
悪鬼祓いの奮迅記録

南方陽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪鬼抜いの奮迅記録

【Nコード】

N5252Q

【作者名】

南方陽

【あらすじ】

悪鬼を屠る悪鬼抜きとして日夜面目躍如^{にやちや}してきた俺——桜庭恭介は、ある一人の少女との出会いを通じ、複雑な人間関係と共に複雑怪奇な人生を辿り始める……かも知れない。

現代を舞台とする和風ファンタジーものとなっております。一章は少しシリアス、二章からはコメディタッチになっていて、何故か学園物へと移行気味。

現在は第五章、【秘密と真】編に突入中です。

処女作です。至らぬ点が多々見受けられますが、それでも良ければ読んで楽しんでもらえれば幸いです！

ただ今更新停止中ですので、完結扱いになっておりますが、次期に再開します。

第壱話

「おねがい……わたしを…ひとりにしないで……」

溢れた涙はそつと彼女の頬をつたい、地面上に雫となって弾ける。幾瀬の間、孤独しか味わうことの出来なかった彼女にとって……

今の俺の存在は、追い求めていた結晶そのものなのだ。

割れ物を扱うかのようにそつと、頭を優しく撫でてやった。慣れない笑顔で、ニツと悪戯っぽく笑ってやる。

「大丈夫だ。俺がお前の居場所になってやるから」
その言葉に、ふと頭をあげた彼女の表情は……。

宝石のような涙を流している時より――
ずつと、輝いて見えた。

霜がいたる所へ舞い落ちている。甚く冷めた空気は乾燥しており、頬を撫でる風が頬に微かな痛みを残していく。

ふと見上げた温度計。そこには、氷点下を指し示す『マイナス』の一本線が、曇り空と対比するように明るく輝いていた。

（マイナス五度って寒すぎだろ。雪振らねえ癖に無駄に冷えやがつて……）

冬休み前の最後の登校日、十二月の二十二日。

寒さのお陰ですっかり覚めた目を擦り、黒の学ランを重い足取りで動かす。

グレーのマフラーが気ダルげな俺とマッチして見えているのは、今の状態をよく表している証拠である。

——何しろ学校が遠すぎる。

小さな山の中腹にある、何でこんな場所に立てたんだ？　と思えるぐらいに立地条件の最悪な——しりつかがみいしがくえん私立鏡石学園。

そんな馬鹿みたいな場所に一年と八ヶ月、この俺——桜庭恭介は勉学を学びに行っているのだ。

……あー、褒めてもらいてえ。

「おはです、恭さん」

そんな億劫な足取りで歩む俺の後方より、唯一の親友の声が聞こえてきた。

走り寄ってくるその姿が格好が良く、息をはっはつと吐くその一

拳かなめじゅんいちごとの仕草さえ、イケメンである。

要純一。

こいつとは中学の時からずっと同じクラスだ。鏡石の才色兼備の名を欲しいがままにしてるこの男は、同性の俺目線で見てもかなりの美男だ。

と、言ってもやはり、何もかもが完璧という訳ではなく。

こいつは何かと可笑しい奴だ。変態、ではなくてただ純粹に変。面白い方の変である。

どうしてと思われるぐらいにどこか抜けているのだ。他の奴より付き合いが深いせいかもしれないが、今のところそれを指摘する奴はいないが。

しかしそんな短所というか、無駄な要素が俺の中にある好感的を得ている。

「うーっす純一。……ていうか、お前も相変わらずだな」

「ん？ 何の事だよ恭さん。もったいぶるなっ」

純一の言葉に俺は嘆息し、指を奴の後方へと突きさす。

「お前の後ろに三人、女子がべったり引っ付いてきてるぞ」

「……え？ マジか？」

そう言っでぐるっと振り返った純一。その視線の先には、こそこそと純一の後ろを付いて来ていたようである女子たちが、一気に頬を赤く染め、驚いたような表情を浮かべた。気付かれるとは思っていなかったのだろう。

そんな表情を見られたくないためか、目線が合わさった女子たちは一目散に学園の方へ駆け上がっていく。

——ああ、青春かな。

羨ましいなんて思わない思わない……。

「うわっ、マジで居たし！ 恭さんずっと前見てたのにいつもよく分かるよな」

「気配で分かるだろ。もろバレだったぞ」

いつもの定型句のような発言をかまし、さっと追及をかわす。

俺はそういう気配に敏感だった。昔からそういう訓練をしてきたためか、それとも天性の才能かは分からないが、こういったことは得意な方である。

気配ね……と呟きながら、純一はブツブツ言いながら俺の隣に近寄ってくる。

いつもこんな感じなので、「お前近いよ」なんてじゃれたりする

ことはない。

「何考えてんだ？ さっきから小言でぶつぶつと」

「いや……恭さんはもしかして、どっかの漫画の主人公か何かなの
かなあつて」

「何でそんな安直な考えに結び付いた？」

漫画の主人公なら、もっと晴れやかな舞台にいると思うぞ。

「んじゃ忍者？」

「いつの時代の暗躍だ」

「んじゃ賢者？」

「おれはそこまで童貞を貫く気はない。……って、朝からボケを
かますなよ」

いいじゃないか、と笑いながら呟いてくる純一に溜め息を吐き
ながら、俺は悴んできた手を擦りながら歩みを速くする。

それに有無も言わずして付いてくる純一は、何かを思い出した様
に声を漏らした。

「……あ、そういえば昨日『悪禍』^{わあくわい}が隣町で起きたそうだよ」

自然界そのものが持つ時空の浄化作用に対して、許容範囲を有に
超える妖力がこの世界では生じる事がある。その力で妖呪的作用
が生じ、悪魔——日本で言えば妖怪——といった『悪鬼』が偶発す
ることを、人は総じて『悪禍』^{わあくわい}と呼ぶ。

西暦を有に二千年を越す現代に於いても、その現象は未だ減少す
ることはなくむしろ増加傾向にある。

特に日本はその『悪禍』が世界と比べ、非常に多い国であつた。
そのためその悪鬼を狩るための役職は公に^{おおやけ}されており、地域によ
ってはヒーロー視されている所もある。

（まあ、まったくをもって迷惑な話だけど……）

しかしそんな心情を俺は顔には出さず、言葉を紡いだ。

「あー知ってるぞ。ちゃんと『悪鬼祓い』が倒したんだろ？」

「毎度ながら、恭さんは情報が早いなあ。何かツテとかあるの？」

「まあな。……っていうか、最近『悪禍』多いな」

一週間ないし二週間に一回起こる悪禍わがわいが、今現在三日・四日に一度というハイペースと押し寄せてきているのだ。

これでは悪鬼祓いも可哀そうである。いくら狩っても給料は変わりやしないのだから。

「確かに多いなあ。三日前は隣町の隣町で起こったし、一週間前はその隣町の隣町で起きたし」

「分かりにくいぞその説明。なんていうか——口説い」

「でもこの町じゃ、まだ一回も起こったこと無いんだけどなあ。何でだろ？」

「うおい。無視ですかシカトですか」

俺が不貞腐れるようにそう言うと、まあまあと宥めるようにこちらに手を伸ばす。

「そうカッパするなよ恭さん。実際、この町の悪鬼祓いは仕事無くて困ってると思うぞ？」

「悪鬼祓いは国家公務員だ。働いて無くても金は貰えるぞ」

「あ、そっか」

「昔からだけど、純一は知恵はあるけど、知識は無いよな」

フツと鼻で笑ってやると、純一の顔が少しだけ強張り、そしてあくどい表情を続けて浮かべた。

な、何を言うつもりだ貴様……。

「口が悪いから恭さんはモテないんだな」

「あゝ？　なんか言ったかコノヤロー！」

そ、それは気にしてるんだから言っとなっつうの！

しかしそんな心の吐露を受け流す様に、うつしつしと悪そうな笑みを浮かべてこちらを見ている。

うむ、やはりコイツにはいつか然るべき報いを……。

「それはそうと、学校着いたぞ恭さん」

とまあ、いつもと同じような感じで無駄話を垂れ込んでいる間に、あの長い長い坂を登りきっていた。

我ながら、なんとなく感動である。毎日同じことばかりで恩恵を忘れそうになるが。

「……なんか便利だな」

「何が？」

「てってけてってって。純一式暇つぶし対話機」

「俺は恭さんにとって都合の良い、暇つぶしのネットサイトか何かか？」

指を向けられた純一少しだけ呆れ顔を浮かべる。我ながら程度の低いネタで、自身で苦笑しながらも、

「軽いジョークだ。教室に行くぞ」

そうして鏡石の門を潜ったのであった。

傾くのが早くなった眩い夕暮れに照らされて、視界が少し漂白する。

掃除も終わり、学校からは段々と生徒の数が減りつつあり、何となく哀愁を漂わせていた。

「ああ、今日は長かった。非常に長かったぞ授業……」
最終日なのに七時間授業とか、もはや拷問なんじゃないのかと思ってしまう自分がいる。

(……まあいい。明日からは楽しい楽しい冬休みだし)
さて、さつさと――

「恭さん。良かったら今日、ゲーセンで遊んで帰らない?」
と、お帰り準備をしていたところで、後ろから純一の声が響く。

「あー……」

まあ正直に言えば、非常にOKしたかったのだが、
「悪いな純一。今日は『お仕事』がある」

俺はそう答えて、純一の御誘いを普通に断った。他の女子からすると考えられないことかもしれないな。

「えー、またか恭さん。夜のお仕事、しかも不定期。……どう考えても危なそうじゃないか」

「そういう仕事なんだから仕方ねえじゃん。一人暮らししている俺にとっては、けっこううつてつけない仕事なんだから」

「……そっかあ。まあ分からなくもないし、今日は諦めるよ。それじゃまたな恭さん」

少し残念そうに純一はそう呟いて遠のくと、まだ教室に残っていた女子二人の方に向かう。

そしてあっさり、同帰の承諾を得たようだった。心なしか、彼女たちが頬を染めているようにも見える。

——イケメンなんて死んでしまえっ！

「……なあってな」

思わず自嘲してしまった俺。

というのも、なんだかんだ言ってもてる奴も大変だと思っているからだ。

女子に囲まれて動けなくなったり、面倒なときに絡まれたりその他もろもろ。

プラスの方に傾くとは、今のところ一切思えない。

純一の奴も、大層愛想よくやっていると思う。

「さて……」

定刻までは、あと二時間。

ゆっくり買い物をして帰っても、三十分ほどは余裕をかましても準備が出来そうだ。

（肉じゃがとか——いいかもな）

ふと脳裏に過った、甘辛く香ばしい匂いのあの料理。

それは俺が初めて作り、そして——初めて人に食べさせた料理でもあった。

「……」

俺としては珍しく、東京の実家の方にいる……幼馴染の姉妹と兄を思い浮かべた。

この町に俺が単身で来て、かれこれ五年は会ってない。
どこことなく懐かしくもあり、そして共に鍛錬した仲間でもあった。
兄の方には、あまりいい思い出はないのだが……。

「ま、今更かな」

首を振り、今までの脳内構想を料理へとシフトする。

今日の肉じゃがに、どんなアクセントを付けようかと思案。

何がいいだろうか。俺的に、糸こんにゃくは外道なので絶対に入
れはしないのだが。

「うーん……、あゝ、グリーンピースでも入れっかなたまには」

黄昏時のある窓際の教室で、そっと虚空に呟いた。

最近独り言が増えている自分に嘆きつつ、バックをいそいそと肩
に掛け、少し浮ついた感じに教室を後にした。

「……うふふ、ふふ。……やべえ！ ニヤニヤが止まんねえ……」

自分でも気持ち悪いと豪語できる程の不適な笑みを浮かべ、鍋を
オタマでゆつくりと掻き混ぜる。

いつもは豚肉で我慢していた肉じゃがを、安く仕入れた牛肉へと
バージョンアップさせたのが原因だ。

ナイスでした、特売日。

芳しくも鼻の奥底に残る、砂糖醤油と調理酒の甘美な香り。
そんな洩悦とした状況に、思わず酔い痴れそうになる。

だがかし――

「おっと……。もうそんな時間かよ」

時計の針が指し示しているのは、六時半の数字。

それは俺の仕事が始まる定刻まで、あと残り三十分余りだという事を示していた。

（我ながら、今日は少しはしゃぎ過ぎちゃったか……）

料理を作るだけではっちゃけてしまうという、恐ろしくも悲しい性質の持ち主である俺は、料理を作る前に用意していた荷物を確認する。

「うしつ。ちゃんと『御札』もあるし、『粗塩』もあるよな。後は――」

そういえば、と思って俺はダイニングに置いてある手帳を持ち出す。

「やっぱあった方がいいよな。流石に無免許は危なそうだし」

車でもそうだもんな、と意味分らないこともおもむろに呟く。軽くそれを手に取り、慣れた手つきでポケットに入れて扉へと向かう。

――『日本国 国家悪鬼祓師認定免許 階級：B』

一般人では滅多に間見えないだろう『証』が、はつきりとそれには刻印されていた。

俺の家は代々、簡単に言ってしまうば『陰陽師』とか『エクソシスト』やらといった、所謂『悪鬼祓い』を習わしとしている家系だ。まあ別段として、今の現代では珍しいってほどでもない。そして土御門とか倉橋とかと言ったあの安倍清明の血を受け継いでいる、なんて大それた名家でもない。

至ってその系統でも平凡。俺の家では、多分父ぐらいしか名が残っていないだろう。

——しかし、それだけに自分の家柄に誇りに思っているのも事実だった。

「マジさみくなオイ。早く来ねえと凍え死んじまうぞオイ。ささっと肉じゃが食わそうぜ」オイ——」

日が落ちるのが早くなった冬のこの頃。

すっかり暗くなったある町外れの公園に、俺は寒さで腫れる手を擦りながら——神力を細微さいびに扱って結界を張っていた。

やはり戦闘となると、光や音やらですぐに、公園の近所の隣人に気づかれてしまうパターンが多い。

そういった非日常を日常から遠のけるため、俺はいつも結界を張って一般人は入れない様にしている。

最も、今朝のような自分の能力を周りに誇示したい奴は、そういう細かいことは一切しないのだが。

——しかし俺は、そんなに頭が悪くない。

アレは一般向けのマジックショー、ましてや見世物では無いのだ。格好を付けて言うならば、これは命を賭した聖戦ジハード。神の使いとし

て悪鬼を祓う大事な神事である。

そんな事をしていると明らかに周りに気を取られ、仕事に集中出来なくなるのは眼に見えている。

さらに周りに危険が生じるという可能性も、極めて高くなるのだ。この町の自治を任されている自分は、そんな甘えた事など決してしない。

容赦など、この『仕事』にはあつてはならないことなのだ。

——何しろ人の命と生活が懸かっているのだから。

「……っと。そろそろか」

午後七時前。

公園内の空間が、ぐにやり、という表現がぴったりに感じに酷くねじ曲がる。

妖気の溜り場となっているこの公園は、この町唯一の『悪禍』出現ポイント。朝の所は三日に一回と言っていたが、ここは最近二日に一度のペースで、こういった現象が起こっている。

あからさまに早すぎる。以前までは、一週間に一回あるかないかぐらいだったのだが、ここ最近かなり活発になっているようだ。

しかも、だ。

「……ん？　なんかおかしいぞ、コレ」

明らかに今まで屠ってきた奴らのような出現とは違った、大層変わったねじれ方をしている。

いつもは淡々と、空間だけがねじれた感じ。だが、今日のは違う。

——空間と共に、その周りの時空列さえねじ曲げているように見える。

「大物……か。面倒だが、本気で行くか」
今までの余裕を言葉と共に吐き捨て、ただ純粹に体中に迸っている神力を高めていく。

体内で昂ぶってきたその力は、左手の甲に刻まれている聖痕へと流れていき――

「神魅……！」

一気に爆発するように神力を解き放ち、神々しい煌びやかな光を帯びてそれが具現化される。

――神魅。

人間ならば誰でも宿っているという、八百万の神々の力を開放することで、神力を武器として投影化させた物を言う。

現代……いや古くから、最もポピュラーな『悪鬼祓い』の祓う喪として定着している。

そしてそんな俺の神魅は、淡いライトエフェクトを放ちつつ、巖然とした雰囲気^{ぜん}を放ちながら左手に投影された。

全てを飲み込む――漆黒の太刀。

全てを闇の向こうへと還す――黄昏の太刀。

これはそういう武器。周りに畏怖を広げ、自身をも飲み込もうかとする唯一の武器。

黒漆大刀と呼ばれるこの太刀は、此の三代目征夷大將軍――坂上田村麻呂が持っていたとされている。

東北に蔓延っていた妖怪を尽く滅ぼしたという言い伝えがあり、通称――『邪魅^{やみ}殛しの太刀』とまで言われている代物。

この刀は二つな通り、かなり強力だ。

そして強力であるがために——この刀は何物をも屠ってしまい、何物にも近づけない孤独な太刀なのである。

ふうっと吐息を零しながら神経を研ぎ澄まし、鞘からゆっくりと抜刀。銀箔の刀身を外気に曝け出す。

月光が刀を包みこみ、鈍い鉄の輝きが放たれた。まばゆい光は何物をも飲み込もうとする、所謂神にも似た畏れを解き放っていた。

「……」

無言で全神経を集中させ、ねじれを一心に見つめ——

『柳の構え』という、反撃に向いた刀の構えを用いて突然の攻撃にも対処できるようにする。

そして——刹那。

悪魔の咆哮が、凍えきつた空気と共に至る所に震えあがった。

「グオオオオオオオオオオ！！！！！」

激しい雄たけびと共に出現してきたのは、鬼女と呼ばれる妖怪。主に恨みや怨念などの負のエネルギーによって現界する、現代に於いて最も多くなっている『悪鬼』の一つ。

そして、だ。

俺はここで、訳も分からない光景を見てしまったのだ。

「……………」

——小さな妖狐が、無言で鬼女に続いて飛び出てきている。

「——おいっ！？ 意味わかんねえぞ……どうなってやがる！」

誰も聞いちゃいないのに、俺は思わず叫んでしまっていた。

ただそれだけのことなのに、俺は驚愕し、嘆いてしまっていたのだ。

その理由はただ一つ。

わざわい悪禍によって二体以上の悪鬼が出てきた、という前例はないのだ。皆無なのである。

それはつまり——わざわい悪禍の長く続いた典型的パターンの崩壊を示していた。

「うち！ 呆けてる場合じゃなかった！」
考えるとは後に。

今は奴らに対する処置が大事なのだ。
こくしつのたち
思い直し、慌てて黒漆大刀を構える。

「ガアアアアアア！！！」

「……っ！！！」

月影の元、片や咆哮を、片や声にならない甲高い音を出し、空中に鮮やかな紅蓮と暗黒の塊を打ち上げた。

眩い光が目の前で交差して、爆音と生ぬるい妖気が体中を過ぎ去っていく。

——鬼女の負の魔弾と妖狐の狐火が炸裂したことを、俺はこの時初めて認識した。

「……嘘だろ。マジでどういう事なんだよ」

今度こそ、間違はなく呆けることしか出来なかった。

咆驚仰天。^{ききょうようてん} 鳩に豆鉄砲。寝耳に水。

今の俺の状況は、まさにそれらの言葉が当てはまること間違い無しである。

只の『悪鬼』が、同じ仲間である『悪鬼』と戦うという事に、認識が追いつけていないのだ。

まるで脳だけが、数刻前に取り残されているような、そんな摩訶不思議な心地である。

普通、『使い魔』といった人間と共存を図っている類の者は『悪鬼』を攻撃する。

だがそれは、自分がこの世界に現界する対価^{げんかい}として、他の『悪鬼』を滅ばさなければならぬという、『制約』に基づいてのことだ。誰も好んで同種族を攻撃している訳ではない。

……人間が人間を殺しあう。

今起こっている出来事は、まさしくそれと同意であるのだ。

「ガアアアアアア！」

交錯した光の間から最初に飛び出してきたのは、禍々しい波動を自身から放っている鬼女。

右の拳に負の波動を携え——真上からの鋭い一閃。

小さな妖狐は軽々と地面に叩きつけられ、激しい地響きが公園内に鈍い音で轟いた。

鬼女はにやり、と潰れた妖狐を見て確信の笑みを浮かべる。

——だが、それは間違いだった。

既に妖狐の本体は鬼女の後方にいた。

叩き潰した妖狐を擬態させたものは小さな砂粒となって、儚く消えていく。

これが『化ける』という能力の真骨頂だ。自身だけではなく、他の物質そのものを自由自在に姿を変えさせる——簡単に言いかえれば錬金術のようなもの。

今回の場合、公園内の砂を自身に『化け』させ、不意打ちを狙おうとする妖狐のずる賢さが垣間見えた。

その狐は、背後から凄まじいスピードで直進し、鬼女との間合いを一瞬で詰めていく。

「……」

沈黙を貫き、今までのスピードを保ったまま、クルッと体を反転して素早く跳躍。

強烈な威力を纏った五本の尾を、未だ気づくことの出来ていない鬼女の背中越しに——勢いよく叩きつけた。

物体と物体とが弾けあう激しい物音が、凍った空気を酷く振動させる。

と、同時に——

「ガアアアア……!!」

初めて悲痛な叫び声が、公園内に響いた。

しかし、妖狐の攻撃はそれだけでは終わらない。

起こしたモーションそのままに、地面にふんわりと着地。

まさにその瞬間——恐るべき速度を出して、鬼女の左腕を通り抜け様に決った。

その動きは、まさに弾丸そのもの。

「ギャアアアアア……!!」

再び悲痛な咆哮。

訳もそのはず。鋭い爪にあの俊歩しゅんぽという相乗効果により、鬼女の腕はもはや千切れる一步手前という負い目になっていたのだ。血の代わりに自身を構成しているドス黒いオーラが、傷口より溢れては消えていつている。

「……オイオイ」

いちもくじゅうごん
一目瞭然で分かってしまう。

俺が今まで対峙してきた『悪鬼』なんかよりも、この妖狐は遥かに強い。

あの妖狐の実力は、二手も三手も鬼女を、そして俺の想像を大幅に上回っていた。

誰の目から見てもそのように思えるだろう——圧倒的实力。思わず感嘆するを得ないほどの——美しい立ち振る舞い。

ヴァルキリー
戦乙女は戦いの中で、舞を踊っているかのように敵を切り伏せると言われるが。

——それは、あの妖狐の姿にも当てはまった。

「……これはすぐに決着が——」

少しだけ気を抜いた、まさにその瞬間。

俺の見ていた世界の景色が、——刹那の時に激しくブレた。

「……っ！？ ああああああああ！！！！」

悲痛ともとれる——俺の苦悶の声が公園内に響き渡った

第壱話（後書き）

誤字、脱字などないようにしていますが、あつたらごめんなさいです。

大分序盤を修正↓2011'9/24

第貳話

（しまっ……！ 力の逆流！？）

全く、プロの『悪鬼被い』が力の逆流に巻き込まれるなど、他の奴らに聞かれたら鼻で笑われてしまうだろう。

それほどまでに、俺は初歩的なミスを犯してしまっていたのだ。

それは美しい戦いに——思わず見蕩れ、気を緩ませていた事。

ただそれだけ。

ただそれだけに、これは忘れてはならない、一番大切なことでもあった。

そして、力の逆流によって今までに死んだ『悪鬼被い』の数は、全体のおよそ——六割。

初心者悪鬼被いの死亡率はおよそ——三割。

つまり、もっとも多くの悪鬼被いの死亡原因は、今体感しているコレであつて。

「ぐ……！ つがあああああ……！！」

意識が遠のく。

声が出なくなる。

体が鉛のように動かなくなる。

考えることが出来なくなる。

ただ体中に激痛だけを伴って——地面にのたうち回るしか出来ない。

力の逆流——悪鬼がエネルギーを著しく低下させた際、回復しようとして周りから生気を吸収するという、非人道的な行動。

あらゆる生物の生きる力、すなわち『生命』という気力を奪い、自身に蓄えようとするものだ。

もちろん許されるべきことではない。だが意思疎通できない者にとって、人間の声は雑音そのもの。

——欲求の赴くままに、自身以外の気力を悉く吸い取っていく。

夕暮れ。入道雲。粉雪。桜。

流れるように、四季折々の自然の風景が脳内を駆け巡る。

太刀。弓。槍。薙刀。

あいつらと共に競い合った、あの頃の鍛錬が目の裏に映える。

肉じゃが。温度計。純一。……純一式暇つぶし対話機。

今日在った平凡な日常が、掛け替えのない物のように感じる。

（ははっ、何てザマだ——まったく、馬鹿みたいだ）

呻くことさえできなくなっていた俺は、尋常ではあり得ない程に冷静になっていた。

脳内では光景が吹き荒ぶように流れていき、そして最後に広い空を映す。

過去に何度も見たことがあるような、そんな懐かしさを感じさせる情景。

雲がひとつ、ふたつと徐々に流れては消えていく。

（この雲が無くなったら、……俺は）

それは、自分の『生命』が体からかけ離れていくのを、上手く顕あらわしているようだった。

（怖い……俺は、どうなるんだ？）

そう考えると同時に、頭の中を染め上げる空の色が途端に変化する。

群青が広がったかと思うと、すぐさま夕暮れが辺りを照らした。まるで命の灯火を表現しているような太陽。

ゆっくりと傾き、そして暗がり――

「大丈夫よ、凶^{きよう}。諦^{あきら}めたら駄目」

闇に沈んでいきそうな意識の中、最後の情景に一人の女性が現れた。

体が軽くなった。

まるで体が百の欠片となり、遠くへ飛散していったような――そんな感覚。

（ん）。天国ならいいんだがな……）

もう死んだものだと思いこんで、寝転んだまま俺は目を開けると……。

「……あれ？」

そこは言うまでもなく、元の公園だった。

「マジかよ。……いや待てよ？」

と、思いながらも、されどパラレルワールド来ちゃったなんて痛い考えにいきついたために俺は沈黙する。

しかし内心、かなり驚いていた。

いや、だってさ。マジ死んだと思ったんだ。激痛だったし、感覚なくなってたし。

体ふんわり浮かんだ気もするし……。

頭を捻らせ、その疑問に思いを馳せる。

しかしいくら考えても行きつくことない答えに、俺は溜め息をついて諦めた――

そんな時、あることに今更ながら気が付いたのだ。

「……お前」

俺の体に負担を掛けないよう、最低限度の力だけで包んでいる――

――白い妖狐。

毛はシルクのように触り心地が良く、白雪を想像させるような華奢な体のつくり。

目は翡翠のごとく、爛々（らんらん）と闇の中でも緑色に目映くまはゆ輝いている。

さて、ここで俺の分かったことは、

「どういうことだよ、ヲイ……」

さっぱり、理解できない事だった。

よーし。落ち着こうぜ俺。

まずは深呼吸だ。

……つつし。それじゃ状況整理。

常に冷静で賢明な俺なら、こんな問題ちよちよいのちよいだ。

えーっと、まず俺は不本意ながらも鬼女の力の逆流を喰らったん

だよな。

んでその後、走馬灯っていうあの例の臨死体験をし——
現在、妖狐に包まれて目が覚める、と。

「さっぱり、意味が分かんねえ……」

分からな過ぎて、完全に思考停止してしまっている。

いや、力の逆流を喰らって臨死体験したとこまでは理解できるんだ。

そこまでは、な。簡単に分かる。誰にでも分かると思う。

その後だよ。うん、その後なんだよ問題は。

何で俺はこいつに包まれてんの？

「おおう、ミステリーだぜマジ……」

しかし、そんな摩訶不思議な出来事に驚いて、いつまでも寝転んでいられはいられない。

俺はゆっくりと体を起き上げ——そして愕然としながら、眼前の光景を眺めた。

「~~~~~っ」

公園内の全ての動植物が、全て絶命していた。

そして負のエネルギーと気力の集まる公園の中心には、甘美な余韻に浸っている鬼女がいる。

負の力しか得ていなかった彼女にとって、『生命』はとてつもなく幸福感を得るものだったのだろう。

纏う妖力のオーラは、奪った気力も混ざっていて、今さっきより少し強くなっている気がした。

「……俺が生きてる理由って、もしかして」

ふと、頭に俺が生きている可能性が過った。

未だ俺の脚元に掛けて、べったり引つついている妖狐を見る。
完全に覚醒した俺にとってその姿は——ハッキリ言って杜撰ずさんな様子だった。

顔は完全に憔悴せうすいしきっており、いつ倒れてもおかしくないような、弱々しい脚の踏ん張りで地面に踏ん張っている。

吐息には明らかに疲労が入り混じっており、生気が見るからに薄くなっているのは明白で。

そして、俺が特に呆れたことは——

「お前、俺に『生命』を分け与えていたのか？」

思った通りだったことに、俺はかなりの衝撃的を受けた。

こいつは今さっきまたまた出会った、見も知らない他人に『生命』を分け与えていたのだ。

今も常に、脚と胴の付け根から暖かい気力が体中に溢れていく。

——だがこれ以上やると、こいつの体が持たなくなるのは確実だ。

（ホント、何が何だか……）

今日は本当に訳の分からないことだらけだ。

「もう止めとけ。いくらお前が強かろうと、『生命』を出しすぎると死ぬぞ」

俺はそう言っただけ妖狐の頭を撫でてやる——何でこうしようと思っただかは不明だが——と、目を気持ちよさそうに細める。

少しの間その気持ち良さに浸っていたようだが、すぐに体を俺から離れた。

そこから未だ余韻から解放していない鬼女に対し、臨戦対応を取りだす。

……まさかその体で殺る気なのか、コイツは。

（あー、ここは俺の出番だろうな、うん）

これ以上、コイツ二みじめな姿を見せることは出来ないだろう。
俺はふうっと一息零して、妖狐へと話しかけた。

「はいはい、妖狐さんや」

声が聞こえるや否や、美しい翡翠の双眸をこちらに向けてくる妖狐。

「ちよつとここで休んでろ。いくらお前でも、満身創痍な状態じゃ勝てやしない。」

生憎、俺は『悪鬼被い』と呼ばれる者で、あーいうのを倒すのに長けているんだ。今さっきはヘマしたけど」

こいつの体はボロボロだ。自分も力の奔流を耐えねばならず、尚且つ俺に『生命』を分け与えていたのだから。

左手にずっと携えていた黒漆大刀を少し強調させて見せ、自分に任せるように説得してみる。

それでも、「なんかわるいから」的な眼を向けてくる妖狐。
なんとも律儀な奴だ。将来、絶対損するな。

「遠慮なんかするなよ。俺はお前に助けられた身で、云わば今の俺はお前の為なら何でもする下僕みたいなもんだ」

体を優しく撫でて安心させつつ、俺の意思を悟らせる。

「大丈夫だ——すぐ、終わる」

その悄然として自身に満ち溢れた言葉を聞き、妖狐はやっと腰を地面に下ろした。

第貳話（後書き）

誤字脱字など無いようにしていますが、あったらごめんなさいです。

第参話

体調は公園に来る時より、遥かに良くなっていた。

(……あの妖狐、馬鹿みたいに『生命』与えやがって……)

体中から気力が湧き上がる。泉から出る水が、大幅に飽和したような感覚だ。

俺の許容量以上の『生命』をアイツは与えたようだ。そのおかげで、今までとは比にならない位に、体中が酷く漲っている。

そして俺は、ゆっくりと近づいていく。

力の根源——公園の中心に佇む鬼女へと。

「よお。気分はどうだ？」

その俺の声に、今までの甘美な余韻から引き剥がされた鬼女は、抑えがたい何かを含むオーラを放つ。

「オイオイ。いきなりそんな風に睨むなよ」

思わず肩が少し竦んだ。だが、すぐに元に戻す。

一触即発の戦場が、そこには形成されていた。

「あの妖狐がさ、何でか分かんねえけど俺を助けたんだよ。ま、そこはお前に関係ねえか」

息をスツと吸い込み……その言葉を発した。

「恩人のアイツへの恩返し。俺はお前を——被^{トリガー}う」

まさにそれが戦^{トリガー}闘開始だった。

鬼女は猛然として地面を蹴り上げ、俺の真上に跳躍。

負のオーラと気力を合わせた波動を右足に纏わせ、俺の脳天へと踵を突き落とす。

……だがその行動を、俺は読んでいた。一瞬で後方へバックステップ。

舞い上がる粉塵と鋭い轟音が、俺の周りを包み込んだ。

動きが分かったのは、俺が言葉を発する前に僅かながら、鬼女の両足に力が入るところを横目で観察していたから。

行動を読むということは、敵の一手を予測し対策出来るということ。そのため戦闘に於いては無くては成らない材料だ。

眼前の粉塵舞い上がる空間から、鬼女が勢い良く飛び出してくる。今度は両手に負の波動を纏っているようだ。

「アアアアアアアア！！！」

恐ろしい程に軋むような唸り声を挙げ、俺の懐へ潜り込んだ鬼女。一瞬で抜刀した黒漆大刀とおぞましい黒いオーラが重なり、常闇とこやみの輝きを放った。

刀と刀とで打ち合っているかのような、異様に高い剣戟が公園内を満たしていく。

俺は拳を弾いたモーションから左斜め上に太刀を払い上げ、数メートルほど鬼女との間合いを作った。

「……行くぜ」

一瞬で『霞の構え』という突きの型を形成し――

凄まじいスピードで、距離を離れた鬼女との間合いを詰め――喉元に一閃。

それは正に、閃光と言わざるほどの勢い。

だが見事な反射神経だった。俺がそこを捉える前に、両腕をクロスして軽々と防御する。

しかし、勢いまでは消しきれなかったようだ。足を地面へ擦り、力を相殺しようとする奮闘しながら後方へ押し流されていく。

「へえ……『二式 瞬息』を受け止めるか。こりゃ結構強くなってるな」

思わず感嘆の声が零れた。

『二式 瞬息』は俺が対悪鬼を想定して作った、神力を用いた剣技。その派生の早さと一連の動作は、まさに息を飲み込む隙さえ与えない。

大抵の『悪鬼』なら、ここで何も気づく事なくTHE ENDだ。それだけ今の鬼女は、力が増しているということだ。

勢いを相殺することに成功した鬼女は、間髪入れずに魔弾を俺に放ってくる。

威力は今さっきの妖狐との戦い以上だ。しかも数は二倍近くに膨れ上がっている。

「……っし！」

目の前に来た奴だけを払い、他は素早いフットワークで交わした。後ろで途轍もない爆発が起きているのを無視し、太刀を鞘に納めて、鬼女の元へと付き進む。

その行動を見た鬼女は、自身も俺との間合いを詰め、負の波動を加えようとした。

——まさにその瞬間、アイツは胴体を深く抉られ、後ろへ勢い良く吹き飛んだ。

「アアアッガッア……！」

一瞬の事で何が起きたのか分からないのdarou。痛みと疑問で、苦悶の音が酷く鈍っている。

一撃を喰らった箇所は、白い煙を挙げてまるで蒸発するかのように

に、酷く焼け爛れていた。

『三式 絶園』。太刀の仰け反りに、神力を付与して抜刀することにより、燐光の刃を前方解き放つ。それは見事に、周囲の敵を絶たせる業。

その抜刀の速度は、『二式 瞬息』の一閃を軽々と越える。

「やっと喰らったか……。ま、後は大丈夫かな」

未だ浮ついてる鬼女の方へと、地面すれすれに刀身を走らせて一気に攻め入る。

上下左右、至るところから閃光の刃を迸らせる。

はち切れんばかりに、猛然と太刀を振るった。その動きは正に――疾風怒濤。

鬼女はもはや攻撃に転ずることが出来ず、ただ防御せざる得ない。だが、手負いである奴では、俺の攻撃を全て受け流すことは出来ず――

「……やあああ！！！」

気合いを挙げて、その一撃に全力を投じた。

防御が追いつかなり、ポツカリと空いた鬼女の右横腹を太刀で深々と決る。甲高い悲惨な声が、俺の眼前で放たれた。

（――まだだ！）

これで終わりなんかにしない。決った太刀を右に引き裂き、そのままクルリとその場で一回転。

その勢いを保ったまま、奴の右肩を真上から、一気に下方へ断ち切った。

「アアアアアアアア！！！！！！」

今までの中で、一番悲痛の念が籠った叫びだった。肩からはドス

黒いオーラが勢いよく外界へと溢れ出て、外気と混ざって消えていく。

「……終わりだ」

鬼女はもはや戦闘意欲を失っていた。ただ茫然と立ち尽くし、これから襲われるであろう死の恐怖に打ち震え、酷く怯えている。

その鬼女の前で、俺は太刀を横一線に払う型——『脇溝』の構えをとる。軽く後ろに重心を掛け、一気に胴身を切り抜かんとする。

そして——影は交錯した。

「オオオオオオオオオオ……」

切り裂かれた胴体は、この世の絶望を嘆くかのような痛々しい叫び声を挙げる。

そのまま鬼女の体は、淡い黒の微光を放って飛散した。

「……ふう」

息を吐き、緊張した戦闘の余韻から身を解放した。慣れたように神魑しんぱうの解放を抑え、漆黒の太刀を虚空に消す。

——と、まさにその時。

「……」

今さらになって、俺の体に死への恐れが沁み出てきた。

手からは汗が迸り、心臓の拍動は以上に早い。

多分、今の俺の顔面は蒼白になっていること間違いなさそうだ。

戦闘の後はいつもこうだ。

太刀を振るっているときはあれほどに流動し、快然たる戦闘に身を焦がしていると言うのに――

そこから解放されると――俺は死が堪らなく怖くなる。

死が堪らなく悍ましくなる。

死が堪らなく凄惨せいさんに感じる。

歳相応の、一般の十七歳らしい少年へと、簡単に姿を変えてしまう。決して普通ではないと言うのに、普通になろうとしてしまうのだ。

全身に疲労感を感じ、地面に身を任せた。

「……っは！情けねえな。プロの『悪鬼被い』がこんなじゃ」

右手で顔を覆い、震える体を必死に抑えようとする。

いつもは数十秒程度で元に戻るこの体。……だが、今日は無理であるようだ。

何しろ一回死にかけた。あの恐怖が身に沁み込んでいて、子供のように打ちひしがれることしか出来ない。

ただ、震えが体中を駆け巡るのだ。恐くて、仕方がないのだ。

「……」

――そんな創痍な状態の俺に、一つの影が舞い降りる。

「妖狐、か」

それはあの、華奢な体躯の妖狐だった。

満ちた月光に照らされて、神秘的なまでに整った体の細部を俺の眼前に見せつける。

「……」

無言のまま、俺の頬を軽く舐めた。

まるで俺の恐怖掬い取るかのように、そっと。

「……っ！」

その瞬間、俺は妖狐を力いっぱい抱きしめていた。

何故かと問われれば、その行動に対する答えは何もない。

——ただ、温もりを感じなければ壊れてしまいそうだった。

「大口叩いてたのに情けねえよな、俺。こんなにビビっちまってんだぜ？」

体中の震えが、妖狐に直に伝わっていく。

「……初めて『悪鬼』を屠った時もこんな感じだった。マジで死ぬかと思った」

聞いていないかもしれないのに、俺は語ることしか出来ない。

「ホントはすげえ怖いんだ。こんな仕事、何回辞めようと思ったか、もう数えねえぐらいに」

子供の戯言に似た言葉を、ポツリポツリと呟っていく。

「でも俺は『神魅』が使える。……それは一般人じゃ簡単には出来ないことなんだ。」

だから——俺はやらなきゃいけない」

心の奥底が、コイツの元に曝け出されていく。

「でも……怖いんだ。他の『悪鬼被い』は、さも当たり前のように自分の命を掛けてるけど、俺にはそんな真似できねえんだ。」

——臆病なんだよ。人一倍、死ぬことに恐怖を感じて仕方がない」

吐きだされる感情。見苦しい姿。

そんな俺自身に後悔をしていると、妖狐は再び俺の頬を舐めはじめる。

今度は、俺の気持ちを汲み取るかのように、何回も何回も。

「……ありがとな。もうちっと、俺に付き合ってくれ」

抱きしめる力を、少し強くした。

しかし妖狐はそんな事に不平も言わず、ただ無言で俺に付き合ってくれ。

初めて俺の恐怖の中に、慈悲という感情が灯った。

「有難う……。本当に、有難う……」

嗚咽が漏れる。出さぬまいとする自身の意思に逆らって、涙と声が溢れ出る。

それは、今まで何百回と続いた命のやり取りの中で――
初めて零した、一筋の光だった。

第参話（後書き）

誤字脱字などないようにしていますが、あつたらごめんなさいです！

第肆話

「……見苦しい所見せちまった。わりい」

数刻経った後、俺はコイツの頭を撫でていた。

特にこれと言って理由はないが、こうしたくなつたからと言う他ない。

妖狐は眼を細めて気持ちよさそうに、俺の手に身を委ねている。

こうした顔を見ると、なんだか落ち着いた。何故か、懐かしい気がしたのだ。

——いやしかし、かなり恥ずかしい所を見られたな、俺。

17歳の男子高校生が、公園の中心で狐に抱きついてマジ泣き……か。

傍から見たら、かなりの変態じゃん。

さて、そんなことは置いて於いて。ああ、暗い暗い過去は放っておこうじゃないか。

何しろここからが大事なのだから。

「では、よく聞いておくれ妖狐さん」

翡翠の双眸が、こちらに向く。

「残念ながら、俺は『悪鬼被い』だ。本当なら、お前を屠らなきゃいけない。……だけど、お前は俺の命の恩人でも在る訳だ。ここまでは理解できるか？」

コクリ、と首を縦に振る。

それがどうしたの？とでも言わんばかりに俺を見つめる。

「よし。ならそういうことで、俺はお前を『見逃す』。

本当ならやつちやいけない事だが、俺は恩人を殺すような、冷血な奴じゃないからな。

……東北の方には悪鬼がひっそりと暮らしている、『桃源郷』という所があるらしい。お前はそこに向かえ。な？」

俺としても、かなりの破格の提案だと思う。

——バレたら免停かもしれないしな。

ここで普通の『悪鬼』なら、そこで飛び跳ねて一目散に、俺の元から離れるだろう。

「……」

だが——妖狐は違った。

驚きと悲しみの混じった、悲壮な表情を浮かべる。

どうして？ と彼女は、俺の瞳を捉えて問いかけてくる。

まるで、そんなことなら死んだ方がマシだと言わんばかりに。

「何で悲しんでんだ？ お前は俺という、言ってしまうえば魔の手から解放されるんだぜ？」

茶化した風に言っても、妖狐の表情は変化しなかった。

見るに忍びなくなつて、思わず自分から目を逸らして、後ろを向く。

「そういうことだから、お前は俺が結界を解いたら一目散に行けよ。じゃないと、他の『悪鬼抜い』に仕留められるかもしれないからな」

背中越しに語りかけ——そして。

「じゃあな」

俺は公園を離れようと入口に向かう。

そう、これが正しい選択なのだ。

そう思い、俺は神力で張っていた、結界を解こうと——

「……まって！」

幻聴だと思った。

その声は、俺が夢の最後に聴いた——純粹で透明な奏かなでに似ていたのだから。

急いで後ろを振り返る。

そこに在たのは妖狐ではなく——美麗な少女だった。

歳は俺と同じくらい。白い布地で作られたワンピースを莊嚴とまとっている。

だが彼女の肌も、それに劣らぬぐらいに白く、そして極め細やかだった。

顔は子供らしさを残しているが、大人の気品を感じる。子供の柔和な雰囲気の中に、堅く引き締まった大人の表情が垣間見える。

想像を凌駕するほど体にメリハリがあり、俺が画家なら迷わず描いているだろうと思うほどの、見事な曲線がワンピース越しに浮き彫りになっていた。

俺は……見蕩れるしかなかった。

何も考えることが出来ないでいた。

目の前の情景を信じられないでいた。

「お前……」

「おねがいだから……まって……」

涙を必死に瞳の中に抑えている。

その顔は、いたく冷たい。

それがまるで、今さっきのアイツの顔と何故か相似していた。

「もしかして、妖狐か？」

こくり、と少女は頷く。

その行動を見て、俺は初めて妖狐だと確信できた。

そして——空気に消え入るような声で、一言。

「おねがい……わたしを……ひとりにしないで……」

怯えていた。まるで、また独りになることを恐れるかのように。
溢れた涙は、そっと彼女の頬をつたい、地面上に雫となって弾ける。

その時、俺は初めて分かった気がする。

俺が死を恐れているように。

彼女は孤独を恐れているのだ、と。

「おねがい……おねがいだから……」

子供のように、ただ涙を流し。子供のように、ただ意慾^{いよく}する。

その姿は、まさに数刻前の俺の行動と、パズルのピースのように重なった。

（……それなら、俺のやる事は一つだな）

再び、公園の中心へと近づき、彼女の顔を覗く。

頭垂れている端正な顔立ちは、涙でしわくちやになっていた。

（恐いんだな。俺にはそんなお前の気持ち、分かってやることは……）

偽善だということは分かる。だけど……。

——俺と初めて気持ちを分かち合えたコイツを、他人事のように放っておくことが出来なかった。

まるで割れ物を扱うかのように、そつと、頭を撫でる。

慣れない笑顔で、悪戯っぽく笑ってやる。

そして——滔々（たんだん）と言ってやる。

「俺は、お前を救う事は出来ねえよ」

彼女の嗚咽が一瞬止まった。

「だけど、大丈夫だ。……俺がお前の居場所になつてやるから」

今度こそ、彼女の嗚咽は狂った時計のように固く止まった。

驚いたように、涙を頬に携えて俺を凝視する。

「救えないけど、居場所にはなつてやることは出来る。だからそこで泣くな。

泣くなら——お前の想う『居場所』で泣け」

俺のそんな言葉を聴いた彼女の顔……。

それは、宝石のような涙を流している時より、ずっと輝いて見えた。

そしてそのまま、俺の胸の中へと飛び込んでくる。

長年追い求めていた『居場所』を見つけた彼女は、まるで子供のよう^{つよ}に強く侃^{つよ}く自身へ引き寄せる。

嬉しそくに笑いながら、ぐぐもった嗚咽を俺の胸元に零す。

そんな少女を。

俺はただ黙って、絹のような金髪を——

柔らかな頭を、そつと優しく撫で続けた。

第肆話（後書き）

自分でも話の方向性が見いだせない……。

誤字脱字などないようにしてますが、あったらごめんなさい。

第伍話

「落ち着いたか？」

「……」

無言で彼女は俺の中で頷き、体を離す。

「ねえ」

「ん？どうかしたか？」

「どうするの？」

「何がだ？」

「わたしを……どうするの？」

そ、それはエロい意味で？なんて考えは俺には起こらなかった。
とりあえず意味が分からないので、思案すること数秒。

「ああ、どうやってお前の存在を、公おおやけに対して正当化するかってことか？」

そう、と彼女は呟く。

ていうか我ながら、よくあの表現だけで意思を汲み取れたな。

「んゝそうだな。隠し通すって方法も、あるっちゃあるんだが。
これはお前に相当負担かかるからな。もう一つの案を採用しようかなあと思ってる」

何だろう？みたいな表情で彼女は俺の顔を覗く。
ってかそれより……。

なんかめっちゃ可愛いんだけど……もう好みの容姿なんだけどっ
……！

改めてよく見ると、コイツの美しさは異常だった。

翡翠の双眸と金髪が思いのほかマツチしていて、その荘厳として気品に満ち溢れる立ち振る舞いは、まさに魔性と言わざるを得ない。これが人間ならなあ、と俺は神力を与えてくれる神を恨むという矛盾の概念に追いやられる。

「それでもう一つの案っていつのが……『使い魔』だ」
「使い魔？」

「そうだ。まあぶっちゃけて言えば、『俺の奴隷になって、悪鬼を滅ぼすために働け』って事」

……あれ？少し怯えさすように言っただつもりだったんだが。何で無表情のままなんだ？

「あの一」

「ん？」

「恐くねえの？」

「なにが？」

「いや、俺の奴隷になれーって言ったんだけど……」

「べつにこわくない」

「……そっか」

そうだった。こいつが一番恐れているのは『孤独』だったな。

なんか修女みたいな奴だ、ホント。

でも——なんかコイツらしいと思ってしまふのは、何でだろうか。ふと脳裏を過った疑問。それを一瞬で消し、言葉を紡いだ。

「悪かったよ。全部ウソだ。別に奴隷なんかしねえから安心してくれ」

「そっなの？」

「他の奴は知らねえけど、少なくとも俺はそんなことする気はない。

……なあに、ある簡単な『命令』を与えれば、すぐに主従関係なんて無くなる」

そう、と彼女は納得したように声を漏らした。物分かりが良くて、非常に嬉しい。

「それでどうする？お前は前者と後者、どっちがいい？」

「どっちでもいい」

「……」

「ひとりじゃなければ、どっちでもいい」

「ああ。お前はそういう奴だったな。それじゃ後者の方法でやるけど、いいか？」

「……ん」

「分かった」

その決意を含んだ肯定の意を聞き、俺はまず彼女の正面に立つ。爪で人差し指を軽く切ると、少女の胸元——ふくよかな双丘の少し上、鎖骨の中心あたりに、五芒星を血で描いた。

『使い魔』としての儀式。俺が知ってる手順は、有態に言えば二つある。

一つは、護符や宝石を用いて、『悪鬼』を『付喪神』とする方法。そしてもう一つは、ドーマンやセーマンという呪印用いて、自分の血族とする方法だ。

やり方としては、後者の方が簡単。しかし、後者は安倍清明や芦屋道満の直系、すなわち、その血筋の者しかやり方を教わらないのだ。

だが俺は幼馴染のお二人さんから、その方法を教わっていた。まさか役に立つとは思っていなかったが……。

（ま、何にしろサンキューな、椎奈。皐月）

そう思いながら、描いた五芒星——セーマンと呼ばれる呪印——は俺の神力を流し込む。

すると中心のペンタゴンのような五角形が淡く、そして強く輝き始めた。

コイツには苦痛かもしれないが、少しの間我慢してもらうに他ならない。

「——我、桜庭恭介の名に於いて、祖、安倍清明の呪詛をここに携えん——」

俺が言葉を発することに、セーマンはより強いライトエフェクトを放つ。

「——呪印刻まれし者よ、我が肉、我が血となり、重ねて再び降誕せよ——」

古めかしい祝詞を、旋律を奏でるかのように最後まで唱え、セーマンの中心に中指を添えた。

正にその瞬間——俺とコイツは重なった。

物理的にではなく、精神的に。だが体ごと吸い込まれそうな力の勢いを、その指と触れている肌とで感じる。

俺の神力がコイツに、コイツの妖力が俺の中へと流れ込んでいく。魔と聖が融合するような、そんな複雑怪奇な胸懷に立たされる。

（コイツ、今どんな気持ちなんだろうな）

無表情に目を瞑っている少女からは、その感情を読み取ることが出来ない。

決して快感ではないだろう、とは思う。しかし、その顔は無機質なままだ。

——数十秒程、その動作を動かずに継続していた。
だがセーマンの光が収まってくると同時に、俺とコイツの力の流通は弱くなり……。

そして完全に、流れは断ち切られた。

「せいこう？」

「多分、な。俺も初めてだからよく分からねえけど。ちよっくら成功してるか試してみようぜ」

「どうやって？」

「簡単だぞ。……命令だ。『その場で一回転しろ』」

俺がそう呟いた瞬間、彼女の胸元のセーマンが強く輝いた。

そして、まるで自分の意思を通さずして動くかのように、彼女は
その場で一回転した。

——バク宙で。

「うお！　すげえ！　生バク宙初めて見た……」

いやしかし、まさかバク宙するとは思わなかったぞ。

——そして眼福にも拝めるとは思っていなかった。
女の子特有の柔らかな素足が、まさか根元近くまで垣間見える
とは。

いや、奥までは流石に速くて見えなかったけど、それでも神に感謝せざるを得ないね！

「どうやら成功してるみたいだな！　いやー、有難うございます！」

「なんでかんしゃ？」

「気にしないでくれ。これは俺のケジメなんだ」

感謝しないと、罰が当たると思うんだ。よく分かんねえけど。

「さて、上手く言ってるみたいだし。ささっとこんな主従関係を解

「いちゃおうぜ」

「わかったけど、どうするの？」

「お前は何かする必要はなし。」

命令だ。『これからは俺の命令など聴かず、自由気ままに、自身の思うがままに行動しろいつと』」

俺のふざける様な命令に反応して――

刻んだセーマンが、今さっきとは比にならない位の、一際強い閃光を放った。

「はい、終わり」

「これだけ？」

「そ、これだけ。もう何もする必要なし」

「ほんとう？」

「ホントだって。……命令だ。『その場で一回転しろ』」

俺はそう呟いたが、セーマンが再び閃光を放つことはなかった。

「ほらな。これでお前は晴れて俺と同じ立場だ。お前の思う通りに動けるぞ。良かったな」

そう、と彼女はおもむろに呟いて――

ずっと俺の懷に潜りこんで、抱きついてきた。

女の子特有の、甘い色香が俺の中へと溶け込んでいく。

「……ヲイ。いきなりどうした？」

「あたたかい」

「……」

「あたたかい。とても、あたたかい」

実感を噛み締めるように、彼女は何度もおごそかな心持を、俺の胸元で囁く。

そこには彼女が洩らす、初めての笑顔もあった。

「ああ。そうだな。……独りじゃなければ、こんなにも暖かくなれるんだ」

肯定してやることで、彼女の中にあると思われる、孤独という名の重石を取り外す。

——ていうか、マジ感動だね。妖狐だけど、仮にも女の子と抱擁するなんて。

「ねえ」

「どうかしたか！？　べ、別に疚しい気持ちなんて抱いてなんだからな！？」

「なまえ」

……あれ？

俺の心の奥底を、心理眼で読まれた訳じゃなかったのか。焦らすなつて……。

「名前、ね。それって俺のか？」

「……ん」

その通り、と彼女は短い肯定を表す。

「そーいや、まだどっちも名乗ってなかったな」

なんか色々、大事な過程を吹き飛ばしていたようだった。

名前も知らねえ奴に抱きついたり抱きつかれたり。

ここだけの表現を見ると、まるでプレイボーイだな、俺！

——いや、実際は純一と違って、かなり女性関係は日照りまくってるけどさ。

「それでは改めて。……俺は桜庭恭介。“一応”プロの『悪鬼祓い』だぞ。あんな恥ずかしい姿見られて言うのもアレなんだがな」

真まことにプロとは言い難い、あられもない姿を晒した後なので、少し照れてしまう。

「あ、そういえばさ」

「なに？」

「お前は妖狐な訳なんだが……。ひょっとして、普通の名前とかあったりするか？」

あくまで『妖狐』というのは名称であって、名前じゃない。

そしてコイツは今や、俺の血族でもある。今後の人生で長く付き合う相手となった訳であって、もし無かったら創ってやらないといけない。

そしてその少女は今、まるで過去を慈しむかのように思い巡らしている。

「……あ」

「ん？自分の名前を思い出したか？」

「ちがう、かもだけど。すこしまって」

そういつて彼女は少し表情を強張らせる。一生懸命思い出しているようだ。

だが、案外短い時間で頭に浮かんだようだ。ペアって子供のようなあどけない表情を作り、こう呟く。

「けっこう、こうよばれた——『尾裂狐^{おくれき}』って」
「ふん、おさき、な……。……んじゃ、お前の名前は現代風にアレンジして、『沙希』ってことで。別にいいか？」
ん、と彼女は短い口調で肯定した。少しばかり表情に笑みが含まれているように見える。

しかし、『おさき』か。

なんか深い意味合いがありそうだけどなあ。しかし別段として、俺の頭にイメージは湧いてこない。

——まあ、放っておいてもいいか。いずれ分かってくるだろうと思うし。

根拠はないけどな。あつたらすげえよ。

「さて、自己紹介も終わったことだし、俺の家に帰るか。……つと、その前に」

羽織っていた黒のダウンを沙希に着せ、グレーのマフラーを續いて首元に巻いてやる。

「流石にワンピース一枚じゃさみいだろ？家に帰るまで着ていいぞ」

わゝ、俺、マジ紳士じゃん。感動だよ、自分自身に。

そんな何時^{いつ}もの俺とは打って変わった行動に、数秒の間、キョトンとした表情を浮かべていたが——

「ありがと、きょーすけ」

愛くるしい顔で沙希は俺の眼を覗き、悠久の時へと誘わせる様な、朗らかな笑顔を浮かべた。

マジで照れそうになる顔を、右手で横腹を抓りなんとか平常を保たせる。

……ちよつと抓り過ぎたみたいだ、痛い。

「そ、そっか。ならいいんだけどな」

しどろもどろになる口調に歯切れが悪くなった俺は、神力で張っていた結界を一瞬で取り除く。

その瞬間、周りの少しざわついた、暖かい家庭の喧噪が耳に響く。

「あゝ、そーいや俺、肉じゃがまだ食って無かったな」

「にく……じゃが？」

「牛の肉とジャガイモっていう芋、その他人参やら糸こんにゃらグリインピースやら玉ねぎやらを、砂糖と醤油とみりんと調理酒で味付けする、超絶に旨い料理のことだ」

早口言葉のように口から零れる。

「よくわからないけど、おいしそう」

「そうかそうか。結構量は作ってるから、おかわりは一応できるぞ」

「……たのしみ」

期待するように、沙希の顔は愉悦の籠った表情を浮かべた。

——最初は気づかなかったけど、沙希は感情をけっこう表に出しているな。

無表情だけだと思ってた初めの頃の俺は、かなり浅はかに感じられる。

「それじゃ——帰ろうか」

「……うん」

俺の言葉に、少し歓喜の機微を漂わせ、消えそうな声で短く答える。

歩き出した俺の裾を握って、沙希は歩調を合わせながら歩む。

月影で照らされた二人の影は、細い路地を紡ぐように続いていた。

——白と黒。一見して相反しているように見えるが、実は相互に関わっているこの色。

今の俺と沙希にとって、月明かりと影で出来ているその二色は、見事に融け合っているように思えた。

『二黒白夜』^{にじくはくぜ}の二つ名を、俺らが轟かせる様になるのは——
そこから数カ月後のことである。

第伍話（後書き）

誤字脱字なんかないようにしていますが、あつたらごめんなさいです
！。

第一章終了時 登場人物・用語

第一章が終わりました。

そこで説明しきれなかったこととか、詳細などをぜーんぶここで紹介しちゃいます。

思えばあとがきを使ってやればよかったんですが、いちいち長ったらしい文章を各話ごとに、今更入るのが面倒なのでやめます！ということ。

主要人物

桜庭恭介

身長：172センチ。体重：59キロ。性別：♂。

好きなもの：料理。嫌いなもの：面倒なこと。

神魅：『黒漆大刀』

本作の主人公です。キャラ的には普通の男子高校生にしようと思っ
てましたが、多少変態かもしれません（笑）。私と同じように面倒
なことが嫌いです。死への恐怖を人一倍持っており、これをいかに
克服するかが今後の物語のキーポイントになってくるでしょう。

沙希

身長：163センチ（妖狐時40センチ）。体重：49キロ（妖狐
時20キロ）。性別：♀（？）。

好きなもの：不明。嫌いなもの：孤独。

神魅：？？？

本作のヒロイン（？）になるかもしれない子ですが、未だ決定し
ておりません。未だ出ぬ幼馴染orこの子のどっちかにしようと思

ってるんですが、そこは話の流れで決めたいと思います。妖狐という狐の『悪鬼』のようですが、どうやら何か隠し事しているみたいです。それは話が進むごとに明らかになってくるでしょう。これがまた非常にあどけない可愛さを持つてるとか。

要純一

身長…176センチ。体重…64キロ。性別…♂。

好きなもの…楽しいこと。嫌いなもの…楽しくないこと。

神魅…???

主人公の友人です。この子には、これから活躍の場を広げていつでもらおうと思っています。非常にイケてるメンズらしく、女子にモテモテらしいです。……自分で作っておいて何ですが、胸糞ム力つきます。

用語

『悪禍』

自然界そのものが持つ時空の浄化作用に対して、許容範囲を有に超える妖力が生じ、妖呪的作用が起こること。『悪鬼』が現界することを使う。

『悪鬼』

現界した、人の理解を超える存在。多くは害を与える者だが、中には福を運んでくる者もいるらしい。世界では『悪魔』『魔物』『精霊』、日本では『妖^{あやかし}』『物の怪^{もののけ}』『妖怪』と呼ばれるものの総称。

『悪鬼被い』

『悪鬼』を被う者の総称。日本では阿倍清明、芦屋道満などと言った『陰陽師』などが有名。被う方法は人それぞれだが、『神魅』を用いるのがポピュラーとなっているようだ。

『神魅』

一人一人に宿っているとされる、八百万の神々の力を武器として投影させること。武器としては、神力の加護が大きい伝説の武器が投影されやすいが、中には無名の物などを投影することもあり、その能力は様々である。また、『神魅』の能力に目覚めるか目覚めないかには個人差があるらしく、大抵は能力者の血筋の者が目覚める。

『聖痕』

『神魅』を初めて解放する際に、体に刻まれる聖なる傷痕。これで能力者が否かを判断でき、また聖痕が付く部位は自由に選べるらしい。ただし一度刻めば変えることは出来ない。二回目以降はこの傷痕に神力を流し込むことで『神魅』を発動出来る。

『鬼女』

恨み、宿業、怨念などの類の『負の力』によって為された形。女性の姿をしているのは、女性の恨みなどのエネルギーが多いためと言われているが、詳しい事は判明していない。老婆姿の者は『鬼婆』とも呼ばれる。現代に於いて一番出現率が多くなっている『悪鬼』。

『力の逆流』

『悪鬼』が悉く力を失った際、周りから氣力を奪う行動やその流れ。エナジードレインとも言われる。発動には時間がかかるため、大抵は為されないが、今回は主人公の情りによって発動した。

『黒漆大刀』

初代征夷大將軍、坂上田村麻呂が使っていたとされる、漆黒の太刀。蝦夷地出兵の際、東北に蔓延っていた妖怪をこの太刀で悉く蹴散らしたとされており、『邪魅^{やみ}瞬しの太刀』の二つ名を持つ名刀。

『黒漆太刀』と言う紛らわしい物があるが、これは儀式用の宝刀。

『使い魔』

主従関係で成り立つ『悪鬼』のこと。

『セーマンドーマン』

阿倍清明が作った呪印をセーマン、芦屋道満が作った呪印をドーマンと言う。セーマンは『清明桔梗』とも呼ばれ、五芒星の形を描く。ドーマンは『九字紋』とも呼ばれ、横五本、縦四本の線からなる格子状を描く。

『生命』

『生きる』という状態を維持するために必要な気力。定義は様々にあるが、『心』や『靈魂』を表すものだというのが有力な説。

はい、ということ以上です。

本文並みの長さになってしまいました……。

これでも必死に省いた方なんですけどね。

それほど奥が深いのか、はたまた自分の文才が無いのか、どちらかは分かりませんが。

めんどかったら飛ばした方がいいかも（笑）。

ここでも言っても遅いし！とか思わないでください。

じゃないとみんな読まなさそうで怖いじゃないですか……。

と、言う事で次回より2章の開幕です。

内容は少しコメディ調にしていきたいと思っています（今のところ）。

それでは今後とも御贔屓に。

第陸話

気が付くと、清廉で純白な素肌が、俺の眼前に広がっていた。そのお淑やかな姿は、ベットという白い海と深く重なっている。

「……沙希、また潜りこんだのかお前は」

「……んう」

甘ったれた吐息が、俺の懷に軽く零れていく。とりあえず、これだけ言っておきたい。

「なんでこう…毎度毎度俺のベットに入ってきて来る？」

お前の布団は隣の部屋にあるだろうが、と付け加えて。だがその問いは、彼女の耳に入っても受容されることはない。どうにもならないので、まずは布団を上げて体を起こすことにする。

「うわっ！おまつ……」

思わず声が出てしまった。

捲れ上がった白いワンピースからは、艶めかしい素足が根元近くまで外気に晒されている。

肩に掛かる紐は片方が崩れ落ちており、零れそう、といった表現が相応しい程の双丘が、俺の眼前でその存在感を示していた。甘美なる色香が、鼻の奥を攪ってくる。

「朝から眼の毒すぎるだろ……」

沸々と湧き上がる衝動を抑えて、俺は隣の少女をジト目で睨みつ

つ、ベットから降りた。

十二月二十九日。

冬休みに入って、早一週間が過ぎようとしていた。

今のところ『悪鬼』の出現はあの日以降なく、見事に暇を弄んでいた。

宿題は既に終了。鍛錬は『悪鬼』出現の多い時間帯、つまり夜に力が出せるようにやっているの、朝から昼までやることがない。

「ふわ。朝飯作るかな……」

いつも買い溜めして、食料は無駄にある冷蔵庫を――

「……ありや？なんか思ったより無くなってるな」

覗いてみると、想像とは大きくかけ離れていた。

常に犇めくように埋まっている冷蔵庫は、現在すっからかんになっている。

調味料、パン、飲み物と卵が数個残っているだけ。

「あー。そーいや22日以降から買い物してなかったわ」

今更のように思い出した俺は、数枚残っている食パンとバター、牛乳を取り出す。

「ま、前兆探索に行くつもりだったし、ついでに買ってくるか」

バターナイフでさっと食パンに塗りつつ、誰も聞いてない部屋の

真ん中で呟く。

最近、どうやら一人言が癖になりつつあるようだ。治さないとな
あと思いを馳せらせながら、牛乳をコップに注ぐ。

朝の食事はこれだけ。あまり早くからは食べ物を受け付かない体
質なので、かなり小食にしている。

「って、アイツまだ起きないのか。……いくら何でも低血圧すぎん
ぞ」

これまた毎度恒例となった彼女起こしに追隨することにした俺は、
自分の寝室へと向かう。

あどけない表情を浮かべて、沙希は吐息を零していた。

最初の頃は、この顔を見た瞬間起こす気が失せていたが……。

「おい。朝だぞー。起きろー」

一週間も経った今では、もはやそんなことでは挫けないようにな
っていた。

耳元に大声で叫んでやる。

「そろそろ起きねえと、朝飯食えなくなるぞー」

しかし返事はない。……まるで屍のようだ。

「起きていただけると、かなりありがたいんだけどー？」

規則正しい寝息だけが、俺の耳にリズム良く響く。

「……実力行使、ってか」

しょうがないな。いつも通りの、奥の手を使うことにする。

俺は彼女が被っている布団を掴み――

「っおりゃ！」

一気にこっちに手繰り寄せた。

「なん……だと！」

つく！コイツやりおるわ！

俺の作戦は簡単に破れてしまった。

ガッチリ布団を手に抱いてキープしており、予めこうなることを予測していたように抵抗する（無意識で）。

何故かその顔は、俺を嘲笑っているかのように気持ちよさそうだ。

「つぶ、つぶ……」

不敵な笑みが、思わず口元から溢れる漏れるのオンパレード。
気持ち悪いと言われても、決して直すことのないこの頬笑み。
子供の頃からの癖で、今更どうにもならなさそうだ。

「ふふふ。……こうなりや、最終兵器しかないな！」

そういつてポケットから高々と取り出したのは——携帯電話。

「ふふ、ふはははは」

慣れた手つきで動かし、マナーモードを解除。その後音量をマックスに設定。

これを沙希の耳元へ近づけ——ミュージックスタート！

「……んんん」

おお！こりゃ効果覲面だぞ！

いけ！頑張れ！科学技術の結晶よ！

「……うるさい」

そう言って彼女は整った顔立ちを歪ませて、布団から体を乗り出した。

眼を擦って、未だ覚醒してない頭を俺の眼前へと上げる。
見事に作戦は成功したようだ。有難う、携帯電話。

「やっと起きたかお前。いくら何でも朝に弱すぎだぞ」

「もう、あさなの？」

「そうだ。ちなみに日の出から、既に二時間以上は経ってる」

「……あさなんて、ほろんでしまえばいい」

「物騒なこと言っなよ……しかも毎度毎度」

昨日は、もう朝なんて来させない、とか言ってた。

一昨日は、太陽を滅してやる、とか言ってたなあ。

まあ基本的に『悪鬼』は夜行性。仕様がなから慣れてもらうまで、こいつには早起きしてもらうことにしたんだが……。

その結果がこれだ。報われんぞ俺。

「だって、じゃま。まぶしい。あつい。だるくなる。あびたくない」

「あのなあ。そんな二トみたいな事を朝から言っなよ。太陽が無ければ、まず地球が成り立たなくなっちまうんだぞ？」

「に、にー……？」

「ああ、仕事に就かず、ただ家に蔓延る、通称——自宅警備員と呼ばれる者たちのことだ」

「それ、しごとみたい」

思わぬ突っ込みに、しどろもどろになる俺の言葉。

「いや、それは何というか……。って、話を逸らすな。とりあえず、太陽が無くなったらどうするんだよ」

「だいじょうぶ、てれびがある」

「テレビジョンはそんなに万能じゃねえよ！」

どんな誤った知識を頭に埋め込まれちまったんだ？ テレビに。うーん。第四権力、恐るべしだな。

「だいじょうぶ、ゼーんぶねことだから」

「とりあえず、寝てる時に言っただけだったな。これじゃただの願望だ」

「……」

「悪かった！ 俺が悪かったから二度寝などしないでくれ！」

一回起こすだけでこんなに時間が掛かるんだから、二度寝なんかしたら夜まで起きない気がする。

「とりあえず、着換える。そして朝飯食うぞ」

「わかった」

そう言っただけで彼女は、白いワンピースを^{へんげ}変化させる。

一瞬の内に、下はフリルのついたピンクのスカート、上は紺のブラウスに黒のレースジャケットを着た格好になった。その見事なまでに整った肢体を俺に見せつけてくる。

「『化ける』って、便利だな……。服を買う必要がねえ」

俺もその能力が非常に欲しくなってきたぞ。

「そうだね、きょーすけ」

幾分嬉しそうにそう言っただけで、彼女はダイニングへと向かう。

沙希には一通り、現代女子の服を覚え込ませた。その効果あって、ここ三日程はこうして服装を変えて過ごしている。

しかも順応性が早く、今ではもう綺麗な女子高生にしか見えない。かわいいのではなくて、綺麗。

非常に価値が高い。

「もう、できてる。あんびりーばー」

その綺麗系女子、沙希が無表情にそう呟く。

「そんな言葉、いつ覚えた？ あと俺が用意したんだから、全然びつくりするようなことじゃないぞ」

「……？」

「意味分らずに使ってたのかよっ！」

そりゃ驚嘆なんかしねえよ！だって意味が分かってないんだもん！

「いただきます」

「そして何事も無いかのように軽くスルーですかそうですか！ それじゃ、頂きます！」

「どうぞめしあがれ」

「……召し上がります」

ああ、最初の頃は、結構まともな奴だったんだけどなあ。

これまたここ三日ほど、こいつは恐るべき天然を発揮し出している。

——いや、こっちが素なのかもしれない。

今までは緊張して喋れなかったとか、少なくともそんな感じだと思っ

「……ま、悪くはないわな」

「なに？」

「何でもねえよ。いいから食べる」

こくり、と沙希はパンの耳を千切りつつ、首を縦に振った。

まあ、そのー、なんだ。

二人つてのも、悪くはないな。うん。

朝飯を食い終わり、食器を洗ったところで、俺はダウンを着始めていた。

今では俺の半身とも言えるマフラーを、慣れた手つきで首元に巻く。

「それじゃ沙希。俺は買い物に行ってくるわ。すぐ帰るから」

「かいもの？」

「そ。町に赴いてお金と食料を交換してくるんだ」

「わたしもいく」

「……」

っへ？今コイツはなんと言いやがりましたか？

「わたしもいく」

「……ヲイ、神。お前は何でこれほどまでに俺に試練を与える」

「なんでざんげしてる？」

「しなくちゃ俺が運命という名の試練に、呑みこまれちまう状況だからだっ！」

無理だ。俺には無理だ。

コイツを連れて、街になんて行けねえよ！

絶対街で何かをするぞコイツは。そしてその何かは、必ず善からぬことになるに違いない。

例えば無銭飲食、器物損害、営業妨害その他もろもろ。

……どうして沙希を連れて行けようか。

「とりあえず、わたしもいく」

「沙希はさ。もう少し考えてモノ言っようにしようぜ。な？」

「うーん。………いく」

「そういう意味じゃねえんだよ！ホントに少しだけしか考えてないな！」

何言っても無駄かもしれない。

「ていうかさ、何で沙希は付いて来たいの？」

とりあえず、まずはこの理由を訊いてみることにする。
だが、その問いを掛けた瞬間、沙希の顔は曇り始める。

「ひとりは、いや」

しょんぼりした様子で、そう呟く。

顔には少し、悲壮感が漂っているようにも見える。

「ひとりは、いやなの」

もう一度、彼女は心を赴きを俺へと吐いた。
嘘偽りなどない、彼女に在る唯一の本心。

「……そうだったな」

ここ最近何もなかったから忘れてたけど、沙希は孤独を恐れる傾向がある。

どうやら、コイツを連れていかないって選択肢など無いようだ。

——なら、最低限度の事は言っておかないと。

「それじゃ三つだけ約束を守ってくれ、いいな？」

そう言って俺は、彼女の目の前に三本の指を掲げる。

「一つ、他人に迷惑を掛けない」

「うん、めいわくかけない」

「二つ、勝手な行動をしない」

「うん、かってにしない」

「三つ、……俺の傍から、絶対対に離れるな！これが一番大事」

「わかった。ぜったいはなれない」

沙希は言う事を良く聞き入れてくれるが、俺が居ないとこだと何をするか分らない。

だから三つめは必ず守ってもらわなければ。

まあ、『絶対』離れないってコイツも言ったし。
危ない心配はしなくて大丈夫だろうと思う。いや、むしろ思いた
い。

「よし。物分かりのいい子は好きだぞ、俺は」
そう言って、沙希の頭を軽く撫でる。
柔らかな、そして甘酸っぱい色香を放つ金髪を、そっと。

「ん……」
嬉しそうに眼を細め、彼女はその快感に酔いしれる。
全神経を頭に注いでいるような、そんな錯覚さえ覚えさせる様に。

「うしつ、それじゃ行くぞ。あとそれだけじゃ寒そうだから、もう
一枚上着を作れ」
「……わかった」

名残惜しそうにそう言うと、沙希は俺のタンスから一枚シャツを
取り出して、カーキ色のモッズコートに変化^{へんげ}させる。
化ける能力の真髄、物質そのものを化^かえる力。

「うわー、いや、マジでその能力欲しんだけど」
「うらやましい？」

「かなり、な。正直俺にも欲しいくらいだ」
「けどあげない」

「ていうか、まず俺に付与できねえよな？その能力」
「……」

「つえ？嘘？出来るの？付与できるの？」

「いこ、きょーすけ」

「待て！俺の質問に答えてからにしろ！妙な伏線を張るな！」

その後、数分程粘ったが見事に流された。
今度は逃げられないようにして聞き出そう、そんな決意が脳裏を
過った。

第陸話（後書き）

誤字脱字など、あつたらごめんなさいです。

第漆話

「ねえ、きょーすけ」

「……何だ？」

「なんでみんな、こっちみてくるの？」

「そりゃー……まあ、簡単に言えばお前がいるから、かな？」

「どういうこと？」

「気にするな。余所見してたら躓くぞ」

「わかった」

そう言って沙希は見上げた顔を、正面へと戻す。

——俺の腕に絡ましている、自分の腕の力を強くして。

周りから見られている原因はコレだ。……いや、沙希がいるから、という理由かもしれないが。

コイツは傍から見れば、金髪翠眼の美少女。その姿には老若男女問わず、誰もが酔いしれること間違いなしの容貌だ。

そして現在、俺の予想は見事に的中し、沙希はその真価を発揮している。

且つ、俺に腕を絡めて歩いているという点でなおさら注目度アップだ。

「なあ、沙希よ」

「なあに？」

「とりあえず、その腕どうにか出来んのか？」

「どうして？」

「いや、お前の福与^{ふくよ}かな例のアレが当たってくるといつか何というか……」

こんなこと、いくら『使い魔』だと言っても、大っぴらに言うの

は躊躇われる。

「まあ要するに、腕を絡めなければあまり周りから見られなくなるってことだ。あまりジロジロ見られるのは嫌だろ？」

「でもきょーすけは、はなれちゃいけないって」

「……」

ジーザス！

おお神よ。なぜ私はあんな事を言ってしまったのか。

最初の二つだけで良かったじゃないか。なぜ三つも言ってしまったんだ、ホント！

……いや、確かに三つ目も重要だったんだ——と思う。
でも、まさかこうなるとは考えもつかなかった。

「いや、それにしても腕を絡めるのはどうかと」

「て、つなぐ？」

「それもそれで、何というか……」

「きょーすけは、いや？」

「……え？」

「わたしにふれるの、いや？」

美しい翡翠の双眼が、俺の芯を捉える。

その視線の中には、少し哀愁が混じっているようだ。

「……そんな眼で見るなよ。別に嫌なんかじゃないから」

「ほんと？」

「本当だ。お前が周りから見られるのが嫌かと思って、訊いてみたんだ」

「しんぱいしてくれたの？」

「……ああ」

最初は別の理由だったかな。

俺も別に嫌じゃないっていつか——ただ恥ずかしいだけと言っか。

「ありがとう」

そう言っで彼女は、俺の方に少し凭もたれかかってくる。

その表情は、もはや今さっきの哀愁など無く、歡喜で満ち溢れて
いる。

周りが少しどよめいた気がしたが、まあ気のせいだろう。

——何だアイツ

——いちゃいちゃしやがって

——でもあの娘可愛すぎじゃね？

——男は……まあ少しかっこいいが、不似合いじゃないか？

——ていうかまずム力つく

「……」

——あーなるほど

——どこで見つけたんだか

——脅してんじゃないの？

——わかるわ

——少し怖そうだしな

——強面ってやつ？ あの子も可哀そうだな。

周りから、何とも言えない陰口が聞こえた。

耳が特別良いつて、こういう時はかなり残念スキルだな。

「……」

「どうかした？きょーすけ」

「何でもないから、絶っ対！俺から離れるなよ！」

「わかった」

ふん。これ見よがしに見せつけてやるわ！ 言いたい放題言いやがってこのヤジ馬どもめ！

嫉妬か！ とりあえず、俺の事をとやかく言うんじゃねー！

不似合いなのは、鼻から分かってんだよ！

強面だ？ しゃーねんじゃん普段からこんなんですよっ！

残念ながら、俺はイケ面な純一さまさまじゃな――

「あ、恭さん。休みの日に会うなんてめず……っ！ええええ！？」

「っ！よ、よう純一。き、ききき奇遇じゃねえか！」

「……」

「……」

「……ん？」

場の雰囲気を読み取れなかった沙希が、疑問を含む声を放つ。
ていうか、噂をすれば何とやらか？

スーパ―に行く道の曲がり角で、純一と接触してしまった。
さて、と。

どーすっかなーこれ……。

選択肢としては、逃げるか言い訳をするのだが。

前者をしてしまったら、間違いなく俺は誤解されてしまう。

なら……後者で頑張ってみるしかないよな。

「まあまず落ち着け純一。これにはあの日本海溝よりも深い訳があ

る」

「きよ、恭さんが、女の子と……。アレ？これはまだ夢かな？休みで頭がボケちゃったのかな？」

「よし、日頃からこういう目で俺を見てるかが分かった。とりあえずそこに直れ！」

悪かったな！どうせいつも独り身だよ！

「まあまあ。落ち着いて下さいよ恭さん。多分恭さんの知り合いなら、誰でも驚いてますって」

「どういうことだ？ 内容次第では罪を無くそう」

「いやだって、恭さんって何回女子に告白されても、誰とも付き合わなかったじゃないか」

「……あー。なるほどな」

確かに、と思つて俺は頷く。

『悪鬼被い』という仕事は、常に危険が伴う。そのため、そんな奴と付き合うだなんて辞めた方がいい、という独自の結論で、現在まで誰とも付き合つたことがない。

つていうか、そう考えると俺が独り身なの、俺のせいじゃん。

「いや、それにしてもびっくりですよ恭さん。こんな美少女侍らせちゃって！ どーりでクラスの女子にあまり喰い付かない訳だ」

「待て。お前は一つ勘違いしている」

「何のことだ？ 恭さん」

「言つておくが、コイツは俺の彼女じゃない」

「……え？でも、これ見よがしに腕を絡ませてるじゃないか」

「その理由はコイツに訊け」

そう言つて、俺はクイクイツと沙希の方に首を傾げる。

「えーっと、それじゃ」

純一は沙希の目線に合わせるように、少し腰を下げた。

「こんにちは」

「……ん」

純一のにっこり挨拶に、少し怪訝そうに返事をする。

「名前はなんて言うのかな？」

「……沙希」

「沙希ちゃん、か。可愛い名前だね」

そう言っただけ、純一は、太陽に勝ると思える程の頬笑みを浮かべる。

——コイツがモテる理由、それがこの笑顔だ。

この顔で、幾度となく女子という女子はコイツに心を奪われてきたことか。

まさしく、『スマイルキラー』と言わざるを得ないだろう。

「……」

しかし沙希は、無機質な顔を浮かべるだけだった。警戒心も混じっているように見える。

「それじゃ訊くけど、沙希ちゃんは何で恭さんと腕組んでいるの？」

「ぜったいにはなれるな、ってきょーすけがいった」

「それで腕を組んでいるの？彼女じゃないの？」

「それは、ちがう」

「そっか。ありがとね」

そう言っただけ、純一は腰を上げた。

「分かったか？沙希は俺の彼女じゃないんだよ」

「それじゃ、この子は何なの？恭さん」

「……っへ？」

し、しまった！そんな設定、何一つ考えてなかったぞ。

やべえ、土壇場には弱いんだよな、俺。

「えーっと、何というか……。とりあえず、これは話せば長くなるから、また今度——」

「何だ恭さん。話すことが出来ない程、只ならぬ関係なのか？」

「それは違うぞ！」

ああ、コイツが妖狐で『使い魔』だって事を言っただけ。言っただけでやりたいけど……。

俺が『悪鬼祓い』だっただけがコイツにバレちまう。それだけは避けなければならない。

純一の俺を見る眼を、変えたくはないのだ。

「んー。それじゃ沙希ちゃん。恭さんとはどんな関係なの？」

あ、コイツ！ 純粹無垢な沙希になんて事訊いてやがる！

しかも眼が薄っすら笑ってやがるぞ。確信犯かコノヤロー！

頼むから、余計なことは言わないでくれよ沙希様。

「……えっと」

沙希はその質問に考え込むようにして——

「しゅじゅつかんけい？」

強烈な爆弾を落としかかった。

「つぶ！」

「おい沙希！？ それは違うだろ？ なっ？ そうだろ！」
ちなみに吹いたのは純一だ。非常に珍しいことである。

「違うよな。な？」

念を押すように訊くと、沙希は考え込むようにして——
「えっと……、ぺっと？」

壮絶なデジャヴが起こった。

「ぶふっ！」

「沙希様ー！？ それはどんなご冗談でしょうかー！」

やめろおお！ やめてくれええ！ 純一にこれ以上、俺の変態度を露出しないでくれええ！

いや、確かに全部合ってるって言えば合ってるけどさ！ もっとオブラートに包んでくれ！ 頼むから！

「きよ、恭さん……」

「違う！ 断じて違うぞ！ だからそんな眼で俺を見るな！」
猛烈な勢いでその問いを否定し、俺は沙希の方を向く。

「な？ もっとマシな言い方があるだろ？」

「えっと……」

再び彼女は、考え込むように頭を捻らす。

頼むぞー。今の俺には、お前しかいないんだからな。

「あっ」

「思いついたか？ よし、言ってやれ沙希」

彼女はこくり、と徐に頭を縦に振り、神妙な面持ちでその言葉を言い放った。

「どうきよにん」

「……」

「……」

ああ、もう駄目だわ。

さよなら。まともな俺の人物像。

ねえ、何だかとても眠たいんだ……。

「あのー、恭さん？こんな所で現実逃避しようとししないで」
「だって。だって。俺はもう駄目な奴なんだよ」
「それで、沙希ちゃんと同居してるって本当か？」
「もう何も言っても無駄だと思うから、正直言っけど……確かに一緒に住んでる。って言っても！俺は別に手は出してないからな！」
「大丈夫だよ恭さん。俺だって、恭さんがそんな簡単に手を出せるような根性は無いって、分かってるから」
「なんか嬉しい気もするけど、それ以上に馬鹿にされた気がするぞ」
「気のせいじゃないかな？」

そう言っただけ純一は話を誑かす様にして口笛を吹く。
いやしかし、何とか乗り切ることが出来たな。
純一があまり深く尋ねて来なくて、ホント良かった。

「あ、そう言えば恭さんたちは、どこに向かう途中だったのかな？」
「おっと、目的を忘れてたわ。今からそのスーパールに行く途中だったんだ。んでその後、散歩の予定」
「おー、買い物に散歩か。なら俺も付いて行っただいかな？」
「あれ？ お前今さっきスーパールの方から来なかったか？」
「暇だったし、今日は結構暖かいからね。少し散歩してたんだ」
「ふん。……沙希は純一が付いてきても、別にいいか？」

首を曲げて先に尋ねると、小さくコクリと首を縦に振った。

「きょーすけがいいなら」
「そっか。それじゃ一緒に行こうぜ」
「サンキュー恭さん。とりあえず、荷物運びは手伝うから」
「おー、それは助かる。何しろコイツ、全然離れてくれないからさ」
「何言ってるんだか。顔がニヤけてるぞ恭さん」

そう言ってニヤニヤとしてきた純一に、俺は思わず訊き返していた。

「っげ、マジ？」

「嘘だけど？」

「ふ、ふふ、ふふふふ……」

「その笑い、すごく恐いから街中でやらない方がいいよ？」

純一に笑顔で諭され、渋々怒りを抑えた。

第漆話（後書き）

誤字脱字などあったらごめんなさいですw

第捌話

クイクイっと、沙希が俺の裾を引つ張ってきた。

「ん？ 何かあったか？」

「……しせんがふえた」

「あー。そりや仕様がなくないか？」

何しろ、イケメンも増えちまったからな。

右には純一、左には沙希と言った、豪華美男美女が一緒に（平民と）歩いてんだ。

それを見ない奴なんて、余程な変人か、三次元に興味のない奴かのどちらかってもんだよ。

そして……俺の肩身がとてつもなく狭い事を分かってくれ。二人とも。

「俺もそう思うよ。なんかいつも以上に見られてる気がするな！。

……沙希ちゃんと恭さんもいるからかな？」

「沙希は分かるとして、何故俺も数に入れている？」

「恭さんだって、別に酷い顔立ちはしてないからね。まあ強面って方面で見られてるかもだけど」

「……なんかやつぱり、偶にお前は俺を馬鹿にしてるよな？」

「気のせいじゃないかな？」

そう言って純一は微笑む。

「っと、着いたか」

そうこうしてる内に、俺たちは到着したようだ。いつもの御用達、町一番の安さを誇るスーパー！。

「それじゃ純一、コレを頼むわ」

そう言って、俺は出かける前に買う物を書いたメモ書きを渡す。
「えーっと、なにに。牛肉八〇〇グラムに牛乳二本…って、これ
どんだけびっしり書いてあるんだ恭さん!？」
「ちなみに言うと、それと同じぐらい量を書いたメモ書きがここにもある」

そう言って高々ともう一枚の方を上げる。

——しかし、純一に渡したのは、かなりの量になるものばかりのメモ。

少しぐらい、コイツを使ってやろうって魂胆だ。我ながらあくどい男だぜ。

「……分かったよ恭さん。それじゃ行ってくるよ」

渋々といった感じ純一はお店に入って、右側の飲み物のコーナーに移動する。

「よし、それじゃ行こうか沙希」

「うん」

「あと、その腕退ける気はない？」

「ない」

「即答だなライ……。でもまあいつか」

そう言って俺たちは店内に入り、左側の野菜コーナーに歩き出した。

「きよ、恭さん酷いじゃないか！俺ばかり重いの持たして！」

「しゃーねーだろ？左腕が塞がっちゃまってるんだから。それとも何だ？沙希に持たせろってことか？」

「い、いや。そこまでは言っていないけど」

「なら頑張ってくれ。俺も俺で大変なんだ」

「……いつか仕返ししてやるからな」

「覚えてたらな」

久しぶりに純一にしてやったりで、少し嬉しくなっている俺。
非常に子供っぽいのは重々承知だ。

買い物の後、街に散歩——もとい、前兆探查に来ている。

実は妖力による歪みの前触れは、結構分かりやすい形で分かったりする。

例えば——

「今日ぐらい、『悪鬼』出るかもな恭さん」

「そうそう、今日ぐらいに出そ——」

……え？ 今コイツは何と言った？

「じゅ、純一。お前、何でそんなこと分かるんだ？」

「ん？それはこくら辺の空が少し紫色になってるからだよ。こういうのは『悪鬼』の出る前触れなんだ」

「フイ！ どうしてそんな専門的知識をお前が知っている！？」

——ていうか、これは確か神力を発動できる奴じゃないと、探知出来なかったんじゃない……。

「何で、そんな事を知ってるんだ？」

「あ、恭さんに言っただけ、俺、実は一年前から『悪鬼被い』なんだ」

「……っは？」

「って言ってもまだ見習い。だから今日は、この街の『悪鬼被い』」

の元に行くつもりだったんだ」

「行くつもりって、どういうことだ？」

「名前を教えてもらってないんだよ。相手から来てくれるってことで詳細は全くだ。だから街中を歩き回って、相手から話しかけてもらおうと思って散歩してたんだ」

そう言って、純一は溜め息をつく。

「俺の師匠。腕は確かなんだけど、なんか放任主義っていうか適当って言うか。」

未だに一回も実戦したこともないし、ホントどうなることやら」

「……」

純一が悪鬼抜い？ マジで？

いや、それが本当なら、なんかこつちとしては沙希の正体バラせるし、楽と言えば楽ではあるが……。

（——いや、少し待てよ？）

だがここで、俺の中である疑問が浮かぶ。

（コイツって、力を受け継ぐような家系の奴だったわけ？）

そう、確か純一の父親はサラリーマン、母親は専業主婦といった、所謂平凡な家系。

力の継承によって成り立っている『悪鬼抜い』には縁が遠いはずなのだ。

「あのさ、質問があるんだけど」

「ん？何だ恭さん？」

「お前んちってさ、そういう家系なのか？陰陽術を受け継いでいるとか代々エクソシストになってるとか」

「ああ違うぞ恭さん。俺は『特例型』だよ」

「……そっか。それなら納得だ」

すっかり忘れてた。

被ったための能力は代々受け継がれる物だと言われているが、昔から稀に平民の奴が突然得ることもあった。そういった奴らの事を『特例型』という。

最近かなり増えているこの『特例型』は、結構レアな武器を投影出来たりすることが多く、かなり重宝されたりする。

「それにしても、恭さんって本当に物知りだよな」

「あ、ああ。そうだな」

「まるで悪鬼被いに見え——」

冷や汗がぶわっと沸きだしたところで、俺の携帯電話が振動し出した。

「ナイスタイミングだぜ携帯電話！ 今日はかなりお前を重宝するぜっ！」

「おっと、悪い」

「そう言って取り出した電話を開き、耳に当てる。

「もしもし？」

「おはー恭介ちゃん。元気してるー？」

——やっぱりナイスタイミングじゃ無かったぜ、携帯さん。

そしてその声には聞き覚えがあった。

「脳裏に常にビールやチューハイやらを持った二十代の女性が浮かぶ。」

「……何の用ですか？ 全く身に覚えがないんですけど。あと、もう昼間なんではようじゃないですよ？ 梓さん」

東雲梓。しのめあずさ 酒乱とも呼べるこの人には、とにかく良い思い出がない。ただ、実力だけは『悪鬼祓い』の中でもトップの位置を誇るといって、非常に性質が悪い人。

そんな声出さないでよー。お姉さん少しショッキングー

「それで、もう一回言いますけど何の用ですか？ さっさと言わないと切りますよ」

もーそんなこと言っちゃって！……でも、君のそういう所結構好みなんだ――

「悪戯電話ですか。失礼します」

待ってよー！ そんなこと言っちゃってると、大事な事言い忘れちゃうよー

「……何ですか？ 大事な用って」

えつとねー。少しの間、お姉さんの弟子を見てもらいたいんだー

「っは？」

梓さんが――弟子をとった……だと。

だ、誰だ！ そんな無謀な冒険に出た馬鹿野郎はっ！めっちゃん

君と同年でさー。かなり格好いいの！ でも、あまり好みじゃないんだよねー

「いやいやいや、そういう御託はいいですから。ていうか、何で弟子を俺に寄越すんですか？

てか弟子ってどういうことですか！？」

お姉さんさー。何か東京の『悪鬼祓い』養成学校の先生に就任することになっちゃってねー。

ちよいとお引越ということで、今その東京にいるんだー

「せ、先生……だど！」

む、無理だ！ こんな人を先生なんかしたら、学校が終わって

しまう！

「何で断らなかつたんですか！ていうか、あまりそういうの好きじやなかつたでしょ貴方！」

んー。何かその弟子の子を見てるとね、せんせい師匠つてのも悪くないかなーって。

それでその頃、この話が私に持ち上がってて。それで引き受けちゃったって訳

「何と言いますか……むちゃくちゃですね」

自分でもそう思うよー。とまあ、そーいう事でちよつとの間よろしくねー。……あ、弟子の名前は――

「要純一、ですか？」

そう！ そうなのよ恭介ちゃん！ なーに？ 予知能力でも付けちやつた？

「いいえ、偶々（たまたま）知り合いだったんです」

そうなんだー！ あの子、あまり男のお友達居なさそうだったから、これでお姉さん安心したよ

「はあ、そうですか」

あと弟子には、まだ実戦経験持たせてないから、少し闘わせてあげてねー。それじゃーバイビー」

「あ、ちよつと！」

……

一方的に切りやがった……。

ていうか純一。すげえ厄介な奴を師匠にしてんな。

御悔み申し上げるぞ、マジで。

「なあ恭さん。結構叫んでたみたいだけど、何かあったか？あと、俺の名前も出てた気がするぞ」

「……」

んー。何て言ったら良いのか、正直分からねえや。
いきなり、俺がお前を指導しますって言ってもなあ。

「恭さん？聞いてます？」

「ん？ああ、聞いてるぞ聞いてるぞ」

いや、ここで悩んだりしても、もう遅いか。
今更隠しても、どうしようも無いしな。
きっぱり言ってしまうおうぜ、俺。

「それで、どういう内容の電話だったんだ？ていうか誰からの電話なんだ恭さん？」

「電話の相手は、東雲梓だ」

「……っへ？ 何で俺の師匠が恭さんに電話なんか」

「そしてお前の師匠は、現在東京にいるらしいな。理由は悪鬼祓い育成学校の先生になるため。

だからお前は師匠不在の間に、この街の『悪鬼祓い』の所に行つて師事を受けようとしている。

——間違いないか？」

「何でそんな詳細まで、俺の師匠は恭さんに教えてんだ！？」

「理由は簡単だ。それは——」

そう言つて、俺は純一に今までの事を詳しく話していくのだった。

夕暮れ前の、辺りが真っ赤に燃える刻。

現在俺の家に純一を招いて、あれこれと説明中。

ちなみに沙希は、テレビを喰い付くように凝視している。

こうして、また沙希に変な情報が付いて行くのだとすると、少し止めさした方がいいのではと本格的に考える。

「ま、まさか恭さんが本当に『悪鬼祓い』だったなんて……」

一通り話し終えたところで、何故か疲れきった表情で純一が呟きだす。

「これからは恭先生と呼びたまえ、純一よ」

「それは嫌だ」

「っち、面白くねー」

「ていうか夜の『お仕事』って、実はそういうことだったんだな」

「少し考えれば、誰でも考え付きそうだと俺は思っけど」

そうそう無いからな、そういう仕事。

「いや、恭さんが言ったら、マジで危なそうな『お仕事』に直結するからさ。気づけなかったよ」

「それはそれは、どういう意味なのかな？　かなあ？」

「あまり気にしないでよ。……いや、それにしてもかなり吃驚だ。」

まさか俺の師匠が推してる人のことが、まさか恭さんだったなんて

「あの酒乱は俺の事を推していたのか？」

「うん。今時珍しく、仕事を淡々とこなす奴だって。あと自分の超好みだと言ってた」

「……」

その情報は、決して聞き入れられなかったよ純一さんや。

「でも師匠が押すぐらいだから、かなりの腕前なんだろうなあ」

「別にそこまでじゃない。お前の師匠はAランクだけど、俺はまだBランクだしな」

「その歳で国家免許持つてるだけで、俺は驚きなんだよ恭さん」

「小さい頃から鍛錬してただけだ。お前だって、俺ぐらいの歳からやってれば簡単に取れる」

「ちなみに、免許はいつ取ったんだ？」

「ん？ ああ、昔の元服時の年齢に合わせて取ったから、十二歳かな」

「じゅ、じゅうに……」

ここで完全に、純一は機能停止してしまった。

なんか悪いこと言ったかな、俺。

いや、免許皆伝が早いのか。やっぱり、おかしいよな。

「きょーすけ」

と、純一の身を按じていると、俺の背後から幾分可愛らしい声色が響く。

「お、沙希。なんかあったか？」

「たぶん、あとちょっとでそう」

「ん、何が出る——」

と、ここで頭にふと、ある可能性が過った。

急いで神経を研ぎ澄まし、神力を用いて気配を辿っていく。

「……ああ、確かにあと一時間以内には来そうだな。御手柄だぞ？
沙希」

そう言って柔らかな金色の髪をそつと撫でてやる。

「ん……」

毎度恒例となった動作。

コイツは一番、これを喜んでくれるからついやってしまっただよな。

「さて、と」

数十秒程撫でた後、慣れた手つきで部屋の中から必要な物を取り出す。

毎度恒例になった『御札』や、穢れを取り除くとされる『粗塩』。特定の悪鬼拘束用の『撚糸』^{ねんし}など、様々な物を持ち運びなれたリュックサックに着々と詰めていく。

「つて、コイツはまだトリップ状態か」

先ほどから完全に動きが止まっている純一に眼を向け、少しばかり溜め息が零れる。

「おい。おきろー。そろそろ行くぞー」

「……ん？どうかしたか恭さん？」

「何言ってるんだか。どうかしてるのはお前の方だ。……いいからとつと行くぞ。もうじき『悪鬼』が出る」

「え？でも、まだ逢魔ヶ刻^{おつまがとき}よりちよつと前だぞ。そんなに早く出るものなのか？」

「妖力探査、出来るか？」

「出来るぞ恭さん。師匠がこれだけは大事だ、って言ってたから最初に覚えたんだよ」

「なら今やってみろ。狙いは北側の公園あたりだ」
「了解」

そう言っただけで純一は眼を閉じて、神経を集中させていく。
聖痕が少しばかり輝いて、微かな神力の波動が街全体を包んでい

く。

いやしかし、結構上手いもんだと思う。

こんなにスムーズに、広範囲に力を流すっていうのは簡単に出来ることじゃない。

案外『悪鬼抜い』かなり向いてるのかなと、すこし畏敬の念を交えて思った。

「あ、妖力の密度がめっちゃ濃いな」

僅か数十秒程度で測り切った純一は、おもむろに呟く。

「通常より、かなりな。多分あと一時間以内には出ると思う」

「ていうか恭さん、よく気づいたな。今の今まで全然分かんなかったぞ」

「俺も沙希に言われるまで気づかなかったよ。って言っても、それでも三十分前ぐらいには妖力の波動が強くなりすぎて、嫌でも気づいちゃうようになるけど」

「……思ったんだけどさ、沙希ちゃんも『悪鬼抜い』なの？」

少し疑問の念を含ませて、俺に質問してくる。

説明したと思っていたのだが、あながち言い忘れていたのか。

「沙希は俺の『使い魔』だ」

「っへ？それじゃ主従関係っていうのは……」

「想像通り。俺が主人であいつは僕だ。命令は出来ないけど」

「あんないたいけな美少女を……」

「待て待て！ お前はまたもや勘違いをしている！ 沙希は妖狐なんだ！」

「妖狐？——ああ、それで人間に化けてるのか」

「そういうことだ。かなり精巧に化けてるから、全然人間と見分けつかないけど。」

……つと、詳しい御託は後だ」
「了解したぞ恭さん」

沙希は既に準備していたようで、既に外出準備は万全だった。
二人が部屋を出るのをきっちり確認すると、俺は鍵を持って玄関
へと向かった。

第捌話（後書き）

誤字脱字など無いようにしていますが、あったらごめんなさいですー。

第玖話

辺りは、闇と光が混ざり合っていた。

公園に着いた俺は、いつも通り神力を繊細に取り扱い、結界を張り巡らせていく。

沙希は既に妖狐モードに入っていて、白銀の毛を棚引かせている。しかし、冬ということもあって、この時間帯でも誰も子供がいなかったのは幸いだった。

いれば何とか理由をつけて、追い出さなければならなかったからだ。

だがそんな事をすれば、なんとも大人げない高校生だと思われるだろう。うん、痛いな絶対。

「あれ？恭さんは御札で結界張らないのか？」

そんな風に思っていると、ここで純一がふと俺に訪ねてくる。

俺はあまり使わないが、『御札』というのは実に便利な物である。用途とすれば、“力”を札の中にスペックするだけ。後は使う時に解放するだけでいい。

そうすることで、闘う前の作業効率を簡略化することが出来るのだ。

まあ、札に力を籠める時間が必要となってくるのだが。

ただ便利なことには変わりなく、また『御札師』と呼ばれる御札を使って闘う奴もいたりする。効率性はなかなか良い。

「まあな。俺は自分で結界を作る派なんだ」

「俺の師匠はいつも御札でやってるからさ、恭さんもそうかなあと思ってたけど」

「ああ、あの人は細かい作業好きじゃないからだろ。現地で結界を

一から作り始めるのが面倒なんだろうな。多分、誰かが結界用の神力を籠めたものを使ってるんだと思うぞ」

そつという商売をしてる奴も、少なからずいると思うし。

「ていうか師匠も恭さんも、何でわざわざ結界を張るんだ？俺的にあまり張ってる人は見かけないんだけど」

「……む」

その軽く訊いてきた純一の声に、大人げなく憤りを覚えてしまった。

コイツはまだ見習いだと分かっているけど、そういう事はあまり言うて欲しくはなかった。

「…説明するけど、決してあの人の前でそんな質問するなよ？」

「あ、ああ。分かったよ恭さん」

いきなり変わった俺の態度に少し驚きながら、純一は首を縦に振る。

「よし。それじゃ教えるぞ。注意して聞くように」
結界を張る作業を続けながら、純一の方に向く。

「いいか？決して『悪鬼被い』の『仕事』というのは見世物なんかじゃないんだ。一般人に見てもらふ必要性なんてこれっぽちも無い」

「……」

「だけど一般人が来ればどうなる？ 自分は周りに被害が届かないように注意しないといけない。」

それはもちろん、余裕が無くなるという事に繋がる。あと、周囲に危害が加わる可能性も、圧倒的に増えるだろう？

こんな理不尽、あつたもんじゃねえよ。己が褒められたいが為に

人呼び込んで、『悪鬼』を抜うなんざ子供のヒーローごっこと同じだ。

——しかもかなり性質^{たち}の悪い、な」

俺の力説に、純一は顔を曇らせて行く。

そんな様子を見て、俺は少しだけほくそ笑んだ。多分、コイツならこれだけで分かってくれるだろうと思うから。

「……確かにそうだな、恭さん」

「あの人——梓さんはそういう事は極端に卑下する。

自分の欲求に周りを巻く込むのを、善しとしない信条の持ち主なんだよ。無論、俺もそうだけど」

「もういいよ恭さん。俺、結構浅はかな事を訊いてたんだな」

「いや、分かってくればいい。中には理解しても無視する奴とかいるし」

流石にあの人が見込んだだけはある。いち早く理解し、自分に取
り込む能力が他の奴より長けている。

「さて、そろそろかな？沙希も準備はいいか？」

結界を張り終わり、小柄になった沙希に問いてみると、こくりと首を縦に振る。

「……純一。お前ってさ、実戦経験ないんだろ？」

「そうだぞ恭さん。師匠の『式神』と闘ったぐらいだ」

「なら最初は一人で闘ってみろ。何事も見聞きより実戦で学んだ方が早く身に付く」

「……ああ、分かったよ」

嬉々とした面持ちが、その声色には含まれていた。

逢魔ヶ刻おつまがときまで粘るかと思っていた悪禍わざわいは、出現前に現れる独特の妖呪的現象——空間のねじれを起こし出す。

「いよいよだな、恭さん」

「いいか、決して手は抜くなよ？　どんなに強い奴だって、気を緩めれば死ぬ世界だ」

「大丈夫。師匠に何度も言われたから」

気張ってそう純一はそう告げる。

だがその言葉とは裏腹に、緊張と歓喜という相反する感情に挟まって、顔を少し強張らせている。

そして——『そいつ』は現れた。

「……ヒュウウウウ」

とにかく、でかい。軽く十メートルは超そうかとする細長い全長。その体を覆う暗藍色の甲殻が不気味に夕日によって照らされ、途轍もない畏れを振りまいている。赤褐色の顎は見ただけでも強靱と思える程の堅い造り。そして何より、規則性無く蠢めいている歩肢が、至って不快感と恐怖感を与える。

——名前は『大百足』。その名の通り、強大な百足の『悪鬼』。だがコイツは、千年前の龍神伝説にも名前が残っているという、いうならば鬼女なんかとは次元が違う怪物だ。

そして、さらに厄介なことは——コイツは決して怯まない。

後退しないという俗信から、戦国時代の甲冑のイメージにされているほど、百足の戦闘能力と好戦的思考は、他の『悪鬼』とは他ならないぐらいの怪童さを誇る。

「おおーすげー！ でけー！ こえー！」

「純一！ 早く武器を——」

俺が言葉を全部言う前に、その現象は起こる。

大百足の口から、妖力と妖毒の固まった波動が暗い黒白を含んで放たれた。

その塊は、俺たちの眼の前に落ちた瞬間——四方八方へと悉く討ち弾ける。まさに千の劔戟サウザンソードルと言わざるを得ない。

「……ワイワイ。いくらなんでも威力が強すぎる」

咄嗟に張った護符が散り散りと空気へ消えていくのを見て、その攻撃の精度と猛烈さを改めて思い知らされる。

いま使った護符は、とにかく神力を十分に仕込んでいた物。その力で妖力自体を抜い去り、妖力を根本から消してやろうと思っていたのだが……。まさか御札ごと壊され、やっと力を相殺できる程の威力とは思わなかった。

「神魅……！」

一瞬で体中に溜めた神力を左手へと昇華させる。

「悪いが純一。こりゃ舐めた真似してると、二人ともお陀仏しちまうから、俺も——」

「駄目だぞ恭さん。コイツの相手は俺が最初にするんだから」

「でもお前……！」

「大丈夫だ」

毅然として言い放った純一は、そんな中、着々と溜めつつあった神力を使い——

「神魅！」

神の力を一気に解き放った。

戦況はあっという間に激変していた。

大百足の放つ波動は、放たれた瞬間にその場で爆殺され、虚空へと鈍い煌めきを放って消えていく。

変幻自在の、至る所に妖毒を含む体から繰り出される体術。だがそれは、巧みなる技術によって軌道をずらされ、意図も簡単に地面へと押しやられる。

——その動作は全て、あの純一がやってのけらせている事だった。

「いけ……『ブラスター』」

純一の左手から放たれた強大な二連弾は、鋼鉄のような甲殻に挟り込むように着弾し、そこから大百足の穢れを華麗に浄化させていく。

純一の神魅は——二丁の拳銃だった。

多分今までに例を見ないのであろう、完全に純一から始発のオリジナル武器である。

見事に整った独特な自動拳銃オートマチックのフォルムは、見る者を圧倒させると共に、その存在感を大きく示す。

だがそれ以上に眼を見張らされるのが——

一方の異様に長い銃身バレルと、もう一方の二個の引金トリガーという特徴だ。

軽く普通の拳銃の二倍はあるかと思えるほどの、長い銃身の先端からは覗くものを萎縮させる脅威を晒している。そして二つの引金

は、捉えたもの逃がさない隠然たる力を示しているようだった。

「……ははっ」

時々悦ばな笑みを零し、純一は引金を躊躇う事なく引き、両手から銃弾を疾き放つ。

常にカウンター狙いで攻撃している純一。その立ち振る舞いに際など何処にも見当たらなかった。

闇雲に蠢く尾端を振るってきた大百足から、難なく距離を離す。避けた動作から一瞬にして、右手握られている銃に神力を溜めこんでいく。

早射ちの要領で再び大百足を照準に合わせ、その銃身の長い拳銃から――異様に鋭い発射光を煌めかせた。マズルフラッシュ鈍い銃声が虚空へと紛れ込んでいく。

「ヒュオオオオオオオ！」

驚きと痛みの混じった、何とも言えない声を咆えらせた大百足。理由は簡単。傷など付けれそうもないほど強靱な帷子かたびらを、意図も簡単に貫通させたからだ。それは百足自身も驚いているのだろう。

純一は続け様に溜めていた神力を、強大な二双の炎光と成して左手より放った。

その瞬間――爆撃にも似た銃の咆哮が、公園内を包み込む。貫通した甲殻の穴に、二つの濃い神力が着弾したと思うと。

一気に四方八方へと爆散された。

「ヒュオオオオオオ！！！」

甲高い悲痛な叫びが公園内に響き、大百足はとうとう、その細長い図体を地面へ叩きつけた。

余程の威力だったのだろう。完全に我を忘れてのたうち回ってい

る。

そこからは、もはや独壇場だった。

只管に、引金に掛ける指を動かし続け、神力の無くなるばかりに二丁の拳銃から強大な光撃を迸らせる。

断罪の炎と化しているその弾は、弾け、貫き、そして破散する。銃声すら押し切って、ただ目の前の穢れに向かって進む。

「——『ペネトレイター』」

再び右手の拳銃を前方へ高々と構え、深紅の花火を打ち上げた。その一筋の光が、鉄壁とも思える甲殻の奥へと抉り込んだ。

第玖話（後書き）

誤字脱字など無いようにしていますが、あったらごめんなさいですー。

第拾話

「悪いな恭さん。神力切れ……」

地面にへたれ込んで、純一は疲れ切った表情で俺に呟く。

「いや、正直侮ってたよお前の実力。流石は梓さんの弟子だ」

「そう言ってもらえると、俺もちよつとは報われるかな」

嬉しそうに、声色を少し高くする純一。

「ということで恭さん。ごめんけど、役に立てなかった」

「十分仕事したと思うんだけどなあ。ったく、常識の通じねえ奴だぜホント」

まあ『悪鬼』だし仕方ねえよなあ。

自嘲気味に笑いながら大百足を確認する。

純一の与えた傷は全て完治していた。

最初は信じられないでいた。あれ程ボロボロになって、体中穴だらけになっていた姿は、僅か数分後に完全回復。

現在は気力を補うため、精神集中をしているようだ。

「それじゃ沙希。アイツを倒すには、まず“塵も残さず屠る”しかない。それは解るな？」

コクリ、と頭を垂れる。

「よし、それじゃ——ドでかい花火を打ち上げてやれ！」

その言葉を放った瞬間、沙希は体を変化^{へんげ}させる。

小さな体躯は、全長2メートルを超す程の巨漢へと姿を——

「つて！ お前大きくなれんのか!？」

今日は驚くことばかりだな！ ホント！

沙希は俺の問いに視線を向け、肯定を促す様に首を縦に振った。そして再び顔を大百足へと戻し、沙希から強大な妖力が漏れだした瞬間――

激しい獄炎を大百足の周りに形成した。その光景は、まるで火柱に油を注ぎまくったように、酷く全体に燃え上がっている。

「……え」

つ、強すぎじゃね？ 俺、いらなくね？

百足――つまり蟲系統の『悪鬼』は比較的に熱に弱い。『悪鬼』といえども、ベースとしては元の動植物と同等であるからだ。

「終わったかな……？」

と思つて獄炎を観察しようとした瞬間――

「ヒョオオオオオオオオオオ！！！！」

劈くばかりに声を張り上げ、大百足は炎を振り払った。

「終わる訳無いよなつと！」

自己完結したように俺は声を張り上げると――『二式 瞬息』で一気に胴体を貫かんとする。

「っは！」

一瞬で懷に潜り込み、神力を纏つてその太刀を突いた。

「……貫けねえ」

堅すぎだろが、と思わず言葉が漏れる。

鋼鉄と言わざるを得ない程の甲殻の前では、太刀は見事に一寸ばかりも決りこむことが出来ず、ベクトルを失って整止していた。

「物理攻撃は受け付かないってか……」

なら、と思つて俺は一瞬で左後方へと距離を開け――

「いけっ！」

太刀を大ぶりに上から振るう。正にその瞬間、刀身より光の刃が出で立つた。

今使つたのは『一式 威光』。『三式 絶園』よりは切れ味が劣るが、それでも遠距離攻撃、そして神力を用いた攻撃としては高性能だ。

その光の刃は半月弧を描くように直線上を突き進み、見事に大百足に着弾した。

――だがしかし、その強靱な甲殻に触れた瞬間、神力は周りの外気へと発散される。

「恭さん！そいつの体は高密度の神力じゃないと貫けないよ！」
後ろから純一の忠告が響いてくる。

「たつた今理解したさ！」

俺が見たままに思ったことを叫んだ、その瞬間。

――今までずっと影を潜め、妖力を溜めつつあった沙希が、神の怒りにも似た大雷撃を突き落とした。

爆発じみた轟音が公園内に響き渡り、大百足をゴツポリと包み込む。

先ほどの狐火と大差ないよう（それでも高威力）に見えるが――
「ヒュウウウウウウウ！！！」

今までで一番と言つていいほどの、断末魔が轟いた。
何故かと思い、その雷撃に眼を凝らしてみる。

（アイツ……。前に混ざつた俺の神力を捻じ込んでるのか）
それは完全に盲点だった。

神力と妖力は相反する物。よって混ぜ合うという発想は、互いを打ち消し合うという現象へと行きつくものだと思っていた。

だが……実際は違っていた。沙希は見事に妖力と神力が相互に昂ぶり合わせ、そして一気に発散させた。

それはつまり――

俺にも出来るんじゃないか？

「一か八かだ！」

体の至る所へと散在させていた、決して神力で抜おうとも出来なかった沙希の妖力を溜めこむ。冬の乾いた空気が頬をひんやりと撫でるのを感じながら、その力を『黒漆大刀』へと――

「いけっ！」

流し込んだ、まさにその時だった。

ザワツと口では形容し難い何かが全身を駆け巡り、思わず総毛立つ。

底知れぬ畏怖を抱きながら、その常闇の太刀を覗く。

（な、なんだよ……）

今まで神力を流していた時より、ずっとその武器は“輝きを放っていた”。

暗闇と静寂を周りへと振り撒き、それに連なるようにおぞましいオーラも解き放つ。決して闇を被う物とは誰が見ても“違う”と思うだろう、その禍々しき太刀。

繰り返し畏れを散布し、見る物を圧倒する。

「恭さん！前！」

茫然と立ち尽くしていた俺に、純一の怒号が響く。

ふと我に返って、今戦闘中であることを再認識した。

「ヒョオオオオオオオ!!」

いたく強靱な顎を何度も打ち鳴らし、大百足は銕み込もうとして顔を打ちつけてきた。

慌てて左手に持っていた太刀を振り上げる。

しかし……。

「っな!？」

振るった俺が一番驚いた。軽く軌道をずらし、後方へ避けようと思っていただけなのに――

太刀が深く囂々(ごうごう)な顎へと決りこんだ。そのおぞましい実態に気づいた大百足は、甲高い声色を響かせて顔を仰け反らせる。

「……!」

その隙に沙希はもう一度神の裁きかのように、壮絶な大雷撃を突き落とす。多分、効果的であつた事に気付いたのだろう。

「ヒュウウウウ……」

闘心はまだ残っているものの、その声には明らかに最初ほどの活気は見受けられない。

ここで決めると思い立った俺は、妖力の周りに神力のオーラを漂わせる。

聖と魔が混じり合い、黄昏時のような淡くも深い淫色くろいろが刀身より煌めき出す。そこだけ別次元かのような孤高で孤独な力を携え、刀身を揺らめかせる。

「うおおおおお!!」

柄にも無く沈む夕暮れに咆え、俺は『一式 威光』の要領で大

きく太刀を振りぬく。

——だが、その攻撃は一式とは比にならなかった。莫大な陽と陰の混じりあった波撃が、悉く大百足を埋め尽くす。喰らい付き、蝕んでいくようなその光景に、誰もが思わずただ呆然と見蕩れる。

「……………っ！」

間髪いれず、三度目の正直のように大雷撃を追加する沙希。威力は今までで一番であろうか。余波が遠く離れている俺のところまでに及んでいる。

縦と横からとめどなく降り注がれる聖魔の刃の前では——

「ヒュウウウ……………」

大百足は微かなな断末魔を垂れ流すことしか出来ないでいた。

そして体中を覆っていた暗藍色の鎧は、虚空へと粉上になって吹き荒び——大百足は現世から消え去った。

せいひつ

静謐な静寂だけが、後の公園内を埋め尽くした。むしろそれだけしか残らなかった、とでも言うべきか。

ひとまず命のやり取りが終わりであることは、太刀の事で頭がいっぱいになっている俺の脳内でも認識できた。

（な、何なんだよ本当に……………）

沙希のを見て、出来るとは思っていたが——
まさかこれまでとは思ってもよらなかった。

（妖力が剛で、神力が柔ってか。予想以上にマッチしてたなホント）
そんな風におごそかな気持ちを抱いていると、

「おーい！ 恭さんー！」

戦闘を終始見つめていた純一が、嬉しそうな顔を浮かべてこつちに走り寄ってくる。

「いや、やっぱりすごいなプロの『悪鬼被い』は！俺の師匠もよく俺を連れて行ってくれたけど、あんな大物倒すなんてこと一回もなかったぞ！」

「それは偶々、強い悪鬼が出てこなかっただけじゃ……？」

「でもでも！ ここで俺は気づいちゃったね！ 格好よかったのは恭さんだけじゃなくて、沙希ちゃんもだ！」

俺の言う事は興奮していて聞こえないのか、普段以上に気張って、いつの間にか俺の背後に佇んでいた沙希を見上げて言う。

「確かに、沙希は高性能すぎだ。俺の出番が全然要らなくなってたしな最初」

「とはいっても、最後の恭さんの攻撃はえらくすごかったな！ 俺見てマジで興奮したし！」

体全体で子供のように解説してくる純一。とても楽しそうだ。

「ていうか、沙希が妖力を神力に混ぜててびっくりしたよ。そんな使い方あるんだなあって。それで俺……」

俺が関心したように沙希にそう言う——

「……」

無言で沙希は首を“横に振った”。

「恭さん恭さん。俺はよく分かんなかったけど、多分神力じゃなくて『神通力』だと思うぞ」

「……神通力？」

「そうそう。『悪鬼』の中でも高位の奴だけが使って師匠が言っていたんだ。」

「って、そう考えたら、沙希ちゃんって実はかなりの強さじゃないのか!？」

「ここでまた、純一が興奮しだす――」

「って、今はそれどころじゃない。」

「沙希。もう一回訊くぞ。お前は俺から流れてきた神力を、使っては無いんだな？」

「こくり、と深刻な面持ちで頷く。」

「……マジ、か」

「何かあったか？ 恭さん」

「純一よ。お前、神魑で生み出した武器に妖力を混ぜるとどうなるかっていうの、梓さんに教えてもらったか？」

「……ん？ 言うまでも無いと思うけど、相反する力が混ざりあえば、力が暴発して神魑使用者はダメージを受けるぞ。」

「そんなの、梓さんに教えてもらわなくても分かり切ったことじゃないか」

「ああ――そうだったな」

「今考えただけでも、ぞつとしてくる。」

「何で俺は、あの時あんな安直な考えに至ったんだろうか？」

「いや、それにしてもそう考えたら可笑しいことがある。」

「(何で、『黒漆大刀』は妖力に反応した……?)」

「まるで“妖力があって当然”かのように、聖魔の力を現界させていた。」

今までの人生の中で、特にこの太刀が流動していたようにも思える。

（何でだ……何で）

疑問の念に囚われた俺の顔を、神妙な面持ちで沙希は見つめていた。

その日は珍しく、恐れへの発作が表れることはなかった。

第拾話（後書き）

誤字脱字など無いようにしていますが、あつたらごめんなさいw

第拾巻話

一月二日、朝のこと。

ここ最近は妖力の溜まりが遅くなっているらしく、前ほど『悪鬼』の現界が多くなっていることはない。

現在はおせちを食べ終え、こたつでぶらぶらと足を伸ばしてテレビを見ている。

隣にはもちろん、沙希もいる。もうすっかり現代っ子のごとくテレビに釘付けで、後々どうにかしないとなあと釈然としない感想を抱く。

「あ、そついえばさあ沙希」

「なに？きょーすけ」

「この前の鬨いのとき、お前の尻尾の数……“一本”増えてたよな。あれってどういうこと？」

「ちからがちょっともどったから」

「ここ最近ずっと、こうやって休息をとってるからか？」

「うん」

「んじゃもう一個、あの大きい姿の方が、お前の本当の姿ってこと？」

そう、とテレビを凝視して口元を動かす。

まあそんなこったろうとは思っていたが、やはりアイツの口から聞くと重みがあるな。

それにしても、沙希には不思議な事がいっぱいだ。人間に害を与えず、それなのに強大な力を持ち、時空のひずみから例外である『悪鬼』の二体目として出てきたり。

（もしかしたら、九尾の狐だった〜みたいなの？）

なんて小学生みたいな阿呆な事を考えていると――

築十年はまだ経ってないだろうマンションの、それなのに幾分低い音の呼び鈴が鳴った。

「あーはいはい。少しお待ちください」

日頃からこの家に来ると言えば新聞配達か何かの勧誘ばかりなので、正月にお客が来るというのは珍しかった。

チェーンを取り外し、扉の鍵を解除して開ける。

「お、純一じゃねえか……って」

「おはよー恭介ちゃん。相変わらず厳^{いか}つい顔してるねー。でもそこがまたイイ！」

「何で梓さんまで来てるんですか？」

純一と東雲梓の師弟コンビが、俺の家の前に来ていた。

何故だ？

「……あ、そういうことか」

ふと頭にある予感が過る。

「いやー、恭さん実は――」

「みなまで言うな。どうせ梓さんに付いて行くからこの街を離れなきゃならない、ってことだろ？」

「お、よく分かったな恭さん。それでさ――」

「そうか。今日でお前ともお別れか……」

脳裏に中学校から現在まで積み上げてきた、純一との思い出が浮かんでいく。

俺が転校してきた時、一番初めに話しかけてきてくれたのがコイツだった。なかなか馴染めなかった学校も、コイツのお陰で慣れたと言っても過言じゃない。

高校に入ってもその関係は変わらず、思えば今の今まで俺とまともに付き合ってくれた友人は純一だけだった。

一回バスの中で痴漢に間違われた時も、一生懸命代弁してくれて助かったことも記憶に新しい。あれにはマジで救われた。

前のように地味な買い物の荷物運びみたいなことも純一は手伝ってくれるし、もちろん俺も純一には恩は色々売った覚えがある。

切っても離せないような縁が、純一にはあったような気がしていた。でも――

「ま、東京は色々あって便利だぞ。交通機関は整備されまくってるし、まず物に溢れてるからな。あ、あと俺の家もあるし良ければ寄って行っても……」

「つちよ、恭さん話を」

「お前とは結構長い付き合いだったけど、なかなか楽しめたぜ。ありがとな。これからは自分の夢に羽ばたいて行って欲しい。なあに、お前の実力ならすぐにで――」

「はい。青春タイムもここまでよー恭介ちゃん」

「……何ですかもう。今とても大事なところなんですから、邪魔しないで下さい！」

横槍に言葉を入れてきた梓さんをジト目で睨む。

「もーそんなにお姉さんを見つめちゃって！その麗しき瞳で私を落とそうとでも？」

「それはないですから、安心して下さい」

「相変わらずつれないわねー。ま、それは置いて於いてと……」

そう言って何やらほくそ笑む梓さん。そんな含みのある表情を見ていると、不思議と嫌な予感が体中から染み出る。

やべえ。周りから見たら天使の頬笑みのような顔なんだろうけど、俺から見れば邪悪な薄ら笑いにしか見えない。

そんな決して良くはない心持ちを抱いていると、さも当然のように――

「さて恭介ちゃん。一緒に東京へレッツゴー！」

「……」

なあんてふざけた事を……。

って、え？今何て言いましたか？貴方。

うーん、幻聴かな？俺が何故か東京に帰るって話になってるよ
うな気が――

「なってるような気じゃなくて、もうなってるのだよ恭介ちゃん」
「心読まないで下さい！　っていうか、俺はこの地域担当の『悪鬼
抜い』ですから、国からの転移の直状が無いと動けないのは分かっ
てるでしょう？」

あと、学校の編入手続きや住所の変更やらも重要になってくるし」

この他にも必要な手続きは多々ある。

例えば俺がここから居なくなる代わりに、新しい『悪鬼抜い』を
配置するよう別の人を自分で手配しないといけないし、まずこの家
の荷物を運んだりしないといけないし。

どう考えてもすぐに行くなんて無理だ。

転移手続きを国に申請して、認証されるのには最低三カ月くらい
は掛かる。

しかも余程の事情がないと認証されないだろうし、もし移動する
となっても、俺は早くて三年生になったぐらいじゃないとこの街か
ら離れることなど出来ない。

しかし至って梓さんの顔は、ニヤニヤと楽しそうにしている。
そんな表情を見ると、自分自身の顔がだんだんと情けな
いくのが理解出来た。

「ふふふ」こんなこともあるのかと、お姉さんが全部やってお
きました！

はい、これが学校編入手続きでしょ？ それでこれが国からの
移届。

新しい『悪鬼祓い』は私が推奨した人が来るから安心だよ。

つで、住所変更はもうやっておいたからね。場所は学校の寮
で、弟子の真向かいの部屋だよー」

「……えつと」

「家の荷物はねー。つと、おーいい所で」

梓さんがそう言って外を見だした瞬間、車の慌ただしい喧騒が耳
に響いてくる。

これは、もしかして――

「じゃーん。引越し業者を頼んでおきましたー！ これでもう心配
することはないね恭介ちゃん」

「そ、そうですね。とりあえず、何で色々手続き出来てるんです
か……？」

「おー！ そこ気になっちゃうよね」

と言って梓さんは右手に提げていた黒のバックをゴソゴソと漁り
出し。

取り出した『それ』を、高々と俺の眼の前へと示した。

「ぱんぱかぱーん。こんなこともあるのかと、『桜庭』性の判子
作っておきま――」

「何でこんな物作ってるんですか！　あなたの名字は名高い『東雲』でしょ！」

「いやー、いつ恭介ちゃんのお嫁さんになるか分からないから、念のためにお姉さん、作ってたのよー」

「~~~~~っ!!!」

本当に情けない声が、俺の喉元が溢れる。

純一の憐みの目線が、俺全体を包み込んでいつているのが分かった。

「ていうか！　何で俺を東京に行かせたがるんですか！」

「そりゃー私も寂しいし、弟子も不慣れな環境で一人にされるのも可哀そうだなあって思ってた」

「……さいですか」

もう言い返す気力なんて無かった。

完全にどうでもよくなった。ああいいさ。どうにでもなっちまえ！

「どうかした？　きょーすけ」

そんな風に自暴自棄気味になっていると、後方から幾分可愛らしい少女——沙希の声が響いてくる。

どうやら玄関で言い争ってるのが聞こえて、駆けつけたようだ。

「……沙希、荷物片付けろ。それで自分に必要な物だけを俺のバックに入れとけ」

「なにかあったの？」

「何も訊かずにただ指示通りにしてくれ！頼むから！」

「…わかった」

不思議そうに沙希は首を傾げて、家の奥に戻っていく。

すまぬ沙希よ。お前の主人は大層情けない奴だ。

「ちよつと、恭介ちゃん！ あの女の子誰よー！ 私という超絶美人を垂らし込んでおきながら！」

「確かに綺麗ですけど、別に垂らし込んでないですし！ 沙希はただの使い魔ですけど！」

「使い魔ー？ 本当かな？」

「……ヲイ、純一。マジでお前の師匠どうにかしてくれ」

今まで無言を保ち続けていた純一に、ヘルプミーしてみる。

お願いだ、俺にはもう相手なんて無理だよ。

「ごめんな恭さん。俺、師匠には逆らえないんだわ。……でも沙希ちゃんは使い魔ですよ師匠」

そう梓さんの方を振り返って、沙希の真相を伝えた純一。

「そ。ならいいわ。——ま、そういうことだから、さっさと荷物準備してきてね」

満面の笑みを受かべて、梓さんは嬉しそうに俺に言うてくる。

外では既にいつでも荷物を運び出せるよう、業者の人たちが俺らの話が終わるのを待っていた。

「……はい、少し待って下さい」

通常時より幾分低い声色で、情けなく俺は答えた。

冬の乾いた風が吹いて——

俺の新たな転機を運んできたように、落ち葉を巻き上げ吹き荒んだ——

その後。

「準備出来た？ それじゃー」

「はあ……」

「ドンマイだ恭さん」

「どんまい、きょーすけ」

二人に支えられながら、おぼつか覚束ない足取りで駅に向かったとき。
あー、めでたくねえな。全くだよチクショー！

第拾壹話（後書き）

誤字脱字などないようにしていますが、あつたらごめんなさいw

第二章終了時 登場人物・用語

はい、毎度恒例（にしようと思ってる）補足説明コーナーです。
それじゃさっそくですが。

登場人物

桜庭恭介

言わずと知れた（？）主人公。今回で新たな力に目覚めました。
妖力と神力を混ぜる力。どうやらこの力は武器に秘密がありそうですが――

沙希

形態がいろいろあるみたいです。どうやら先の現界時は力を失っていたようです。なんかこの子さえいれば悪鬼退治どころにかなりそうです。だって強いんだもん。

要純一

神魅：『ブラスター』&『ペネトレイター』

今回の主役的な感じに途中なつてた人。完全にオリジナルの神魅を使い、その力は未だ測り知れません。実力は、一年ぼつきりでも相当だとか。でもやっぱりどっか抜けてる雰囲気。

東雲梓

身長…158センチ 体重…秘密だよー ♪ 性別…♀
好きな物…お酒全般（主にチューハイ） 嫌いな物…自身の意に

反する行動、行為

神魅……???

初登場の純一君の師匠さんです。非常にフランクな方ですが、実力は国内でも指折りだとかなんだとか。数少ないランクAの免許の持ち主にも関わらず、力に驕らず非常に人間としては出来てる人。だがちよつと残念。なかなかにお姉さんキャラ。純一と恭介と話す時、少し口調が変わります。恭介の方に対して甘い声色を出すとのこと。

用語

『前兆探查』

妖気調べ。歩きまわる事で、細かいところの妖気の集まりが分かり、いつ『悪鬼』の出現があるかある程度絞れるようになる。結構大事なこと。

『妖力探查』

同じく妖気調べだが、こちらは神力を用いて広範囲を調べる。だが前兆探查ほど細かい部分は見られないので、大抵は『悪鬼』出現前に最終確認程度に行われる。

『御札』

簡単に言えば、神力や呪詛などを用いた補助、攻撃などの力をスベックする便利アイテム。人骨を使って作るとされている。溜めてた力が切れると、札は粉上になって飛散する。

『大百足』

巨大な百足の『悪鬼』。藤原秀郷ふじはらのひであきの琵琶湖龍神伝説にも登場する、非常に厄介な敵。吐きだす波動と不気味に動く体、そして何物も恐れぬ闘心は他の『悪鬼』の中で見てもかなり歪いびつ。

『ブラスター＆ペネトレイター』

純一の扱う神魑の武器。完全にオリジナルもの。銃口ノズルが長く、右手に持つのがペネトレイターで、引金と銃口が二つあるのがブラスターのようだ。ペネトレイターの意味は『射ち貫く者』で、ブラスターが『撃ち弾く者』。非常にかっこいい。

『神通力』

神に通ずる力と言われているもので、『悪鬼』の中でもごく少数の高貴な奴でしか使えないとされている力。性質は神力と似ているが、ベースがまるつきり違う。妖力と混ぜ合わせたり、引き剥がして爆発させたりとなかなか便利。

今回は少なくて良かったです。

さて、次はビバ！東京へ！というところです。

そろそろ家族や幼馴染なんかも登場させていきたいですね。

内容はまあ、だらだらした感じですが、楽しく読んでいただけると幸いですw

それではまた。

第拾弐話

「うへえ、座りばなしで腰が痛いや」

「お前もか純……。あまり慣れないことはするもんじゃないな」

「何言ってるのよー二人とも。学校で毎日ずっと座ってるでしょうに」

酷く冷たい風が吹きぬく中、俺たちを東京まで運んできた鉄の箱から降りたつ。

都会の独特の少し濁った空気を感じ、帰ってきたことを今一度感じる。

「さて、それで俺はどこに行くんだよ？学校っていつでも、どうせ普通の学校なんだろう？」

「何言ってるのー恭介ちゃん？君も弟子と同じ学校に入るんだよ？」

「……Why？」

俺、もう『悪鬼被い』なんだけどな……。

「その学校はねー。実戦を主に重視していて、別に『悪鬼被い』の子でも入れるんだよー。」

現に数人程いるみたいだしね」

「……あー、そうなのか。それじゃ俺、少しラッキーかも」

「どうしてだ？恭さん」

俺と梓さんの会話に、純一も関わりこんでくる。

「いや、あんまり新しく習う内容、少ないかなーって」

既に子供の時に基礎知識は叩きこんでいるからな。えらい難しいこと以外なら、分かることも多そうだ。

「きよーすけ、えらいの？」

「偉いつていうか。まあ知識だけあるみたいな感じだ。……それと何でお前はまた腕を？」

「はなれちゃいけないから」

「あー！沙希ちゃんだけずるーい！お姉さんも一緒に——」

「させません」

空いている右の腕に入り込もうとしてきた梓さんを、体を横に少しずらして軽く回避する。

「もー、いじわる」

「分かりましたから、ささつと行きましょーうよ」

「それもそうだねー。……弟子？」

「はい師匠。ここからならまず地下鉄の三番線に乗って——」

つて、梓さん覚えてないんかい。

ホントに辿りつけるのかなあ、と少し恐怖の念を抱きつつ純一の歩くあとを追った。

一月二日、午後のこと。

いくつか地下鉄とバスを乗り換え、計二時間程の移動を終えてついに学園へと着いた。

つていうか……。

「でかくね？ あんまりにもでかくね？」

これ、都会の敷地どれだけ使ってるんだよ。

どう考えても前と規模が違う。見渡す限り学園を覆う煉瓦作りの壁があり、入口である鉄製造りの門は荘厳かつ凄然とした赴きを放っている。

校舎がざつと軽く見るだけで数個（少なくとも、七つは見える）見受けられ、その奥にはまだ数個ありそうだ。

赤褐色の建物の屋根は夕日と深く合わさっていて、見る者を無智の境地へと追いやる。だが建物の入口に一つ一つある狒犬が、何故か親近感を心に持たせる。

「聖インフィニティア学園。敷地面積は……まあとりあえず広いよーかなり。あと校舎もいっぱいだからー」

「覚えてないんだったら、無理に説明しようとしなくていいですよ梓さん」

「ていうが無駄に中二っぽい名前ですよね師匠。こんな名前で本当にいいんでしょうか？」

「なんか日本っぽくないよな、確かに。って、今更改名なんてしないだろうけど……」

「い、いんふいにて……？」

個々の感想を抱きながら、俺たちはその学園の向かい側、これまで周りの建物とは酷く合わさっていない煉瓦作りの建物を見上げる。

「ここが寮だよー。十階建てで、三階から六階までが男子、七階から十階までが女子の部屋になってるから、間違えて女子の所に行かないようにねー。もし間違えて行ってしまったら……」

「アレですな師匠。『きゃー変態ー』みたいな毎度恒例の――」

「純一、その補足は要らないと思うから黙れ。ま、そんな間違って行くなんて事ないと思うがな。っていうか本当に場違いな場所だな。京都で作ってたらマジで怒られっぞ」

見事に周りの建物とマッチしない。この建物だけ、中世ヨーロッパ

パ辺りにありそうな感じだ。

もはや悪鬼被いとか関係ねえよこの建物。完全に趣味だろ。

そんな悪態を突きながら、俺たちはその建物の中に入る。

煉瓦作りなのに、なぜかドアは自動という無駄な設計に、思わず顔を顰めるが――

「中も中で全然マツチしないな」

明らかに現代の宿直場みたいな環境だった。

だったら外見も普通で良かったのに。何か拘りがあったのだろうか……？

いらない拘りだろうけどな、多分。

「どうやったらこんな建物が作れるんだ？」

「恭さん、そこ気にしたら負けだと俺は思うぞ」

「そうだよー。気楽に行こうよ気楽に」

俺はあんたら程、樂觀視できない性質なんだよ。

「ねえ、きよーすけ」

「どうかしたか？」

「なんかしせんが……」

「え？……ああ、成程な」

沙希が言わんとしていることは、すぐ理解できた。

ロビーに数人この学園生がいたのだが、突然の来訪者に驚き俺らを直視しているのだ。その視線の中には、何やら疑惑の念も入り混じっている。

「梓さん。俺らがここに来るって説明はしてないんですか？」

「一応したんだけどねー、寮の管理人っぽい人に」

周りの目線に動揺することなく、微笑んで梓さんは答える。

「とりあえず、部屋に行ってみたらどうかかなー？確か五階の奥だったわよー？」

「それもそうですね師匠。それじゃ恭さん行こうぜ」

「何か色々大事なことですつ飛ばしてるような……」

と、随時また悪態を突きながらも、俺は渋々付いて行く。

エレベーター——外見と本当に合わない——の前に差し加かって、いざボタンを押そうとしたところで——

「あの、すみませんが」

後ろである男子生の声が響いてきた。

どうやらロビーの辺りで談話していたグループの一人のようだ。

「一体どちら様なんでしょう？生憎、ここは関係者や学園生徒以外立ち入り禁止となっているんですが」

そんな発言に、思わずしかめてしまった顔を梓さんに向ける。

「……ヲイ、梓さん。やっぱり伝わってないじゃないですか」

「おつかしいわね！。ちゃんと言った筈なんだけどー？」

えへへ、と可愛らしく疑問の念を浮かべる。本当に二十代には見えない。

純一は俺と目線が合った瞬間、顔をさっと虚空へと回避させる。

こんなんが師匠で恥ずかしいのだろう。

もう梓さんはどうにもならないので、何とかしようと思って男子生を見ると——

「あず、梓……？」

どうやら必死に頭の知識を掘り出そうとして、脳をフル稼働させているようだ。

「あのー……」

「アッーーーーー！ どこかで見たことあると思えば！

貴方もしかして『ルイン・クイン破滅王』の東雲梓さん！？」

「あまりその呼ばれ方はシツクリ来ないけど……。一応はそうよ」
少し鬱陶しそうに梓さんは答える。まあ好き好んでそんなあだ名を受け入れる輩はいるとは思えないが。

だがその男子生は、その返答を聞き幾分声を弾ませているように見えた。

「あの噂本当だったんだ……！」

「噂って何だ？ 在校生」

「あの東雲梓さんがこの学校の先生になるって噂だよ！ 来ればいいなあとは思ってたけど、まさかマジで来るとは思わなくて」

かなり興奮しているようだ。眼がギラギラと熱気で迸っている。

梓さんは少し顔を暗ませて引いているようだ。まあ、実際俺も彼女の立場ならそうなっているが……。

しかしランクAともなると知名度がガラリと変わってくるな。

……まあ国内に数えるぐらいしかないのだから、当たり前と言え当たり前なのだが。

そんな風に感慨深く思っていると――

「ということは、もしかしてそっちの人たちは弟子とかなんですか！？」

と、男子生は少し上機嫌に俺と純一を見ながら、梓さんに対して

質問してくる。

「そうよ。こっちのイケてる子が私の弟子」

「……あれ？ こっちの強面の人は違うんですか？」

「誰が強面だ！？ 曲解だ！ 事実無根だ！」

「きょーすけきょーすけ」

「あ？ 何だ沙希？ 今大事なところ――」

「きょーすけは、こわもて」

「……」

そんなに真顔で言われると、否定のしようがなくなるじゃないか。
チクショー……。

「あー、今隅っこで泣きだした子は私の彼氏よ」

「誰が彼氏だ誰が！　いつそんな只ならぬ関係になった!？」

「えっと、今かなー？」

猫撫で声を出して、俺の質問にそう答えてくる梓さん。

——っていうか、俺と他の奴に対する口調が変わりすぎだろ、この人。

どんだけ興味ないんだよ他人に。

「とりあえず、この人の言う事は軽く流していただきたい」

ひとまずと思って俺は、男子生に対してそう結論付ける。

「はあ、わかりました」

不思議そうな声色をあげて頷いた。

——と、そこで一人の大柄な男の人が入口から入ってくる。

黒ぶちの眼鏡と大きなダウンコートが、印象を大きくしていた。

「あ、東雲先生！もう着いていらっしやってましたか！」

幾分柔和な雰囲気を放ちながら、男はそう梓さんに声を掛ける。

「遅いですよ渡辺さん。しかも生憎、生徒に不審者的な目線で見られてしまいましたよ？」

「それは失礼しました。なに、言っただけ時間帯より早いお着きだったの」

男は申し訳なさそうに、ペコペコと頭を何度も下げる。

「ところで、その二人……と、もう一人ですか？」

「その女の子は彼の『使い魔』ですから、別に気にしなくていいです」

「……ああ。そうですね。いやなに、可愛らしく擬人化してるので、思わず人間かと思っただけで、見落してしまいましたよ」

「確かに前、化けるの上手いよな」

未だ俺の腕に自分の腕を絡ましている沙希を、横目で覗く。

どうかしたの？ とでも言わんばかりに俺の瞳を捉える彼女は、本当にただの綺麗な少女にしか見えない。

「それでは二人は私に付いてきて下さい。……東雲先生はいかが致しますか？」

「私は帰らせてもらいます。未だ荷物が片付いていなくて」

「それはそれは大変なことで。今日はお疲れ様でした」

ぺこり、と大柄な男——渡辺さんと言う人は頭を下げた。

「さて、弟子と恭介ちゃん。悪いけど、帰らせてもらわねー」

「いえ、ここまで着いてきてくれてありがとうございます」

全然ありがたいことはしてねえけどな。

「師匠も気をつけて帰って下さい」

「ありがと。それじゃまたねー恭介ちゃん」

嬉しそうに俺に手を振り、純一に目配せしながら梓さんは建物から出て行った。

それと同時に男子生は仲間の元へ、梓さんが教師になることを伝えに行ったようだ。

えーすごい！ といった表現が、耳を傾けなくても受容出来る。

「いや、それにしてもびっくりしました」

そう言っただけで渡辺さんは俺の方を向いて語りかける。

「ん？ 何ですか？」

「あの東雲先生がフランクに喋り掛ける人物がいるとは、と思いましてね。もしかして東雲先生とは深い付き合いなどが御有りで？」
「いえ、あの人とは馬が合うだけでそんなに長い付き合いじゃないですが……」

出会ったのは三年前。

別にそこから特別に会う、ということも無く現在に至っている訳で、そこまで深い付き合いじゃない……と思う。

（まあ、何だかんだで信用はしてるけどな……）

「ていうか、敬語は止して下さい。貴方の方が年上なんですから」
「…それもそうだね。それではお言葉に甘えよう」
そう言つて渡辺さんにはにっこりとほほ笑む。

……なんか純一に雰囲気似てるな、この人。

「では、自己紹介を。私の名前は渡辺小鷹。ここの寮の管理人をしている」

「よろしくお願いします。俺は桜庭恭介で——」

「俺は要純一でっす。どうぞよろしく」

「はい、よろしく。それでは早速君たちを部屋に案内しようと思うのだが……」

と言つて、渡辺さんは沙希を眼で捉える。

「そこのお嬢さんの姿を元に戻してくれるかな？なに、男子寮フロアに女子を入れると騒がれるもんでね。

部屋に入れば別にいいから」

「なるほどです。……沙希、姿を小さい妖狐にチェンジだ」

そう俺が言つと、沙希はこくり、と首を縦に振り——

一瞬で妖狐モードに変えた。飛び上がって、俺の右肩にそのまま

乗っかってくる。

「ほお、『悪鬼』を使い魔に、それも妖狐か……。非常に珍しいね。こんなに扱いの難しい『悪鬼』、どうやって？」
「別に特別なことはしてませんよ。コイツが普通じゃないだけですから」

そしてコイツを飼いならしている俺も普通じゃないけどな。

「……そうか。変なことを訊いてしまったね。では案内を」
そう言っただけを返し、渡辺さんはエレベーターのボタンを押す。
誰も乗っていなかったのか、すぐに扉が開き、その中に乗り込む。

「ところで、どちらが東雲先生のお弟子さんかな？」
ふと疑問に思ったのか、そう尋ねてくる。

「俺が弟子だよ渡辺さん」

「こっちは成り行きで連れてこられた少年Aと妖狐です」

「そうですか。しかし……大丈夫かな？ 君たち」

「え？どういふことですか？」

少し声色を低くして呟いた渡辺さんの言葉に、俺は思わず尋ねていた。

「この学校は実戦を重視しているので、ね。あの人の御弟子さんなら大丈夫そうだけど、あまり慣れてないなら少し面倒なことになるかもよ？」

そう言っただけで俺の方に対して心配そうに語りかける。

——つまり実戦慣れしてないと、思わぬ怪我するぞってことか。

「大丈夫ですよ！何しろ、恭さんはあ——」

「純一の言っただけで、俺は大丈夫です！だから心配しなくても平気

ですよっ！」

俺の正体を言おうとした純一の口を塞ぎ込んで、俺は渡辺さんに答える。

「あの一、純一君が」

「あ、こいつですか！　今涎が垂れそうになってたんで、口を閉ざしてやったんです！」

「もぐ、むぬうんん」

「苦しそうだから、いい加減離してあげれば？」

「それもそうですね」

「……つぶは！　いきなり何するんだよ恭さん！」

「気にするな。気にした時、お前は死ぬと思え」

「何か壮絶！？」

と、下らない話をしていると、あつという間に五階に到着した。

「えっと、この右の道を直進して突きあたりの部屋が君たちの部屋だよ。右が純一君で、左が恭介君の部屋だね。荷物は……」

「明日届くらしいです」

「そうそう、そうだったね。それじゃここで軽くこの寮の説明をしようと思う」

俺たちを見据えて話したず。

「一階には入口の他に、ロビーや談話室とか自動販売機などがある。僕の宿直場もあるから、何かあったら気軽に言いに来てほしい」

「はあ、なるほど」

「二階には学食と、大浴場。……一応シャワーやキッチンとか部屋に備えてあるんだけど、学食は安上がりだし、風呂に入りたいって人もいるからね。」

「それとトレーニングルーム、格技場なんかも備え付けられている」「へえ！トレーニングルームに格技場か！」

純一が興味を示したように声を上擦らせた。

「そつだよ。この学校は何度も言うけど“実戦を重視している”からね。」

体は鍛えて損はないだろうし、闘うのは慣れてナンボだろう?」
苦笑いしながら、目を細める。

「そして三階から六階までが男子寮、そこから上が女子寮だね。くれぐれも間違えて女子寮なんかに行かないように、ね」

「はあ、善処します」

「一度、手違いで女子寮に行った男子がボロボロになって帰ってきたことがあってね。アレには少なからず同情の念を覚えたよ」

「そ、それは恐い」

純一が打ち震える。

まあいかなければ大丈夫なのだから、別にいいんだけどな。

「と、簡単に言えばこんなものだよ。質問なんかあるかな?」

「あ、はい」

「何かな恭介君」

「ここら辺で一番近くて、品が良いスーパーの場所とか教えて欲しいんですが……」

一瞬キョトンとした表情を浮かべた渡辺さん。

だが、すぐに表情を元に戻し――

「ここから五分ぐらい歩いたとこでいい所があるんだ。後で一緒に行くかい?」

「あ、よろしくお願いします」

「了解。それじゃ荷物を置いたら下においでよ。……他に質問は?」

俺の訊きたかったことはもう無いし、純一は早くトレーニングムに行きたくてウズウズしているようだ。

「特にないようだね。それじゃ僕の説明はこれまで」

「ひゃっほーい！」

その言葉を聞いた瞬間に、純一はダッシュで自分の部屋に向かう。

「つたく、テンション高いなアイツ」

「まあいいじゃないか。……それじゃ僕は下で待ってるからね」

「あ、はい。すぐ行きますから」

俺がそう言っていると、軽く笑みを浮かべてエレベーターを使い、下に降りて行った。

「さて、俺の部屋は……と」

純一が向かった方向に歩きだし、数十秒で着いた左の角部屋を開く。

「へえ…… 案外設備はいいんだな」

シンプルではあるものの、必要な物は一応全て備わっている。

そして角部屋ということもあって、案外部屋は広い。

これに俺の荷物を付け加えれば、前と変わらない感じになるだろう。

ひとまずリビングの角に自分の荷物を置き、買い物用のエコバックと財布を小さいポシェットに入れる。

「よし、それじゃ行くか沙希。姿は一階で変えろよな」

こくり、と沙希はおもむろに頷いた。

その後再び渡辺さんと出会って近くのスーパーに行った。品物も良かったし、いろんな物があって結構いいとこだった。

役得役得。

第拾弐話（後書き）

誤字脱字などないようにしていますが、あつたらごめんなさいw

第拾参話

一月三日、午前一〇時。

休みによつて体たらくな時間に起きるのが日課となつてしまつた俺は、朝飯を準備し、毎度恒例となつた沙希起こしに奮闘した。

いつも以上にテキパキと家事を終わらせ、外出するための準備をする。

そして――

「よし沙希、行くぞ」

「いくつてどこに？」

「……俺の実家だ」

せつかく戻つてきたんだし、挨拶しといたほうがいいもんな。

一度駅まで戻り、そこからバスに乗つて二十分。

学園に行くまで分からなかつたが、あながちそこから遠いとは言えない閑静な住宅地に、俺の家はあつた。

向かい側の幼馴染の家に圧倒されているが、一応俺の家もでかいと言えばでかい。

――まあ、庭園とかある家が真向かいにありや、自然と陳家な所に見えるがな。

考えても鬱になるだけだったので、玄関に備え付けられている呼び鈴を押す。

……つていうか、なんか新しくなつてゐるな。カメラ付きになつてゐるし、セキュリティも俺がいたころより良くなつてゐる感じだ。

はい、どちら様でしょ――

インターフォン越しに聞こえた、懐かしい女の人の声が絶句しているのが分かった。

そりゃ驚くよな。何しろ言いかえれば、あの街に監禁されてたもんだし、俺。

……え？ 恭介？

「ただいま母さん。玄関、開けてくれるかな？」

諭すように俺はインターフォンに声を掛ける。家からドタバタ足音が響き――

ボタンつと大きな音を出して、玄関の扉は開かれた。

「恭介！ どうして……って」

母さんの顔が、俺の隣にいる沙希を捉えて徐々に強張っていく。

あー、こりゃ誤解されてんな。ま、母さんは常識人だから説得すりゃ別に勘違いは無いか。

「や、母さん。とりあえず、上がっていいかな？」

「え、ええ」

その言葉を聞いて、俺は実家の敷居を跨った。

お昼時前にやっとのこと、沙希の説明も終えた俺。

昔のような朗らかな顔に戻ってくれた母さんは、キッチンからお菓子和緑茶を入れて運んでくる。

「それにしても、どうして恭介帰ってこれたの？ まだ転移する時

期じゃないでしょうに」

幾分不思議そうに、母さんは俺に尋ねてくる。

「東雲梓…… って知ってる？」

「知ってるも何も。有名な方じゃない。『ルイン・クイン破滅王』でしょ？」

結婚するまでプロの『悪鬼祓い』だった母さんは、未だこの手の情報を持っているようだった。

「なら話は早いかな。その人が今度、東京の学園の先生になることが決まって、成り行きで俺もその学園生になることになったんだ」

「…… いきなり話飛ばなかったかしら？」

「飛ぶも何も、その通りなんだから仕方がないじゃん」
言葉通りだよ、と俺は付け加える。

「それにしても手続きとか、住所変更とか荷物とかいろいろ問題もあつたでしょう？」

「あつただけど……。なんか全部梓さんがやってた」

「……すごい女性ね。東雲さんは」

「ある意味驚嘆するよ」

茶化すように俺は言葉を掛ける。母さんはそつと微笑んだ。

「それにしても、悪禍で同時に二体も悪鬼が出るって…… 本当？」

「ああ。そしてその二体目がコイツだ」

そう言つてまたもやテレビに釘付けになっていた沙希を撫でる。

「妖狐の悪鬼ね。本当に大丈夫なの恭介？」

「大丈夫だよ。コイツとは一応主従関係が成り立ってるんだ。コイツが俺に逆らうことなんてないよ」

ま、その主従関係は既に無くなってるんだがな、と心の中で呟く。

「そう、それなら安心。」

ね、何で母さんがこんなに心配してるか分かる？

一度、使い魔に乗っ取られてしまった人がいたのよ。その人、自分より力が強い悪鬼と契約しちゃってね。

そこからの処理が大変で——」

母さんは過去を思い出す様にポツリポツリと語る。

その言葉に対して、俺は——

「へ、へー！ そんなおっかないことも、あるんだな——！」
つい動揺しながら、母さんに応答した。

ていうか、やべえぞ。はつきり言って、俺って絶対沙希に力負けしてるもん。

再び沙希の方を向く。俺の視線に気が付いたのか、顔をクルッとこちらに向けてくる。

「あ、あのさあ沙希。お前ってさ、もしかして乗っ取ろうと思えば俺に乗っ取れる？」

ふと口から出てしまった言葉。そして——

「うん、“いまなら”できるよ」

あ、あっさりと肯定しやがったぞ……。

俺が絶句しているの見て、沙希は思いつめたように考え、そして

「でもない。きょーすけは、わたしの“いばしょ”だから」

そう言って何日ぶりが分からない、可愛い笑顔を浮かべた。

そしてそのまま、テレビの方に顔を戻す。

「な、なんかさらっと衝撃告白もあったけど、沙希と俺の関係はバ

ツチリさ！」

つぐ、と親指を立て、話をごまかそうとしたが……。
母さんの目線が痛い！

「か、母さん？」

「……はあ、貴方は昔からそういう危ないことばかりに足を突っ込んでんじやって」

目を瞑って、やれやれと言った感じに首を振る。

「恭介、いい子をパートナーに選んだわね。これからも頑張りなさい」

「……ああ。ありがとう母さん」

俺がどんな厄介なことに足を突っ込んで、昔から母さんは助けてくれた。

その母さんがそう言うんだから、沙希に対しての危機感というのは無くなったのだろう。

「ところで、父さんと京平兄は？」

「橋幸さんも京平も、まだ仕事。多分京平はもうすぐ帰ってくるんじゃないかし——」

と、母さんの言葉が全てを言い放つ前に、玄関の扉が大雑把に開かれる音が聞こえる。

「帰ってきたようね。……あの子、泣いて喜ぶんじゃないかしら」

「そんなことは無いだろ、母さん」

「知ってる？あの街に恭介の配属が決定した時、京平ったら泣いて止めようとしたのよ？」

確か『まだアイツは十二歳だ！ 子供を一人でそんな場所に行かせるのか！』って言ってたね」

壮大な驚きを含む兄の声が、家の中を満たした。

「何だよ使い魔か。初めからそう言えってんだ！」

「まさか、あそこまで簡単に騙されるとは思わなくて……」

「だってどう見ても美少女じゃん。妖力も見事に消してるし、化けてるようには全然見えないぞ我が弟よ！」

そう言って沙希を指差す兄。

——確かに、沙希の化ける能力は神がかっていると思う。

化けてると言われても、そうは思えない程に精巧に化けているのだから。

「まあ、それほど高位な奴を使い魔にしたってことだよ、京平兄」

「さすが恭介。俺の弟なだけはあるな！」

「どれだけ自分を過大評価してるんだ？」

「ははは、と久しぶりに家族たちで笑い合う。」

うん、たまにはこういうのもいいな。自然と心が表面へと出てくるような、そんな暖かい雰囲気がある。

「それより母さん！俺は今腹が減って死にそうだ！」

「そういえば、もうお昼回ってたわねえ……」

「俺、うどんな」

「お、恭介。お前も分かってるじゃないか」

「昼は母さんのうどん。定番だろ？」

昔はよく作ってもらっていた。母さんの作るうどんは、めっちゃ美味い。

料理を始めたきっかけも、母さんの料理に理由が在る。どうやったらおいしく作れるのか、この人の動作を見てよく真似したもんだ。

「ふふ、それじゃ待っててね」

そう言っって少し嬉しそうに、母さんはキッチンの方へと姿を消した。

「あ、そういえば！」

その姿を見送った兄は、何か思い出したように声を挙げる。

「お前、向かいの倉橋さんちの二人、気になる？」

「ああ確かに気になるわ。あいつら今何やってんの？もう免許は取ったのか？」

「簡単に取ったさ。でもあいつ等はまだ“仕事をしていない”んだ」
「ん？ ということ？」

兄のその何かを含んだ言葉に、思わず訊き返していた。

「今あいつらは、悪鬼祓いの育成学校に在るんだよ。そこで寮暮らし」

「……悪鬼祓いになってんのなら、行かなくていいじゃん」

「いや、そこはどうやら実戦主義らしくてな。」

あいつらの過保護な父親が闘うのに慣れるまでってことで、その学園に通わしているみたいだ」

「出たよあの過保護親父……ちょっと怪我したぐらいで救急車なんて呼びやがって……」

そんな過去の苦い思い出を思いだしながら、俺は学園について考えだした。

ていうか俺が転校した所と似てるな、そこ。まあ、東京だしそういう学校はたくさんあるんだろう。

「ところで、お前は どうして こっちに 戻って くれた？ まだ 転移に しては 時期が 早いし。…… もしかして、俺が 恋しく なったか？」

「何で やねん。 そんな 理由で 戻って これたら、俺だ って 感動 だわ」「相変 わらず つれない な 我が 弟よ」

「つれる ような 冗談を 言う ように なって から、出直 してくる んだな」しっしつ と 手を 振って、目で 笑いながら 兄を見る。

「…… で、 実際 どう なんだ？」

「京平 兄、 東雲 梓…… って 知って る よな？」

「当たり前 じゃ ないか！ あの『破滅王』^{ルイン・クイン} だろ？ むしろ 知らない 奴の方が こええ よ！」

へえ、 やっぱ り 相当 知られて んだな、 梓さん。

「って いうか、俺あ の 人の ファン なんだ よねー！ いやー、一度で も いいから 拝見 して みてー！」

「…… つは？」

「何 驚いて んだよ」

「いや、 なんか 梓さん の ファン とかの たまう、京平 兄の 声色 らしき 幻聴 が——」

「幻聴 っていうか、 本当 だぞ。 って いうか、お前。 何で 親しげに『梓さん』 とか 言ってる んだ？」

「…… あ、お前—— もしかして？」

「あー、 体調 が 悪くなっ たなあ！ 沙希 に 膝枕 してもら おっ かなー！」

逃げ ようと した ところで、右肩 を ガツチリ と 掴まれた。

後ろ から 尻^{また}なら ない オーラ が 溢れだ している。

マジで 怖い。

「よお 恭介。 キリキリ話せよ？」

「や、やめ——」

アッ————！………！

第拾参話（後書き）

誤字脱字など無いようにしていますが、あつたらごめんなさいw

第拾肆話

「なにいいい！ めちゃくちゃ知り合いになって、それにも飽き足らず、東雲梓さんの学校に転校するだとう！？」

「……」

蛻もぬけの殻だ。もう動けん。何をされたかは……正直話したくない。

「ふざけんなよ！ 俺も入学したい！ ていうかさせる！」

「無理だ。もう高校卒業してるだろ？」

ちなみに十九歳で、大学には行かず仕事一筋だ。俺もそうしよう
と思っている。

「さて……、どうすれば高校中退の履歴書作れるだろ……？」

「マジで入る気が！？」

いくら何でも迷走しすぎだぞ。どんだけファンなんだよ。

「止しときなよ。いくら何でも、裏で手を回すのはよくないぞ」

「……それもそうだな」

兄は悟った風に俺の顔を覗き――

「つまり真正面から実力行使で入れ、と。そういうことだな！」

「いや全然違うからね！？」

別にやり方を問題視してんじゃねえんだよ！それ以前の問題だよ！
ていうか真正面から実力行使ってどうやるんだよ！その方法を教
えてくれ！

「じゃーどうすりゃいいんだよ」

「梓さんと仕事仲間になって、仲良くすればいいじゃないか……」

「お！ それはいいアイデアだな我が弟よ！」

でも梓さん、教師になるから多分兄と同じ仕事することは無いと思うけどなあ。

しかし俺は至って平然と――

「だろ？ 京平兄」

誤魔化しちゃった。ってへ。

「あらあら、盛り上がってるわね」

そう言ってキッチンの方から、母さんがお盆に四つほど器を乗せてこちらにやってきた。

出汁の良い匂いが、リビングの中をやりわりと満たしていく。

「沙希のも作ってくれたんだ。ありがと母さん」

「いいのよ。もうその子も、恭介から見れば“家族”なんでしょうから」

にこつと柔らかい頬笑みを浮かべてそう言う。本当にありがたい。

「いいよなー恭介。俺も壮絶に可愛い使い魔が欲しいやーい！」

「妬むな妬むな。嫉妬は醜いぞ」

「お、我が弟よ。それは俺に対する戦線布告と見なしてもよろしいかな？」

「あー腹減ったなー。沙希、こっちにおいで」

兄の言葉を見殺しして、沙希をこちらに呼び寄せる。

「っち、と舌打ちをして兄も行儀よく椅子に座り始めた。」

沙希は慣れたように、いつも父さんが座っているであろう空いている席に腰を下ろす。

「それでは、頂きます」

「いったただっきまーす！」

「頂きまーす」

「いただきます」

母さん、兄、俺、沙希の順に食事の挨拶。やはり日本人としてこれは大事だよな。

「お、沙希ちゃん。なかなか食事の礼儀を覚えているな。よしっ、お兄さんと結婚を前提に付き合わないかい？」

「何が『よしっ』だ何が。前文と後文に繋がりを見いだせないじゃないか」

無視しようと思ったが、おもわず突っ込んでしまった。母が上品に口を押さえて笑う。

そして沙希はと言うと。

「いや」

たった二文字で、兄の求愛行動を見事に突っぱねた。

「うう、酷い」

その時の兄のうどんは、なぜか塩味だったらしい。

「今日はありがと、また来るよ」

「いいの恭介？ 別にこの家から通ってもいいのよ？」

「寮の方が学園に近いからな。朝のギリギリまで長く寝れそうだし、まず何より、お金だけはあるから寮費も気にしなくていいし」

五年程、一人暮らしで国家公務員並みの給料を貰ってきてたんだ。余りに余っている。

「えー……。我が弟よ、沙希ちゃんは置いていけ。頼むから」

「うーん、俺としてはどっちでもいいんだけど……」

そう言っただけで沙希の方を向く。こいつが嫌がっているのは孤独であつて、別に俺とじゃなくても良さそうだしな。

「沙希、お前どうする？この家で過ごすか？」

「きょーすけといっしょ」

「つちえ！ つれなーいじゃないか沙希ちゃん。俺とバカンスしようぜ？」

「いや」

「……」

またもや二文字で完全に拒絶され、地面に膝から崩れ落ちた兄。
真まことにご冥福を祈る。

「沙希ちゃんは恭介に少なからず、好意を持っているのよ。じゃない貴方なんかと契約するはずなんて無いんだから。だから、沙希ちゃんの思ふ通りにさせてあげなさい」

「……そうだな、母さん」

あなたなんか、という所に少し引かかったが、母さんは思ったことを言ったのだろう。

悪意なんて見当たらなかったし、重んじて母さんの意見を聞き入れることにする。

「よし、それじゃ沙希。俺と今まで通り、一緒に住むか？」

「うんっ」

ぶんぶん、と顔を何度も縦に振る沙希。こうして見ると、沙希に

少なからず好意を持たれている存在と認識できて、少し嬉しい。

「それじゃ母さん。父さんに宜しく伝えておいてくれ」

「はい、分かったわよ」

「それとじゃあな京平兄。また余裕が出来たら遊びに来るよ」

「次は東雲梓さんも連れてこいよ！」

「あはは……。出来たらな」

苦笑いを浮かべながら、俺は玄関を開ける。外の乾いた冷気が、頬を撫でてくる。

「つと、そう言えば。……沙希？」

「またね」

沙希に挨拶をさせるのを忘れていたので、するように促す。

子供のようにパタパタと手を振り、いつものように俺の腕に再び自分の腕を絡めてきた。

「あ、お前！ 役得したわ、みたいな顔浮かべやがって！ ふざけんな！」

「さよなら」

鬼気迫る勢いで兄が追いかけてくる前に、俺は足を速めてバス停へと向かうのだった。

「……たく、大きくなりやがってチクショーが」

走り去った弟の背中を見て、柄がらにもなく感慨深く思う。

五年前と比べて、心も体もよく成長していた。だがあの頃となん

ら変わらない懐かしい顔も同時に見れて、少なからず感動を覚える。

「そうね京平。……やっぱり十二歳のあの子に一人暮らしさせるなんてどうかと思ったけど、恭介は強い子だったから、案外大丈夫だったわね」

「俺が泣いて引きとめたのが、今更ながら水の泡に思えてくるよ」
国が定めたことでも、行かしたくなかったからな、あの時は。

「そうね。……その後、橋幸さんが『電話とか手紙は決してするな』って言った時、あなた本当に父親を病院送りにするぐらいに怒り狂っちゃって」

「若かったんだよ。モラトリアムだ、俺の黒歴史だ」
しかし見事に惨敗だった。今でも勝てるかどうか分からない。

「ところで、恭介はこの学校に行くんだ？俺、そこら辺訊き逃しちゃってさ」

「……いつい我が弟と会話する時は冗談が多くなってしまふ。そのせいか、アイツの印象では俺はお茶らけた兄のようになっていらい。」

別段として嫌ではないが、もう少し良い印象も欲しい所だ。
そして母さんは少し悪戯っぽく微笑んで、こう答えた。

「聖インフィニティア学園よ」

「……え？そこって確か――」

「お母さん、わざと恭介には教えなかったけど、いずれ会うと思うわ」

「……そっか。そうだな。あいつら、驚くだろうなあ」
それと同時に、嬉々とした表情を浮かべる二人の少女が目に見え
る。

「恭介が戻ってきたこと、メールで伝えてやろうかと思ったけど、やっぱり止めとこ」

「ふふ、その方が面白そうよね。あの三人がびっくりする表情、この目で見てみたいわ」

「……やっぱり、母さんは俺の親だよ」

思考がまるつきし俺と同じだもん。流石親子って感じだな。

「それは、褒め言葉として受け取ってもいいかしら？」

「もちろんだ。俺の自慢の母親だよ」

「ありがとう京平。それじゃ、夕飯の支度するわね」

「ああ」

俺の二つ返事を聞いて、母はリビングの方へと戻っていく。

「そつかあ。これから面白くなりそうだなあ」

随分と学園を牛耳ってるらしいからな、あの二人。そこに恭介が入れば、下手な喜劇より面白くなるだろうよ。

「あー、俺も行ってーなあ。何で年子じゃ無かったんだろ？」

少し後悔の念を覚えるが、まあしょうがないだろう。運が悪かったんだと、割り切るしかない。

「まあいいか。授業参観の時、俺が行こ」

……アイツの困った顔が頭に思い浮かんでくる。めちゃくちゃ楽しそうだ。主に俺が。

やば、自然とにやけてきた。自重自重っと。

そんな（不埒な）今後の決意を心に留め、俺は玄関の扉を閉めた。

冷たい外気が、暖かい我が家の空間と深く入り混じった。

第拾肆話（後書き）

誤字脱字などないようにしていますが、あつたらごめんなさい！

第拾伍話（前書き）

1月5日、午前7時半。

今日から少し早めだが、この学園は三学期の始業のようだ。

いつも以上に早めに沙希を起こし、朝ご飯を食べさせる。

「あ、学園に行く時は、沙希は妖狐モードな。小さい感じで宜しく
「わかった」

こんがりと焼かれたトーストの耳を齧りつつ、沙希は首を振った。

第拾伍話

「いや、それにしても恭さん」

「何だ純一。どうかしたか？」

「俺ってさ。こういう学校ってもうちつと古臭いと思ってたんだよね」

「つぶ、甘いな。……俺も来るまではそう思ってたが、あのレンガ造りの建物を見て、早々にその幻想はぶち破ったぜ」

洗練されたビルのような中央校舎が、高々しくそびえ立つ。

「それにしてもこの学校の制服が学ランで良かったよなあ」

前の学校も学ランだったので、要するに使いまわしだ。

ボタンと校則バッチだけ変えれば、あつという間にこの学校の制服が完成する。楽ちんで良かったぜまったく

「そうだな恭さん。腹減ったな」

「会話に繋がりが見入いだせない！？」

「そういえば、東京って言えばフィギュアだよな。美少女の」

「え？何で？何でそんな話題になったの？」

まさか純一から、そんな類たぐいの単語が出るとは思わなかった。

「あ、恭さん。校長室ってどこ分かるか？」

「ここでききなり話題戻すの！？つちよ、フィギュアどこにいった！？」

「もういいんだよ。何か恭さんの反応微妙だったから」

「どんな反応が百点満点か、教えて欲しいんですけど宜しいでしょうか！？」

「お、着いたぞ恭さん。運がいいな全く」

「……そーですね」

駄目だ。朝からこんなテンションじゃ夜まで保つ気がしない……。

「それにしても、なんだかなあ」

ここで今までは打って変わり、純一は少しトーンの落ち着いた声色で呟きだす。

「本当に『悪鬼抜い』への一步を歩んでいつてるんだなあ、俺。何か実感が湧かないや」

「いい加減、腹括っておけよ。ここに入れば、多分待ってるのは人との競争ばかりだぞ」

聞いたところ、実戦主義らしいからな。出来ない奴はエスカレーター式で落ちぶれていくに違いない。

「……ああ、そうだな」

しかし純一は、ここで少し嬉々（きき）とした感情を声に含ませる。

そういえば、純一は昔から競争が好きだったなあ、今更ながらに思い出す。

「つと、純一。言い忘れたけど、俺が悪鬼抜いてことは内緒な」

「っへ？ 何で内緒にするんだ？」

「特別視されたくねえんだよ。少なくとも、今から一緒に学ぶ奴らにはな。」

俺だつて腕前はそんなにいい方じゃないし」

「恭さんでいい方じゃなかったら、殆どの人が良くないと思うんだけど。……まあ、恭さんがそう言うなら、俺は口を慎んでおくよ」

渋々、といった表現がぴつたりな感じに、純一は肯定の意を表した。

「サンクス。それじゃ——」

軽く手の甲で扉を数回叩く。室内から「どうぞ」と少し穏やかな

声が響いてきたので、言葉通りに俺たちは扉を開けて中に入った。

——あれ？

今までの経験から考えると、かなり歪こじな環境が整えられていると思っていたのだが……。

室内は思った以上にシンプルな造りだった。いかにも学校、といった空間が広がっており、これと言って変わったところなどはない。強いて言えば、レトロな卓上ライトと少し色に変色した本棚があるぐらいだ。

「ああ、君たちが東雲先生が言っていた子たちですね」

柔らかな、しかし年相応にしゃがれた声を出して、椅子に座ったまま女性がこちらに語りかけてきた。

「えつと、そっちのカッコいい方が要純一君で、こっちの厳いつい方が桜庭恭介君で宜しいですかね？」

「……些ちやかその表現には意義を唱えたいが、その通りだ」

早速タメ口になっちゃったぜ。

いやだって、ここまであから様に対比されると、少しカチンと来ちゃうだろう？

「まあまあ、そんなに怒らないで。老婆の戯言ざげんだと思って、軽く流してもらえればそれでいいのよ？」

「肝に銘じておく」

「そうですね。それでは、少々時期的には遅いですが、我々は貴方たちを歓迎致します。ようこそ聖インフィニティア学園へ」

「なーなー学園長さん。その中二つばい学校の名前、誰が考えたんだ？」

「誰って、当然私です」

「……」

「……」

センス悪っ！

「…ふむ、なるほど」

そんな風に思っていると、まるで俺らを値踏みするようにこちらを眺める学園長。そしてそのまま、一人自己完結する。

「何が『なるほど』なんだ？学園長さん」

「いえ、東雲先生の弟子の貴方は、雰囲気からして相当出来る子だろうと思っていたのですが……」

齒切れが悪そうに、俺を芯を捉えてくる。

「こちらの恭介君も、相当出来そうだなあと実感していたのですよ。いくら東雲先生が有能だからって、推薦された子まで優秀とは限りませんからね」

「あの人と比べたら、俺なんかゴミくずも同然だ」

「そんなに自分を卑下になさらず。……大丈夫、きっとここで学べば貴方の実力は今より向上しますよ」

全く論拠など無いというのに、その言葉には何故か納得させられていた。

「——だが、それはこの学校が“有能だから”、という理由ではありません。」

先生方も最善を尽くすとは思いますが、それ以前に貴方たちの“根気と努力”も必要です。

そこだけは、履き違えないようにして於いて下さい」

「……了解だ」

「心得ましたー」

大事なところに一つ一つ協調を加えた学園長の言葉は、屁理屈を

ただ並べた論語よりも俺にとっては重要だと思われた。
素直にその意に従う。

「それはそうと、恭介君。貴方の足元にずっといるその子は……？」
「俺の使い魔ですけど、何か？」

「いえ、悪鬼を使い魔にしているのが珍しくて、つい訊いてみてしまったんですよ。」

しかも妖狐で六尾。これほど高位な悪鬼を扱うには熟練が必要なんですけど、以前に式神を使い魔にしたご経験は？」

「一切無い。皆無だ」

「……一から悪鬼の性質を、勉強し直した方がいいかもしれませんね」

「大丈夫だ学園長。俺だって、結構疑い深い性質なんだぜ？何が危なくて何が安全かくらいの認識ぐらいは容易に取捨選択出来るよ」

「貴方ほど、自分に奢っている子は初めてですわ、私」

「そりやどうも。最終的に信じられるのは自分自身だからな」

少し不敵に笑って見せる。

数秒の間、俺から視線を逸らさず瞳に捉えていたが――

「それもそうですな。くれぐれも油断為さない様に」

学園長の方も不敵に笑って、俺と沙希を同時に見据えた。

（なかなか面白いなこの人。何て言うか、少し父さんに似てる）

人の心を読まんとして瞳を疑ってくるその姿は、幼いころの記憶にある父親と被った。

厳格な父の目線は、あの時は結構恐かったけど……。今はどうなんでしょうか？

「それじゃ純一君。くれぐれも無茶はしないように。」

何かあったら東雲先生経由でも私に直接でもいいので、言いに来てくださいね」

「……何か贔屓^{ひいき}じゃね？ 俺には？」

「口の悪い子は、お仕置が必要ですからね。自分でどうにかして下さい」

「冗談の通じない学園長先生なこと」

「私は貴方ほど、楽観的に物事は見据えない性質^{たち}なんですよ」

「俺とは一生分かり合えそうもないな。」

「ええ。そうですね」

ふむ、あっさり受け流すな。なら――

「頭堅いと、これからのグローバルな社会に生きていけねえぞ？」

「老い先短い歳である故^{ゆえ}に、少しぐらい堅くてもいいんじゃないかしら」

「それもそうだな」

「ええ、その通りです」

先ほどと同じような類笑みを、俺たちは相手へと見せつける。

一見にして、口喧嘩にも見えるこのやり取りに、俺は少なからず感動を覚えていた。

なんというか、嬉しいのかもしれない。自分の思った事を真つ向から批判してくる奴なんて、今まで全然居なかったのだから。

父にはまず言う前に砕けてしまおうし、他の人だとまず話にもならず、簡単に物事が通ってしまっていたからだ。

それだけに、この会話は俺にとって充実している。

それは向こう側も同じなようで、大層自虐的に微笑んでいる。俺と同様、この会話を楽しんでいるようだ。

だが純一は深読みし過ぎてか、めちゃくちゃオドオドしている。

お、俺はどうすれば！？　みたいな雰囲気だ。

そんな姿を見て、思わず学園長が口を押さえて笑い出した。

「ごめんなさいね純一君。別に陰険いんけんな仲になっっているって訳ではないのよ？」

「っへ？　え？　ホントか？」

「当たり前だろ。何で初対面の相手にマジで喧嘩なんておっ始めんだよ。今のはそういう互いに割り切った会話だ」

「……マジか。何か途中から会話が飛躍し過ぎて、俺どうすればいいか分かんなくなっちゃってさ」

「悪い悪い。置いてけぼりにする気はなかったんだけどな」
思わず口から笑みが零れる。

「それはそうと、もうちょつとで授業始まるんじゃないか？」

俺らのクラスと担任はどういう感じになってるんだよ、学園長」

「貴方たちのクラスはF組です。大抵クラスの人数は35〜40人、一学年に1000人いますので、全体でみるとクラスはきっちり2組まであります」

「お、多いな」

驚いたように、純一は感嘆の声を洩らす。

まあ校舎の数からして、そんなこったろうと思ってたけど、改めて言われるとその莫大な量に感慨深く感じる。

「そして担任は、もう少しで来ると思いますよ」

そう言っつて、何やら面白い物でもあるかのように、薄ら笑みを浮かべた瞬間――

「お、遅れてしゅみま……ぎゃふっ！」

言葉噛み噛みに、しかも派手にずっこけて一人の女性が入ってき

た。

「……」

「……」

正に声が出ない、というのはこういうことだろう。

あのハイテンションの純一でさえ、完全に黙りこくっている。

ま、まさか……これが？

「貴方たち、2年F組の担任をしてらっしゃる若槻美香子先生です。
こつ見えて、実績はあるんですよ？」

「へ、へ」

引き攣った顔で、幾分値踏みをするようにその女性——若槻先生
を見る純一。

多少、不安の色も垣間見える。

い、いや。俺も同感だけどさ。しゃーねーじゃん、割り切っちゃ
おうぜ？

「それじゃ若槻先生、お二人をよろしくお願いしますね」

「は、はい！ お任せ下さい学園長先生！」

立ち上がって服装を整えた若槻先生は、ちゃんと見ると結構美人
だった。

淡いライトグリーンのスーツとスカートを身に着けているその姿
は、よく見ると重心がブレていない。

シャキッとした立ち振る舞いからは、見事に引き締まったプロポ
ーションと、大人の女性独特の色気が——

「それじゃ二人とも！早くいきま……きゃふっ！」

あるといいなあ……。

第拾陸話

学校独特の、若者集う雰囲気には溢れている——学園内最南端の南A校舎。

その二階の奥にある教室を目の前にして、現在先生を含む俺たちは立ち尽くしていた。

「ここが二年F組の教室よ。えーっと、こっちの君が確か……」
「要純一です」

「そうそう、東雲先生のお弟子さんね。それでもう一人が桜庭恭介君、で良かったかしら？……ふーん、やっぱり似てるわね目元が」
「お、何で俺の名前知ってるんですか先生？ あと似てるってどういう事ですか？」

「私ね、実は貴方のお兄さんから弟がこの学校に転入するって聴いたの。それで、ね」

落ち着きを取り戻した若槻先生は、見事なまでに先生っぽくなっていた。

いやまあ、普通はこれが妥当なんだけどね……。

「へえ、あの京平兄の知り合いなのか」

……うん、碌^{ろく}な奴じゃねえな！

断言出来るぞ、コレ。何せあの京平兄の知り合いなんだぜ？その時点でゲテモノ分類だよ。

——って、そう考えると肉親である俺もゲテモノ扱いになるのか。
……はあ。

「なんか色々含んだ顔してるわねえ。何がどうしたの？先生に言っ
てごらん？」

「いえ、何でもありませんからささつと入りませんか？教室もざわついてますし」

考えれば考えるほど鬱になるだけだったので、仕方がなく先生に教室に入るよう言ってみる。

クラスの喧噪はいつも以上に大きいみたいだ。現に若槻先生が「……たく、またアイツらは」みたいな一人事を呟いている。

どうせ転校生来るからってウキウキしてんだろうよ。ま、女子にとっては当たりかもな。何しろ純一いるし。

「よし、桜庭君の言うとおりでし、そうさせてもらうわね。それじや二人は少しここで待ってて」

そう言うのと直ぐに毅然とした態度を作り出し、教室内へと堂々と入っていく若槻先生。

その姿はまさに、人に教えを請う先生そのものだ。今さっきの学園長室の印象は、早速だが消した方が良いのかもしれない――

「はい、静かにしなさいみんなー！」

「せんせー！ 学園長の前で緊張しませんでしたかー？ 扱けたりしませんでしたかー？」

「つちよ！ そんな事ありません！」

「……こりや当たりだな」

「ああ、間違いねえよ」

「ほら言ったじゃない。絶対緊張して何かするって」

「そーそー。若槻先生、プレッシャーに弱いんだから」

『あははははははは！……！』

「こ、こら！先生を馬鹿にしないの！ていうか静かに！」

——はい、消去すること出来ませんでした。舐められすぎだろ若槻先生。

今さっきの俺の抱いた切実な感想を返せ。

純一も同様に思っているのか、苦笑いを浮かべて俺を見据えている。

「そ、それじゃ気を取り直して。こんな時期ではありますが、転校生を紹介します！それじゃ二人とも入ってきてー」

そう言われ、別に特別なこともせず普通に入るは良いものの……。

——うひゃあ!?

ありとあらゆる視線、視線、視線。悪いことなんてしていないのに、何故か大声で謝りたくなるような、そんな不可解な境地に追いやられる。

ていうか沙希、大丈夫かなあ。コイツ、人の視線にあんまり慣れてないし。

「えーっと、こっちの使い魔持ちの子が桜庭恭介君。んでそっちのイケメンの子が要純一君。

要君は、あの東雲梓さんのお弟子でもあるそうよ」

すげえ、と言った感嘆がクラスの彼方此方あちこちから漏れている。やっぱり、梓さんの知名度はすごい。

——そして純一の説明の時は、絶対イケメンとかカッコいいとか、そんなワードが入ってくるよな……。

べ、別に悔しい訳じゃないしっ！ そんなことねえし！

「こっちの桜庭君も東雲梓さんの推薦で入ってきているから、相当実力はあるはずよ。……えっと、それじゃ二人とも挨拶をどうぞ」

「か、要純一です……。ヨ、ヨロシクオネガイシマス」

「桜庭恭介だ。こっちのちっこいのが、俺の使い魔の沙希な。宜しく頼む」

みんなが緊張の面持ちで俺と沙希、そして純一を見比べた。

……うーむ、少々堅苦しかったかな。

こういうのは真面目にした方が良くも思っていたが、初見でぶっ飛んでいると認識出来るこのクラスでは、少し駄目だったかもしれない。

そして純一、緊張しすぎだ。俺まで緊張しちまうだろうが。こういうのって案外他の人にうつっちまうもんだんだぜ？

「二人とも、それでもう挨拶終わりなの？

知ってる？ ファーストインプレッションはとても大事なのよ？

第一印象、第一印象」

「あーはいはい、分かりましたから、若槻先生は学園長にでも会ってまた盛大に転んで来てください」

「っんな！？」

俺が若槻先生をからかうように言葉を述べると――

「おー！ いいぞ転校生ー！」

「よく分かってるじゃない、貴方！」

わはは、とクラス全体が笑いに包み込まれる。

……よし、掴みはバッチリだな。ここから本番だぜ。

「ではでは、それじゃ今から俺とコイツと先生で漫才しまーす」

「えー？ 何その無茶振り！？ そんなの出来ないよ恭さん！」

「為せば成る。為さねば成らぬだ。ここで逃げちゃ人生の終焉だと思え」

「何で漫才如きで、そんなに壮絶なの！？」

「待って！ それ以前に何気に先生まで、漫才のメンバーに組み込まれちゃってるのか訊きたいんだけど！？」

二人とも、そこを気にしたら負けだぜ？

軽くスルーすることにした俺は、適当に話題を純一に振ってみる。

「よし純一、先生に一番似合いそうな物はなんだと思う？」

「そりゃあ、血に塗られた日本人形の足だよ恭さん」

「どんなイメージを先生に持ってるの！？　ていうか何でいきなり乗り気になってるのよ要君！」

「働いたな負けかなあって思ってた」

「違う！　先生はそんな返答が来るような質問はしていないわ！　つていうか！　その反応もどうかと思うよ先生は！」

「俺的にはイヤホンのゴムが若槻先生に似合いそうだと思う。どうだ純一？」

「ぴったりじゃないかな。ビンの缶詰」

「だーから、どんなファーストインプレッションを先生に持つちやったのよ君達は！　それより、前後の文に繋がりが見えないよ二人とも！」

「先生先生」。俺たちの先生に対する第一印象と言えば、学園長先生の前で嘔みまくりながら、激しく前方へ投げ――」

「悪かったわね純一君！　ファーストインプレッションなんてもう要らないわよ！　さつさと後ろに空いてる席に座って頂戴！」

若槻先生は俺らの悪ノリから脱出しようと、さつさと席に座るように促してくる。

だがしかし――

「つちよ、先生！　今いいところですよ！　頑張らないと！」

「そーよ先生！　ここで大人の貫録、魅せつけなきゃね！」

『そーだそーだ！！！！』

「こんな貫録なんか、魅せつけたくないわよー！」

結局、先生弄りに慣れているクラスの奴らからは、逃れることが出来なかった。

とりあえず心の中で、グッとみんなに親指を立てる。

「若槻先生、貫録魅せるならアレがいいですよアレ」

「……アレって何よ桜庭君？」

「ズバリ！ 鷹の飛翔ポーズです」

「どうしてそれで貫録が出るのか、先生は教えて欲しんだけど！？」

「見れば分かるじゃないか若槻先生……。そんなのも分からないのか？」

「何でそんな周知の事実みたいな反応なの要君！？ 絶対違うでしょ！？」

「……」

「何でこんな下らない会話の時だけ、連帯感が凄まじいのよ！日頃からそういう繋がりを見せなさいよ！」

「おっと、そういえば——」

この後、結局どうなったかと言うと。

とりあえず俺と純一はみんなに受け入れられ、若槻先生が膝から崩れ落ちた。

「ご愁傷様です。そしてネタの材料になってくれてありがとうございます。」

第拾陸話（後書き）

誤字脱字など無いようにしていますが、あつたらごめんなさい！

感想や批評などありましたら、気兼ねなく書いて下さいね。
それでは次話で。

第拾漆話

お昼時になつと現在。

あの漫才の後、ぐだぐだになつた授業の一時間目に、質問の集中砲火を浴びた俺たち。

……ま、主に純一の方が多かったんだけどだな。

それでその後は、普段通り（のような感じに）ちゃんとした授業を受けた。

そして現在、四時間目まで受け終わった所だ。今からは昼休みで、授業や休憩の時間配分は普通の高校と何ら変わりなかった。

——違っているのは授業内容だけだ。

出現する悪鬼の種類分けとか、悪鬼と人間の歴史とか、式神の種類とか、悪禍の規模分けとか。そういった悪鬼扱いに於いて必要な専門的内容でほぼ占めている。

それより、俺も悪禍の規模分けというのは知らなかった。

何でもここ二、三年で型式が整えられ、一般化されているようだ。純一も知らなかったみたいで、結構ノリノリに授業にのめり込んでいた。

「ねえねえ桜庭君に要君。良かったら、一緒に学食に行かない？」

そのように授業が終わるや否や誘ってきたのは、このクラスの女子三人。残念ながらあんまり印象は無い。

「あ、ごめんね。俺、今から師匠の所行かないといけなから……」

「すまんが俺もだ。悪いな」

「師匠つて、東雲梓先生？ ……要君もすごいよね！あんな人を師匠に持つなんて」

「そうかな？まあ師匠がすごいんであって、俺がすごい訳じゃない

けどね」

そういつて自嘲気味に純一が薄ら笑みを浮かべると、その女子三人が少しざわめく。

流石だな純一。何気ない仕草までイケメンだぜ。

「んじゃ恭さん。行こうか」

「りょーかいでっさ」

席を立ち、教室を気だるい足取りで退出する。

「んでさ。梓さんとはどこで待ち合わせしてんの？」

「ああ、学園の中央近くにある広場だよ恭さん」

「……結構遠いな。昼飯食う時間とかあるか？」

「大丈夫だよ。多分すぐ終わるって師匠が言ってたから」

そう言つて純一が足を速めたので、俺も同じく速めることにした。

噴水とか胸像とか、なんかもう何処どこかの美術館の外のような光景に圧倒されながらも、俺たちはパンを摘まんでいた梓さんの元へと行く。

「お待たせしました師匠」

「はい、ごくろう様。結構遠いんじゃない？ここまで」

「何しろ一番端っここですからね、自分とこの校舎は。どこ行くのにも時間掛かって仕方ないですよ、全く」

「でもいーじゃない恭介ちゃん。格技場とかは、主に南側に配置さ

れてるんだから、移動の時間が短縮出来るわよ？」

「……何で格技場の移動が重要視されてんです？」

「あつれー？知らなかったー？……弟子はどうか？」

「あゝ、実戦主義って言うてたから、何かあると思ってましたが……」

「……」
そう言うって気障きざったらしく人差し指を上に掲げ――

「昼から、全部実習って事ですかね？」

そう結論づけた。

「そう、その通りよ」

「へえ、そうだったのか。……ったく、あの学園長。そういう事を教えるってんだ」

「あら？恭介ちゃん、学園長先生とは親しい付き合いなの？」

「全然親しくないですけど、何故なぜか気は合います」

俺にしたら、かなり珍しいことだ。

「へー！それは驚きだなー！」

梓さんもそう思っているのか、幾分眼を見開く。

そう言うってパンの端っこまでパクリと飲み込んだ梓さんは、深く俺と純一を見つめだす。

「ま、最初は環境に慣れないだろうけど、頑張ってね二人とも」

「それは貴方もでしょ？梓さん」

「つふふ」そうだよー恭介ちゃん」

甚いたく嬉しそうに、梓さんは愉悦の籠った顔色を浮かべた。

こういう所は、どっちかと言うと大人な女性と言うより同年代の女子のようだ。不思議と親近感を持つことが出来る。

「よし、じゃあ戻るかなー。……っと、あとね二人とも」

何か思いだしたのか、ここで何故か幾分声に緊張を含ませ――

「この学校ね、すごい力を持ったぐらいで調子乗ってる生徒がいるから。そう言う奴等がいた時は——叩きのめしなさい。私が許すわ」

「了解でっす師匠」

「右に同じだ」

「つよし、言いたいことはそれだけだから。それじゃーねー」

俺たちにいつも通り目配せしながら、手をひらひらさせて梓さんは去って行った。

——そこから数十秒後。

「どういう内容で呼びしたかと思えば、そういうことだったんだな」
純一はそう言って、静寂を切り崩す。

「まあ、重要だとは思っけだな。こういうのは誰かの容認が無いと、やっていいかどうか分かんねえし」

「……確かに」

納得したように呟いた純一は、ふと俺の足元にずっと引っ付いてきている沙希を見つめる。

そして何を思ったのか、突然頭を撫で始めた。

「……何やってんだ？」

「いつも恭さんやってるから、俺もやってみたくなっただ。あんまり結果は良くなかったみたいだけど」

少し警戒しているような沙希から手を離し、苦笑いを浮かべる。

ここで純一は又々（またまた）何を思ったのか。周りを見渡すようにして——

「お、そこでパン売ってるぞ恭さん。ついでに昼飯買わないか？」
偶々（たまたま）目に入ったパンの売店を見つけ、そう提案してきた。

「ああ。いいぜ。……それにしても、今度からは弁当を作ってきた

方が良さ気だな」

「どうしてだ？」

「学食が遠いだろう？中央校舎にあるから、ここからまだ数分歩かなきゃなんねえし、パンを売ってるここまですら少し早歩きでも五分は掛かるからな。行き帰りだけで十分も消費するのは良くねえじゃん？」

「……確かに、そうだな」

「そういうことで、頑張れよ料理」

普段は料理をしない純一の肩を叩き、茶化す様に囁く。

「あんまり慣れてないけど、頑張るかなあ」

観念したように首を振ると、純一は近くのパン売り場へと足を運び出した。

「遅いわよー転校生二人！」

「すみませーん美香ちゃん先生。格技場がどこかわかりませんでした」

「右に同じです」

「……まあ、今回は多めに見るけど、その『美香ちゃん先生』ってどういうことかしら？要君」

「こつちの方が可愛いですよ、美香ちゃん先生」

「…そ、そうかな？ならいいんだけど……」

まんざらでもない様に、美香ちゃん先生は顔を背けた。

純一ナイスだ、とか思いながら俺はニヤリと厭らしい笑みを浮かべる。

現在、午後一時半。

格技場への道が分からなくて少し迷ってしまっていた俺たちは、探しに来ていたクラスの男子に見つけてもらい、十分遅れで無事到着。

眼鏡を掛けているそのクラスの男子は、言うなれば草食系男子の雰囲気纏っている。

「ありがとな、えつと……」

「しげおかゆと滋岳悠斗だよ。よろしくね桜庭君」

「ああよろしく。……滋岳っていうと、やっぱりしげおかのかわひと滋岳川人の？」

「へえ！ よく知ってるね桜庭君！」

「いや、知らない方がおかしくないか？この業界なら」

滋岳川人は、平安時代に名を轟かせた陰陽師で、比い稀なる呪術使い。その能力は安倍清明には劣ると言われているものの、多くの秘伝や書物を残したりする平安前期に於いてはかなり有名である陰陽師だ。

「いや、俺は知らないぞ恭さん」

「お前が知ってたら、俺だって驚きだわ……。とまあ、何はともあれよろしくな悠斗」

「つえ？ つあ、うん、よろしく」

「ん？ どうかしたか？」

「いや、まさか名前の方で呼ばれるとは思わなくて……」

「あー？ もしかして嫌だったか？」

「いや、そうじゃないよ。そうやって呼ぶのは家族だけだったから、少し驚いただけ！」

ぶんぶん顔と顔を横に大きく振り、俺の問いに否定する悠斗。

「あ、俺も宜しくな悠さん！」

ここで少しだけダンマリを決め込んでいた純一が、軽く焦っている雰囲気悠斗に挨拶する。

「よ、よろしくね要君。っていうか、ゆ、悠……？」

「コイツ、下の名前をさん付けで呼ぶんだよ。多少アレンジも加えたりして」

「へえ……！やっぱり何か二人とも、まさか転入早々先生を使って漫才するだけあって、普通とは違うなあ」

「それは褒められてんの？ 貶されてんの？」

「褒められてるに決まってるだろ恭さん。何言ってるんだ」

「いや、そうとは思えないんだが……」

「気にしないでよ桜庭君」

「そうよ。気にしないでいいのよ。先生の今日の黒歴史なんか

……！」

いつの間にか、酷く暗いオーラを纏って若槻先生が背後に立っていた。

「いや、若槻先生は話題にすら上がって……は、いたか」

あの漫才の件でくだりちょこつと。

「友好会はまた今度にして、いいから今は先生の話を聴いて頂戴」

「合点承知だよ美香ちゃん先生！」

「……。それじゃみんな、いいわねー！」

何故か——は分かるが、幾分声を弾ませて、若槻先生は午後の授業の説明をし出す。

だが説明とは言っても、結構簡単な事ですぐに話し終えた。

「では今からみんなには、いつも通り模擬戦闘をしてもらいます」

第拾漆話（後書き）

誤字脱字など無いようにしてますが、あつたらごめんなさい！

批評・感想などありましたら気兼ねなくお書き下さい！
それでは次話でまた！

第拾捌話

「なーなー、恭さん」

「何だ？」

「俺ってさ、今日初登校してきたよなー」

「ああ、そうだぞ。それがどうした？」

「なあんでそんな初心者を、模擬戦闘のトップバッターなんかにするのかなあ！」

甚く憤慨^{いた}している純一。そして呆れたような表情も垣間見える。

「お前が梓さんの弟子であるのと、あと先生がお前を気に入ってるからだろ。良かったな」

「いい加減すぎるんじゃないかと、俺は思っただよ。断固抗議したいね。こんなのでもいいのかな聖インフィニティア学園。こんな指導でいいのか、美香ちゃん先生」

「ああ分かった。分かったから——さっさと行け」

俺が突き離す様に背中を押すと、渋々と言った感じに純一は呪練用のフィールドへと向かった。

これがまた結構大きい。高さは三階相当まであり、まるで祭壇を模したかのような空間は、至る所に神力を施した注連縄^{しめなわ}が張り巡らされている。多分、力を外へ出さないための処置なのだろう。流石は学校とも言うべきか。

「お手柔らかにね、か・な・め・く・ん♪」

そんな大層なフィールドに入った純一に向かつて、めちやくちや猫撫で声で話しかけたのは対戦相手である天海千里^{あまみちさと}。名前にコイツは江戸時代の大陰陽師、南光坊天海の末裔……とか何かだろうとかよくは分からない。

コイツの特徴を簡単に言ってしまうと、低身長なのに巨乳というグラマラスな体。

男の弱い部分に付け込むような雰囲気醸し出しており、万人受けはしそうもないが、一部のロリ大好き人間ならあっさり心を引き込まれそう。

「……」

——しかし純一は前者だった。めちゃくちゃ顔を引き攣らせている。

まあ、アイツ年上好きそうでもんな。

「大丈夫かな……要君」

そんな情景を覗いていた悠斗が、声色に不安の色を含ませてそう呟く。

「どうしてそう思うんだ、悠斗？」

「いくら東雲梓さんの弟子でも、天海さんは悪鬼抜いのプロヴィジナル一步手前つて言われてるぐらい、クラスの中では実力はあるんだ。それだから大丈夫かなあって」

「それってつまり……あの天海って奴は、実力だけならプロに劣る事は無い、っていう認識でいいよな？」

見た目からは想像も出来ないけどな。

「うん、その通りだけど。……どうしてそんなに気楽そうに見えられるの？」

「いやー、何というかさ」

俺はフィールド内ですって気ダルそうな純一の方を、軽く見据え

「アイツも、実力だけならプロに相当すんだよ」

既然として言い放ったその瞬間、開始を促す若槻先生の声が響き渡った。

天海の武器は、刀だった。刀の神髄というのは以外にも数多く、俺が知ってるだけでもざっと数百は超えるほどある。

そして悠斗が言っていたように、純一がさつさと勝敗を決めてしまうかと思っていた勝負は、なかなか混戦している。現に五分程お互いの一撃を交わしあっているが、決着は付いていない。

「……やあ！」

随分と気合いの抜けた声で、純一に一手を加える天海。だが技術だけを見るとなかなか手慣れなようだ。虚空を斬る音が悠々とこちらにも聞こえてくる。

しかし冷静に、純一は右手のロングバレル——通称、ペネトレイターで太刀筋の軌道を変える。

そして右斜め後方へと下がり、左手のダブルトリガー——ブラスターより、壮大な二双の^{マズルフラッシュ}発射光を進らせ、追撃を加える。

だが読んでいたのだろうか、天海はその神力で創造されし銃弾を意図も簡単に斬り伏せた。分かれた二つの弾が淡い光を残して地面へと“付着していく”。

「かなめくん！ 君、なかなか強いね！」

「っはは！ それはどうも！」

幾分テンションがハイになっているのか、純一は嬉々とした声色で天海の言葉に答える。

「こりゃ、やっぱり試しちゃってても……？」

そう小声で言いだした純一は、距離を少し遠めに開け、まずブラスターより二対の弾を放つ。

「つきゃ！」

若干戸惑いながら、天海はその銃弾を見る。理由は自分を狙わずして、足元に銃弾を落としてきたから。

不規則に揺らめき、浮動している二つ弾を余所よそにして――

「……」

無言で迷うことなく、右手から鋭い一撃を即出した。

天海はその弾を右方へと素早く避けようとした――まさにその瞬間。

鋭い弾は天海の手前五メートル辺りで、即座に破散する。要領で言えばブラスターから放つ爆裂弾と一緒にのだらうが――

その破散した弾の欠片が当たったのか、浮動していた二双の弾は激しい爆発を引き起こす。

「つく！」

初めて悲痛そうな声色を上げた天海は痛みを堪えつつ、最初に狙っていた方向とは逆へ身を流そうとした。

――その時、初めて気づいたのだらう。

「……え？」

避けた方向に点在する“神力の固まり”。適当に撃っていたよう

に見えた純一の弾の残骸は、西洋儀式魔術としては基本術式——六芒星を描いていた。

「『フリーズ』」

非常にあくどい表情浮かべて放った純一の言葉に、天海は従うを得なくなる。逃げるモーションそのままに、輝かしく光る六芒星の中でピタリと虚空に制止する。

六芒星を描く意味というのは、簡単に言ってしまうえば『自然の摂理を司り、世の理とする』呪術を成すこと。それはつまり、今回の例のように言い変えてしまえば『自分の術式に入ってきた物は、避けられない自然^{じふん}の摂理に組み込める』というのと同じ。

天海は純一の創造した擬似的な『自然の摂理』に『組み込まれた』のだ。よって、今の彼女は純一の造り上げた世界の一部に指定されており、無論純一の言葉には従うを得なくなる。

ゆっくりとして純一は彼女の元へ向かい、「ばーん」と柄にも無く、子供の遊戯のようにペネトレイターを天海の額に当てる。

「止め！ 勝者、要純一」

若槻先生の静廉とした声がアリーナを包み込んだ。

その言葉を聞いた純一は、六芒星から神力を消して素早く天海を解放する。その彼女からは疲労の顔色が窺えるが、何故か信爽とした表情も確認出来た。

「まさかあんな細かいことしてたなんて、ね。私ちよつと驚いちゃったな」

こつちが素なのか。案外普通に言葉を述べる天海。……俺的には、こつちの方がいいと思っちゃってたりする。

そして純一はというと――

「別に細かくはないよ。“偶々（たまたま）”なんだから」

そのように言っただけで悪戯っぽく笑いかけると、駆け足で俺たちの方

に戻ってきた。

「すごいね要君。まさかあの天海さんに勝てると思わなかったよ！」
「そりやどうもだ悠さん。つま、結構天海さんも油断してたし、あ
つちが本気でやってたらどうなってたか分かんないよ」

感慨も無く、あっけらかんとして純一はそう答える。

「そうなの？ ……でも、あの六芒星はすごいと思ったよ。まさか
あそこまで計算しているなんて——」

「“計算なんかしてないぞ”？」

「……え？」

疑問符を浮かべて答えた純一に対し、同様に悠斗も疑問符を浮か
べる。

——こりゃ、俺の説明が必要になってくるかな。

「悠斗。六芒星はコイツの言うとおり、計算なんかなかったぞ」

「つえ？ でもそれならどうやって天海さんを……」

浮かない顔をして尋ねてくる悠斗に、少しだけドヤ顔を浮かべつ
つ俺は答える。

「コイツはあと先考えず銃弾を撃ちまくって、適当に神力を呪術場
の床に配置してたんだよ。」

——とは言っても、そんなに広範囲に広げると維持が難しくなる。
だから、大体避けそうな場所に適当に弾を破散させて、その方向

に逃がすように仕向けたんだ。

後は簡単だろ？ 避けた方向に在る、点在した神力の欠片の中で六芒星になる形を見出して発動させる。ハイ、これで拘束成功だ」

随分と長くなってしまった説明に、悠斗は目を丸くしていた。

その後、純一に何かを求めるようにして視線を投げかける。

「ん？ 恭さんの言ってることは全部合ってるぞ？」

その視線の意を読み取って、純一は適当な感じにそう言い放った。

「ていうか、そこまで見破られちゃったか。流石だなあ恭さんは」
「前と比べて動きが結構、型作られたような感じだったからな。それで、だ」

「うへえ、やっぱり恭さんには劣るよ」

やれやれ、といった感じに純一は首を横に振った。

「てかアレが上手く成功してなかったら、どうするつもりだった？」

「そこは成り行きに任せるつもりだったよ」

「お前も案外、気を抜いてやってたんじゃねえか」

「あはは、バレちゃったか」

何故か嬉しそうに苦笑いを浮かべる。そんな顔を見ていると、自然とこっちも笑わざるを得なくなる。

「あ、あの〜」

ここで一人取り残されていた悠斗は、少し機微^{きび}を窺^{うかが}わせる様な声でこう呟いた。

「本当に、君達って普通じゃないよね……」

第拾捌話（後書き）

誤字脱字などないようにしてますが、あつたらごめんなさいですつ。

感想、批評などありましたら気兼ねなくお書き下さい！
それでは次話でまた！

第拾玖話

「……右方、桜庭恭介。——前へ」

その後適当にいくつか試合があり、悠斗が危なっかしくも勝利を収めた後——とうとう俺の名前が呼ばれた。

「あのー、先生。質問がありまーす」

「何かしら？ 桜庭君」

「これって、沙希を使ってもいいんですかー？」

「沙希……っていうと、その使い魔よね？ 別にいいわよ。目的は悪鬼を屠る事を想定した模擬戦闘であって、闘い方じゃないから」

「マジですか？ よっしゃー！ 後でどうなっても知りませんよ！」

ガッツポーズを取りながら、俺は純一の足元に置いていた沙希を手招きする。

無表情ながら、何となく嬉しそうにこちらに走り寄って来た。

「それでは……」

と言って、先生は開始の合図をフィールド内に響かせた。

「来い！ 『夜叉』」

俺の相手である一人の男子生がそう言った瞬間——

酷く無骨なフォルムの、全身を黒の甲冑で纏った人型式神が現れた。

（へえ、式神使いか。しかも相当弄ってやがるな？ 呪とかいろいろ混じってやがる）

悪鬼被いの見習いの時点で、ここまでの芸当が出来ているとすれば——あと数年もせずしてプロになれるだろう。

そう思いながら、俺は沙希に「よし、軽く叩きのめせ」と簡単に指示する。

そんな事をしてる内に、夜叉とか呼ばれる式神は俺の近くまで走り寄ってきていた。

右手にはこれまた無骨な大剣が握られており、こんなので殴られたりでもしたら、俺は一瞬で吹き飛んでしまっただろう。

「……」

しかしそんな事は沙希に関係が無かった。一瞬で妖狐モード（大）にシフトチェンジすると、横槍に式神を六本の尾で討ち弾く。

だがものすごい威力だったのだろうか。腕を大層へこまされ、反対側の注連縄近くまで吹き飛ばされる。

「……っ！ ふざけんなよ、どんだけだよ！」

強度には余程手を施したのだろう。酷く崩れた式神の腕を見て、叫び出す男子生。

数秒驚いたように立ち尽くしていたが、すぐに御札を腰に掛けてあったケースより取り出す。

「奴を封じる！——急急如律令！」

そう叫んだ瞬間、沙希の動きがピタツと止まりだした。

今使った御札は、多分拘束用に力を含ませた物なのだろう。それを『急急如律令』——現代風に言ってしまえば、『俺の望みをすぐに叶える』という契り文句で発動させたのだ。

だが——

「……っ！」

沙希が少し妖力の濃度を強めただけで、拘束できなくなっていた。粉上になって御札は虚空へと儚く消えていく。

ああいう御札の悪い所は、籠めた力以上の力を相手が放出すると、何も出来なくなってしまうところだ。つまり力の差を逆転する、という概念がそもそも無いのである。

茫然としている男子生を眼の前にして、沙希は翡翠の眼を爛々（らんらん）と眩かせ――

獄炎の柱を、轟々と呪術場の中心に形成した。

「ギイイイイイ！！！」

式神の叫び声が、最初の方は周囲へ鳴り渡っていた。しかし数秒もすると、その声も出せ無くなるくらいに原型を留めず、酷く焼け爛れていた。不規則に腕が蠢いている。

まさに全てを喰らい尽くすその炎は、その中心に立っていた夜叉が消え終わった後も、まるでこの世の全てを消し去ろうとする勢いで燃え続ける。

「や、止め！」

若槻先生の驚いたような声が響いた瞬間、沙希は炎の形成を止めて再び小さい姿へとシフトチェンジした。

――いやあ、楽に終わって良かったよホント。

それにしても終始圧倒的だった。これは少し褒美でも与えた方が良いのかもしれない。

そんな風に思った俺は、とことこ、といった表現が相応しい移動を俺の元で終えた沙希に――

「よし、良くやったぞ沙希。今日はオムレツでも作ってや……ぶべら！？」

と、ここまで喋ったところで、俺はクラス連中に張り倒されて沙希を持って行かれた。

うう、なんて奴らだ……。

「ねえねえ、一晩でいいから沙希ちゃん貸してくれない？」

「そうだぞ桜庭！　こういう子はおおよそ、お前みたいな強面より俺みたいなプリチーな顔を好むに決まってるんだ！」

「お前！　今日会ったばかりだろうが！　強面とかそういう悪口はもつと親しくなってるから言うもんだろ！」

……ていうか何で沙希を取ろうとすんだ！」

「そりやこんなに強くて可愛くちや、仕様がなないじゃない！」

「こんなすべすべな毛触り、どう考えても抱き枕にちょうどいいじゃないか！」

「いいえ、もはや私は神として扱うわ！」

「止めるやお前らあ！　どういう神経してんだ！？　いいから沙希をこっちに……！」

「何よ桜庭君！　何もしてなかったじゃない貴方！　そんな事言える権利があると思ってるの！？」

「そうだそうだ！　誰が主人^{マスター}になっても一緒だ！」

「っちょ、待てや！」

——言ってしまえば、その後は混沌^{カオス}とした会場に様変わりした。

沙希を寄越せだの貸せだのクラスのペットにしようだの、色々と俺に対して提案と言う名の文句を言ってきたクラスの連中。

ていうか。「お前らもう初対面じゃねえだろ？」って言いたくな

るぐらいコイツ等はマジ遠慮と言う概念がない。

「それじゃ、沙希に誰が良いか決めてもらえばいいじゃないか……」
俺がどうでも良くなつて、ふと呟いた言葉に『それだ！！』と
息びつたりに声を荒げたクラスメイト達は、沙希を呪練場の中心に
置き――

「って、ヲイ！ 何で俺はハブられてんだよ！」

どうして自分だけ、フィールド外に立たされているのだろうか？
「さくらばくんは今まで、沙希ちゃんの主人だったんでしょー？
だったら、別に遠くに離れててもいいんじゃないかしら。……
ちゃんと関係が成り立ってるならそっち行ってくて。」

そのように天海がそう正論染みたことを呟く。他の奴も触発され
て、『そーだそーだ』の連呼。

「……ああ！ もう！ 勝手にしやがれ！」

そう言つて俺は先生を探す。

残念だが、あの頼り甲斐のない若槻先生を今は頼るしかないだろ
う。

一応ながら先生だ。ここでビシッと叱ってくれるはず。

そのように思つて俺は若槻先生の姿を探すと、結構あつさり見つ
かった。

「先生の元においで！ 沙希ちゃん！」

――完全にあつちに取り込まれていた。

「はあ……」

思わず零れてしまった溜め息。本当に残念だ。もうどうにでもな
つちまえ。

「恭さん、大丈夫だよ。沙希ちゃんならこっちに来るって」

「そうだよ桜庭君。使い魔が主従関係を放棄するなんて、まず無いんだから」

そう俺を励ます様に言つて来たのは、あの争いに唯一参加してないであろう純一と悠斗。

「……悪いな悠斗。実を言うと、主従関係成り立ってねえ」

「っは！？ ちょっと桜庭君、僕意味が分からないんだけど？」

「主従関係結んだ瞬間、主従を取り外したんだ」

「…そんなこと出来るの？」

「とっておきの呪文だ。『俺の命令を一切訊くな』っていうな。だから、今まで俺は沙希にずっと『指示』したり『懇願』してきただけに過ぎないんだよ」

「あらら」

どうしようもねえよコイツ、みたいな顔をして悠斗は沈黙を決め込んだ。

そうこうしてる内に――

『さあ……！ 沙希ちゃんおいで……！』

あつちはかなりデッドヒートしているようだった。全員の目が血走っているように見え、もはやあの呪練場内にまともな奴なんて存在しない。

「……」

無言で周りを見渡し、とことこ、と入口の近くにいた奴の方へ向かう沙希。

「きたああああああ……！ これ絶対俺だろおおおおお……！」

めちゃくちゃ喜んで叫びながら、一人の男子クラスメイト（残念

ながら、まだ名前覚えてない）が近づいてきた沙希を抱こうとした、刹那――

器用に六本の尾っぽで手を叩かれ、スルーされてしまった。

愕然として膝から崩れ落ちた男子生を無視し、沙希はそのまま憮然として歩き続ける。

「……」

そして俺の足元で、完全に動きを停止させた。そのまま膝元に擦り寄ってくる。

……ああ、俺もう泣きそうだ。今ほど沙希が可愛いと思ったことは無いよ。

「ほらな恭さん。言った通りじゃないか」

「そうだな純――」

沙希を抱きあげ、頭を撫でてやる。

ああ、めっちゃ気持ち良い。もうコイツは誰にも渡さん！

「ぼ、僕もこうなるんじゃないかなあって、思ってたんだよ！」

そんな俺の姿を見ながら、同様を隠せない様に悠斗は呟いてくる。

「途中からマジで痛い子見るような目線で、俺を見てたけどな」

「うう、だって――」

『ぶつつぶつつぶつつぶつつぶつ――！！！！』

追い込まれた奴が必ずするであろう、毎度恒例の言い訳を悠斗が発動しようとしたところで、クラスメイト（プラス先生）が盛大なブーイングを挙げる。

「横暴だ！俺は断固として、こんな事実認めんぞ！」

「どうせ命令してんでしょー！早く主従解きなさいよー！」

「……お前ら、人としてどうかと思うぞ」

ホントに残念なクラスだ。

「桜庭君！ 貴方、やっぱり命令して……！ 先生は許しませんよ！」

——何しろ、先生がそっち陣営なんだからな。

「違いますよ。沙希の意思です」

「ucci、口ではどうとでも言えるよ！ なあ、桜庭！」

「お前らの中で、俺はどれだけ悪人サイドなんだよ！」

と、いい加減飽きた突っ込みを入れた所で——

「お前ら、いい加減にしろよ？」

——純一の冷徹な声が、幾分身を凍えさすように響いた。

「命令してる所なんて何時^{いつ}あった？」

それより、人の使い魔を奪い取ろうとしているお前らの感性が可笑しいね。

悪鬼が好き好んで人間なんかと、簡単に主従関係を取るとでも思ってるのか？

そんな風に思ってるなら、今すぐにでも脳内を切り替えるやクズ共」

「を、ヲイ純一」

「少し黙っててよ恭さん。——何か言い返せる奴はいるか？」

……おい、いるんだろう！ そこまで大声でこっちに寄越せとか言うんだろ？

さぞかし悪鬼の扱いや式神の扱いが上手いんだろうよ！

何か言ってみろや。こちとら、まだ式神とか扱ったことのない素人の妄言だぞ！」

『……』

誰も言い返せなくなっていた。

まさか本人いざ知らず、純一が怒り出すとは思わなかったのだらう。

流石にやりすぎたかなあと、クラスの奴らが際どい顔色を浮かべる。

（馬鹿だなあお前ら。ほどほどにしねえからだぞ？　ったく）

そんな風に思っていた俺は、いつまでもこんな空気は面倒で嫌なので、さっさと終わらそうと純一に言葉を紡ぐことにした。

「純一、いいから聴け」

「……何だよ恭さん。こいつら、恭さんの事を——」

「いいから聴けってんだ。あのなあ、別にあいつら悪気があった訳じゃないぞ。」

転校初日で緊張している俺たちを和ませうとしてやってたんだ。

少し考えれば分かるだろ？

誰も全員使い魔が欲しい訳じゃないし、本当なら先生があっち陣営に入ることはない。

それはつまり、予め俺たちがいないところでそういう作戦会議をしてたってことだ」

「……」

「多分、俺たちが遅れてる間に話し合ったんだろうよ。だから悠斗は参加していない。……俺のことを思っ言っのは構わないけど、多少は相手の行動の意味も考えてみる」

純一は、真摯^{しんじ}に俺の言葉を受けとめる。

しばらくの間、考えるように下を俯^{むっつ}き——

すぐさま後ろに振りかえる。クラスメイトと先生の、少し強張った表情を確認。

「ごめん」

そして深々と頭を下げた。

「本当にごめん。そう言えばそうだな。俺って何一人で熱くなつてんだろ……」

「あ、いや！ 要君が悪い訳じゃないよ！」

「そ、そうだ！ 俺だって途中で少し本気になってたりしたし！」

「かなめくーん！ 良いから顔をあげてよー！」

何故か今度は宥められる純一。どよめくクラスメイト。

「ごめんなマジで。ごめん……」

「ああ！ 泣かないの要君！ 先生たちがやり過ぎたのが悪いんであつて……」

「誰も転校生を苛めようだなんて思っていないんだから！ もう、いから泣きやめよー！」

……その後、十分ほどこういう状態が続いたとき。

翌日、純一が驚くほどクラスに馴染めていた。

くそう……。なんだかんだでいい所持つて行くだもんなあ、コイツ。羨ましい限りだ。

第拾玖話（後書き）

誤字脱字などあったら、ご報告下さい。

それでは次話でまた！

第廿話

一月九日。夕方のこと。

やつのことで一週間が終わり、その帰り際。

「じゃーねー要君、桜庭君！」

「また来週ー！ アデュー！」

「おう、またなーお二人さん」

「それじゃあね。また来週」

クラスに残っていた女子二人に対して、俺、純一の順に軽く返事を交わし合い、廊下へと出る。

「なあー恭さん。今日ぐらい、寮の学食行かないか？」

と、ここで純一が俺に一つの提案を差し出してくる。

「……ん、そうだなあ」

自炊の方が安いからということ、いつも純一を部屋に呼んで三人で食事をしている。

——ま、たまに梓さんとの鍛錬もあって、純一の来ない時も多々あるのだが。

しかし今日はその鍛錬の無い日らしく、そして昼間にクラスの奴らから寮の飯について、深く語られたようだ。めっちゃくちや行きたそうである。

「……たまにはいいかも、な。沙希もそれでいいか？」

俺がそう言うといつもの如く、こくりと首を縦に振る妖狐さん。

「よし、なら今日はそこに行くか。何時に待ち合わせする？」

「六時半で良くないか？ ちょうど腹減るだろっし」

「了解した」
そうして黄昏時は過ぎていく。

「よ、待たせたな」
「珍しいな恭さん。まさか少し遅れてくるなんて」
現在午後六時三〇分。指定時間より少し遅れている。
「いや、沙希がな。妖狐モードで学食行くのは嫌って、駄々捏ねるからさ……」

現に沙希は人間モード。腕は組んで無いにしろ、袖をぴつちりと持っていて離れない。非常にめんどい。

「ふーん、なら仕様がないかな。それじゃさつさと食券買おうよ」
「了解。沙希は何にする？」
「きょーすけとおなじもの」
「ったく、いつもそれだな沙希。他の物食べようとか思わないのか？」

「きょーすけのといっしょ」
「……はいはい、そうですねっと」
そう言っただけは、お手頃な値段のカレーを選ぶ。

——まあなんだかんだ言っただけで、カレーというのは職人の腕によって何通りにも味が変わる。良い方面にも悪い方面にも、だ。
要するに、ここの学食の腕を試してやろうってことである。美味しければ周期的に来ることになるだろうが、そうでなければ今後と

も自炊だ。

「お、恭さんは無難にカレーか。んじゃ俺はラーメン定食だな」

「んじゃ、の意味が分からねえぞ。繋がりが無いじゃないか」

「気にするなよ恭さん。気にしたら絶命するぞ？」

「まさかの命懸け！？」

普段通り（？）の会話をして、食券を出しに行く。

「はい、いらつしゃい。……あら、見かけない子たちだね」

「こんばんはお姉さん。俺たち、今日初めて学食を使うんですよ」

窓口にいた少し姉御肌みたいな女の人に、いつも通りイケメンな対応をする純一。

「お姉さんだなんて、ったく口の上手いこと。ほら、早く食券だしな」

まんざらでもないように、食堂のお姉さんは純一と俺の食券を取る。

するとお姉さんは俺と沙希を見比べて、こんな事を言いだす。

「おや、可愛い子だねえ。ひよつとして彼女かい？」

「俺の使い魔です。気にしないで下さい」

「へえ、そんなに可愛いのが使い魔ねえ。ひよつとして……」

「考えていることは分かりますが、列記とした“戦闘用”の使い魔です。“愛玩用”とは違いますからね？」

「分かかってるよ。そう邪険にしなさんな」

そうは言いつつも、にやにやしている食堂のお姉さん。絶対誤解してるだろ。

「っと、出来たみたいね」

後ろの調理班の人から料理の入った容器を貰う。慣れた手つきで

箸やコップ、そして調味料などをさつとお盆に入れ、純一に突きだすお姉さん。

ていうか出来るの早いな。

「はい、ラーメン定食。カレーはもう少し待ってね」

「純一、先に席探しててくれるか？」

「おう、任されたぞ」

美味しそうな料理の香りに感化されてか、少しはしゃぎながら席を探しに行く。

「ねえねえ。あの子、なかなかカッコいいじゃないか」

肘で俺を小突きながら、茶化す様に言ってくるお姉さん。後ろに誰も並んでいないので、暇なのだろう。

ていうか、何であんな子供っぽい姿を見てそう思えるのだろうか。俺にはさっぱり理解不能だ。

とは言いつつも、やっぱりイケメンではある。素直にその意見に賛同しておくことにした。

「確かにそうですね。同性の俺でさえそう思いますよ。アイツはこっちに来る前でもかなりモテてたし」

……とは言っても、純一が女と付き合ったという事実は、一切耳に入っていないのが。

「まああのルックスじゃそうなるよね。正直、惚れちまいそうだよ」

「そうなれば、純一の奪い合い争奪戦の真っ只中に入ることになりますよ」

ライバルの人数は、ざつと三桁を超えるだろうな。

「おっと、それは少々ご勘弁だね」

そう言っ、て、にかつと笑うお姉さん。

——なんだよ、笑えば結構いい顔するじゃないか。

「あ、出来たみたいさ」

そう言って運ばれてきたカレーを、先ほど同様に慣れた手捌きでお盆にセットして――

「はいお待ち。……今日はたまたまカレー残ってたけど、一応うちの人気メニューだからね。食べたかつたらもつと早い時間に来な」
「今度はそうしますよ」

片手でお盆を持ち、ヒラヒラと余った手を振って純一が歩いて行った方へ向かった。

「うーん、どこ行った？アイツ」

食券を買って料理を貰うピークは過ぎていたものの、食べるピークは今は最高潮。

席はなかなか空いていないため、結構遠くまで席を探しにいったのだらう。近くには確認出来ない。

「なあ沙希。純一どこか分かるか？」

「あっち」

そう言って沙希は入口近くの方にある席を差す。
目を凝らすと、確かに純一はいた。

その席は誰かが座っているっぽいけど、その隣が空いているらしく、頼み込んで譲ってもらおうとしているのが分かる。
分かるのだが、しかし……。

「ん？なんか揉めてるのか？」

明らかに殺伐とした空気が流れている。一人の女子が激昂して純一に何かを言い触らしているように見え、他の女子二人がその女子を抑えようと必死だ。

「…フイライ。珍しいな、アイツがそんな風になるなんて」

人との仲を取り持つのは結構得意である純一に於いて、こんな光景は非常に珍しかった。

どうやってその女子を抑えようかと思案しながら、純一の元へ近づいて行く。

「……離して湊さんみなとっ！絶対コイツ、私たちをナンパしよう」と――

「いや、だからここしか席が空いてなくて、それで譲ってもらおうとした訳であつて！……うゝん、どうすりゃいいんだろ？」

「純一、何があつた？」

「おう恭さん。何かさあ、俺ナンパしようとしてるみたいらしいぞ」

「してるみたいって……実際そうでしょうがっ！　ちよつともしかしてそのアンタまで……！」

「もういいじゃない加奈子。そこら辺にして於いて」

そう言つて一人の女子が、加奈子とか言う穏やかじゃない女子を制した。

「~~~~っもう！　私は皆のことを心配して……」

「はいはい、いいから落ち着いて」

うん、なかなか宥めるの上手いな。そしてなかなか可愛い。

肩まで伸ばした少し茶色がかっている髪は、大人びている端正に整った顔立ちと上手く合わさっている。

そして筋が通った鼻は、その彼女の美貌に拍車を架けているように見えた。

——ていうか、あれ？ なぁんかどっかで見たことあるような…？

「申し訳ありません。あの子、別に悪い子じゃないんです」

「いや良いよ。誤解が解ければ、俺は別にいいんだからな」

そう言つて輝く笑顔を見せつける純一。俺が女子だったら絶対に惚れてる。

「そっちの君も、申し訳あり——」

続いて謝罪の念を俺に表そうとした女子が、何故か俺の顔を見て固まる。

ん？ 何かついてたか？ 顔に。

——ていうか、やっぱり見覚えがある。こんな可愛い知り合い、俺にいたっけ？

「も、もしかして！ “恭介君”？」

懐かしい俺の呼び名が聞こえ、そこで俺はハッキリと認識した。
「……よ、椎奈。元気してたか？」

「……っへ？ 恭さん、どういうこと？」

最初に喚き出したのは純一わめだった。それに続いて——

「そ、そうですよ椎奈さん！ 誰ですかコイツっ！」

あの加奈子とかいう、少々頭に力チンとくる奴が声を挙げる。

「……もしかして、お前が前に言っていた幼馴染とやらでは無いのか？」

凜とした声でそう呟いたのは、今さっき羽交い絞めしていた湊、という人。

「えっと、人違い……かな？だって彼はまだ——」

「残念ながら、庭に無駄にでかい庭園があつて年子で下に妹が居て、今年で齡^{よわい}四十六歳の父親を持つ倉橋椎奈さんの真向かいの家に住んでいた桜庭恭介です」

「——っ!？」

今度こそ驚いたように椎奈は眼を開く。

「本当に、本当に恭介君なのですか？」

「あのなあ。何回そう言ったら信じてもらえるんだ？ 相変わらず

の“疑わしいな”ちゃんは健在してんな」

「ほ、本当に……」

そう言つてポロポロと涙を零しだし——つて！

「何で泣くんだよ……。他の人こつち見てくるだろうが」

既にガン見されてるけどな。残念すぎる。

「だって、だって。だってえ」

「つて！ アンタなに椎奈さんを泣かせてんのよっ！」

そう言つて俺と椎奈の距離を離す加奈子とか言つめんどくせえ奴。

「ねーねー。何かあったのか気になっちゃつてたりするんだけど？」

そして大層間の抜けた声が、俺の後ろから響いてくる。

——はたまた、これにも聴き覚えがあつた。振り向いて応答することにする。

「つよ、皐月。元気してたか？」
軽く手をひらひらさせて、幼馴染第二号——妹の皐月に声を掛ける。

昔と変わらないサイドダブルツインに結んでいる茶色の髪は、その彼女の可愛らしさを際限無く表現している。

姉同様に美しく整った顔は、その姉のと比べて少し幼さを掛け合わせているように思えた。

「……あつれ〜！？ 皐月ちゃん、何かきょーすけ兄さんらしき人影の幻覚が見えちゃってたりするよ〜！？」

声を上擦らせ、しかし嬉しそうにボケる皐月。

「實際いるからな。見えちゃって当然だ“のんびりさっちゃん”よ」

「ふえ〜！ 私をそんなに的確なニックネームで表すだなんて、こりやもしかしてきょーすけ兄さんだったりするんじゃない？」

「今さつきからそう言ってますがな。話を聴け」

「そう言われて聴かないのが、私だったり〜。ってへ」

「何でも可愛くしてたら、どうにでもなるとでも思ってるのか？」

「言っとくけど俺は京平兄じゃねえんだぞ？」

「そう思えばそうだったり。あのおバカさんには通用するんだったりしたね〜」

「……いくら何でも言いすぎじゃ？」

ま、そこが皐月のいい所（？）なんだけどな。

「って！ 皐月までこの男と知り合いなの！？」

椎奈を宥めることに成功した加奈子とかいう輩やからは、驚いたように皐月に問い直す。

「うん、そうだよ。あ、唐揚げちょうだ〜いって、言っちゃってみたり」

「はいど〜ぞ……って、ちょっと話を逸らさないで！」

「コイツと話を通じさせるには、熟練が要るのだよ熟練が」

慣れるのに数年は掛かるけどな！……無論、今も慣れてない。

「さっすがはきょーすけ兄さん。私の婚約者だったりするだけあるね」

「残念ながら、そのネタはつい先日使われたばかりだ」

「むう、多分その人、私と同じくらい猛者まうだったりする気が」
確かにそうだけだな。かなりの猛者すぎて困るよ。主に俺が。

「えーっと、恭さん？ そろそろ色々教えて頂いても宜しくて？」
随分丁寧な言葉で、純一は俺にこの状況を訊いてきた。

「明白且つ簡潔に言ってしまうと。そこにいる由緒正しき倉橋一族の方々とは、昔から深い付き合いをさせてもらってます……ってことだ」

『え~~~~~!!!!!!』

何故か集まっていたギャラリーも含めて、純一が盛大に驚いていた。

第廿話（後書き）

誤字脱字などないようにしてますが、あつたらごめんなさい。

批評、感想などありましたら気兼ねなくどうぞ。
それでは次話でまた！

4月16日において変更点 奏↓湊
そつえば奏は「みなと」とは読まなかった……

第廿巻話

ギャラリーを引かせて数分後。

——加奈子とか言う奴は正直気に食わなかったが、あの女子四人組と一緒に食べるようになった。

「なるほど、な。うまっ……それで、仲が良い、っと。ていうかチヤーシューうまっ!」

「分かったから食べながら喋るな純一よ。沙希を見習え。黙々と食ってるだろ?」

「思ったんだけどさ、その可愛い子ってアンタの彼女なの?」

「「つぶ!!!」」

加奈子の質問に、何故か椎奈と皐月が吹き出す。

……そりゃ食事中にそんなこと言われれば、少なからず誰かはそうなるだろう。

「きよ、恭介君……」

「きよーすけ兄さん……?」

「何でお前らがめっちゃ睨んできてるのか分からないけど、沙希は違うぞ」

「沙希って、馴れ馴れしく呼んでます!」

「そうだそうだ! 怪しいぞって思ったり!」

「どんだけ疑り深いんだ……。どれもこれも全部、お前らに要因があるんだからな」

「つぶえ?」

「うつそ」

「うつそ〜じゃねえよ。お前らが俺に悪鬼を使い魔にする方法を教えなければ、沙希を使い魔にすることなんて無かったんだぞ?」

カレーを頬張って飲み込んだ後、驚き顔の姉妹にそう伝えてやる。

——ていうか美味しいなこのカレー。こりやちよっくら調査するためにちよくちよく通うかな。

「そ、そうですか。私たちが教えた方法で……」

「それはそれで、何か嬉しくなっちゃったり」

「ここで何故か二人とも頬を染めて、嬉々とした表情を浮かべる。

……正直、意味が分からないんだが。

とりあえず喜んではいそうなので、放っておくことにした。

「それでその沙希とかいう使い魔は、元は悪鬼という認識で良いか？」

そう言って来たのは、純一の向かい側に座っている湊さん。

何でもどこかの剣術道場の娘らしい。なかなか立ち振る舞いが様になっている。

「ああそうだよ」

「しかしそれで大丈夫なのか？ 何やら以前、悪鬼を使い魔にした悪鬼扱いが乗っ取られたという事を、耳にしたことがあったのだが……」

「あゝ。それ皐月ちゃんも気になっちゃたり。大丈夫なのかなきよーすけ兄さん？」

「わ、私も！ 教えた張本人としてそれは訊いて於きたいですね……」

「あ、俺も気になるな。何しろ沙希ちゃんの実力は悪鬼の中でも高位っぽいし」

「私は別にどうでもいいけど……。どうしても、っていうなら聴いてやってもいいわよ？」

「なら聴くな。あっち向いて耳塞いでろ」

「……ねえ、なんかアンタ私にだけちよっとキツくない？」

「さて何のことやら」

カレーを再び口元に運んで、上手く誤魔化す。

「さて、みんなの訊きたいことはよく分かった。まあ正直に言うところ……俺はいつでも沙希に“乗っ取られる”」

『……え』

うん、分かるよその反応。俺だってそうなるよ。

でもしゃーないじゃん。事実なんだし。

「な、沙希？」

「うん、そうだよ」

一生懸命食べていたので、いつの間にか完食していた沙希。
——って。

「カレーが付いてるぞ、口に」

そう言ってポケットからハンカチを取り出し、口元に付いているカレーを拭いてやる。

「あれ、付き合ってるんじゃないですか？ 椎奈さん」

「そうではないと、思いたいんですが……」

「明らかにそれっぽい仕草ではあるな」

「むう、羨ましかったりい」

「恭さんの部屋で料理食べてても、あんな感じだよいつも」

——なんだか俺の想像とは思ってもつかない考えが、女子の（プラス純）間で述べられているようだ。

何を言ってるんだか。どう見ても世話をする人間とペットだろ。

どこをどう見たら彼女彼氏の関係に見えるんだよ。

ていうかこんなんが羨ましいのか臯月。ならいつでもやってやるぞ？

「ま、そういうことで沙希と俺には深い関係が成り立っているわけだ」

「それは分かったとして、どうしてそれが乗っ取られない理由になるのだ？」

「ん？ それは心と心で深い絆が出来てるからさっ！」

「つぐ！ と俺は湊さんの言葉に対して、親指を立てて既然と答える。」

……「フーイ。何で皆さん黙っちゃってるの？」

「ねえ、この人のキャラってどんなの？ 教えなさいよ皐月」

「顔に似合わずかなりユーモアだったりするよ。強面だからそうは見られないけど」

「誰が強面だつて？ あ？」

「ほつぺたをぐにぐにと引つ張る。必殺ほつぺぐにぐにの刑だ。何も変わってない様に思うのは気のせいである。」

「しかしなかなか……。相も変わらず肌がすべすべで、柔らかいもんだな。」

「ひゃ、ひゃにをひゆる」

「そうは言いつつも全然抵抗してこない皐月。若干嬉しそう。」

「……皐月ちゃん、羨ましいです」

「え？ 何か言ったか椎奈？」

「い、いえいえ！ 何も言っていないですよ、ええ！」

「俺がほつぺから手を離し、椎奈が何かを言っていたようなので問うてみる。」

「しかし別に何も無かったようだ。聞き間違えか？ この地獄耳がミスるとは、結構珍しい。」

「ちなみに純一は湊さんと結構仲良く話している。なかなか真面目」

者コンビ（少なくとも、湊さんはそう見える）同士なので、馬が合うのかもしれない。

と、そうこうしている内に俺も食べ終わった。

さて、そろそろ七時だし――

「んじゃ、俺は先にながらせてもらっわ」

「ん？　どうかしましたか恭介君？」

「いや、そろそろ時間がな」

「時間って……ああ。成る程。そういうことですか」

納得したように椎奈は首を縦に振る。ふむ、昔から物分かりがよくて俺は嬉しい。

「さて、皆さんそれではさいなら」

そう言っただけで手を振って食器を食器返却場へと持っていく。その後ろを、沙希とことこ追いかけてくる。

さて、いつも通りにやりますかと。

「椎奈さん。あの……桜庭、だっけ？　今から何するんですか？」

彼が立つてすぐに、私に問いかけてきた加奈子ちゃん。

「恭介君ね。結構時間にはうるさくて、決まった時間に鍛錬しないと気が収まらないんですよ」

「ふむ、時間を守るのはいいことだ」

「それにしただけ、あの顔でそう言われてもね」

怪訝けげんそうな顔をする。まあ確かに恭介君、顔はちよつと怖いかもしれないけど……。

「何だよお前。恭さんの何が分かるってんだ」

少しイラつきを含ませた声色で、純一君が加奈子ちゃんに突っかかる。

「いや別に、ただの感想っていうか……」

「なら言つていいことと悪いことぐらい分別しろよ。外見で人を判断するなんて良くないぞ」

「わ、分かつてるわよそれぐらい!」

「ならいいんだけどな」

出合いが出会いだつたし、純一君は加奈子ちゃんに少し敵対心を持つているようだ。

仕様がなと言えば仕様がな。何しろ先に色々言いだしたのは加奈子ちゃんの方だ。自分でどうにかするしかない、私は思う。

「それはそうと、お前は純一と言っていたが、もしかして東雲梓さんの弟子と言つのは……?」

「俺の事だよ、湊さん」

「ほえ。それはすごいなあつて臯月ちゃんは思つたり」

驚いたように臯月ちゃんが声を荒げる。

確かにすごいと私も思う。あれ程の人を師匠として持つということとは、弟子の方にも少なからず力や才能があるというに大抵は繋がる。

「ま、恭さんには劣るけどな」

付け加えて、ふと自嘲気味に笑つてそのように呟く純一君。

「あんたさ、どうしてそこまであの桜庭つて奴に拘るの?」

「拘っているわけじゃないけど……。だって恭さん、使い魔だって使いこなせているし、この前に俺が住んでた街で悪禍があつたんだけど、そこで『大百足』を屠ったりしてたし」

「『大百足』を？いくら何でも学生じゃそんな事出来る訳ないじゃない」

そう言つてふつと鼻で笑つた加奈子ちゃん。その様子に、またまた少し怒りを覚えているような純一君。

確かに学生ぐらいじゃ、歴史にも残っているような『大百足』を屠ることなんて無理だ。

——それが本当に“只の学生”であるならば、の話だが。

彼は若干十二歳という齡よわいで国家に悪鬼祓いとして認められている。その実力は、並みの悪鬼祓いと比べようがない程に上手うわてであるのだ。

しかし、恭介君は意図的にその情報は隠しているようだったので、そこは言わないでおこう。純一君も口止めをされているのか。言いたそうにはしているが——

「ま、信じないならそれでも良いけどな」

諦めたように話題を終わらせた。……カッコいいのに人間としてもよく出来ていて、多分他の女子から人気の的になりそうだ。

「皐月から見ても、あの桜庭っていう人の実力は？」

「強いよ」。私が子供の頃に模擬戦闘して勝った回数、指で数えられるぐらいだった」

「あははっ！冗談きついわよ」皐月！

そう言つて肘で小突く。確かに皐月は学園内で見れば指折りの実力者。それに勝てるのはプロの悪鬼祓いぐらいだと周りに言われて

いるが……。

くだい様なのでこれ以上は何も考えまい。どうせ気にしても何も変わらないのだから。

——しかしどういう事情かは知らないけど、彼は帰ってきた。それだけが只々嬉しい。

それは皐月も同じだろう。彼女は結構、恭介君にべったりと依存していたようだし。

恭介君が戻ってきた理由としては、多分この冬に赴任してきた東雲梓さんが手を握っているのだろう。しかし何が理由かは良く分からない。

だがとりあえずは、心の中で感謝しておく事にする。

（また、あの頃のように……。いや、それよりもっと……）

頭に色々と含んだ想像が膨らみ、思わず顔が赤くなる。

「どうかしたか椎奈。顔が赤くなっているではないか」

「……ふえ？　っあ！　いや、何でもないですよ湊さん！」

「そうか。とりあえず、くれぐれも無茶はするなよ。体を壊しては何も為せなるからな」

「大丈夫だよ湊さん。多分、椎奈ちゃんずっとときよーすけ兄さんのこと——」

「さ、皐月ちゃん！」

「きやく怒った〜！」

気が抜けるような声で皐月は私の手から逃れる。

「ふう……」

彼のことになるといつも周りが見えなくなっていくか、自分自身が変わるというか……。

一旦落ち着こう。深呼吸、深呼吸。

……よし。これでいつも通りの私だ。

（来週にでも、恭介君の教室が何処か訊いて、遊びに行こうかな？）
新たな決意が、私の中に自然と生まれた。

そのまま今日の食事会はお開きという事になった。

私も負けないよう、鍛錬しないと。そんな決意がいつも以上に心に宿った日になった。

第廿巻話（後書き）

誤字脱字などないようにしてますが、あつたらごめんなさいです！

ご感想、批評などありましたら気兼ねなくお書き下さい。
それでは次話でまた！

第廿弐話

「純一君に……き、恭介君。良かったら一緒にお弁当でもどうですか？」

「わざわざ出向いてきているんだ。断る、という選択は無しであるう？」

一月二二日。午後一二時四〇分。

四時間目まで終わって、やっとのことで弁当にありつけると思った俺は、純一と沙希を連れて屋上に行こうとした——ところで椎奈と湊さんと遭遇。実際にはこっちに来てくれた、の方が。

「ああ、分かつ——ってうおっ……！」

……一瞬で教室の奴に羽交い絞めされた。そしてそのまま囲まれていく。

相変わらず下らんことに対しては、妙に連帯感を発揮するクラスメイトだ。

ちくしょ、くたばっちまえ！

「ごめんなさい倉橋さんに津守さん！　ちよーっと待っててくれるかな！」

「さあて、桜庭。きりきり話せよ？　きりきり話せよ？」

「つちよ！　やめっ！　助けっ！」

「あはははは、面白いなあ。それじゃ湊さんたちと先に行ってるね
恭さん」

な、何だと貴様……！！

「純一！　見捨てるのか！　俺を見捨てて逃げるのか！」

「何言ってるんだ恭さん。俺じゃ太刀打ち出来そうもないから立ち去るだけだよ」

「それを逃げるって言うんだよお！！！！」

それ以外に逃げるなんて言葉は無いんだぜ！？

「それじゃお先に屋上へ行つてましようよ、椎奈さんに湊さん」

「ふむ、それもそうだな」

「あはは……。恭介君ファイト」

片や苦笑い、片や眼で笑って教室から離れて（逃げて）行つた。
ああ待つてくれ、なんて考えも虚しく、クラスメイトの放つオ
ーラに蹴落とされていく。

「さあ桜庭君！ 君はどうして十二神将の倉橋さんや津守さんと知り合いなのかしら！」

「じゅ、十二神将？」

それって、確か阿倍清明の式神じゃなかったっけ？

「ああ、学園に数少ないプロである悪鬼抜いの学生だから、珍しさで十二神将って呼ばれ——って話をごまかすな桜庭！ どうして、お前があのお二方とお知り合いになっているんだ！」

「ライ、純一も知り合ってたぞ」

「要はしゃーねーじゃん。東雲先生の弟子なんだから。でもお前はただの平凡な生徒だ！絶対裏があるだろ！」

「差別反対！ 断固として俺は意義を唱える！」

どんな理由だよ！ 俺だって、一応梓さんの推薦で入ってきてるんだぜ！？

「それで、実際どうなのさくらばくん？」

そう結論づけてきたのは天海。相変わらずそういう参謀的ポジシ
ョンがよく似合う。

「……椎奈とは幼馴染だ。湊さんとも学食で知り合った」

ええええええええええええ！！！！

教室の木霊こたまは、多分他の教室にも伝わったんじゃないかと思う。
ていうかうるせえよ。鼓膜破れんだろうが。

「つくう！ 幼馴染だと！ ちくしよ、神はどうなってやがる！」

「嘘よ！ あの倉橋さんと桜庭君が……。どう見ても吊り合っていないじゃない！」

「うるせえ！今のそれ関係ないだろうが！」

そうこうしている内に、何とか無理やり拘束から逃れる。

まったく無駄なことしやがって。

そんな風に思っていると……何と言う事でしょう。

——沙希様が未だ、俺の机の上に座って待っているではありませんか。

感動を覚えつつ、これ以上絡まれない様に顔色にはそれを出さず、教室の奴らに呟く。

「詳しいことは後で教えてやる。だから今は飯だ。いいな？」

「男に一言はないぞ桜庭！」

「そうよ桜庭君！ 逃げないでよね！」

「荷物あんだから教室に戻るに決まってるだろうが……」

悪態を突きながら教室を出る。教室内ではまだざわめきが残っていた。

さて、屋上だよな確か。冬で少し寒いけど、一応結界を張って外気と遮断すれば、なかなかの好条件な所だ。

「よし、行くか沙希」

⌋
⋮
⌋

無言の肯定を促したまま、俺の背中に乗って来た沙希。

これまで以上に親しみを持ちながら、そのまま俺たちは屋上へと足を運んだ。

「待たせたな」

「お、恭さんなかなか早かったな」

「さくつと事実を述べて逃亡してきた。教室に帰ったらまた質問地獄かもしれないけどな……」

「ご、ごめんなさい恭介君」

「別に椎奈が悪い訳じゃねえよ。気にするな」

いつも通り人の少ない屋上。

既に椎奈の方が結界を張っててくれたようで、冷たい風とかの心配は無さそうだ。

背中から降りた沙希様に専用の弁当箱を、彼女の眼前へと広げてやる。

「何だ桜庭。なかなか美味そうな弁当を作ってきているじゃないか」
続けて自分の弁当箱を広げた俺に、少し驚きながら呟いてくる湊さん。

「だろ？ これでも五年間ぐらい一人暮らしたから、料理の腕は自信あんだぜ」

「ふむ……。ではこの唐揚げ、一つ貰っても良いだろうか？」

「おう、持ってけ持ってけ」

弁当の蓋の上に唐揚げを乗せ、それを真向かいの湊さんに差し出

す。

「では一つ」

……どうかな？　なんか「見た目だけだったな」とか言われそうで怖いんだけど。

そんな風に思っていると、湊さんは味わい深くしつかり噛み締め

「おお、やはり見た目通り、なかなかの出来栄じゃないか」

「そ、それは何よりでございます殿」

「……何故『殿』なんだ？」

「いえいえ、お構いなく」

いやさ、何かそういう——「すぐに作り直します！」とか言わなきゃならない感じじゃん。

貴女のその、高貴な立ち振る舞いとか喋り方とか気品とか。

「そういえばさ、椎奈はもう自炊出来るようになったのか？」

ふと思い出した要綱を彼女に尋ねると、何故かギクツと肩を弾ませる。

……はっは。こりゃやっぱり直ってないな？

「そうか。未だに自分で作れないから、皐月にべったりか」

ニヤニヤと厭らしい顔を浮かべながら、俺は椎奈にそう結論付けた。

「い、いやそうでは無くてですね！　私も作れるっちゃ作れるんですけど、やっぱり料理好きな皐月ちゃんに任せた方が、あの子も喜ぶんじゃないかなあって思いました！」

「はいはい、そういうことですな」

「……絶対納得してないです」

そう言って頬を少し膨らませる椎奈。その癖もあの頃から変わっ

てなくて、何故か少し心が晴れていく。

「そういえば純一、お前弁当どうしたの？」

「学食で買ったよ。前のラーメンがすげえ美味かったし、何しろお姉さんが少しまけてくれるんだ」

「……相変わらず、得してんなぁお前」

お前のスキルが正直欲しいよ。

「ところで。前の『沙希』とかいう使い魔は、もしかしてそのちっこいのだろうか？」

ここで湊さんが、俺の作った出汁巻き卵を頬張っている沙希を目線とらえる。

「そうそう。そういうこと」

「妖狐ですか。確かに狐の類の悪鬼は強力なのが多いですし、やっぱり乗っ取られる可能性も……」

「そこまで考察せんでもヨロシ」

ジト目で椎奈を睨む。

大丈夫だって、乗っ取られるなんてこと無いんだから。

「しかし用心しておいた方がいいぞ桜庭。万が一という事もあるからな」

「その万が一があつた時、俺は抵抗空しく乗っ取られるな確実に」
それほどに沙希は強力だ。無理な抵抗なんて甚だしい。

「まあ大丈夫だよ御二人さん。そこまで気にしなくても沙希ちゃん
は恭さんに乗つとらないから」

「ほぉ……。どうしてそこまで言い切れる？」

面白そうに湊さんが、そのように言つて来た純一に問いかける。

「いつでも乗っ取られる状況にあるって恭さん、言つてただろう？」

それはつまり、“使い魔にする前に恭さんはやられてる”ってことも想像出来るし、まず第一に乗っ取ろうとする恭さんと一緒に長くいて、親しくしようなんて沙希ちゃん思っかな？」

「ふむ……それは一理ある。しかし慣れて油断した後に、ということも考えられるような——」

「油断するっていうなら、いつでも恭さんは沙希ちゃんの前で油断していると俺は思うけどな。」

トイレや食事、風呂とかだって油断しないと出来ないわけだし、寝ているときなんて無防備にも程があるぐらい油断しているぞ」

「そ、それもそうだな……」

「つまり恭さんはいつでも乗っ取られる、だけどそれに対して沙希ちゃんは意思がない。だから気にしなくても大丈夫なんだと、俺は思うぞ」

一通り説明し終わった純一が、ふうっと息をつく。食事中に一気に喋って、少し疲れたのだろう。

「それもそうですね。純一君の話を聴いて、私もそう思うようになってきました。」

納得したように椎奈がそう呟く。

「そこまで力説されてしまったら、元も子もないようだ」

続いて観念したように首を横に振り、お手上げのようなポーズをとる湊さん。

その彼女は、ふと沙希を見つめる。ひとしきり覗いた風にしていて——

「しかし、可愛いもんだな」

そう言って食事の終わった彼女を抱きあげる。

「おおう！ 何だこの抱き心地は……！ どうしたらこんなに、ふ

かふかですべすべの毛触りになれるんだ!？」

「あ、湊さん！ 良かったら私も、その!」

「沙希ちゃんファンクラブ第一号である、この要純一を差し置いて何をしているんだ!」

「そんなの何時の間^{いつ}に出来たの!？」

まあハッキリ言えば、そこからは沙希を使ってすげえぐだぐだし始めた。

とりあえずその後、沙希が殺気を放って威嚇し出したころからやつと落ち着きだしたのは、この四人だけの秘密である。

第廿弐話（後書き）

誤字脱字などないようにしてますが、あつたらごめんなさい。

感想、批評などあれば気兼ねなくどうぞ。
それでは次話でまた。

第三章終了時 登場人物・用語

はい、ここでおなじみ用語説明です！

前の章より長くなり、人物も大いに増加。

なので“軽く”説明します。はい、ごめんなさい。

それでも長くなるかもしれませんが……どうぞ。

登場人物

桜庭恭介

沙希に色々任せ過ぎのせいで、少々教室内での印象は残念になつてゐる本編主人公。次章では頑張ってもらいたいところ。

沙希

和み担当。そのあどけなさは作者の夢の彼方にも現れてくるほど。

要純一

恭介とは違い、その強さは教室の誰もが認めてゐるイケメン。隠れファンクラブが出来てるとか。東雲梓の弟子。

東雲梓

悪鬼抜いのトップクラス。要純一の師匠。恭介と他の知り合い、その他との口調がハッキリと変わってくる。「破滅王^{ルインクイーン}」の異名を持つが……？

桜庭京平

恭介の兄。ちょっとぶっ飛んでゐる。実力はかなりものとかで、何と東雲梓のファン。

桜庭小百合

名前は出てなかったが、恭介の母。恭介の父と結婚するまでは、悪鬼抜いとして活躍してた。料理の旨さは恭介のそれを超える実力者。

桜庭橋幸

出てこなかったが、恭介の父。ランクは上位のものらしいが……？

渡辺小鷹

聖インフィニティア学園寮の管理人。大柄の優男さんで、結構女子から人気は高いとか。

食堂のお姉さん

そのまま。冗談を言うのが好きらしい。

学園長先生

聖インフィニティア学園の学園長。歳の割に若づくりはしているらしい。昔は悪鬼抜いとして名を轟かせていたとかで、なんと学園の名前はこの人が創名。……センスは無いようだ。

若槻美香子

二年F組の先生。極度の心配性、そして弄られキャラ的存在として生徒に暖かい目で見られる。一応美人らしく、京平と交友関係があるとのこと。

滋岳悠斗

二年F組の生徒。平安前期の大陰陽師、滋岳川人の末裔。草食系男子の雰囲気醸し出しており、実力はクラスの中では中の上。

天海千里

二年F組の生徒。ロリで巨乳なグラマラス。实力はクラスの中では上位で、「悪鬼被いのプロヴィジョナル一步手前」とまで言わしめている。なかなか参謀的ポジションを確立している。

二年F組のみんな

変にテンションが高い。無駄な事に対しては恐るべき連帯感を發揮する。

倉橋椎奈

恭介の幼馴染。安倍清明の末裔、倉橋家の長女。極度に心配性な父親によって学園に入れさせられる。丁寧語を使い、多くの男女問わずの生徒に人気があるとか。冷静沈着のキャラは恭介を前にすると一気に崩壊する。

倉橋皐月

恭介の幼馴染で、椎奈の妹。独特な喋り方、そしてダブルサイドツインの髪型にしていることにより、注目度はかなりある。姉同様に人気はすごい。恭介を前にしたり、恭介の話題とかになるとテンションがハイになる。

津守湊

剣道道場の娘さん。高貴な立ち振る舞いやその雰囲気から、お姉さんのポジションが学園内で発生している。じつはプロの悪鬼被いらしい。ポニーテールがよく似合っているとのこと。

二条加奈子

皐月の同級生。京都にあるという二条家の二女（という設定を後付けした）。心を許している相手には口調や態度が幾分と柔らかいが、逆に知らない奴やどうでも良い輩には物凄い勢いで暴言を放ち

まくる。——しかし逆に、そんなところがツンデレのように周りから見られており、男子生から絶大な支持を得ている。

> i 2 2 2 2 5 — 2 9 7 5 <

→ 加奈子&湊さん

用語

聖インフィニティア学園

東京の敷地をめちゃくちゃ使って立てられてある、悪鬼祓い専用の学校で、高校と同様に扱われる。名前は非常に残念だが、一応名門であるらしく、毎年1000人近くの生徒が入学する。広大な敷地を保有しているのには、何やら秘密があるらしいのだが……。

注連縄

神社にあるアレ。型は元々“蛇”を模したもので、力を遮る能力が高い。

西洋儀式魔術

その名の通り、近代西洋ヨーロッパより発達した儀式魔術で、秘学ないし秘教の体系である。カバラ、占星術、タロット、ギリシア・ローマ・エジプトの神話などを総合したシンボリズムと形而上学を枠組みとして、位階制とイニシエーション儀礼、および儀式と瞑想の技法を用いた霊的修練の体系を構築している。

六芒星

近代西洋魔術に於いて、もっともポピュラーとなっている儀式用の紋章。一筆で最初から最後まで描け、また星を成しているため、

自然の理を体现するのを得意とする。日本でも、同様の「籠目」という文様がある。竹編みの籠の編み目を図案化したもので、魔除けとしてこの図形を用いることがあつたらしい。

呪詛

呪い（まじない）や呪い（のろい）や祓い（はらい）と神霊の力を利用するために用いるもの。これにより、様々な物に意味を与え、現実として投影できる。

長い……！
長いよ。めちやくちや省いたのに、何でこんなに疲れているんだろ
う自分は。

ああ、登場人物が一気に4倍以上になったからか……。
そういうことで、以上で説明終了です。

挿絵……どうでしょうか？
下手だとは思いますが、投稿してみました。
一番描きやすくて、お気に入りキャラです！

次話からは四章。一気に2月らへんまで話が飛びますが、お気にな
さらず。

それではまた。

閑話 常

(……コイツ、もう使えるようになったのか)

夜の帳が降り、学園内は目映い街灯と相対的に暗がり包み込んでいる。

そんな中、俺の目の前にいる彼女は――

(まあそんなこつたろうとは思ってたけど……。流石に早すぎだろ)

煌々と光を放つようにして、妖力を口元に集め――^{しか}睨と世界へ“具現”する。

その物と触れあっている虚空は、まるで蜿蜒^{えんえん}とした蛇のように――複雑に絡み合つては、単調にねじれ込んでいつている。

(俺だつて……まだ“ちょっと”しか成功してねえのに)

そんな風に、少し妬ましくも羨望の眼で覗いていると――

「どうかした？」

そんな目線に気付いた彼女が、何時の間にか姿を変え、俺の芯を捉えてきていた。

薄く輝やいている金と、淡くも燈る白の対比。幾分と寒いはずなのに、俺に不自然があればいつもこの姿へと身を誘う。

「いや、習得早いなあつて、な。まだ教えて二週間だろうに」

「おしえるの、うまいから」

口元を緩め、薄ら笑みを浮かべてそんな風に呟く彼女。
ほんのりと頬をそめているように覗けるのは、きっと寒さのせい
だろう。

「でも、梓さんにはホント感激だよな。普通なら、夜は学園使つち
や駄目だし、よく二つ返事で認めてくれたもんだ」

そのお陰でこの“用法”を練習出来るのだから、感謝しても仕切
れないように思える。

「それじゃ教えるのは得意ながらも、習得は不器用な俺に、ちょっ
と指導してくれるか？」

「うん、いいよ」

——と、その前に。……そつと上着を、何処となく寂しげな服に
重ねる。

「それより、寒いだろう？ これ着とけ」

黒のダウンが、白々しい素肌へと深く連なる。

「ありがとう、……きょーすけ」

「ああ。それより、コツ。教えてもらっていい？ 沙希」

「うんっ」

それは、いつものような寒空の元。

一人と一匹の、変わらぬ闇夜に溶け込む日常。

第廿参話

二月四日、午後一時。

「学園選手権？」

「そうだよーさくらばくん。三学期のこの時期、ていうか今週末にね、いつもあるんだよん」 クラスで代表者を決めて参加するんだけど……」

「そこで優勝した人のクラスは、期末テストが免除になるんだ」

天海と悠斗が、俺を諭すように呟いてくる。

「それで、それが俺と何の関係があるんだ？」

「それはねー」

「実は……」

『是非沙希ちゃんに、優勝して欲しいんだ！』

「うお！ いきなりどうしたみんな！？ しかも頼んでいるのが俺じゃなくて沙希！？ どういうこと！？」

「学園選手権は二つの競技があるんだ。一つは『人式』、そしてもう一つが『護式』のね」

「……何だ？ その『人式』と『護式』っていう競技」

「『人式』っていうのは、普通に人間と人間が競い合う競技。それで『護式』っていうのが、つまり悪鬼被いを守る式神とか使い魔を使わせて闘うってものだよ」

俺の問いに、悠斗が分かりやすく説明してくれた。

「ははあ、つまりクラスのマスコット兼最強使い魔の沙希を出してあつさり勝って来いと」

『つまりそういう事だ（よ）！』

「お前ら、つまらない事だけはすぐ思いつくな……。っていうか、『人式』の方は誰を出すんだ？」

「そりゃ決まってるじゃないか」

『要君だ（よ）！』

「ただいまゝって、うお！ 教室に入った瞬間俺の名前叫ばれた！何で！？」

先ほどの俺の反応のように、ジュースを買いに行っていた純一が驚く。

まあ帰った瞬間、すごい形相で見つめられながら自分の名前を呼ばれたら、誰だってそんな風になると思うがな……。

「確かにいいかも知れないな。名前の知名度的にもクラスの実力的にも群を抜いてるし」

「でしょ？ さくらばくんも分かつてるゝ」

「あの……。張本人の俺を差し置いて何の悪巧みだい？」

『悪巧みなんて失礼な！ ただ純粹にクラスの為に馬車馬のように働けてことなだけだろ（じゃない）！』

「明らかにそっち、悪者サイドじゃないかな！？」

俺もそう思う。

しかし仕方がない。何しろ試験免除はそれほどコイツ等にとって宝のような物なんだから。

「諦める純一。お前の出場は確定だ」

「ていうか、何に出場するんだ？」

「なんか今週末にあるっていう、学園選手権の代表だってよ。『人

式』っていう人間同士で闘う競技」

「……それって俺じゃなくて、恭さんが出た方がよくないか？」

『それは無い！』

「うるせえお前ら！——俺は『護式』っていう使い魔とか式神を使わせて闘う方に出ることになってるんだ」

「ああ、沙希ちゃんがいるからか。惜しいなあ、恭さんを『人式』に出せば、間違いなく優勝なのに」

『それは無い！ 断言する！』

「お前らは俺に恨みでもあるの！？」

俺の扱いが酷い。際限なく酷い。

何時も通りって言えば、何時も通りだけだね……。

「ていうか僕、桜庭君が自分で闘ってる所見たことないんだけど」

「そういえば私も」

「……いつも沙希ばかり出してたからか」

悠斗と天海の問いに、残念な想いを含みながら肯定する。

ことある模擬戦闘に、沙希ばかりを出していたので、今のところ俺の真価をクラスメイトに発揮出来ていない。

『ほら、あいつ自分で闘えないから沙希ちゃんばかり……（ひそひそ）』

『でも強い使い魔を扱うには、主人も強くないといけないじゃない。ホントは強いのかも（ひそひそ）』

『能ある鷹は爪を隠すってか？（ひそひそ）』

『確かにその可能性も……（ひそひそ）』

なんかクラスメイトがざわめき出した。待つこと数刻。そして——

『やっぱ桜庭、『人式』にも出る！』

「何で二種目も出なきゃならん!？」

いくら何でも無理あるだろうが!

「ごめんけどみんな。一人一種目しか出れないから、さくらばくんは参加出来ないよ?」

「——っつ、そうだった」

どうやら規定で制限されていたようだ。有難う、学校。

「それじゃ『人式』は要君、『護式』は桜庭君で、みんないいかな?」

『いいぞ(わよ)〜!』

「本人の意見は無視なんだな……。俺、出るとか一言も言っていないんだが……」

「諦めなよ恭さん。このクラス、人の言う事聞くような奴らは微塵も居ないんだから」

「マジで残念だな」

「ああ、残念だ」

二人で仲良く肩を落としたとき。めでたくなえめでたくなえ。

2月5日、午前10時。

終末である今日、学園選手権が開催される……らしいが。

さあ始まりました、第三十九回学園選手権! 各クラスが二種目に一人ずつ代表者を決めて、優勝目指して対戦するというものです

！ この優勝賞品は…… 毎度恒例！ 期末試験免除となっております！

『おおおおおおお！！！！』

おつと名乗り遅れました！ 司会わたくしは私、学園放送局レポーターである諏訪明日香すわあすかです。どうぞよろしくう！

『イエエエエエー！』

そして批評者にお招きしたのは、これまた毎度恒例の学園長先生と…… なんと！ 東雲梓先生だあ！！！！

『うおおおおおおお！！！！』

お二人方、何か一言、宜しくお願いします

皆さん、精一杯頑張ってください

右に同じく

非常にメンドクサイのか！ どうでも良い形だけの挨拶、有難うございます！ さて、学園選手権の競技は一日目は『護式』、二日目は『人式』の競技となっております！ さあ、今年のチャンピオンとなるのはどのクラスか。非常に気になる？

『ねるねるねるねー！！！！』

…… なんつだコレ。無駄にテンション高え。

うちのクラスだけだと思ってたけど、学園全体かよこのテンションの高さ。

しかも最後のなんだよ、意味不明だよ。

「なあ恭さん。俺、なんか明日が不安になってきたよ」

「明日なだけマシだろうが……。俺なんか早速不安だわ」
初戦の初っ端から俺の試合だ。

——俺って言っても、実際は沙希の試合だけだな。

「まあ沙希。負けたら俺がクラスにボコされるから、とりあえず勝つてこいよ？」

こくり、と沙希はいつも通りに首を縦に振る。

それでは第一種目、『護式』の一回戦、第一試合を始めます！
選手の方は、特設フィールドへ入場して下さい！

「おっと、出番だわ。それじゃまた後でな純一」

「頑張つて優勝してきてよ。じゃないと俺、明日緊張でどうにかなっちゃうそうだから」

ヒラヒラと手を後ろに振り、学園の中心にある特設フィールドへと足を運んだ。

おっとお！ 最初に出てきたのは三年A組、五稜毅選手ごりぎゆうしだあ！

彼は去年の選手権にも出場し、何とベスト4に残った実力者であります！

『おおおおおおお！！！』

そして遅れて出てきたのは、二年F組の桜庭恭介選手！ 彼は今

年の一月に転入したばかりで、その实力は未だ不明！……さてお二人方、何かお言葉はありますか？

お二人方、頑張ってください

恭介ちゃん、ファイトー♪

おおっと、ここで東雲先生から桜庭選手にエールが！……こちらの調べによると、彼の編入は東雲先生が深く関わっているそうですが、それは本当ですか東雲先生？

うん、そうだけど？

はい、事実でしたー！さて、事の真相も分かったところで試合開始です！ それでは審判の方、よろしくお願いします！

「左方、桜庭恭介。右方、五反田亮。——前へ」

先生の（よくは知らない）声に従って、俺と沙希はフィールド内へと足を運ぶ。

南校舎近くにある、二年F組がよく使っている所と違って、かなり嚴重に神力による結界が張り巡らされていた。

準備を促す様に審判に言われ、俺の対戦相手は御札をさつと腰から取り出し――

「出てこい！」

地面へと投げつけ、そして式神を召喚させた。

一つ一つの力は、前にやり合った『夜叉』と比べてそこまで強そうでない。

——ただ数が違う。現に俺の眼の前には八体ほど、人型や鳥型の

式神がこちらを見据えている。

「へえ、すごいな」

式神を扱う時は神力も消費するのだが、それ以上に負担が掛かるのは精神力だ。

大抵二、三匹が限度とされているが、俺の相手はその倍以上を召喚している。とてつもない精神力の持ち主なのだろう。

「……ま、多ければいいってもんじゃないけどな。よし沙希、頑張っ
て来い」

沙希の頭をそつと撫で、フィールドへと足を運ばせる。

「それでは——始め！」

一気に静かになった特設フィールドに、一際大きく、そして凜とした声が響いた。

まさにその瞬間、沙希は日頃抑えている妖気を一気に解放させる。そしてそのまま妖狐モード（大）へとシフトチェンジ。

「いけっ！」

相手は式神を沙希の元へと向かわせる。

——結構上手に扱っていて、ちゃんと緩急をつけて八体を別々にこちらに向かわせていたので、対応に手間取るかと思われた。

「……」

しかし沙希はそんな事をお構いなしに、六尾を大ぶりに振るう。

最初に寄って来た二体の人型式神が、あっさりとフィールドの端っこまで吹き飛ばされ——

「……アア」

かすかな断末魔を挙げて虚空へと消える。それと同時に御札も飛散した。

「っ！　嘘だろ！」

対戦相手は酷く驚き、そして危なく思ったのか、式神を一気に後

退させる。

——だがそれが奴の敗因となった。

「……っ！！！」

一瞬^{かんだか}甲高い声色上げて、沙希はフィールド中心に狐火という名の獄炎を奮い立たせる。

『ギイイイイイ！！！！』

何かが擦れるような、そんな聞くに堪えない悲痛な式神の声がフィールド内を木霊^{こだま}していく。

しかし沙希はそんな事お構いなしのように、その炎の威力を着々と、そして冷酷非情にも向上させていった。

まるで全てを焼き尽くさんばかりに、狐火は高々と舞い上がる。

その光景は、誰もが言葉を失って見蕩れていた。

ゆらゆらと炎が揺らめく中、御札が虚空へと少しずつ飛散していく。

——そして、一通り式神を全て屠った所で、沙希は狐火を消し去る。

その後、ピリピリと肌で感じ取れるほどの不吉な闘心と激しい殺気を、最大限に対戦者へと向けて威嚇。

沙希も面倒なのだろう。早く終わらす事に越したことは無い。

……ていうか、怖いだろうなあ。いやマジで。

俺だったら逃げてる程の威圧。それは審判の先生も同じなようで、多少顔を引き攣らせている。

「リ、リザイン！」

「やめっ！勝者、桜庭恭介！」

怯んだ声に合わせて勝敗が言い放たれると、一際大きく、周囲が

ら観衆の声が轟き叫んだ

第廿参話（後書き）

誤字脱字などないようにしていますが、あつたらごめんなさい！

それでは次話で。

第廿肆話

な、なんと！ あの五稜選手がこんなにもあつさりと敗退です！
ど、どういうことでしょうか！

桜庭君の式神は悪鬼、しかも妖狐です。古くから妖狐という悪鬼が強大であることは皆さんご存知でしょうが、その悪鬼を桜庭君は従えているのです

それにしても強いわねー沙希ちゃん。

六尾持つてる時点で、ある程度の力はあると思つてたけど……想像以上ね。

多分、八尾の下位ぐらいの力量はありと私は踏んでいるわ非常に貴重なご意見ありがとうございます！

さて、これで第一試合は終わりです！ それでは第二試合に入らせてもらいます！

「容赦ないなあ沙希。ま、そこがお前のいい所なんだろうけど」
そう言つて頭を撫でてやる。気持ちよさそうに目を細めているその姿は、先ほどの猛々（たけたけ）しい妖狐の時とは非常に大違いである。

そんな風に思っていると、クラスの奴らがこちらへやつて来た。多分、俺たちに初戦突破の激励を――

「恭さん、沙希ちゃん、お疲れ」

『沙希ちゃんお疲れ！』

「……クラスメイトが俺を苛める」

純一以外は沙希だけだった。

「だってー。さくらばくん、何もしてないんだもん」

天海がクラスの意見を代弁するかのようになり、俺にそう結論づける。

……ま、実際そうなんだけどな。

「さて、俺の次の試合は何時だ？」

「二時間以上は空くよ。だから、少し食べ物でもかき込んでおいたほうが良いと僕は思うよ」

「確かにそうだな悠斗。よし、沙希よ。何か食べに行くか？」

俺がそう言っていると、一瞬で人間の姿へと変える沙希。

「おむれつがいい」

「最近ハマってるなお前。それじゃ学食にでも――」

『何か美少女になった――！――！？』

「……あ、そういうえは知らなかったんだっけ？」

コイツ等の前では、まだ人間モードにシフトチェンジしたことが無かったようだ。

あー、そういうえはコイツをシフトさせた時、絶対何かありそうだなと思ってたんだよな、俺。

「や、やべえ。めっちゃかわええ。ていうか綺麗え」

「スタイル良すぎだろ……。何だよあの零れそうな双丘は」

「DかEはあるな。……くそう、羨ましいぜ桜庭！」

数人の男子がそこそと裏で話しあっている。

アレで隠してるつもりなのだろうか？ 一番遠い俺からでも簡単に聴き取れるんだが。

「男子サイテー」

「そうやってすぐ胸の方に視線が行っちゃってさー」

「うるせえ！ 大きな胸には男の夢とロマンが一杯詰まってるんだ

！」

『そつだそつだー！（男子全員）』

……收拾付かなくなったので、とりあえずあいつ等から離れる。
決してあのクラスメイトと、おなじなかま同類なんかにさせられたくない。

まあ純一、頑張ってくれ。

「さて、行くか沙希」

「っうん」

嬉しそうに、これまた毎度のように俺に腕を絡ませて、学園中央の学食へと向かうのだった。

その後の試合も、ほぼ独壇場の様子だった。

ある試合では沙希が閃光の如く蹂躪し、爪で刻みまくって勝った。
り。ある試合では霹靂へきれきのように迅雷を高速で落としまくって勝った
りと、隙や油断など一切持たさせずして勝ち進む。もはや苛めの部
類だ。

そして――

さあ一日目、『護式』の最終試合となりました。

今回は思わぬダークホースの出現により、皆さんの期待は一片に
変わってしまったかと思われませんが、そこは最終試合！盛り上がる
こと間違い無しです！

『うおおおおお!!!』

さて、決勝戦の組み合わせはと言いますと……。

左方、桜庭恭介の使い魔である通称『沙希ちゃん』と、右方、國^く
にのみやふうか乃宮楓夏さんの式神との対戦です！

國乃宮選手は『白鷗会』はくおうかいの会長を務めており、なお且つ去年の選手権で見事『護式』部門で優勝を果たしております。

はたまた対戦相手である桜庭選手は、恐るべき元悪鬼である使い魔を従え、全ての試合をほぼ瞬殺で勝ち進んできました！ さて、優勝するのはどちらか！

『わああああああ!!!』

解説のお二人さん、どう思われますか！？

両方とも良い試合をしてくれると思います

右に同じ

もう飽きてきたのか！ どうでも良さそうであります！

……さて、そろそろ試合を始めさせて頂きましょう！ 審判の方、よろしく願います

「左方、桜庭恭介。右方、國乃宮楓夏。——前へ」

試合前に必ずある、定句のような先生の言葉を聞き、俺は慣れたように特設フィールドへと足を運ぶ。

周りを見ると、朝と比べて幾分ギャラリーが増えているように感じる。決勝ともあって、みんな興味があるのだろう。

「宜しく頼むよ、桜庭恭介君」

周りに気を取られていると、目の前の女性——國乃宮さんが俺に挨拶をしてきていた。

「はい、宜しく願います」

「んう？ どうして敬語になっているのかな？ 僕たち、一応タメなんだよ？」

「っは？ そうなの？」

いや、雰囲気だけで言うത്三年ぽかったし、まさか一年生で優勝しているとは思いつかなかったからな。

「僕の知名度もまだまだかな。これから精進しないと」

「いや、多分俺以外の奴なら知ってるんじゃないかと思うぞ。だって転校生だし」

「そう、そこが気になってるんだよ。君、元は普通の学生だったらいいじゃないか。」

どうしてそんなに“悪鬼に慣れているのかな？”　そこが不思議で僕は仕方がないよ」

……ふむ、確かにそうかもしれない。

しかし後々面倒な事になりそうなので、上手く誤魔化しておこうと思う。

「偶然だ。梓さんの知り合いである時点で分かるだろ？ 結構慣れてんだよ」

「ふうん。ま、今はそれでいいよ」

納得しないように楓夏は頷くと、俺との会話を中断させる。

右の腰に備え付けてある御札入れから、一枚の青々しい御札を取りし――

「おいで……『雫』」

神力を少し御札へ流し込む事により、一つの式神を現界させる。

体を聖水で満たし、その上には黒線で幾重にも紋様を躰に刻み込んでいる。

見蕩れる程の美しさを兼ね備えながらも、気遅れする程の畏れを随時振り撒く。

——それは何もかもを浄化させるような、美しい人型式神であった。

「ほお！ こりやまたすげえな……。」

呪詛に封に禁、それに西洋の星学術式も混ぜてやがるか」

オリジナルの領域が凄まじい。ここまで混ぜてくると力の流れが行き詰まり、力の暴発といった危険性も高まってくるのだ。

それを上手く纏め上げ、そして組み合わせているのはもはや職人技としか言いようが無い。

「へえ！ そんな事一瞬で分かっちゃうんだ！ やっぱ君は何か裏がありそうだなあ。ね、この勝負に負けたら君の正体を教えてくれないかな？」

「……正体も何も、今の俺が正体だが？」

すっかり言葉を零してしまっただが為に、更なる不可解な念を持たせてしまったようだ。

これは何としても沙希に勝ってもらわないと。秘密は大切に。

「あくまでシラを通すんだ。——まあいいよ、勝ったらじっくり訊いてあげるから」

「怖い怖い。それじゃ俺が負けたら『白鷗会』っていうのを教えてくれ」

今さっきの放送から、少し気になってたんだ。

「……ホントに、認知度ないなあ僕」

すごくガツカリしたように國乃宮は肩を竦める。

そこで一旦会話は終わり、戦闘前の焦がれる様な雰囲気以身が包み込まれる。

審判の先生が、さつと虚空へ腕を挙げ――

「それでは、始め!」

大きな声が響くと共に、本日最後の闘いが幕を開いた。

第廿肆話（後書き）

誤字脱字あればご報告を。

それでは次話でまた！

第廿伍話

「……」

沙希は無言で相手の式神——雫へと高速で移動し、間合いを詰める。

爪をさつと解放し、顔面を抉ろうとして大ぶりに腕を振るった。

——だがそれは、雫の腕から生じた一筋の聖水によって防がれる。

刀を成しているようなそのフォルムはとても美麗。そして身の毛が立つようなを兇刃も窺える。

「へえ！ いきなり雫に『水刃』すいはを使わせるなんてやるなあ！」

そういつて國乃宮は、くいつと指を動かす。……多分、何かしろの命令を与えたのだろう。

すると雫は弾き飛ばす様に『水刃』と呼ばれる聖水を飛散させる。妖狐にとって害でしかないその水に、避けるようにして一気に後方へと身を引き、体勢を整える沙希。

……前足が少し焦げたように煙を挙げる。妖力を少し浄化されたのだろう。

「……っ！」

しかしそんな事は御構い無しに、甲高い唸り声を挙げて沙希は妖炎を打ち上げる。

最初は戸惑うように、身をその場へと留めていた雫。しかしピツと國乃宮が指を動かすと同時に——

「~~~~っ」

声にならないような音を挙げ、体を一気にウェーブ上へと移行する。

そしてそのまま、スッポリと炎を全て包み込んだ。最初は炎の勢いに負けているように見えていたが――

徐々に勢いは衰えを見せ始め、そして気づく頃には狐火は全て鎮火されていた。

「すげえ……！ 沙希の狐火を抑えるとか」

それはもうプロの実力だ。しかもかなり上手である方の。

自慢の狐火を抑えられた沙希は、どう攻撃しようと思案しているようだ。そのせいで、少し動きが鈍くなっている。

——その隙を使って、再び人型へと姿を変えた雫は、両手を『水刃』へと誘^{いよほ}つ。

人間では出来ない様な、地面を滑りこむような移動で一気に間合いを詰め、沙希へと追撃を加え出した。

最初は爪で刃を弾く様にし、軌道を変えて防御していたが……。

「……っ!？」

少しずつ聖水の効果で爪は剥がれ、そしてとうとう腕に刃が掠つた。

ただそれだけなのに、その華奢な腕からはまるで焼き石に水を注ぐような、濃密度の煙が漂う。

苦痛の表情を覗かせ、沙希は一旦間合いを開けるために身を引いた。

（ふうん……。明らかに“今のままじゃ不利”っぽそうだな。

あつちは浄化させることに専念させているみたいだし、沙希の体じゃすぐに折れる）

俺がそんな風に思っていると、國乃宮はそんな思考を読み込むよ

うに、なんとも言えない嬉々とした表情を浮かべた。

「どうかな？ もうお手上げかな？」

そう言っただけの方に、再度指を弾くようなモーションを見せる。その瞬間、雫はジリジリと沙希の方へと距離を詰め出した。

「……ま、今の状況じゃそうだな」

そう言っただけは沙希の方を向き――

「沙希、やっぱもういいわ。“アレ”使え」

その言葉を聞いた瞬間に、何かを悟った様に沙希は体中から神通力を解放させる。

彼女の口元には高密度の淡い光が集まり出し――“一本の刀”を形成した。

「霊刀『小狐』……これにお前の式神は耐えられるかな？」

その時の俺の表情は、大凡極悪人のおおよそのようなあくどい顔をしていたに違いなかった。

明らかに不利だと思われた桜庭選手の『沙希ちゃん』ですが、なんとここで武器を創り出したー！

これは一体、どうということなのでしょう！

神通力で神魅を“擬似的に模した”のでしょうか。……実に発想がユニークですね、彼は。

多分前から、こういう神通力の使い方を教え込んでいたのでしょう

うね

それにしてもすごいわねあの刀。どう見ても神魑のような力しか感じ取れないわ。それほど精巧に創り出している、と言わざるを得ないわね

さあ、ここで大番狂わせとなった最終試合！　まだまだ試合の決着は分かりません！

割れんばかりに歓声が轟いた。

沙希を擁護するような声と、そして俺を褒めるような声も何故か聞こえてくる。

「す、すごいね本当に。僕の想像の遥か斜め上を過ぎて行くよ」

「大丈夫だ。もっと驚かせてやるから。……“韌”^{じん}」

そう言っただけが不敵に微笑んで言った瞬間――沙希は燐光で体を包みこむ。

その光は、灼き^や尽くさんばかりに赤く揺らめき、炎のように熱く迸っている。

そんな沙希は弾丸のような速度で閃光を振り撒きながら、刀で雫の胴体を切り裂いた。

「~~~~！」

一瞬のことで理解できなかったのだろう。驚きと痛みのニュアンスを含む、何とも言えない音を出す雫。

裂かれた所はまるで闇に呑み込まれるかのように、恐ろしく、そして盛大な妖力によって穢されていた。

「……“戟”^{げき}」

再び消え入るような声で沙希に指示する。沙希を包み込む赤き閃

光は、続いて輝かんばかりに明るく白のライトエフェクトを帯びる。過ぎ去った雫の胴体へ、もう一度最初の位置へ戻るようにして再び決った。

——まさにその刹那、溢れんばかりの膨大なエネルギーが傷元に生じ、聖水ごとその生じた力を爆ぜさせた。

「~~~~~っ!!!」

声に成らない様な音が先程とは違い、酷く悲痛であることは用意に認識出来た。

雫は人型を為せなくなったのか、酷く崩れて地面へと崩れ落ちそうになる。

「な、何をやったの君は!？」

一番驚いているのは、雫ではなく國乃宮の方だった。何故、雫がいきなり飛散されたのか分からないのだろう。

「問題です。同じ力量の妖力と神力のような神通力を組み合わせると、どうなるでしょう?」

「……成るほど、そういうこと」

俺の問いに、数秒程考える素振りを見せていた國乃宮。

悟った時は甚く悔し^{ひど}そうに、沙希と俺を交互に見渡した。

「非常に残念だけど……。最高傑作の雫を壊される訳にはいかないからね」

そう言っただけの現界させている御札から、神力を取り除く。殆ど原型を留めていなかった雫は、そのまま虚空へと消え去る。

「僕の負けだよ。……リザイン」

「やめっ!勝者、左方——桜庭恭介!」

その判定を司る声が響いた瞬間、今日一番の歓声が学園を包み込

んだ。

優勝は、今大会のダークホース！ 左方である桜庭選手です！
おめでとうございます！

……あの國乃宮選手を破るとは、本当にすごいことであります！
しかし『雫』はなぜあのように飛散されてしまったのでしょうか
！ 学園長先生、どう思いますか！？

皆さんは、妖力と神力との関係は知っていますよね？

普段なら妖力は神力によって浄化され、また神力は妖力によって
穢されたりと、相互に浸食し合う事で成り立っています。

——しかしその相反する同じ量の力を、上手く混ざりあわせた時
に限って、神力と妖力は莫大なエネルギーを伴って無へと還るので
す。今回はその現象を使ったのだと思われます

ちなみに妖力を先に雫の方に溜めこんで、後に神通力を流し込ん
だみたい。じゃないと神通力が神力に融合してたかもしれないかつた
しね。

——神通力で作った刀だから、神魘と違って妖力による暴発も無
いし、二つの相反する力の性質を深く知っておかなきゃ出来ない芸
当だったと私は思うわ。流石は恭介ちゃんってとこかな♪

ご説明、有難うございます！ よ、よく分かりませんでした、
とりあえず桜庭選手！ フィールドへ帰って来てください！ まだ
表彰式が残ってますよ！

午後5時3分

初日の熱気が冷めていくなか、俺は沙希と純一を引き連れて保健室に来ていた。

理由は、浄化された沙希の怪我を治すため。

「まさか表彰式をすつぽかそうとするなんて。恭さんなかなかやるな」

あきれ顔で、純一が俺に呟いてくる。

「勝った気がしねえもん。多分まだ奥の手とか残していそうだし、あっちが諦め悪かったらどうなつてか分からねえよ」

そう言いながら俺は少量の『生命』と呼ばれる気と呪詛を用いて、御札に“治癒符”としての力を蓄えさせる。

数分程度で創り上げたその御札を、沙希の少し欠けた爪と腕に張り付け――

「我が名に於いて彼の者を癒せ――？きふつぎゅうにょりつりよう急如律令つと！」

定句を唱え、治癒符の能力を解放させる。

淡い微光を放って、沙希の腕が少しずつではあるが回復していく。

「恭さん恭さん。何で今、御札を使つたんだ？ 別に直接治癒しても良かったじゃないか」

「……気と呪詛を同時に使つて治癒を唱える事が、今の俺じゃ難しくて出来ないんだよ。だから一つずつ別々に治癒符にストックしてやることで、同時に発動させた訳だ。――それと」

「ん？ それと？」

「純一は、御札が人骨で作られてるって知ってるか？ 何で人骨使

つてるかっという、実は“効果を上増し”出来るからなんだよ。神力を使える人間を支えているパーツだから、骨は。少なからず加護があるんだ」

別に攻撃では無いから、能力を破られるという現象も無いし。回復に限定してしまえば、普通に唱えるよりも効率が良い。

「それは僕も知らなかったなー！」

純一からの返しだと思っていたその声は、大層純一のそれとは違いトーンが高い。

声が響いた方に首を傾けると、そこには決勝戦の相手——國乃宮楓夏が気障ったらしく扉に体重を掛けて佇んでいた。

「あ、君の使い魔、怪我は大丈夫かな？」

そしてそのまま、沙希の心配をしてくる。どうせそこまで興味無いにせよ。

「問題ねえよ。……っというか何だよ國乃宮。盗み聞きなんて宜しくねえぞ？」

「別に盗んでたつもりはなかったんだがね。……あと、その僕の呼び方もどうにかしてくれないかな？」

メンドクサイでしょ？ 普通に楓夏って呼びなよ」

「おう、それは助かる。お前の名字は長いからな。——さて、と」

「ちよっと待とうよ。君には色々と教えてあげないといけないし、訊かないといけないからね」

……っ。引き際を逃したか。

「言つとくけど、試合は俺が勝ったんだからな。話すことなんて何もないぞ」

「分かってるよ。とりあえず、まずは『白鷗会』について説明してあげようと、会長である僕が自ら赴いているんだよ？ 感謝して欲

しいぐらいだね」

「あざーっす、さっすが楓夏様」

体をクネクネさせながら返答してやる。ふざけているのは重々承知の上だ。

「まあ、いいけどさあ。とりあえず、そっちの東雲先生のお弟子さんは何か分かるかな？」

「俺は純一でいいって、会長さん！」

……えつと確か『生徒会』と『白鷗会』っていう学校を仕切る二つのグループがあつて、生徒会が主に学校側で白鷗会が主に生徒側の主張をするって感じだったかなあ？」

「桜庭君と違って、よく知ってるね純一君は」

「悪かったな、良く知ってなくて」

「いや、別にいいんだよ。説明のし甲斐があるってもんだからね」
そう言つて幾分胸を張り、堂々として俺に語り出す。

「白鷗会っていうのは、その行動全てに於いて生徒のためという観念を築き、そして学生管理の業務を行う組織。

それで生徒会って言つのがその真逆で、その行動全てに於いて学園のためにといい観念を打ち立て、そして主に学園施設の運営を行う組織だよ」

「へえ、珍しいなそういうの」

大抵は生徒会が全てをやるもんだと思っていたが。

「何しろ学園の生徒人数が多いからね。……それで生徒会っていうのは選挙制で決めるんだけど、白鷗会は現白鷗会メンバーの指名制度で役員を決めるんだ」

「お、それはなかなか良いな！」

純一が興味を示し始めた。

——やめとけよ？　この後に来るのはやっぱりアレだろう。

「それでさ、僕、君に少し提案してみ——」

「だが断る」

「……まだ何も言っただけだよ？」

「どうせ『君も白鷗会メンバーにならないかい？』とかそんな感じだろ？」

もう分かり切ってたんだよそう言うノリは。幾度となくあの姉妹にそういう提案をされてきたことが。

「へえ。そこまで理解しているなら、別に入ってもいいじゃないか。もう、君は意地っ張りなんだから」

お返しのように体をクネクネさせてくる楓夏。……ちょっと色っぽい。

「俺じゃなくて、純一なんてどうだ？　真面目だし、知名度もあるし、何よりイケメンだぞ」

「軽くスルーしないでよ。僕のボケが綺麗さっぱり無くなっちゃってるじゃん？　……ていうか僕は、純一君も誘おうと思ってたんだよ。だから二人まとめてどうか？」

「うげ、俺もか。正直言っただけさ——」

「ああ、そう言えば白鷗会に入れば、悪鬼抜きの免許取得試験時にかなり優遇されるらしいよ？　……って……けど……」

「よし、白鷗会に入るよ！」

「決断はやっ！　ヲイ、ちょっと待てよ純一！　

今コイツ、小声で『っていうわさだけど』とかほざいてたぞ」

「そんな事ないよ！　俺はもう入るもんね！」

「……あっさり騙されやがって」

何を言っても駄目そうだ。純一は一度決めてしまった事は決して

曲げない、悪く言ってしまうえば意固地な奴なのだから。

「さて、君はどうするかな？

っと、そういえば。白鷗会は生徒のための機関だから、もしかして生徒である君の意見も、白鷗会に入ればまかりなりに通らせれるっていう可能性も——」

「よし、入ろう」

「……君達、本当に欲望に忠実だね」

何か？ 何か悪いことでも御有りか？

そんなの自分の得になるようなことならば、好きに職権乱用するに決まってるだろうが！

——バレない範囲で、な？

「でもまあいつか！ そこが君達の良い所かも知れないしね」

納得したように、ウンウンと首を何度も縦に振る楓夏。そして、

「よし、それじゃ二人とも——ようこそ、白鷗会へ」

その大人びた顔に似合わない、何とも子供の様な明るい笑みを浮かべた。

第廿伍話（後書き）

誤字脱字などないようにしてますが、あつたらごめんなさい！

それでは次話へ。

第廿陸話

白鷗会の部室は中央校舎の三階にあった。

無機質な白面一色の廊下を歩き、楓夏の赴くままに付いて行く俺と純一、そして沙希。

「ん？　なんか荒れてるぞ、この中」

純一が他とは少し違った、色の薄い煌びやかな扉の前でそう呟く。多分ここが白鷗会の部室であることは間違いなさそうなのだが……。確かに中からは「ぎゃーぎゃー」とか言ってそんな空間が広がっているようだ。

それぐらい扉越しで喧騒が聞こえてくる。

「アレ、何でだろうね？　僕が居ないからみんな寂しがって悶えているのかな？」

「面白い冗談を言うなあ國乃宮楓夏さんよ」

「……別に言ってるつもり無いんだけど、君。しかも何でフルネームで呼んだのかな？」

「気にすんな、そういうノリだ」

「…君は時たま意味分からなくなるね。ま、別にいいけどさ」
そう言つて扉を開けた楓夏。

「ちょっと離してよー！　私は早くきょーすけ兄さんのところに行かなきゃいけない気がしてたり！」

「そうですね！　私はそんな星の元に生まれた気がするんです！　離して下さい！」

「意味分かんないですよ椎奈さんっ！　ていうか皐月暴れないのっ！」

「いつも冷静なお前が……。何がどうしたっていうのだ……？」

「……あちゃ、今回の騒動の原因は君みたいだよ？　どうするのかな？」

「どうするも何も、早く自分の手下を鎮めるよ國乃宮楓夏会長さん」
「あはは、やっぱそうなっちゃうよね」

未だ俺たちが入室した事に気付いていない四人の元へ、苦笑いを浮かべ何となく億劫な足取りで近づいて行く楓夏。

「やあ、椎奈副会長に臯月会計。楽しそうな事をしてるね」

「つげ、会長さんが来ちゃったり……」

「うう、一度会議という無駄な時間を重ねなきゃならなくなってしまいました……」

うつわ、すげえげんなりしてんな幼馴染たち。オーラが暗すぎる。

「二人ともしょんぼりするのも良いけど、僕の顔を見て悲壮感に浸るのは止めて欲しいな。まるで悪人になってる気分だ。……あ、二人に良いお知らせがあるよ」

「会長の良いことって、大抵は良くないんですよ……」

「同じくそう思っちゃったり……」

「失敬だな。こんな二人、どう思っかね君たち」

そう言ってこっちを見てきた楓夏。多少、眼が笑っているように思える。

「そうだなー。ちょっと会長さんが可哀そうかって俺は思っぞ」

「以下同文」

そのように純一、俺の順番に声を挙げた瞬間――

「恭介君優勝おめでとう……！」

「きょーすけ兄さん優勝おめでとう……！」

間髪入れずに下げていた顔を挙げ、こちらを見つめ大声で同時に賛辞を送って来た。

——流石は姉妹。行動が似過ぎ。

「おう、ありがとうございます。……って言っても、俺じゃなくて沙希が頑張ったんだけどな」

そう言っただけで膝元に擦り寄っている沙希の頭を撫でる。眼を細め、気持ち良さそうにその快感に浸っている。

「……うらやましいです」

「しょうがないよ椎奈ちゃん。実際そうだったし……」

ここで何故か再びしょんぼりし出した幼馴染たち。

何だ？ 情緒不安定か？ 躁鬱激しすぎるぞ。

「っほ、やっと収まった……。ったく、もうちょっと早く来なさいよ」

「そっだぞ桜庭。もっと早く来てくれ、頼むから」

そっげんなりして言っただけで来たのは湊さんと……。誰だったわけ？

「二条加奈子よ、かな・こ！ 何で忘れてんのよアンタ！」

「心読んでくるな。っていうかそんな奴いたなあって、今思い出した」

めんどくさそうな口喧しい奴というイメージだけは脳裏に浮かんでくる。

「あれ、君達。もしかして白鷗会メンバーとはもう知り合いなのかな？」

ここで楓夏が、疑問の念を俺と純一に向けてきた。

「メンバーって……こいつらが？」

「そっだよ。椎奈副会長に湊執行、皐月会計、加奈子財政と私を含

んだ五人が、現段階での白鷗会メンバーだ」

「あちゃー、見事に知り合いしか居ないな恭さん」

驚いたように純一が俺にそう話しかけてくる。

「そうだな。まあ、その方が気が楽と言えば楽だが……」

「ていうかそれよりつ。会長、何でコイツ等を白鷗会の部屋に連れて来たんですか？」

「ああ、この二人を白鷗会メンバーに誘ったんだ」

あつけられんとして、そう言い放った会長の言葉に――

[illegible]

現メンバーの四人が盛大に驚嘆した。

「……っと、そう言うわけでこの二人は白鷗会メンバーなんだが。」

役職はどうするかね？一応、もう一個副会長の席と書記が余っているのだが」

説明し終え、俺と純一にそう疑問をぶつけてくる楓夏。

そんな彼女は部屋の一番奥、窓際にある大層高級そうな木製のデスクを目の前にして、これまた高そうな椅子に踏ん反りかえって座っている。

ちなみに言う。それを先頭に右側と左側に席が三つずつあるのだが、俺は右から楓夏の一番近い席。その隣に湊さん、そして純一

の順に座っている。

向かい側は楓夏の方を奥にすると、椎奈、皐月、うるさい奴の順番だ。

「……アンタさ、今アタシに良からぬ印象を持ってなかった？」

「何のことやら」

相も変わらず、勝手に人の心を読んで来やがって。プライバシーの欠片も無い奴だ。

ここでぎゃーぎゃーと再び喚いてきた輩を軽くスルーしていると、ずっと悩み込んでいた純一は楓夏の方に向く。

どうやら自分の役職を決定したようだ。俺的には、絶対副会長だと思う。

「俺は副会長に立候補します！会長さん！」

——ほらな。

「んじゃ俺は書記でいいよ」

「おろ、僕は君の方が副会長に立候補すると思っていたよ」

そう言っただけの方を見据えてくる楓夏。多少口元がニヤニヤしているが……何故だ？

「別にどんな役職だろうが、関係ないし。俺あんまり仕事する気ないし」

「そうかい。でも君と純一新副会長……ちょっと違うね、君だけかな？ 多分仕事はかなり増えると思うけど？」

「何でそう思う？」

「勘かな。……いいや、絶対そうなるって僕の本能が告げているよ」

「何とも信憑性の無いこと」

正にその通りだね、と楓夏は再び愉悦を零しだす。

しかし……なかなか怖いぞ。信憑性は無いって言えば無いが、何というかそれが逆に怖い。

絶対何かありそうな雰囲気醸し出しているような、そんな複雑な実態性もある。

「むう。会長さんときよーすけ兄さんの仲が良さ気に見えちゃったり」

「確かにそうですね。これは思わぬ……」

そんな風にこそこそと、俺の向かい側の席で皐月と椎奈が何やら喋っている。

「あれ、何の話してると思う？ 湊姫」

「私に心当たりは無いのだが……。それと桜庭、何で『姫』なのだろうか？」

「いえいえ、お気になさらず」

貴女の“やむごとなき際”^{きわ}は、もはや姫や殿の称号がお似合いだ。今度からどちらかの総称をつけて呼んでやることにしよう。

そんな風に思っていると、あっちの席の入口側の席の女——口喧しい奴が会長に声を掛けようとして……。

「ちよつとアンタっ！」

今さっきからアタシの印象、『口喧しい』とか『五月蠅い』とかそんなんばかりじゃない！ ふざけないでよっ！

うわお、また俺の深い心理層があの子に読まれ——って。

「お前。もしかして、マジで心読めるのか？」

「そういう家系で、ちよつと力を使うと出来るのよ。」

普段は何にも無いんだけど……って、良いからちゃんと名前前で呼んでよっ！ アタシもちちゃんと『桜庭先輩』って呼ぶから、分かった！？」

「お、おう。分かった加奈子。ていうかお前年下だったんだな」
皐月と結構仲が良さ気だったから、もしかとは思っていたけど。

「……っ。呼ぶって、そっちの名前の方じゃ……」

「っは？ 何か言ったか？ 俺耳は良いんだけど、そんなに小声で喋られると分からねえんだが」

「別に何でもないっ！」

そう言っ顔を逸らす加奈子。何とも情緒不安定な奴の多いところだな、此処こゝは。

「なーなー会長さん。ところで会議とかって、何するんだ？」

ここで純一が、面白そうな顔で俺たちを覗いていた楓夏にそう呟く。

「ああ。別に今日はこれと言って特別な話しあう要網はないよ。ちようど学園選手権の真っ最中だからね」

「そっか。それなら今日はこれでお開——」

「少し待とうか桜庭君。ここで君に一つ質問をしたいのだが」
帰ろうとしたところで、楓夏が俺を呼びとめる。

「何だよ質問って。言っとくけど、黙秘権を行使するからな」

「無駄だよ。こっちには加奈子財政が居るんだから」

そう言っ口を吊り上げる楓夏。

「っち、マジで面倒だな。」

——まあ、このメンバーなら他人にむやみにバラす、みたいなこととはないかもな。

自身の能力をばらされたくない奴の、巣窟だろうと思うし。

楓夏の式神とか、マジそなんだよなあ。

「……はあ、分かったよ。ちゃんと嘘偽りなく答えましようぞ、っ

と」

諦めて俺はそう呟くと、ほっとしたように、されど吊りあがった口から笑みを零し始める。

そして一言。

「宜しい。それでは単刀直入に――君は“プロの悪鬼祓い”かな？」

「ああ、そうだよ」

俺が気ダルそうに答えると、加奈子と湊さんが驚いたように顔を顰めらせる。

「嘘つ。え？ それって本当？ 冗談で言ってるわけじゃないわよね？」

「こんな事、冗談で言うかよ。マジもマジ、大マジだ」

「それは……、いやそんなに強大な使い魔を飼っているから、もしやとは思ってはいいたが」

未だ少し信じられないようだ。二人とも浮ついているように見える。

楓夏は納得したように顔を上下に振ると、自分以外のメンバーを見据え――

「ふむ、了解したよ。……この白鷗会もメンバーの内、四人もプロの悪鬼祓いか。なかなか異例の事ではあるね」

このように語る。

「……ん？ 恭さん以外に、誰がプロなんだ？」

「ああ、純一新副会長は知らなかったか。君は知ってるかな？」

俺にそう尋ねてくる楓夏。

「その幼馴染二人と、あとはクラスの奴からちょこっとな。湊姫

もそうだと言うのは耳に入ってきている」

「だから何で『姫』なんだ。……しかも」

「「じーーーーー」」

「あつちの二人からは睨まれるし。どういう事だ本当に……」

困ったように奏さんがあたふたとして、取りあえず席を立てて椎奈と臯月を宿めに行く。

「へえ。白鷗会の事は全然知らなかったのに、そういう情報は早いんだね、君」

「どーも」

ここで茶化す様に言っ て来た楓夏を、俺は軽く受け流す。

何故か悔しそうな顔をしているようなので、してやったりと少し嬉しくなる。

「さて、ここで新メンバーの素性も分かった所で、お開きとしようか。」

明日の『人式』の競技に出る人は、頑張っておいで」

「ん？ 純一以外にも誰か出るのか？」

「椎奈副会長のクラスは湊執行を、加奈子財政の所は臯月会計を出すからこの二人だね。」

……ていうかそれより、純一新副会長も『人式』に出るのか。これは面白くなりそうだ」

ニヤリと悪戯っぽく笑みを浮かべる。

「うへえ、どっちもプロじゃないか」

「頑張れ、純一。俺は陰ながら応援してる」

「表立って応援して欲しいぞ、恭さん」

「へいへい。つってもこの二人以外にも、強敵はいると思うけど？」
思ったことを、そのまま純一に告げてやる。

「よく気付いたね君。その通り、生徒会の方からも三人ぐらい出し、武芸部の方からも数人出るらしいから。いつも以上に今回の『人式』は激戦だよ」

「だ、そうだ純一。まあ今日の沙希の活躍で試験免除になったんだ。気楽にやって来い」

「……気楽に出来るかなあ」
そう言って少し暗くなる純一。

——しかし明日までに寝て起きれば、いつも通りになっているだろう。

「とりあえず、湊姫も皐月も頑張ってきて来い」

「だから何で『姫』だと私は……」

「任せてよーきょーすけ兄さん。多分、明日は調子が良さ気だと思ってたり」

「おう、期待してんぞ」

湊さんの抗議はスルーしつつ、皐月にエールを送る。

心なしか、椎奈に睨まれている様な気がするが、そこは放っておこう。

そんな感じで俺と純一は、今日を以って白鷗会のメンバーになった。

第廿陸話（後書き）

やんごとなき際……平安時代の言葉で「高貴な身分」という意。

それでは次話でまた！

第廿漆話

二月六日、午後十一時三十八分。

お昼時となった今日、とうとう白鷗会メンバーの一人——湊さんの試合となる。

ついでに言うと、これが一回戦最終試合。

くじで皐月と純一はシード権を獲得したようだ。よってその二人は昼からの試合となる。

それより、お祭り程度に考えて俺は昨日やっていたが、今日を見ると案外真面目な行事らしく、結構驚いた。

「湊さん、大丈夫でしょうか……？」

「あの湊さんですよ？　大丈夫に決まっていますって！　椎奈さん」

「その通りだよ。そこまで緊張する必要は無いんじゃないかな。隣の君はもう少し持ってほしい所だけど」

「何で観客の俺が緊張せねばならん」

そのように俺は呟くと、売店で買って来たポップコーンを摘まむ。ついでに膝元に包ま^{くも}っている妖子モードの沙希にも一つ。

「あのー、桜庭君？　何で白鷗会が総出で、ここに集まっているのかな？」

そのように言ってきたのは俺の右隣に座っている悠斗。ちなみに左側は楓夏とかが座っている。

「あ、私も気になっちゃうな。何でかな、さくらばくん？」

「さあな。何かあったんだろ」

その悠斗の隣にいた天海の問いも、適当に誤魔化してみる。

今ここで、クラス連中に「白鷗会のメンバーになりました」とか言ってみろ。

——間違いなく何かされるだろう。主に危ない方面に。

「さて、そろそろ始まるぞ」

次の試合が始まるうとして、周囲の観客席から喧騒が高まる。良い逃げ手を見つけた俺は、試合に集中するよう天海に助言。悔しそうな顔をして渋々と言った感じ、天海は中心のアーリーナ付近に顔を向けた。

さあ始まりました！ 学園選手権二日目、『人式』の一回戦最終試合です！

今年は例年以上に強豪が集まっており、どの試合も目が離せない所ですが——つと、ここで早くも二年B組、白鷗会執行委員である津守選手の一撃が決まったあ！ 峰打ちながら、その威力は強烈っ！

流石ですね。大振りに入って来たところを小刻みなステップで避け、体勢が崩れかけたところで一閃ですか。本当に小さな隙ではありましたが、良く見てますね

確かに良く見てると私も思いますよ、学園長先生。

——ただもうちょっと入り込みは鋭くした方が良かったかな、と私は思います。女子だから力もそんなに無いだろうと思いますからね。

本当ならここで終わってかもしれないでしょうけど、あっちの選手はまだ戦えそうですよね？

……多分恭介ちゃんなら、上手くやってただろうけどねー」

「あのつ、桜庭先輩。何か事あることに東雲先生、先輩の名前出してない？」

そのように言っただけなのは加奈子。口調はだいぶ落ち着いて、昨日のように口喧しいことはない。

「気のせいだろ。そんなことねえよ」

「いや、それにしたってね君。その前の試合は『恭介ちゃんならここで切り返して足元に仕掛けたろうね』とか、その三試合前は『甘いな』。恭介ちゃんにそんな事してたら、あつという間に腕と首筋に一撃加えられちゃってるよ』とか。

どう考えてみても君の名前連呼なのだが……」

「知らんなー。気のせいだろ、いいから試合に集中しなされ」

どんな感じに言われても、俺はそのような事実を認めない。

確固たる決意を胸に秘めていると、ここで一際ひととき歓声が轟き叫んだ。試合は大きな展開を迎えようとしているらしい。より眼を凝らしてを湊さんを見守ることにした。

一撃を加えられていた男の選手は、少し動きが鈍っている。握っているあいくち匕首と呼ばれる短剣のような物を、急所は避けて湊さんに高速で振っているもの――

「……っし」

それを湊さんは幾分その短剣より大きな刀で、見事に振り捌いていた。その後大きく間合いを開けるため、力を籠めて打ち弾く。

距離を少し離され、再び高速で間合いを詰めようと男子生が動き出す。

湊さんの動きは、まるで男子生を鍛錬でもするかのように華麗だった。

左腕の適所に振るってくる匕首を、今度は腕を引いて体を極限ま

で捻り、紙一重のところでは避ける。回避できたかと思うと、湊さんはそのまま猛然として打ちかかりにいく。

虚を突かれた様に男子生は一筋一筋を捌き、体勢を整えようと奮闘。

もともと短剣というのは“ソードブレイカー”——言うなれば剣を捌き追撃を加える為の武器、というのが始原とされている説もある。そういう動作をするのは容易いのだ。

だがその男子生の捌く以上に湊さんは怒涛のラッシュを加えている。ハッキリ言って、アレを全て捌いて避けるというのは酷な話である。

男子生もそのように思ったのか、一度大きく弾く様にして距離を離す。

——まさにその時、このタイミングを狙っていたかのように、湊さんが瞬間的に刀を突く。

その打突の速度は、学園随一を誇って良いほどのスピード。ハッキリ言って。俺の眼では構えたモーションまでしか把握出来ないでいた。

だが男子生はその直線的な攻撃を読んでいたのか、短剣で上手く打ち弾く。目映い火花が飛び散り、鉄の剣戟がこれまで以上に響き渡る。

そこからは男子生の短剣打突ラッシュ。足や腕、今度は容赦無しに頭や胸といった急所へ、ヒ首握る腕を急かしていく。

湊さんは最初驚いたようにして、攻撃を剣で弾いて避ける。しかし全ては打ち弾けず、多少腕が剣先によって切れているようにも見えた。

ここで決着が付くかと思われたが――

徐々に慣れていったのか。落ちる木の葉の如くして躲しに躲しにくる。遠くからでよくは見えないが、スピードに慣れ、全て瞳で捉えきれているようだ。

痺れを切らした様に男子生は一瞬で湊さんの死角へ移動し、そこから首元に一閃。

だがそこで、フツと彼女の姿が一瞬の内にして、男子生の目の前から消える。

……理由は重力に身を任せ、体を地面へと追いやったから。

この切り替えは、男子生にとっては呆氣に取られる程のテクニクだったのではないだろうか。

そんな体術に富んでいる湊さんは、強引に左ターンを決め込む。極度の遠心力が刀に因ってかかっていると思われるが、そこは鍛えている体。そんな生半可な事では崩れはしない。

そしてその遠心力を保ったまま、大ぶりに横から刀の一太刀を振る。眼を見開いたようにして男子生は、その見事な反射神経を用いて一撃を耐え忍ぶ。

しかし勢いはもろに喰らってしまったようで、苦痛の表情を浮かべて後退していく。

――だが、それが大きな命取りとなったようだ。一瞬で間合いの型を成した湊さんが、地面を滑るようにして男子生の元へ動き出す。

息づく暇さえ与えないような速度で姿が消えたかと思うと、その影は男子生の元で重なり合う。

彼女の表情には、まるで冷酷で、獰猛な笑みと、修羅のような形相が刻まれていた。

空間そのものを切断するような刹那の間に、虚空を貫かぬかと切り裂かん音が三つ。淡い銀箔の刀身を煌めかせては即座に引き、そして振るい。入合いをこれぞとばかりに魅せつける。

それは決して大きく無い音ではあったものの、誰でも容易に聴き取れるほどに鋭利さを兼ね備えていた。

その場面には多くの生徒が声を鎮め、見惚れるようにして茫然と口を開ける。

数メートル程通り過ぎ、慣れた手つきで左右に刀を前方に振るうと、湊さんは時代劇さながらに鐔を滑らせて納刀した。

——その動作を終えたかと思うと、男子生が膝からゆっくりと崩れ落ちる。

息を執拗に吐き出し、苦しそうに主に腹の方を抑えながら体を震わせて抱きしめる。

「止めておけ……。いくら軽くとは言え、水月や嵐門、丹田を打ち当てたのだ。それ以上は動けまい」

凄然、かつ凜とした声で諭すように男子生に言葉を紡ぐ。

遠い観客席であるここまでその声が聞こえたのは、途中から周囲が声を出していないから。それほど先の戦闘は高レベルで、眼を見張らされるものだったのだ。

男子生は悔しそうに、痛みに歪む顔から闘心を消し去り――

「リ、リザイン……」

苦痛混じりにそう言い、審判が勝敗を判定したかと思うと、壮大な観衆の声がフィールドを包み込んだ。

「す、すごいですっ！ あの一年生の男子生も凄かったですけど、それ以上に湊さんもっ！」

「湊執行のパフォーマンスには、いつも心を踊らされるね。あんな無茶な動き、どうやってたら出来るようになるのか知りたいものだ」
加奈子と楓夏が嬉々とした声色で呟く。

確かに俺も結構見入っていた感があった。流石はプロ、というべきか。

接戦のようには見えてはいたが、実は湊さんは一切“顔面や足元に攻撃を加えていない”。

つまり狙っていたのは胴体と腕だけだ。その条件を踏まえてこの戦闘を思い返すと、やっぱり一枚も二枚も上手だったように思えた。椎奈も同様に思っているのか。小難しい顔を浮かべながらも、しかし嬉しそうに湊さんに激励を送る。

「ねえ桜庭君。あの水月とか嵐門っていうのは……？」
そんな質問してきたのは悠斗。多少府に落ちないような顔をしている。

「ああ。水月っていうのは鳩尾で、嵐門と丹田っていうのはへその緒から二寸程上下にある場所だ。

どこも全部急所で、軽くでも突かれればかなり痛いところだが……試してみるか？」

「いや、いいよ！ 遠慮しておく！」

手をブンブンと振りながら、俺の提案を最大限に却下してくる。

「うち、つまんねえな。消化不良とかにも効くんだぞ？ いやマジ

で。

そんな風に思っていると随時アナウンスが聞こえてきた。どうやら二回戦が始まるらしい。

いつ純一は出るのかなあ？ と、俺は少なくなってきたポップコーンを沙希の口元に運びながら思案した。おもいな

第廿漆話（後書き）

誤字脱字など無いようにしていますが、あつたらごめんなさい。

それでは次話でまた！

第廿捌話

午後十二時三十六分。

昼時となつて、今は小休憩中。

「そついえば、加奈子ちゃん遅いですね……」

「そのようだね。加奈子財政は仕事が早いのが売りだと言つのに……。何かあつたのだろうか？」

俺の隣で、椎奈と楓夏がそんな事を呟きだす。

その話題のネタとなつてゐる加奈子は、二十分ぐらい前に――
「私が一番年下なんで、みんなのお弁当、買つてきますよっ」
なんて言つて、俺たちの制止も聞かずして立ち去つていた。

（……“気になる事”もあるしな。ちよつくら探してくるか）

「あ、俺ちよつとトイレ行つてくるわ。……楓夏、沙希を持つててくれていいか？」

「了解したよ」

膝の上に乗つてゐた沙希を、慣れた手つきで楓夏の膝元へと動かす。

機嫌、というか何かしろの気分を損ねたようで、不吉な目線を俺の方へ向けてくる沙希。

（――コイツにはバレてたか？ 流石だな、ホント。連れて行けと言わんばかりに覗いて来やがって……）

そんな風に若干畏怖じっかんの念を覚えながら、俺はヒラヒラと肩越しに二人に手を振ると、トイレの方向――の奥にある転売スペースへと向かった。

着いてみると、案の定というか、想像通りの光景に半端ない落胆を覚える。

「ねえ、いいじゃんか加奈子ちゃん。俺たちと一緒に観戦しようじゃないか？」

「離してって言うてるのが分かんないの！？ そんなに耳が壊滅的に腐ってるなんて思わなかったわよっ」

「……あゝ あ？ いくら温厚な俺らでも、そこまで言われちゃ力チンと来るんですけど？」

「だったらどつか行きなさいよっ！」

「加奈子ちゃんは、悪いことしたら謝るってことを知らないのかなあ？ ——こりゃ僕らがじっくり礼儀を教えてあげないと」

はあ、やっぱりか。そんなこったろうと思った。

ちようど一時間前から、舐めまわすような目線で俺たち——主に白鷗会女子メンバーを覗いてる奴らの気配があったことを、俺は気付いていた。

学年は二年か三年のようだ。一年の奴ならば、多分コイツの実力にビビって、こんな風に絡んだりはしないだろうから。

そしてこの視線には、沙希も気付いていたようだ。多分彼女にとっても、気持ちは良くなかったのだろう。まるで「私が懲らしめる」みたいな目線で俺を見てきやがって……。

だがアイツが懲らしめてしまうと、間違はなく加奈子を取り囲ん

でいる三人組男子は病院送り。そうさせないためにも、俺が来た訳である。

しかし考えごとはここまで。不穏な空気が徐々に集^つってきており、そろそろ助けてやらないと、男たちが本格的に加奈子へ手を出しても可笑しく無くなる。

「ハイ、ちよつとすみません」

溜まりつつある傍観者を退けて、俺はその中心を掻い潜りながら目指す。

「お前、いい加減にしろよ？　ちよつと可愛くて実力あるからって調子乗んじゃねえよ？」

「ッハ？　だったら私以上の実力を付けなさいよ。この万年ヘタレ」「ふざけんなつつうの。幾ら温厚な俺らでも、そこまで言われてヘラヘラするとも思ってたんのか？」

「——っ！　うつさい！　早く消えて！」

「このアマあ……。もういい、一回殴って黙らせようぜ」

そう言つて男子生が拳を軽く握り、腕を引くモーションを見せつける。

「っひ！」

加奈子が怯えて蹲^{ひづくま}ろうつとした瞬間、その男の拳は彼女の右頬へと向かい——

「男が女に手え挙げるなんて、お前らクズすぎんだろつと！」

本当に残念に思いながら、俺はその男の腕を掴んで勢いを消してやる。

「っ！　お前誰だよ！」

「うつせえから黙つて地面とイチヤイチャしとけ」

驚嘆している男の腕を、そのまま力づくで一回転さえ、背中から

無理やり突き落とす。

「ツガ……ウウ」

ピンポイントに背の中心から落ちたようで、若干息苦しそうに痛みを堪える。

まあ、そんな事してるからだな。良く言えばご愁傷様、悪く言えばざまあ。

「桜庭先輩っ！」

「ヲイ、絡まれてんなら走って俺らのところに逃げるとか、そういうの考えないのかお前は」

「あ……。ご、ごめんなさい」

嬉しそうに寄って来た加奈子を一喝し、少し反省させることにする。

「学園内で勝手に能力や武器で手を加えるのは禁止されてんだから、男子に劣るのは当たり前。次からはすぐに俺か椎奈んここに来いよ」

「はい、すみませんでした」

「弁当は買ってるよな？　おぼつかないなら戻るぞ」

そう言って、恐怖で少し覚束ない足取りの加奈子を支え――

「……待てよお前。もしかしてヒーロー気取って、のこのこ帰るとか言わねえよな？」

「……。うち。良い感じに逃げ切れそうだったのに……」。

残念ながら、倒れている奴を含めた三人が俺の方に、微量な殺気を交えて睨んできている。

「っで、何ですか？　俺、そんなにお前らみたいに暇じゃないんだけど」

「俺らの相手を勝手に搔っ攫って、よくそんな事言うじゃんか」

「意味分かんねえな。俺らの相手？　っは、笑わせるじゃねえか。お前らが嫌がる女を勝手に引きとめてただけじゃね？　モテない男は大変なこと」

「……喧嘩売ってるよな？」

「さあな。そう思ってもそう思わなくても俺には関係無いし。……だがな」

振りかえって殺気をちよびつと解放する。只それだけの事に、若干驚いたように男たちが顔を顰めるのを確認し――

「お前らが本当に相手出来るんなら、相手してやるよ」

静まりかえった空間に、消え入るような声で諭すように言い放つ。

「っへ、言ってくれんじやんか」

「こりゃ、本格的に体に教え込んでやらねえと……」

「ボコボコにしてやらあ……！！」

「……っぐ、ふはっ！」「」

ハッキリ言わせてもらおうじゃないか。

めっちゃくちや弱ええええええええええ。

「お前ら、よくそんなに喧嘩しようと思ったな……」

それは正しく瞬殺、そう言わざる得ない程の速度――というか時間だった。

文章にしたら、多分三行ぐらいしか空白空いてないんじゃないか？　ってぐらいに僅かな一刻。

とりあえずしゃがんで、近くに転がっている男子生の頭をペチペチと叩いてやる。

おおつ、めっちゃ睨んできた。怖い怖い。

「……桜庭先輩、今どうやって倒したんですかっ！？　ハッキリ言
って“見えなかった”んですけど!？」

何故か戦慄を覚えたように、不可解な顔持ちを浮かべて加奈子は
俺にそう呟いてくる。

「ん？　ああ、今のは俺の家に伝わる『俊歩』ってやつで移動して、
腹に一発入れてやっただけ」

二式　瞬息　でも用いているこの技法は、俺の家に古くから伝わ
る戦闘時用移動方法。

神力を少量、足元に付与して速度を“神速へ誘う”というものだ。

——ただこれは距離感を掴むのが、ハッキリ言ってかなり難しい。
ここまで物にするまでに、兄は五年、俺は七年の歳月を消費したの
だ。

理由はとにかくスピードが速過ぎて、どこで付与を止めれば良い
か分からなくなる所。家で練習してた時に、壁にめり込んでしまっ
て三回ぐらい病院送りになった事があり、それ以来外でやるように
したのも良い思い出だ。

そう言えば、沙希も鬼女を倒す時に使っていたような。

——っと、脱線して少し過去の回想に入りそうになったが、そん
な事は現在に於いてどうでも良い。

呻いている男たちに近づき、若干の闘心を少量の殺気と併用させ
て。

「と、言っわけでお前ら……“失せる”」

強調するように、笑顔で言い聞かせてやる。

「ひ、ヒイイー!!」

「すみませんでしたっ!!」

「っちょ、マジ魔王!!」

「ヲイ、ふざけんな最後の奴! 魔王とかどういう事だ!」

最後の問いも虚しく、観衆を除ける様にして脇目も振らず逃げる男たち。

——いくら何でも、格好悪すぎだろ。

魔王とか言う悪口にも怒れなくなるほど、俺は酷く残念に感じながら彼らの背中を眺める。

ついでに集まってきていた人の群れに、一言物申す事にした。

「お前らもさっさとどっか行け。見世物じゃねえんだから、な」

面倒くさそうに俺が諭すように述べると、一目散に群衆は、まるで犬に追いかけられる羊のように即座に散っていく。

……あれ? そんなに怯えるよう逃げなくても。

そんな風に、途轍とてつもない悲しみに浸っていると——

「本当にありがとうございますっ、桜庭先輩!」

日頃からあまり慣れていないのか、不器用な感じに俺へ再び感謝する加奈子。

「そんなに気にすんな。別に俺は弁当が早く食べたかっただけなんだよ」

バツが悪くなった俺はそう言っつて、加奈子の両手に握られているビニール袋の片方を、取り上げるようにして持ってやる。

「……先輩って、感謝されるの苦手なんですな」

「うるせー。どっちかって言つと、お前も俺と同じ分類カテゴリーに入るだろ

うが」

「若干そうかもっ!」

「若干じゃなくて、実際だろうが」

訂正を加えてやる。どう考えても、お前は俺と同等の人種である。

「ていうか桜庭先輩って、本当に強かったんですねっ?」

「ヲイ、何故に疑問形だ。それは喧嘩を売っているとみなして宜しいか?」

「女の子に手を出すの?」

「……いや、出さないけど」

くっそ。あのニヤニヤ顔、めっさム力つく。

——いやしかし、印象を良い方向に向かわせて良かったと思える。後輩に舐められっぱなしじゃ、示しもつかないからな。

「でも、あの時はとても格好良かったですっ。——助けてくれて、本当に嬉しかったんですからっ!」

「……そ、そうか。なら、いいんだけど、な」

無垢な笑顔に、思わず顔を逸らしてしどろもどろに答える。

(まったく、コイツのこんな顔は初めて見たぞ)

いつもは俺——実際には男子全般には無表情、もしくは怒ったような表情しか見せていなかった加奈子。

それが突然あんな顔をされてみる。

ただでさえ可愛いのに、ハッキリ言って凶器である。

「どうかしましたか? 桜庭先輩」

口調も前と違って非常に大人しい。最初の口喧しいイメージは最早、俺の脳内では末端扱いになっている。

「……いや、別に」

「もしかしてっ——ツンデレ？」

「お前にだけは、絶対言われたくない！」

心境を変えようと、加奈子に毅然として言い放ってやると、

「さあ、私はどうか分かりませんよっ？　せーんっぱい♪」

再び木漏れ日のような柔らかい笑顔が浮かび、視線をもう一度逸らす羽目になった。

そしてこの台詞を言いたくなつたよ。

お前は何時からデレ期に入つたんだ……。

第廿捌話（後書き）

誤字脱字などないようにしてますが、あつたらごめんなさい。

【どーでもいい謝罪】

分かってます。分かってますよ。

キヤラ崩壊？もう分かり切ってるんですよ。

いいじゃないですか！書きたかったんですよ！

これしか思いつかなかったんですよ！

加奈子はお気に入りなんですよ！すみませんでした！

残念な脳内で申し訳ないです、ホント。

それでは次話でまた。

第廿玖話

「ただいま帰りましたーっ！」

「お帰りなさい、加奈子ちゃん。ちょっと遅かったですけど、何かありましたか？」

「少し変な奴らに絡まれちゃって……。でもつ、桜庭先輩が助けてくれたんですよ！」

「へえ、そうだったのか。——水もそんなに飲んで無いのに、何でトイレ行くのかと思えば、そういうことだったか君」

何やら女子三人で会議している中、少し遅れて席に到着する。

理由はアレだ。何で群衆が慌てて逃げたのか訊きたくなつて、偶々（たまたま）あの場にいたっぽい奴らを見つけたので、途中まで追いかけた——のだが。

人の顔を見て悲鳴挙げるなんて、どうかと思うんだよ……。

「そんな加奈子財政のヒーローは、何でそんなに落胆としているのかな？」

「気にしないでくれ。俺は嫌われ者なんだよ……」

袋に入ってた二つの弁当の内の一方を、楓夏に渡しながら悲壮感に浸る。

「そついえば加奈子。お前、怪我とか無えの？」

「大丈夫ですよ。すぐ桜庭先輩が助けてくれましたから」

そう言つて何度目か分からない類笑みを浮かべる。席へ帰る時も随時見ていたため、流石に慣れてきたのはいいが、それでも目を不意に逸らしてしまうのは仕様が無いだろう。

それはそうと、俺の隣でニヤニヤとこつちを見据えてくる輩がすごく面倒だ。

「何こつち覗いてきてんだよ。いいからさっさと飯を食え飯を」

「いやなに、あんなに昨日ぐらいまで険悪だったのに、今日はどうしたのかなあっと思ってるね」

「……唐揚げが上手いぞ。お前も食ったらどうだ？」

「あくまでシラを通すんだ。ま、僕は別にいいんだけど？」

つく、何もかも見透かしたような事言いやがって。覚えてろよ、楓夏。

そんな苦手意識を持つ彼女から飛び乗って来た沙希は、卵焼きに興味を示していた。

最近ハマっているオムレツの表面のようで、気になっているのだから。

「食べるか？」

「……」

こくり、と無言の肯定を確認した俺は、口元に箸を持っていき――

「あーん」

悪乗りでそう言うと、至って従順に沙希は口を開けたので、少し戸惑いを覚えながらも丁寧に口内へ突っ込んでやる。

「……うらやましいです」

「っえ？ 椎奈、今何か言ったか？」

「あ！ い、いえ！ 何でも無いんですよ！ ええ！」

多分何か呟いていたのだろうが、俺の問いを必死に誤魔化す椎奈。訊かれたくなかった事だったのだろうか？ それなら、これ以上の追及を止めておこうか。

「椎奈副会長。良かったら、席変わってあげようか？」

「え、ええ！　そ、それは何と云うか、えっと……」

「あ、私変わります會長っ！」

「っへ？　あ、ああそうか。なら変わるうじゃないか……」

「はいっ」

楓夏は椎奈に席替えを提案していたのだが、何故か楓夏と加奈子が変わることになった。

——若干、椎奈が楓夏を睨みつけるようにしている。

とりあえず、こんな光景は初めてである。

楓夏も目ですまないと訴えるようにして、加奈子と席をいそいそと変えた。

「悠斗。次の試合って何時だっけ？」

「えっと、次は1時からだよ。多分その後の第二試合ぐらいが、純一君だと思っただけど」

「ふんふん。そっか、ありがとさん」

漬物とご飯を摘まみつつ、感謝の念を送る。

その後白米を数秒程掻き込んでいると、加奈子が何かを訴える様な眼で覗いて来ていたので、なんだ？　と眼で応答する。

「あ、桜庭先輩。良かったら、こっちのハンバーグと先輩の焼きそば、交換してくれませんかっ？」

「んう？　ああ良いよ。ホレ」

箸で多少固まっている焼きそばを挟むと、一気に加奈子の弁当箱に突っ込む。

「ありがとございます！　えっと、それじゃあ……」

そう言って加奈子はハンバーグを箸で掴み、俺と同様に弁当箱に入れる――

のかと思いきや。

「先輩、あーんっ」

……あつれ〜？ 俺、こんな後輩的存在、全く知らないんですけど？

とりあえず、さ。

椎奈の視線が、すげえ怖いんだわ。ガクブルものなんだわ。俺の状態、蛇に睨まれた蛙^{かえる}なんだわ。

ちなみに悠斗とその隣の天海は驚いているようにしているし、楓夏なんてめちやくちや自虐的に笑う——っていうかはしゃいにいる。ちったあ助けようとか思わねえのか、お前は。どうにかしろよ、いやマジで。

しかも周囲の奴らも、片や羨望、片や殺気を含ませて見据えてくるでは無いか。居心地悪すぎである。

「あれっ？ 先輩どうかしましたか？」

「い、いや。何と言うか、今日は天気も良いし、一人で食べたいなあっ」と

……動転して、上手く誤魔化す理由が浮かばなかった。

「全然文が繋がってませんよ？ いいから、早くしないと落ちちゃいますって」

そう言っただけの眼前でハンバーグを強調させる。

「そ、そうなら食べないとな、うん」

仕様がなかったので、もはや諦めて口元のハンバーグを口に含む。すると、加奈子は大層雰囲気朗らかにして――

「美味しいですか？ 先輩っ」

こんな事を、近くで笑顔で言ってくるではないか……。

後ろの方で、殺気が微量高まった。俺はこの席を、みんなが帰るまで立つ事は出来ないだろう。

「……」

そして無言のプレッシャーを放つ椎奈は何なのだろう？

——もしかして、あれか？ 椎奈は加奈子に実はあーんされたかったとか、そういうことなのか？

あー、なら悪い事をしたかもしれない。これは後で謝っておくことにする。

「あ、あのー桜庭君？ 何か昨日から、桜庭君の周囲の人間関係が劇的に変化してるような気がするの、僕だけかな？」

「それは俺も一番気にしてる所だ」

うん、昨日と今日で一カ月くらいかけ離れたような、そんな次元の狭間を垣間見た気がする。

「さくらばくくん、良かったら、私のもどおーかなあ？」

ふざけた事を考えていると、甘ったるい声で悠斗を挟み、俺の口元に卵焼きを運んでくる天海。

めちゃくちゃ目が笑っている様な気がするの、決して気のせいではないだろう。

「……お前、確信犯だろ」

「えー？ 何の事が、さっぱりだよあー？」

っち、コイツだけは本当にム力つくな。殴るぞ、いや殴らないけど。

しかもまた別方向から殺気が増えたし。どんだけ俺を苦しめれば

気が済むんだよ。

「……」

なんて今後の展開を危惧きくしていると、沙希が首を伸ばして卵焼きを食べたではないか。

——ぐっじょぶ！ お前はマジで天使だよっ！

「おゝ美味いかそうか！ そりゃ良かったな沙希！」

わしゃわしゃと、どっかの動物博士のように撫でまわしてやる。
しかしそんな事にも嫌がらず、俺に身を委ねてくれる貴女様さきは、
絶対に女神ゴッデスだね！

「……っち」

聞き捨てならない舌打ちをした天海は、俺の目線が自分に向く前に、正面へ顔を戻す。

苦笑いして、悠斗はおにぎりを摘まみつつあった。

「桜庭先輩、鼻伸ばしてる？」

そう言っただけ来たのは加奈子。そこには以前のような、少し不機嫌そうな表情が浮かんでいる。

「んなことねえよ。ま、さっさと弁当を食べろ」

「……分かった」

しかし聞き分けは以前に比べ十分と良くなった彼女は、そのまま不機嫌な椎奈と同じようにして弁当を口元に掻き込んだ。

第廿玖話（後書き）

誤字脱字などないようにしてますが、あつたらごめんなさい^^

感想、批評などありましたら気兼ねなくお書き下さい。
それでは。

第参拾話

午後一時二十八分。

二回戦第一試合はあっさりと終わり、次はとうとう純一の出番となる。

その純一はと言えば――

『きゃー！ 純一君、こっち向いてー！』

『頑張つてー！ 応援してるよー！』

『ねえ、こっち見て！ ねえったらー！』

『カッコいい所、期待してるよー！』

『っは、ははは……。どもー……』

めちやくちや引き攣った顔を浮かべて、女子の声援に応えるようにして手を振る。

アイツに今日、近づかなかった理由はこれだ。ていうか近づけなかった、とでも言うべきか。

野次馬が奴の周りを朝から囲んでいて、それどころでは無かったのだ。本当に純一がメンドそうだ。

「た、大変そうですね、純一君」

「君がそう言うくらいなら、とても大変なんだろうね、純一新副会長は」

椎奈の苦笑に、その隣にいる楓夏が同意するように応える。

聞いたところ、椎奈――というか倉橋姉妹は人気者らしく、学園のアイドル的存在らしい。

まあ分かると言えば分かる。容姿は淡麗たんれいであるし、実力もプロでピカイチだ。

これで人気が無ければ、とんだ捻くれ者が厭^{いや}つたらしい奴に違いない。

その人気者で人の相手に慣れている椎奈がそう呟くのだ。ハッキリ言って、純一は御気の毒なくらいに面倒な人間関係を築きつつあるらしい。正にご愁傷様である。

「んう？ 桜庭君、純一“新・副会長”ってどういうこと？」

「……さあな」

そんな楓夏の発言に反応して、悠斗が俺に質問してくる。

別段として純一が白鷗会に入った事を言っただけでいいと思うが、その次は絶対俺の方に矛先が来そうなので、黙っておく事にした。

「あゝ、わたしも、気になっちゃうな」

「うるせえから前向いて純一にエール送っとけ」

天海は面倒だからパスだ。コイツだけは容赦ならん。

ギリリと一瞬だけこつちを睨んだかと思うと、すぐにニコニコフエイスを作って前を向く。

……ちよつと怖かったのは秘密だ。

ま、それ以上に周囲の殺気染みた視線が怖いけどなあ。

「先輩？ どうかした？」

「いやさあ、なんか背筋が寒いなあって……」

こんな量の殺気をずっと浴び続けるのは初めてだったので、鳥肌が徐々に立ちつつある。

「あはは、もしかしてちよつと冷えました？ じゃあ少し擦^{こす}ってあげます」

そう言っただけで俺の背中をスリスリと優しく撫でってくれる加奈子。

ああ嬉しいよ。大層とても嬉しいんだ。嬉しいのだが……。

——それで殺気を増やして、俺の背筋を極度に冷やしていくのはやめてくれ、頼むから。

しかし、そんな人の好を直球的に無下にするのは躊躇よしみわれるため、敢えて目線で遠まわしに訴える事にする。

するとその視線に気付いたのか、こちらを見つめてきた加奈子。そのまま俺から眼を逸らさず、ずーっとこちらを覗いてくる加奈子。

——もつと背筋が冷え出したので、不意に逸らす事にした。

さあ『人式』第二回戦第二試合！

二年F組の代表は、今回批評者としてお招きしている東雲梓さんの弟子、要純一選手だあ！

『きゃあああああああ！！！！』

わお、すごい声援です！そして対するは、去年一年生ながらもベスト8に残った強豪選手、二年X組の坂田昌平君です！

いやあ、何ともこのバトルは見逃せません！お二人方、どう思われますか！？

どちらも頑張ってくれる事を願います

弟子、ここで負けたら“アレ”、二本追加だからね

「そ、そりやないですよ師匠！」

おおっと、非常に“アレ”が気になる所ですが、時間が無いのでそろそろ試合を始めさせて頂きます！ 審判の先生、宜しく願いますね！

「先輩、“アレ”って何でしょうかね？」

「あゝ、一応分かるっちゃ分かるんだが……」

正直に言つて、絶対に思い出したくない。

「大丈夫かね君。顔色がかなり悪いようだが？」

「あ、えっと！ お薬買つてきましようか恭介君！？」

「……いや、ちよつと昔の暗黒史を振り返つてただけだ。ていうか椎奈落ち着け、そこであたふたしていると周りに迷惑だ」

「え、でもでも。もしかしたら風邪で。ああ、もしかたら肺がんとか白血病を——」

「んなもん市販の薬で治るか」

余程心配してくれているらしい。それはありがたいが……もうちょつと冷静さが欲しい。

「そ、そんなに恐ろしいですか？ “アレ”って」

本日二度目の戦慄を覚えているような加奈子は、若干顔が引いている。

「……ああ。何しろ梓さんが本気で作つた式神二体と対峙する奴なんだが、相手の武器は、ダメージあるのに傷が残らないっていう不気味な得物で、しかも——」

ああ、駄目駄目。もうこれ以上は駄目だ。

トラウマも心的外傷^{トラウマ}。アレは最早、訓練じゃなくて軽く拷問染み

ている。

それを『一』足す『二』で『三』セットもやらせようとしている梓さん。

貴方は悪魔ですか？ と問いかけたくなる。

——だがしかし、そんな言葉は純一にとって大きなプラス効果を与えたようだ。

澄んだ眼は敵の芯を捉えており、闘心が体中から迸っているように見える。

先程の間の抜けた立ち振る舞いは、脅し（？）によって見違えるほど隙が無くなっており、その変わりに殺気がどこからでも垣間見えるようになっていた。

「……流石だな、梓さんも」

アイツの性格を良く解読出来ていると思う。普通の奴ならテンシヨンダウンでやる気ゼロになるか、逆にテンパってお疲れ様の二択だ。

しかし純一の真価は、追い込まれば追い込まれるほど燃える、いわば火事場力が強い所なのだ。それはアイツとよく絡んで無いと分からない事でもある。

それほど純一と梓さんの交友関係——というか師弟関係が優良である事は、……多分俺しか気付いていないかもしれない。もしかしたら、学園長ぐらいなら分かってるかも知れないが。

そんな風に軽く分析を行っている内に、開始ホイッスルがフィールドに木霊した。
こだま

ハッキリ言ってしまったえば、本気になった純一は終始からして圧倒。相手の武器——チャクラムと投げナイフという暗殺的得物は、純一の放つ光弾によって、悉く蹴散らされている。

苦々しい顔を浮かべている相手を軽く見据える純一。若干焦りも見え始めている。

当たり前と言えば当たり前だ。今まで努力して習得してきた攻撃を、見るも無残に全て打ち払われているのだ。これでもとも思わない、という方が逆に可笑しい。

そんな男子生の元に、純一はまず相手の右側にブラスターより浮動弾を配置する。

怪訝そうに遠くへ離れて、手元へ返って来たチャクラムを浮動弾の方へ、排除しようと投擲した。

——その瞬間、浮動弾は淡い光を放って飛散し、周囲に白煙をもたらす。

こんな神力の使い方は、まず普通の奴じゃ思いつかないだろう。

(……梓さんか？　こういうのを教えるのは)

あの人の神力の扱いは、多分今まで出会って来た悪鬼抜いと比べ一際長けている。

何しろ自身の体に神力を纏って、そのまま悪鬼に打ち込むような人だ。

多分、この白煙もその応用なのだろう。細かい神力の欠片が、明るい日差しに照らされて燦々(さんさん)と光を放っている。

相手は一先ず視界を保つため、まず白煙より飛び出す。

黙々と男子生を包み込んで行こうとする煙。飽き飽きしたような感じに、未だ煙の影響を受けていない場所へと移動——

したところで、男子生は見事に制動された。

煌々と光を放って彼の足元で輝いているのは、以前天海を止めるのにも用いた、近代儀式魔術の基本儀式紋様……六芒星である。

方法としては至って簡単だ。煙に目線が向いている間に、微量の神力を男子生の避けそうな所へ配置する、ただそれだけ。

しかし単純で有るが故に、それに気付かないという事も多々あることは確かだ。所謂、灯台もと暗しという奴である。

仕掛けた白煙が晴れたかと思うと、純一は即座に男子生の元へと近づく。

動けない男子生は目元だけ動かし、忌々しく純一を覗いていた。

——おやすみ

微かに純一の口元が動き、薄ら笑みが浮かんだかと思うと、ペネトレイターを持つ右手の手首を捻り返す。

移動する勢いをそのまま攻撃へと移し、衝掌しゅうしょうを加える要領でその鋼鉄部を勢いよく射ち貫いた。その攻撃は正に容赦など無い、無慈悲な一撃。

ッガ！ と男子生は軽く呻いたかと思うと、そのまま直立したまま意識を失った。

試合の終わりを告げる合図が響くと、観衆と女子が大きく轟き叫んだ。

全くを以って羨ましい奴だよ純一は、ホント。

第参拾話（後書き）

誤字脱字などないようにしてますが、あつたらごめんなさい。

とうとう30話ですね。

長かったような、短かったような。

とりあえず、これからよろしく願いますね。

感想、批評などありましたら気兼ねなくどうぞ。

それでは次話でまた！

第參拾壹話

「ふーん、まあアイツっぽいと言えばアイツっぽいかな」

武器的に、濃密な神力を当てる攻撃としては、純一の得物はなかなかの代物ではあるが、多分威力としては刀とかそういう近接武器と比べて低いであろう。

その引けを、上手くテクニクだけでこの試合を物にしたのだから、とても称賛される事である。

（つま、行動があからさま過ぎて、敵次第ではバレるかもしれんな……）

俺ならまず白煙を払って敵の位置を確認するか――

「すごいですねっ、あの人も。……でも、これなら多分桜庭先輩の方が強いんじゃないですか？」

と、今後の戦闘シミュレーションをしていると、横で加奈子がそう呟いてくる。

「いや、分かんないぞ。アイツは何しろ梓さんの指導を受けてるんだからな」

考え方や動きなどは、結構梓さんに似ているような気もする。

しかしその中にも純一らしさが入っていて、ハッキリ言って展開を読み間違えれば、こちらの負けは確定するであろう。

何しろ純一の戦闘方法は、まず相手を行動不能にして仕留めるものだからだ。大百足戦では多少ハツちゃけていた部分もあってそんなまどろっこしい事をしなかったが、観察するにそういう風に梓さんに教え込まれているようである。

その動きは――正に狩人。

敵を追い詰め、そして最後は敵の望みを無感情にも撃ち弾く、まさに狩獵ハンティングと同じ要領である。

「……ま、負ける気はそうそうねえけど」

静かに呟いたその確固たる意志は、わあっとどよめいた観衆によつて打ち消される。

何があつたのかと思ってフィールドを覗くと、その人物がいる事を確認して成る程だと簡潔に思い知る。

「さて、お前はあの頃からどんだけ成長してるんだろうな……皐月」
最も、と言つて良いほど何度も子供の時、本気で手合わせを交わし合つた彼女。

懐古していると、ふと目線が交錯した。すると此方こちらに笑顔で手を振ってくる。

「……ヲイ、加奈子。こっちに手え振つてきてるぞ。振り返してやれ」

「え？ あ、はい」

怪訝そうに俺の言葉に従つて、皐月の方に手を振る。

——少しだけ目が据わつて、再び手を振り返してきた。

「はあ……。これ以上悪寒を増やしたくは無いんだけど、なあ」

それでも後で皐月に色々言われるのは面倒である。

仕方がないようにして、俺は手を振り返してやった。

満足したようにウィンクした皐月は、目線をフィールドに上ろうとしている敵選手へと向ける。

「……先輩、大丈夫ですかっ！？ 何か震えてますけどっ！」

「あ、ああ。いや、こんな多くの殺気は初めてというか……」

「へっ？ 皐月がどうかしましたか？」
「い、いや何でもないから、気にするな」

あー、こりやちよつと後で散歩がてらに視線の元を排除するかな
じゃないと面倒で仕様がな

そんな危ない想像をしていると、戦闘前の焦がれる様な、そして
静かな空気がフィールドを包んでいた。

その理由は氷の微笑を浮かべている皐月にあった。

いつものお気楽な気配など一切漂わせず、一心不乱に闘心を見せ
つける彼女に、驚いたような顔をしている敵選手、そして周り観衆
アイツのこういう、やる時にはやるような雰囲気は嫌いじゃない。
きちんと時と場合を見極めている所は、本当に称賛ものだ。

（ま、頑張ってくれよ、皐月）

成長つぷりに淡い期待を持ち、試合の眺めることにした。

相手の選手は、神魘しんぱつで無難な刀を具現化する。

そんな中で皐月は、神経を研ぎ澄ます様にして目を瞑り――

――神魘しんぱつ

口元を小さく動かしたかと思うと、彼女の両手に淡い微光が集ま
っていく。

その量は尋常では無い。これぐらいの神力を用いる武器は、当然
と言つていいほど多くの逸話や歴史に残っている逸品である。

無論彼女のはそれであり、そして光が収集を終えたかと思うと、
彼女の体を優に超える一本の薙刀なぎなたが形成されていた。

——名は岩融。いわとあし

これは武蔵坊弁慶むさしほうべんけいが使つていたとされる七つの武具の一つであり、
柄は150センチ、刀身は100センチもある……言つてしまえば、
常人では扱えない武器だ。

弁慶が橋の元で千本の太刀を集めていた時、この武器を使つてい
たと知られている。

声を張り上げて相手が刀を振るう——直前で、既に皐月の薙刀は
大ぶりに下から動いていた。

咄嗟に右方に避けたかと思うと、そのまま横に一閃を加える皐月。
激しい剣戟が響き渡ったかと思うと、相手は選手は一気に振るわ
れた方向へ吹き飛んでいく。

「……相も変わらず、力だけは有り余つてんな」

小さい時よりあの大きな薙刀を振るつてきているのだ。当然筋力
が付くし、持久力も自ずと付いてくるだろう。

吹き飛ばされた相手は、あの一撃を右手一本、刀を握っている手
で受け止めたようで、かなり痺れているようだ。

しかしその構えていた刀を左手に持ち替えると、今度はステップ
を小刻みにして入りのタイミングを掴もうとしている。

「へえ、両手利きスリッチ、ね」

それはなかなか脅威と成りうる。戦っている間にも相手が構え
を変えたりすると、途端に慣れたテンポが崩れ落ち、そのまま
グダグダになってしまうという事は、ざらにある。

「やああああ！！！」

大声を出して自分を戒めた相手は、既然として刀を振りかかりに行く。

それを無言で抑えていく皐月。その目線は絶対零度、まさしく相手を仕留める敵^{もの}としか見なししていない冷え切ったものだ。

幾分と振りにくい薙刀を最短動作だけで受け流していく。刀の斬撃は皐月にすら届いておらず、全て彼女の手前で撃ち落とされている。

武蔵坊弁慶はこの薙刀を、のちに主である源義経^{みなものよじつね}を護るために用いた。

それはつまり、“防御特化”であるということ。弁慶は死すまでこの薙刀で全ての攻撃を撃ち弾いたのだ。

痺れを切らした選手は一旦落ち着こうと、少し距離を離れた――

正にその刹那、皐月の怒涛のラッシュが繰りだされていく。

まさしく彗星の如く、とはこういう事を言うのだらう。大きな威力のある攻撃が、流れるように細かく鋭く相手を追い詰めていく。狙い目は全て刀を持っている手、頭、胴などと言った急所ばかりで、その動作からは多大な努力と器用さが簡単に窺^{うかが}うことが出来た。受ける方も凄いと思われるが、顔には苦痛の表情が垣間見える。あの攻撃を受け流すといっても、勢いと力の流れはもろに喰らっているのだ。並み大抵の痛みではないだらう。

少し疲れが見えだし、薙刀の刃が肩を掠めて反応が鈍る。

その瞬間を、皐月は見逃さなかった。即座に攻撃を切り返し、空いた敵の首筋に軽く峰^{みね}で打つ。

がはつと悲痛な声を放ち、相手が前方に揺らめいたかと思うと、クルッと皐月は体を左に回し――

残酷にもその長い柄を、深々と敵の腹へと打ち貫いた。その速度と突いたタイミングは正に手本そのもので、近くの観衆も「すごい……」などと言った声を放っている。

相手の眼からは光が消え、そのまま前のめりに突っ伏した。

「うつわ……。皐月容赦無いわね」

相手選手を憐れむように、皐月に対して言葉を放つ加奈子。

「しかしそこが皐月会計の良い所だろう？ 力を出し惜しみせずに正々堂々としていて、なかなか良かったじゃないか」

「でも、皐月ちゃん、今日は至って張り切っていましたね。あの相手の人、大丈夫でしょうか……？」

「そ、それには少し同情の念を覚えるよ。かなり痛そうだった……」

どうやらいつも以上に皐月は本気だったようだ。楓夏が怯えるように肩を震わせていた。

しかしそれを、至って凄然と覗いて分析する椎奈は、なかなか肝が据わっているように思える。

そんな風に椎奈を思ってみていると、なぜか顔を赤らめてそっぽを向いた。

こういう所は本当によく分からない。俺が居なくなつて、結構性格が変わつたのだろうか。今更になつて、長い時が過ぎた事を思い知る。

「……おい！ きょーすけ兄さん！」

遠くから俺を呼んでいる声が聞こえたので振りかえると、そこには満面の笑みを浮かべている皐月がいた。

どうよすごいつしょ？ みたいな顔を浮かべて、あの大きな薙刀を軽々と振りまわしている。

とりあえず「すごいですごい」と苦笑いを浮かべながら口元を動かして手を振るうと、少し恥ずかしがるようにして皐月は神魃しんぱつの解放を止めた。

あーあ、また視線が増えちゃったよヲイ。

本格的にどうにかしないといけないなあ、と釈然としない考えを持って、俺は皐月の去ったフィールドに眼を向けて次の試合を待つことにした。

第参拾壹話（後書き）

誤字脱字などないようにしてますが、あつたらごめんなさい。

感想、批評などありましたら気兼ねなくどうぞ。
それでは次話でまた。

第参拾貳話

あー、はっきり言おうか。

とりあえず、もう殺気が物凄いだ。半端無さ過ぎて、もう気持ち悪いぐらいだ。

——ということで、そろそろこの悪寒の流れを止めようと思う。

「加奈子、ちょっと沙希持ってきてくれていいか？ トイレ行きたいんだ」

「うん、分かった……けど、あともうちよつとで純一先輩の試合なんで、早くした方がいいですよっ？」

「ああそうだな。つってもまあ、アイツなら次も勝つと思うけど」

そう言っただけで席を立ち、トイレの方向へ向かう。

ゴソっという物音が後ろから聞こえてきたので、何かと思って振り向こう——

とした瞬間、俺は本能的な警鐘に従って、振りむくのを止めた。

だってえ、気配が凄いだもん。ざっと探知しただけで数十人はいるよ、絶対。

（……俺が何したって言うんだ。どっちかって言つと、俺じゃ無くて加奈子とかが率先してだな——）

なんて思っても、彼らには俺の切実な願いは届かないのだろう。

（はあ、出来れば話し合いで終わらせてえけどなあ）

しかし予想とは見当違いな方向に結果いくんだろうな、と悲しい今後を懸念しつつ、俺は内トイレではなく、迷惑の掛かりそうのな

い外トイレに向かった。

「ぼぼぼ、僕たちの加奈子様と、なな、何べたべたしゆるんだすか
！」

『そーだそーだ！！！』

「……っは？」

すみませんけど、何語ですか？

「我々の加奈子さんを奪っておいて、その反応は何なんだ！」

『そーだそーだ』

「奪うって……、俺はただ、アイツと話してただけ——」

「“アーン”してたでしゅよ！　したでおじやるよ！！！！」

『グヌヌヌ！！！！』

「……さいですか」

何を言っても、最早無駄なようだ。奴らの耳には俺の声は届かん。

とりあえず、外のトイレに向かっていく途中に、後ろにゴソツて
来ていた連中らが一気に目の前に登場。せつかちな奴らだ。

そしてバンダナをつけた太めな奴と、眼鏡をかけた細い奴が四十
人ぐらいを先導して、現在に至るところだ。

「んで、俺はどうすりゃいいんだ？」

「決まっているだろう！　加奈子さんからの撤退と、今後一切の接

触を控えることだ！」

「ああ、それ無理。残念だな」

何しろ、俺白鷗会に入っちゃったし。今度からはアイツと逢おうと思わなくても逢うことになるだろう。

「む、むむむ！ それは我々、『加奈子ちゃんLOVE！ 同好会』の会員全てを敵に回しゅと見なしてよろしいでおじゃるか！」

「何でやねん」

突っ込みどころ多すぎて、突っ込む気にもならない。

「何でやねん、は貴様の方だ！ 貴様は幾多の罪を重ねてもいるんだぞ！ 自覚は無いのか！」

「幾多の罪い？」

何かやっただけ、俺。

ガリ眼鏡の言う事は端折りすぎて、なかなか分かりにくい。

「ほ、本気で気付いていないでおじゃるか……！ ナンバー四！ 罪状を述べるヨロシ！」

「イエス教祖！ 彼の者は加奈子様にまず第一接触^{フェーズ・ファースト}を果たし、その後隣の席に座ると言う神にも背く行動を起こし、あ……あまつさえ加奈子様から“アーン”という御慈悲をおおおおおお！」

「もういいでおじゃる！ そなたの悲しみはよく分かるでおじゃる！」

その後、デブバンダナと同盟員（？）達がこぞって泣きだした。ガリ眼鏡も目頭を押さえ、下を俯いている。

その光景は余りにも見るに堪えないぐらい、めちゃくちや気持ち悪い。

「フーイ。とりあえず、第一接触^{フェーズ・ファースト}って何だ？」

「加奈子様に視線を向けると第三接触^{フェーズ・サード}、加奈子様の横を通りすぎる

フェーズ・セカンド
と第二接触、そして加奈子様と会話すると第一接触だ！」

「そう言えば“スリスリ”も、してもらっていたでおじやるな！」
『こ、殺してー！』

俺も死にてえよ、めんどくせえ。

ていうか目線向けただけで接触とか、お前ら悲しすぎるぞ。まず意思の交換が出来てないし、接触とは言えねえだろ。

しかしコイツら、本気で目線向けただけで接触出来てると思ってるんだろうなあ。

…… 今後は面白そうだから、スルーしとくか。

「これほどの行為は神でも許されない所業、フェーズ・ゼロ第零接触かも知れないんだぞ！ 貴様、それほどの罪を重ねて…… 接触を控えないだと！」

「大人しく引いとけば見逃してやろうと思ったでおじやるが、もういいんす！ 同好会法則第4条、『抜け駆けする者には死の鉄槌を！』より貴様を罰するでおじやる！」

「ライ、何だよそのふざけた法則は」

デブバンダナが声を張り上げると、群衆各々（おのおの）が神魑を唱えたり、式神出したり、御札を構えたりしてくる。

無論、俺の問いかけは無碍むげにされた。

「お前ら、自分らがやってる事分かってんのか？ 立派な校則違反だぞ？」

「気にするな、何しろ生徒会と白鷗会のメンバーは学園選手権に大忙しだからな」

そう言ってニヤリと頬を上げるガリ眼鏡。

そこら辺は考慮の上で俺に迫ってきてたか。ちつと見誤ったか。

……ま、話合いで終えれるとも思ってたしな。それじゃと
りあえず――

「武器を構えたってことは、それなりに覚悟出来てるんだろっな」

今まで向けられてきた殺気を押し返す様にして、ドスを利かした
声を響かせて殺気を放つ。

あっちの集団の団結が、即座に崩れそうになる。

「な、何をびびってるでおじゃるか！ あっちは一人、こっちは三
十八人もいるでしゅよ！ 負けるわけ無いでおじゃる！」

「そ、そっだそっだ！！！」

『おおー！！！！！！！！！！』

へえ、あのデブ。なかなか集団の統制は出来てるんだなあ。ちょ
っと見直したかも。

再び闘心を露わにした同好会連中を睨み、俺は静かに告げる事に
した。

「それじゃあ――始めようか、お前ら」

重い足取りは、一気にそこから雷電のように、即座にトップスピ
ードへと至った。

「が、がはっ！」

迫って来ていた会員の一閃を真横に避け、腹に一発拳をお見舞い

する。

その後、直感的に左側へ避けると、元居た場所が爆ぜるようにして空気が破散した。

一瞬でその現象を引き起こした御札師の元へ向かうと、まずは衝掌で頭を揺らす。

「つぐ！」

肉弾戦にはあまり慣れていないのだろう。続けて水月に拳を挟りこまそうと思っただが、あっさりと気を失って地面へと身を寄らした。これで面倒な“術師”系統の敵は殲滅できたようだ。と言っても数が五人とか、言ってしまうえば案外少なかったから、というのが理由だが。

「同士の仇打ち！」

大声で突っ込んできた、コイツ馬鹿か？ と思える刀を構えた男子生を軽くないなす。

その後ムエタイさながらに延髄蹴りをお見舞いし、あっさりとブラックアウトさせた。

「おら、そっちにもプレゼント……だ！」

『うげふう！？』

その生徒を、俺の背後から迫ってきていた男子四人の方へ無理やり投げる。

中には体の至る所にダメージを負い、頭に当たって崩れ落ちる者もいた。

「な、何でおじゃるか！ 何故負けているでおじゃるか！」

「お前らがストーリーカー紛いな事してるからじゃねえの、か！」

“俊足”を用いて一瞬でデブバンドナの死角に入ると、脳髓に手刀を手加減してお見舞いする。

案外肉で入りにくいと思ったが、首元には少なかったようだ。見事に深く決ることが出来、そのまま前のめりに倒れる。

「つな！ 教祖！」

「お前も……寝とけ」

「つくそ、小癪な」

ガリ眼鏡に放った俺の手刀は、見事に交差された腕によって防御される。

おお、まさか防御されるとは思わなかった。

「いけえ！ 副教祖！」

「負けるな、副教祖！」

いつの間にか立っている方が少なくなってきた会員たちは、ガリ眼鏡の応援に回っていた。ふん、所詮はビビりか。

それにしても、コイツはなかなか動ける。

副教祖って何だよ？ とか最初思ったが、やはり“副”だけあって、実力だけは並み以上なのだろうか。

「俺たちの加奈子さんに対する愛は……誰にも負けぬ！」

「きめ……うおっと……！」

短剣を持っているガリ眼鏡の腕を弾き飛ばそうと思ったが、読まれていたようで即座に掌をひっくり返し俺の足元を斬りかかろうとしてきた。

とりあえず手首を抑え、軌道をずらして何とか短剣の一閃を回避する。

「……っし！」

一気に“俊足”で背後を取ると、デブ同様に手刀を――

入れようとした所で、ガリ眼鏡の姿が突如として目の前から消え失せる。

「うおっ！ やばっ！」

勘だけで俺は真横に避けると、一瞬で足元に逃げたガリ眼鏡の高速突きが腕を掠めた。

これは今さっき奏さんがやっていた芸当だ。確かにこれは不意を打てるようで、気付く時間と驚く時間の間に攻撃される事請け負いだ。

「よく避けたな貴様……」

「柄に死地をくぐって来た訳じゃねえんだよ！」

このような命からがらなイベントは、悪鬼被いになってから指では数える事が出来ないくらいにエンカウントして来ている。今更驚いていられない事だ。

俺はいつの間にか体ばかりに目が向いてるガリ眼鏡の、もろ空きしている足を勢いよく払う。

「つく！」

体勢が崩れた所で相手の腕を掠め取り、そのまま力任せに——昔、梓さんに習った一本背負いを繰り出す。

ゴスツと地面に鈍い音で崩れ落ちたガリ眼鏡は、どうやら背中と頭を強打したようで目を開きながらも軽く痙攣している。

多分、脳震盪にでもなっているであろう。

はい、ご愁傷様。悪く言っちゃえば、そんなキモいことしてるからだざまあ、だな。

「んな！ とつとつ副教祖まで……」

今日三度目の戦慄を覚えたような顔を見た俺は、驚愕している残党共に——

「これ以上何かするんなら……殺^やるぞ?」

申し分ないくらいに、言の葉に覇氣を含ませて優しく諭す。

『ひ、ヒイイイイ!!!』

これまた第三回目の集団逃亡の様子を確認する。

かなり疲れたが、やっとの事で緊張の糸が解けた。

体に倦怠感を覚えた俺は、その場に崩れ落ちるようにして座る。

——と同時に、幾分久しく体が震えだす。

「ああ、あんだだけ殺氣を浴びてたからか……。情けねえ」

震える手足を必死に抑え、死への恐怖を噛み殺す。

「たかがガキの喧嘩なのに、な。ホント、俺はつまんねえよ」

誰も居ない虚空で、そんな事を呟く事でしか自制出来ない自分が、
酷く悲しく思えた。

震えが落ち着いたのは、そこから十分後。

のしてる連中をどうしようかなあと、俺は後々の行動に対して物
思いに耽^{ふけ}た。

第参拾弐話（後書き）

誤字脱字などないようにしてますが、あつたらごめんなさい。
暴走しちまった……。

感想、批評などありましたら、気兼ねなくどうぞ。
それでは次話へ。

第参拾参話

「ういっす。ただいま戻りま——」

「遅いですよ桜庭先輩っ！ もう湊先輩の試合すら終わっちゃいましたよっ！」

「あ、ああ悪い。ちよつと絡まれちまって……」

少し遅れただけですごい形相で見られた。何かコイツに、悪い事したっけ？

だが最後に出た虫の息のような俺の言葉に、何故か加奈子はおどおどし始める。

「……えっ？ それってもしかして今さっきの連中じゃ」

「ああ、違う違う。また別の連中だ」

大丈夫だ、と軽く頭を撫でてやる。

——ちよつとだけ、加奈子の膝に座っている沙希に睨まれた気がするが、多分気のせいであろう。

「ん？ 大丈夫かね君。怪我は無いのかな？」

「傷一つ付いてねえよ。んで、コイツ等が主犯な」

そう言つて常備している撚糸ねんじで括りつけて連れてきた、主犯っぽいガリ眼鏡とデブバンダナを楓夏の近くに寄らす。

「ああ、君達は……。なるほど、そりゃ絡まれるに決まってるね」

「このキモイ奴ら誰なんですか？ 会長」

納得したように楓夏が頷くと、汚物を見る様な感じに二人組を睨みつつ、加奈子が暴言を放つ。

「コイツ等聴いてたら、間違ひなく自殺もんだな……」

「全くだ。口には気を付けたまえ、加奈子財政」

「え、何でっ！？ 何でアタシ気付かない内に説教されてるのっ！？」

酷く困惑しているが、俺と楓夏は笑って誤魔化すだけだ。

すると隣で話を聞いていた椎奈が、加奈子の元に行き、耳元で囁く。

「……。……っえ！ こんなキモイ奴らが！？ ていつか何時の間に同好会なんて出来たのっ！」

大層引き気味に、大声を張り上げて二人を蔑む。

——マジで身内以外には容赦ねえな。ハッキリ言って、これは酷い。

「んでよ楓夏。コイツ等、俺に絡んでくる時に武器を使って来た訳だが、こういう時、何か罰則とかねえのか？ 違反って事は分かるんだが……」

「武器を使って来たのは、この二人だけかね？」

「いんや、コイツ等の下っ端みたいなのも使ってたな。ざっと四十人ぐらいだった気がする」

そっいえば、三十八人とかデブバンドナが言っていたような……。

しかしどうでも良い事のように思っていたので、頭からはスッポリ情報が抜けきっている。

「四十人って……。き、君はもしかして、一人でそんな大人数を相手したのかい？」

驚くようにして楓夏が俺を見つめてくる。ついでに加奈子、椎奈、そして盗み聞きしている悠斗と天海もこちらを見ている——ような気がする。

「他に誰に頼めばいいんだよ。一人に決まってるんだろ。あ、言っとくけど俺は武器使ってるからな」

これは言っておかないと、俺まで罰則が――

「武器も使わずしてそんな大人数……。別に違反者を取り締まる時、白鷗会メンバーは武器使用を学園に許可されてるから、使っても良かったのにね」

な、何だと……。貴様、それを何故昨日言わなかった！

「君はつくづく面白い奴だなあ！　そうか、一人で相手したの！　あはは、それは傑作だよ！」

「お前！　そう言う大事な事はさっさと言っときやがれ！」

「はははは！　悪い悪い！　まさかそんな初っ端から君が絡まれるとは、思っていなかったからね！」

目元に涙を浮かべ、めちやくちや腹を抱えて笑っている。こういうの、なんて言うんだったつけ？　抱腹絶倒？

ていうか笑いごとじゃねえよ！　こっちは危うく病院送りになる所だったんだぞ！

良く見ると、加奈子も吊られて笑っているようだ。さらに付け加えると、天海も笑っている。逆に悠斗は、開いた口が塞がらないような滑稽な表情を浮かべていた。

「……コイツ等が……。恭介君を……。コイツ等が……」

すると何か、呪詛のように木霊する声が、何処かしろから響いてきた。

何かと思って、その音の発信源に目を向け――

「み、みんな逃げる——！！！！」

「うわっ！ どうしたのかね君！ 行き成り大声を挙げて」

「うるせえ！ 早く逃げねえと巻き添え喰らうぞ！」

「何を言ってるんだ君——」

「……来て、『雷上動』」

椎奈が囁くように呟くと、彼女の右手に高密度なライトエフェクトを帯びて、一本の“和弓”が形成される。

弓勢の強さは甲冑7枚を貫く程で、蜻蛉の羽根を射ることができ、百歩離れたところから柳葉を射て百発百中したというこの弓は、言ってしまうばかり伝説的だ。そしてあらゆる悪鬼より畏れられる代物でもある。

そして、コイツのかなりえげつない所と言えば——

「それは全てを滅す兵の力、我が手に光来し、変化を驚かせ……」
兵破『」

無条件に、伝説級の鎬矢かぶらやがセットで付いてきて、なお且つ弓の効果で威力が最大源に……って！

「や、やめる椎奈！ ここでそれ放ったらここら一帯が焦土になるぞ！」

——しかも真名まなまで唱えて具現しやがって！

いつも以上に禍々しくも煌々しい覇気が場を包み込んでいる。

「止めないで下さい恭介君。この二人は武器も何も持たない恭介君を、四十人掛かりで攻撃、しかも怪我させようとしたのですよ？」

情状酌量の余地はありません。今すぐこの兵破で殺るので、あしからず」

「何があしからずだ！ しかもニュアンスおかしかったぞ、“罰する”のところ！ いいから落ち着け！」

「私は至つて落ち着いていますよ。さて、滅殺の邪魔ですので恭介君は私の後ろで眺めていて下さい」

「落ち着いてねえ！？ ヲイ、ていうか誰か止めるの手伝——って、いつの間にか忽然と消失！」

気付かない間に俺らの周囲はぽっかりと穴が空いたように、人がポツクリと消え失せていた。

あいつら薄情過ぎんだろ！ 俺は尊い犠牲になれとでも言うのか！

「ではゴミ屑さん。十分に来世で反省して下さいね……」

椎奈の眼は、まるで死んだ魚のように虚ろで、何を言っても聞こえそうもない。

左手に豪然たる和弓を構え、右手に持つ兵破と共に、半月弧にその形を歪めていく。

（つくそ！ こうなりや……！）

頼むから通じてくれ！ と俺は昔の行動を信じ——

そのまま椎奈の後ろから、猛烈な勢いで抱きつき、そのまま制動させる。

後ろの方で『きゃあああああ！……！』という女子の黄色い歓声や、『うわあああああ！……！』という男子の絶望するような声が響くが、そんな事はお構いなしだ。

コイツを止めなければ、あの二人は現世からさよなら、そして椎奈は間違はなく牢屋送りになってしまう。

それだけは避けないといけないという気持ちだけが、空回りして

いた。

「……んな！　なななにやあ！」

何だか間の抜けた声を挙げたかと思うと、その反動で兵破を落としそうになったので、慌てて腕をガッチリ掴んで支えてやる。

再び声が後方から響いた気がするが、俺の耳では受容出来なかった。目の前の事に対して、酷く神経を注いでいるからである。

「椎奈よ、落ち着いて指示に従え。――まずその神々しい弓矢を、即座に消しなさい、今すぐう！」

「んっ……！　は、はいですう……」

耳元で囁くように諭すと、ピクつと体を動かし、赤面を浮かべもじもじしながら、驚くほど従順に俺の言う事を聞き入れる。

即座に神力で創られている弓矢が破散し、淡い微光を放って消え失せていった。

――危ないところだった。ホント、洒落にならんぞ。

「よし、それじゃこのままで聴け、いいな？」

「聴きますよ……はあ」

「まず、他の平凡な奴には、絶対に雷上動を向けるな。それは思っている以上に強烈で、凶悪な代物何だからな」

「分かりましたあ。えへへえ……」

ホントに聴いてんのか、コイツ？　ポワンとしてるけど、大丈夫か？

しかしこれ以上は言う事もやる事も無くなったので、とりあえず固く閉じていた腕から椎奈を解放する。

「……」

少しの間ぼーっとしていたが、いきなり二へらつと笑い、その場でしゃがみだす。

その行動はハッキリ言って歪こじで怖い。もしかして、頭でも狂ったのだろうか。

「いやあ、それにしてもあの頃と一緒だったな……」

京平兄はことあるごとに椎奈を怒らし、その度にこの無表情無反応無感情無慈悲な椎奈——通称、死無しうなモードに変化させていた。

その度に俺はこうやって椎奈の動きを限定させて、凌いでいたのだが……。

あの頃と同じようにして動かなくなったので、やった甲斐はあったなと一人で自己完結する。

「いやあ君、いきなりあんな事するなんて僕は驚きだよ。まあ、それで喰い止めたのも事実なんだがね」

「せ、せせせ先輩っ！ いきなり何やってるんですかつ！」

後ろの方から、若干頬を染めている楓夏と、思いつきり赤面している加奈子がいきなり何やら問いかけてくる。

「っは？ あんな事って何だよ」

「いや、それは……ハグというか、何と言うか」

「はぐう？ どう見ても、暴走しがちだった椎奈の動きを止めようとして、腕を抑えただけだろ」

「いや、しかしその後はまるで愛の囁きのように……」

「あいのささやきい？ どう考えても、あの二人を助けるために椎奈を諭しただけだろ。……女子がそういうの好きなのは知ってるけど、時と場合考えるよな」

俺がそう呆れたように言うと、楓夏と加奈子も呆れたように首を振った。

え？ 何故に？ ていうかギャラリーも、『ああ、コイツ駄目だわ』みたいな目で見てんじゃねえよ！ お前らを助けてやったんだぞ！ むしろ感謝されたいわ！

「とんだ変人だな、君は」

「本当ですよっ！ 桜庭先輩のばーかつ！ あほお！」

「つちよ、お前！ 先輩の俺になんて暴言を——」

「いや、今は許そう。存分に言ってやれ、加奈子財政。会長権限だ」

「何で白鷗会会長権限をここで使うんだよ。意味わかんねえぞ」

「とぼけた表情の俺、それを憐れむ楓夏と加奈子という状態が、ガリ眼鏡とデブバンダナが逃走したのにも気づかず、その後十分程続いた。」

椎奈のトリップ状態が元に戻るのは、その後の一戦、皐月対純一戦のことである。

第参拾参話（後書き）

感想、批評などあれば気軽にどうぞ。

第参拾肆話

午後三時二十四分。

「まさか皐月と純一先輩が当たるなんて……」

「そりゃ勝ち進めばいずれは当たるだろうよ」

定句のような発言を、俺は飄々と受け流す。

「確かにそうですけど、何かもうちょっと、まともなリアクションとか無いんですかつ？」

「ああ、そうだな。どっちが勝つか楽しみだな」

どうでも良い感じに加奈子をスルーすると、脹れっ面をかました彼女は不機嫌そうに前を向いた。

まあ純一の試合の後に皐月の試合があつたので、いずれ近い内にトーナメント的に当たるとは思っていたが、まさかベスト四まで長引くとは思っていなかった。

ちなみに湊さんも残っていて、その彼女の対戦相手は、なんと生徒会の会長らしい。今まで彼女と試合してきた相手も殆どが生徒会役員だったらしく、正にその会長にとって湊さんは仇のポジションということだろう。

さあ盛り上がって来ました！ 今年とはにかく熱い、学園選手権『人式』部門！

残っている内のメンバーの二人が白鷗会メンバーという……え？ あ、少々お待ち下さい！

「何かあつたのか？ アレ」

「多分、純一君の所在がバレてしまったんじゃないでしょうか、恭

介君」

「ああ、なるほど。最初に“二人”って言ってたしな」

そうこうしている内に、本部のアナウンサーは慌ただしく放送委員が行き来を繰り返す。

そして――

すみません、訂正します！ 白鷗会メンバーは三人です。

津守湊選手、倉橋皐月選手、そして東雲梓先生の弟子、要純一選手も昨日付で白鷗会副会長の職に付いた模様です！

あら、何時の間にそんなのになったのかしら？ 弟子

昨日付と仰っていたではありませんか、東雲先生

「今日から容姿、名実共に人気者だ純一よ。良かったな」

――と、同時に面倒事も増えて残念だな、と近くにはいないイケメンに心で訴えかける。

「純一新副会長って、僕の聞き間違えじゃなかったんだね……」

「そういうことだ悠斗。知り合いが有名人になったぞ、嬉しいだろ」

「それもそうだけど、桜庭君も今日の所業で、明日ぐらいには有名になってるかもね」

「ん？ どういうことだ？」

「一人で四十人の相手をのしたって事でえ、変なあだ名とか付いちやうかもねえ」

悠斗に向けた俺の疑問に、ふざけたような声で天海が応えてくる。

それにしても、あだ名か。……うん、それは何か嫌だな。絶対良い方面の奴が出来そうもないし。

これは楓夏に頼んで、先の出来ごとは口外不出にしてもらおう、手回しでもして貰った方がいいかもしれん。

「先輩っ！ もう始まりますよっ！」

「ん？ ああそうか。それじゃどっちが勝つか懸けるか？」

「未成年の賭博は法律で禁止されてるんですよっ？」

「下らんとここでお前は少々真面目になるな。……ま、大人しく覗いてどうか」

そのように言っただけで数刻経つと、フィールドを包み込むようにして設置されている観客席から、割れんばかりに歓声が轟き叫ぶ。

それと同時に、東西のぽっかりと空いたフィールドへ繋がる空間より、純一と皐月が堂々として入場してきた。その姿は片や静廉、片や冷然といった感じである。

純一の瞳はもはや狩獵者ハンターそのもの。射き貫かんばかりに、その自分より小柄な少女を覗いている。

一方その少女たる皐月は、まるで嘲笑するが如く、涼しげな微笑を浮かべるだけである。

「……なんかどっちも怖いですね、先輩」

「ま、多少はそういうにも思うが、本気でぶつかり合うんなら、これぐらいの探り合いは当然だとも考えれるな。純一は目前の優勝っていう肩書のお陰で気合いは十分だし、皐月は何故か今日に限ってやる気スイッチ入ってるし」

前者は兎も角として、後者は非常に珍しい。皐月はまともにやればかなり出来る子なのだが、幾分気分が乗らないと実力を出さない。そしてその気分が乗る日は、年に数回あるかどうかという所だ。

それぐらい、今日の皐月は珍しくもあり、そして本気で厄介であ

るという事である。

審判の先生が構えるよう合図すると、何やら皐月が小言で純一に述べた。すると純一は少し考える様な素振りを見せ、数秒後、お返しのように口元を軽く動かす。

何を言っているかは良く分らないが、多分相互を盛り上げるための掛け声、もしくは挑発といったところか。こういうのは別に嫌いではない。

「そろそろ始まりますね……」

「味方同士という所が惜しい所だが、楽しませて貰おうよ」

椎奈と楓夏が期待を膨らまして言葉を述べた、その数秒後、戦闘は幕を開けた。

「今日はきょーすけ兄さんが見てるから、絶対負けられないの。覚悟してね」

先生が武器を構えるよう合図すると、そんな事を聞こえるか聞こないかぐらいの小さな声色で呟いてきた皐月ちゃん。

顔は冷酷ではあるものの、途轍もない熱い闘心が漲っているように見える。

そして長年その馴染んだような槍を構え出した彼女の姿は、正に鬼神という一言に尽きた。

腰を低くし重心を抑え、大上段に構える槍の矛先は、自分の存在

を刈り取るような、そんな錯覚を見せるほどに仰々しい。

だがしかし、それにしても――

（恭さん、好かれてるなあ。正直羨ましい限りだ）

この学園に来て以来、自分以外にも恭さんの事を特別視する目は、前のことは比べ少なくとも増えてはいる。

――しかし、それは“少なくとも”である。

恭さんは面倒だからだろうが、自身の力を周りに誇示しない。しかし自分にとっては、それが歯痒かしく思える時もある。

もっと誇つていいはずなのだ。自分は恭さんには謙虚でいて欲しいと思うが、それ以前に恭さんの実力を、みんなに知らしめて欲しいとも思っている。

勿体なくて、仕方がない。大百足を倒すほどの実力を持っているというのに、その出来事に見向きもしない事に対して。

（……嫉妬、って言うのかな、“コレ”は）

師匠にも求められていて、なお且つ想像を凌駕するほどの技量。

自分がそんな気持ちを抱いているのは、自分が恭さんに魅せられているだけで、自分が恭さんに対して実力測ってもらえてないからだろう。

（だから……今日は俺が）

――恭さんに、魅せつけてやろう。

「大丈夫だよ、そっちも気をつけてね」

だからこんな言葉を、アマである自分がプロに言い放つ事が出来たのであるう。

少し驚いたような顔を皐月ちゃんは浮かべたが、すぐにまた、冷

たい表情へと戻した。

先程の氷の笑みからは余裕が消えており、やっと自分の事を真つ当な敵として認識してくれたようだ。

プロからのそんな待遇に、何時の間にか固くなっていた体は、異様にほぐれていた。

「それでは――始めっ」

驚くほど自分の思念の出来様で軽くなった体で、早速だが右手の銃の攻撃を、音速へ誘う事にした。

第参拾肆話（後書き）

誤字脱字あればご報告下さい。

これを投稿する前に。

皆様のおかげで、やっと目標の評価500ptを超えましたとことをご報告します。

ありがとうございます^^

これからも御贖に、よろしく願います。
それでは次話でまた。

第参拾伍話

「おお、純一健闘してんな」

プロ相手に怖気づくかと思っていたが、今日は何かが違うらしい。躍動するように純一は皐月に、追い詰めるが如く銃弾を放ちまくる。

——どうやら作戦を変えたみたいだ。

皐月は簡単に捕縛できない、その事を直感的に理解したのであるう。

そのため、神力の欠片での捕縛を無しにし、全てを攻撃へ回している。

「すごいです……、あそこまで、皐月ちゃんを追い詰めているなんて」

戦慄を覚えたように、椎奈が試合を凝視しながら呟いた。多分、自覚はないのだろう。

しかしどうも皐月の動きが鈍い——というより、少し不自然だ。

（何狙ってるんだ？ アイツは）

こんな風に皐月の行動を深く観察するのは、未だ数回ぐらいしかない。

——そしてその数回は、皐月に模擬戦闘で負けた回数でもある。

（……なるほど、そういう事か）

その条件を踏まえて考えると、俺はあっさりと解答を発見した。不規則かつ定型的な動き。

それは俺がアイツに初めて“敗北を期した”戦法でもあった。

（お前は乗り越えられるかな……純一）
それだけが、今後の運びで気になる事であった。

（何なんだ？ この動き）

不自然に動き回って、自分の銃弾を避けている皐月ちゃん。
その行動たる意図は未だよく分からない。しかし攻撃は少なからず、皐月ちゃんを掠めているように覗けた。

とりあえず距離を離し、ブラスターの破散弾で様子を見る事にした。

「……っ！」

声を押し殺すようにして、左手より放たれた二対の銃弾による反動を耐え忍ぶ。

——だがここで、思いもよらぬ現象を目の当たりにしてしまった。

「……何で弾が“避けるんだよ”」

その空気を押し退ける銃弾は、いつも通りに破散した。しかしその破散した神力の欠片は、皐月ちゃんを“すり抜ける”ようにして、脇道へ逸れていく。

「ふう、やっと……か」

そう呆れた、というより疲れた様に言葉を出した——正にその刹那、秩序なき混戦を始めるか如く、猛然と俺の元へと薙刀を横一文

字に薙ぎ払ってくる。

「うおっ！」

あまりの打突速度に、思わず身が怯んでしまった。体が上手く動かなかったので、とりあえず二丁の拳銃を用いて防御することになった。

その威力は——余りにも壮絶で強烈であった。

「……ぐう！」

がああん！ と響く不快な音と共に、思わぬ衝撃波が身の中を蠢く様に襲いかかってくる。

足を地面に擦りつけるようにして勢いを止める。

意に反するように腕がかなり痺れる。

——だが、ここは自分の攻撃チャンスのもあつた。

（いけっ！）

俺の体が流れた方向へ、皐月ちゃんの意識が向く前にペネトレイターから鋭い一撃を放つ。

空気を切り裂かんとして進むその弾道が、今はとてもゆつたりと確認出来た。

これは当たっただろう、思わず無意識的に笑みが浮かんでくる。

——だがその笑みは、一刻後には焦りの表情へと入れ替わっていた。

再び不規則なような、それでいて規則性ある皐月ちゃんの移動に、弾が自ら避けて行く。

そのまま弾は観客席近くまで吹き飛び、幸いとして誰も居ない席へとたどり着いた。

しかし、今はそんな事に気を回している場合ではない。

「くそっ！」

自分の声から、初めて怯えともとれる声が、焦燥の余りに出てしまっていた。

（何なんだ、何で弾が避けるんだ！）

その事が頭を過つては、自身を不可解な境地へと追いやっては悩ませていく。

（何か……何かあるはずなんだ、皐月ちゃんの動きには）

しかし観察しようとも、そんな弱点を晒すような事を彼女は許さない。

地面を爆ぜるようにして蹴りあげ、風のように鋭く、どこからともなく大振りな一撃を積み重ねてくる。

銃で抑えたり、バックステップで回避する度に、目の前の大音響を走らせる一撃が降りかかる、そんな錯覚が訪れる。

避けるが、追い詰められ。放つが、当たらない。

その事が、自分自身を余計に苦しめている事には気づいていたが、体は理解できない。

どうすればいいか——ただそんな不安が脳裏に浮かび、動きを鈍くさせていく。

そんな中、彼女の笑みはますます冷たさを増していた。

正に獅子奮迅と呼ばざるを得ない彼女の攻撃に、途切れさせる事の出来ない自分の意識は、最早限界を迎えようとしていた。

怒涛の攻撃の中、彼女は何かを狙っているように思えるが、自分には理解できない。

「……っふ！」

ここで、今までの中で一番気合いの入った彼女の攻撃が、俺の顔面へと容赦なく振るわれた。

その攻撃の距離間は、なかなかリーチの長い武器を使っているのに何故か剣で切れそうな間合いであった。

危なげに自分は師匠の式神地獄で培った、超絶回避力を存分に発揮した。

体勢を整えようとして、その後の彼女の行動を確認――

「……っな！」

居ない。彼女が居ない。

何故だ、今さっきまでは“そこ”に居たはずなのに！
動揺が迸り、自身の不安が全身を駆け巡っていく。

「頑張ったね、流石はきょーすけ兄さんの親友ってことかな？ て
思っちゃったり」

――どうして、どうして後ろに居る。

そこから聞こえた不吉な声に、即座に反応して避けようとする。
……しかしその願いは叶わず、臆する事なく皐月ちゃんはそのリーチの長い柄の部分で、俺の延髄を刈りとった。

眼の前が一瞬で煌めく様にして儚げに映ったかと思うと、自分の意識はそこでぶつつりと消えた。

割れんばかりの歓声と、純一を庇護するような女子の声が包み込

む中、審判の先生の勝敗を決め込む声が凜として響いた。

「先輩……。純一先輩の放った銃弾、何で皐月を“避けた”んですか？」

「……何でそんな事を俺に訊いてくる？」

「分かっているんですよ？ 何であんな現象が起きたか。だって眼が笑っているんですからっ！」

「お前、見てないようによく見てんな」

アタシの家はそういうの得意ですから、と笑みを浮かべて俺に返答した加奈子。

ふむ、別段として隠す必要はないし、簡単に説明してやるか。

「んじやまず、あの皐月を動き。何か“不自然”だと感じたか？」

「えっ？ いえ、アタシは、何時もに比べて皐月の動きが鈍いなあと思っただけで、そこまでは」

そう言って、顔を少し顰める加奈子。すると――

「……なるほど。そう言う事ですか」

納得したように、しかし依然として驚いたような顔を浮かべ、椎奈が答えに至った。

「今ので分かったのかい？ ……ならどどういう事か、説明してもらっていいかな、椎奈副会長」

楓夏は未だ気づいておらず、顔を捻るばかりだ。すぐに助け舟を求めるようにして、椎奈に意見を求める。

椎奈は目線を、純一を運びながら退出する皐月に向けて、真剣な様子で応えた。

「皐月ちゃん、反閉へんぱいを使っただですよ。まさかあんな用法をすることは思いませんでしたか……」

兎歩うほとも呼ばれる反閑へんかんという技術は、道教に於いて北斗七星の流れを組み込んだ歩行法に、陰陽術の形態を組み込んだものである。その用法としては、地霊や呪縛を解き放ち、場を清浄するために用いることが多い。

——だが、そこが盲点であるのだ。

反閑はそのような用法から見ると、悪星を踏み破って浄化するようなものに見える。

しかし、実際はそうではないのだ。

反閑は陰陽術独特の呪術歩行法であり、その本当の効果は、自身の近くから“厄”を遠ざけるなのである。

それは端的に言い変えてしまえば“超自然的”なもの。だからあの動きは“不自然”に見えてしまうのである。

「その通りだ椎奈。……ていうかあのヒントだけで良く分かったな」「い、いえ。それほどでも」

顔を赤らめ、照れるようにして俺の方から顔を逸らす。

後で元に戻るだろうと考えた俺は、引き続いて話を進めることにした。

「そういう事で、アイツはその反閑を用いて、自身に仇為す銃弾という“厄”から身を離れたっていうことだ」

「へえ……！　なんだかそれ使えば、全部の試合チートじゃないですかつ！」

「そう思うだろ？　実際は違うんだよ」

「えっ？　そうなんですかつ？」

驚いたように、加奈子が声を張り上げて俺の眼を覗いてくる。純真さを兼ね備えたその美麗な瞳に思わず吸い寄せられそうになるが、

理性を以ってその本能を消す。

ポーカーフェイスを気取り、俺は説明に走って気を紛らすことにした。

「——あの動きは、広い定義の現象は被えないんだよ。例えば『攻撃』とか『不幸』とか、そういう曖昧なものな。

という事は、今回皐月は『銃弾』を厄として指定してたが、それ以外の攻撃を純一がしていれば通ってたって事だ。例えば前の試合のように、銃で小突いたりってことは、な」

それがあの反問を用いる上で難しいことだ。

場の見極めが大事になってくるため、また不自然な動きである事から、厄として指定した攻撃以外避けられなくなるのである。

「しかし今回、純一は銃を攻撃目的以外で使わなかった。いつも通り、拘束用に神力を張り巡らせたりもしなかったのは、多分皐月にはそんな小賢しい真似が通らないと思ったからだろう。そして近接攻撃も、薙刀には勝てないと思って使用しなかった」

「なるほど……、それで皐月会計はそれを読んで、という事でいいかな？」

「その通りだ楓夏。今回の敗因は、思いこみで純一が攻撃方法を限定した事」

逆に言えば、純一が決めつけをせずに、がむしゃらに適度な攻撃をしていれば勝てたかも知れない、という事でもある。

実力は少なからず皐月に匹敵はしていたため、場を見極める事。この経験の差が勝敗を決めつけた。

「その結果、純一その限定した攻撃も通らなくなって焦りが生じ、最後のような事になる」

もう少し落ち着いていれば、気配を辿って皐月がどこに行ったか見切れていたものを。

焦りというものは、自身にとっても相手にとっても不服な事で仕方がない。

「先輩先輩っ、その最後の方で純一先輩が皐月を見失っていたように見えたんですけど、何故か分かりますかっ？」

ここでまるで先生に質問するかのようになり、元気な声で話しかけてくる加奈子の言葉に、少しだけ――何故か悦楽を覚えた。

「ああ。それは反閤が“剣舞”の元になっているからだ。独特の踏み込みや足捌きだろ、アレ。という事は、上手く使えば突然と消える様にして死角に入る事は簡単になる。つつても、よく観察してればすぐ見分けは付くがな。――だが今回、純一は攻撃が通らない事に不安が先走りして、視覚が限定されていたんだ」

他にも理由はある。例えば敵が腰の方へ手を隠したとしよう。すると自分は『あれには何か意図があるのか？』と少なからず疑問に思い、その手の方へ視線が向く。

ただそれだけで視界が限定される。そしてその視界を限定させる物体が近付いてきたとすると、狭まった視界はもっと狭くなる。今回皐月は、この方法を用いていた。

薙刀をわざわざ大振りにして視線を寄せ、長いリーチを使わずして近くから打突しようとした。その事で純一は視界が狭まって、その後の皐月の動きが分からなくなったのだ。

閑話休題。

そう言う事で、皐月は今回純一に対して実力的にも、知識的にも勝っていた。

これがプロとアマの境目、ということだろうか。深くは考察する出来る身でもないの、止めておこうと思う。

中途半端な俺に評価されても、アイツ等は喜ばないだろう。

「まあ純一には次があるし、鍛錬を二年足らずしかやってないんだからな。次はどうなるか分かんないな」

「……え！？ それ本当ですかっ！」

「ホントだホント。たった一年数か月であそこまで臯月を相手出来るんだ。将来は絶対大成するだろうな」

それこそ俺を軽々と越える、という事もあるかも知れない。

怖いと思う一方、嬉しくも思う自分がいた。

（楽しみにしてるからな、純一）

お前はいずれ高みに登る奴だ。俺なんかとは違っとな。

そう思いながら、ふと空を見上げる。

傾き始めた陽だまりが柔らかく、雲間から差し込もうとしていた。

——まるで今後の、彼の成功を祈るかのように。

第参拾伍話（後書き）

それでは次話でまた。

第参拾陸話

肩を竦めるようにして、聖インフィニティア学園生徒会会長が、相手の首元に晒す剣を前にして、気ダルそうに声を掛ける。

「リザインするか、敗北を認めるか。早く選ばないとぶった切るぞコノヤロー」

その対戦相手——津守湊は悔しそうに顔を顰め、リザイン、と口を軽く動かした。

「……嘘、ですよね？」

信じられない、とでも言わんばかりに、椎奈はその試合結果に驚愕していた。

「実感は湧かないけど、そう言う事なんだろうね。……ここであの生徒会長があんな実力を出してくるとは、思いもしなかったよ」

「ていうかあの生徒会会長、今までずっと御札で闘ってきたのに」

楓夏と加奈子も同様のようだ。そして加奈子の言う事は、尤もなのである。

今までの試合、あの生徒会長は所謂『御札師』として戦闘を繰り返してきたのだが、この試合——つまり湊さんとの決闘になって初めて神魑を具現化させた。

「しかも他国の武器を神魑にするとはな……」

日本という国は珍しい。

というのも、他の西欧や中東と言った国々は神魑の武器が少ないのだ。

そして日本はそれに比べ、多種に渡る様々な神魑と呼ばれる武器が存在している。

理由としては、あちらの国の方では『聖人』と呼ばれる、肉体自体に神の加護を受けて生まれる人の方が多いからだ。そのため、日本のように神魑武器が多いのは、ある意味特殊と言っても過言ではない。

しかしそうは言っても、探してみれば数百とも外国の神魑武器は見つかる。

——まあそれはあくまで、全世界で見れば、という事ではあるのだが。

「生徒会長の神魑は『覇剣グラム』^{ツェーハンドバスター}。ゲルマンの英雄、ジークフリートが使っていたと言われる両手大剣としては最高峰の名刀だって、桜庭君」

「悠斗、それどーやって調べた？」

「まあ、多少コネがあつてさ」

隣で詳しく武器を説明してくれた悠斗は、今まで見た事ないような清々しい笑顔を浮かべて、携帯を俺に見せつけてくる。

「しかし、覇剣グラムねえ……」

これは最早伝説の中の伝説、と言っても過言では無いくらいに有名な代物だ。

そんな物を極東の一介の高校生が持っているというのは、なかなか周りにとっては皮肉な事でもある。

「それで、あの生徒会長の名前は？」

「知らなかったんですか先輩（こうとくいえいじ）？ 幸徳井栄治（こうとくいえいじ）って人ですよっ」

「……うげ、名門中の名門じゃねえか」

幸徳井家を二言で表せば、陰陽道のサラブレッドである。

何しろ陰陽師に於いて有名な家系である安倍家、賀茂家の血をどこちも引き継いでいるのだ。

……その実力は宗家である二方を超えるともまで言われているほど。

「そりゃそんな血筋の奴があんな武器を神魅にしても、可笑しな話じゃないわな」

片手で両手剣（ツーハンドソード）を振っているところを見ても、そう思うしか無くなる。

「……やっぱり血筋、ですか」

と、俺の皮肉いっぱいに述べた言葉に、過剰に椎奈が反応した。

「ん？ どうかしたのかな椎奈副会長」

何事かと思ったのか、楓夏がそう椎奈に尋ねると――

「所詮は血筋で全て決まってしまうような、そんな業界に飽き飽きしているんですよ」

椎奈の放った台詞は、正にここでは言っではいけない禁忌（タブー）であった。

——それが倉橋家の口外以外では、の話ではあるが。

彼女がそう言うのは、今までの経験を思い起こしての結論であるう。

血筋だけでちやほやされ、名前と存在だけしか見てもらえず、実

力は見てもらえない——そんな魂の無いような心地を、彼女は良く知っている。

『“私”が居ないのです。あの人達の眼には、私ではなく“倉橋家長女”しか見えていないのですよ』

昔、彼女が零したまるで自分を嘲笑うかのような、甚く儂い笑顔。その表情には、今でも俺は心に刃が突き刺さるような想いになる。あの時、倉橋椎奈はここに居なかった。いたのは倉橋家の次期頭首としての彼女。

式神のように、作り込まれた笑みだけが浮かぶ、ただそれだけの存在。

出会った頃は、正にこんな感じだった。

「まあそんなもんだろ。何時の時代だって平等なんて文字はどこにもねえんだし」

分かつてはいるものの、その事柄を考えると、俺は不思議と悲しみの奥底へと誘われる。

「でもまあ、それでいいんじゃないか？ 誰だって優劣はあるし、自分の出来ない事が誰だって出来るなんてざらにあるぞ」

「……それでも、やっぱり」

うわ、疑わ椎奈のプラス効果“聴かん坊”の発動かよ……。何言っても聴きやしねえかな？

そうは思いつつも俺は、それでもきつと分かってくれるだろうと思つて語り続ける。

「はあ……お前は馬鹿だなホント。良いか？ 例え最初に優劣があったとしても、それは努力でどうにかできるんだからな」

「それでも、それでもやっぱり！——」

「それじゃ椎奈は、俺が努力してるのを馬鹿らしく思ってるのか？」
「っ！　そ、そういう訳じゃないですけど……」

シユンとして首を、そして連鎖するように目線を下へと向ける。
「俺から言わせてもらえれば、血筋血筋言ってる時点でソイツは負けだ。“天才は日々鍛錬の凡才なり”……お前の親父さん、言ってただろうが」

今更のように思い出したのか、はっとして顔を不意にあげる。

……上目遣いなところは、狙っていないと思いたい。

「今さっきの幸徳井だって、はっきり言って武器以上に動きにキレがあった。湊さんを圧倒的に力でねじ伏せる所だって、いくら男女の差があるからって、あれ程圧倒的に出来る訳ねえだろ」

湊さんの小刻みなステップにも反応し、受け止めたり避けたりしていた所を見ると、日々の鍛錬の賜物であるようにしか思えない。

「なあ君。そろそろその辺で——」

「いいんです会長。私が悪かったんですから」

少々聞き捨てならないように楓夏が介入しようとする所を、そのように言って椎奈が制す。

「……すみませんでした。少し、考えたらずな発言でしたね」

「気にするな。偶々お前の変なツボに入っただけだろ」

そう言って掌をヒラヒラとすると、椎奈は申しわけ無さそうに俺に呟く。

「——昔から、いつも迷惑かけてばかりですね、私」

「俺だって、お前には恩を売ってもらってばかりだぞ」

若干上を向きながら苦笑いを見ると、彼女もつられて少し微笑んだ。

——さて、ここいらで椎奈のために締めるとしますかな。

「んじゃ、一つお前にアドバイスなる物を贈ろう」

「はい？ 何でしょうか……？」

期待と不安の混ざった、何とも言えない表情を見せる椎奈に、さ
らつと告げる。

「どんな奴でも昔はあるけどな、それでも昔からソイツはソイツ。
印象なんて変わりやしねえよ」

「っ……！」

——そう、椎奈はあの過去を随分と悔んでいるのだ。

俺に、家族に、そして妹の皐月にも何ともつれない態度をとって
いたあの頃。

しかしその様子を、皐月は幼いながらもその理由を認識してたし、
無論俺も分かっていた。

だからちゃんと戻った後、椎奈の謝罪で俺たちの心持はすっかり
晴れていたのだが——コイツはそうでもなかったらしい。

ずっと悩んでたのだろう。だから今日、その重石を取り除いてや
る事にした。

「あんまり気にするな。俺たちは多少拙い部分を許容出来ない程、
落ちぶれちゃいねんだから、な？」

「先輩、何言ってるか分かりませんよっ？」

綺麗に締めた、と思ったら、ここで加奈子が横槍を入れてきやが
った。

「ああ？ 椎奈は理解できてるんだから、良いじゃんか」

そう言っただけで彼女の方に視線を向けると、嬉しそうに微笑みながら、
コクリと首を縦に振る姿が目映える。

ふう、良かった良かった。

「あ、ところで先輩。私の第一印象はどんな感じでしたかっ？」

……っは、決まってるだろ。

「五月蠅おそろくてしつこい。声がでかくて面倒くさそう」

「っな！ 先輩っ！ それ酷過ぎですよ！」

「まあそれ以上に、純粋な子なんだなって言うのは分かったぞ」
「じゃないとあんなに他人のために、怒れるはずなんて無いんだからな。」

「……後から取って付けたように。そ、そんなんで騙されると思ったら大間違いですからねっ」

なんて言いながらも、少し照れている様子の加奈子。素直じゃねえなあホント。

「君は案外、見た目と違ってやるね」

「っん？ どういう事だ？」

「そして無自覚とは。最早それは天性のものなのかい……？」

楓夏が何やら意味不な事を呟きだした。

偶にコイツは訳分からなくなるよな。今さっきの椎奈暴走時といい。

「さあて、次の試合はいつだ——って」

なんて思っていると、アナウンスのよく響く声が何処からともなく聞こえ出した。

第参拾陸話（後書き）

誤字脱字などないようにしてますが、あつたらごめんなさい。

それでは次話へ。

第参拾漆話

皆さん、お待たせ致しましたー！　これより、二日目『人式』部門の、決勝戦を始めさせて頂きます！

『うおおおおおー！！』

ここで決勝戦の組み合わせを、最早知っているとは思いますが、こちらで随時述べさせて頂きます！

左方は白鷗会会計、安倍清明の末裔である倉橋家の次女、倉橋皐月さん！　ここまで顔色一つも変えることなく、全ての試合で敵方をノックダウンさせて勝ち上がって来ました！

『皐月ちゃんああん！！！！』

『うおー！　俺と付き合ってくれー！！』

さて、対します右方は、陰陽道家のサラブレッド、生徒会会長の幸徳井栄治選手です！

彼は今大会の優勝候補、白鷗会執行である津守湊選手を降す程の実力者。さあ、今大会、超見どころであるこの試合！　勝つのはどっちか！　先生方、どう思いますか？

幸徳井君は御札師としての実力もありますし、その中で神魃武器を扱いも長けています。

対して倉橋さんは武器の扱いはもちろん、非常にユニークな戦法を持っていきますし、今回は、スキルを如何いかにして扱うかによって勝敗が分かれてくると思いますよ

んー、まあ私はどっちもどっち、って所かな。二人とも少しムラ

が多いしね。集中力と冷静さを忘れなければ、勝てるかと思うわ

はい、お二人方、ありがとうございました！……それでは選手入場です！

「皐月ちゃん……一段と気合い入ってますね」

「まあ罷りなりにも湊執行は彼女の先輩だからね。仇討ちの感情だつて湧いてくるさ」

「皐月なら勝てますよね、先輩っ」

「あの幸徳井という奴はなかなか侮れないけど……正直に言って、今日の皐月には俺も勝てそうもない」

それぐらい、今の皐月は一瞬錯覚ととれる程に——壮健で、気高く、そして頸烈な雰囲気を出していた。

その一方、気だるくもその立ち振る舞いからは隙などを見てとれない対戦相手——幸徳井栄治は、神魁をさつと取りだす。その一個の無駄のない動きからは、想像以上に豪然たるものを感じた。皐月も神魁、と軽く口を動かすと、使いなれた大槍をさつと具現化し、大上段へとすぐさま構える。

大力無双のその立ち振る舞いからは、もはやプレッシャーなんて言葉が温く感じれるほどの、思わず殺気と感じ取れる様な覇気が解き放たれていた。

しかし対戦相手も、そんな簡単に攻略できるような奴ではない。正に端倪すべからざる敵とはこういう奴の事を言つのだろう。

考えていないように見えても、何か裏を探って来そうな、そんな不穏な気配が彼にはあった。

「それでは——始め！」

今期最後となった、先生の凜とした声を起点に、その怒涛の戦闘は始まった。

忙しくも一手一手が、両者の周りへと激しく交わっていく。

容赦など見当たらず、そして揺るぎなく勇ましい戦闘。

誰もが目を見張って、声も出さずその試合を眺めていた。

……否、そうすることしか出来なかった、とでも言うべきか。

これは最早訓練生の——いや、もつとそれ以上のプロでの戦闘でさえも滅多に見られないくらい。

高みの極みと言っても、違わないものであったのだ。

「はあああああ……！」

気合いと共に繰りだされた皐月の鋭き一閃は、敵の大剣によって難なく弾かれる。

フィールド内を木霊するように、甲高い剣戟が響き渡ると、幸徳

井はさつと間合いを離し——

「焰ほむの姿を顕ひしたまえ——急急如律令！」

すぐさま腰に備え付けていた御札ケースより一枚取り出し、即座に“火蛇”かだという御札特有の燃焼系対外呪術を皐月にお見舞いする。

まるで太陽のプロミネンスのように激流する炎は、そのまま皐月の方へ向かってくる。

だが彼女はその場から動かず仁王立ちのまま、ただ単純に槍を前方で回転させ出した。

誰もがそんなもので避けれるか——と思いだした瞬間、その槍から高密度のライトエフェクトが迸り、まるで円盾のように皐月を神力が包み込む。

火の流れはそのまま彼女は呑みこんだが、あっという間に撒き散

らされるように拡散させられ、儚く空気へと混ざり込んでいった。

思わぬ称賛がフィールドを包む中、皐月はそんなこと気にもせず、烈火のごとく突きという突きを刷り込むようにお見舞いしていく。空気を裂かんとする鈍い音が幸徳井へと吸い込まれていくが、それを一つずつ丁寧に打ち弾いて行く。

キュっキュっ と甲高い音を挙げながら、その二人の手数は一刻ごとに多数となっていた。

「ちいい！」

痺れを切らした幸徳井は、バァン！ と大きく椎奈との距離を大振りの一撃によって開ける。

「うおおおおお！！！」

神力を大剣に施したかと思うと、それを真上から一気に振るう。その刹那、高密度の光の刃が出で立ち、皐月の元へ突き進んできた。

（へえ。アイツも俺と同じ用途をなあ）

燃費が悪いのでなかなかこういう風に神力を打ち出すというのは、多くの人はしない（弓とかそういう武器は別ではあるが）。

しかしそれ以上に、あの攻撃は威力、範囲とも高位なもので戦闘に於いてはなかなか使えるものなのだ。

勝利を確信したように、その幸徳井はニヤリと口角を挙げる。多分今まで、あの系統の攻撃を防御されたことがないのだろう。

——だが、甘い。

何しろ“俺と何百回も”対峙してきているんだからな、皐月は。

「はあああああ!!!」

皐月は神力を大槍の先端に纏いつけると、光の刃が来る前に、それを前方の振るい上げる。

まるでオーラの様に皐月の眼の前、当たり一面を覆い被るとその刃は到達し――

轟！ と凄まじい音と燐光が交錯する。

そんな中、幸徳井はやりすぎたか？ みたいな顔を若干得意げにかましていた。

そして神力同士の激しい衝突で生じた高密度の白煙が吹き荒ぶ中。

――彼の想像とは打って変わって、悠々として彼女はそこから現れる。

茫然と立ち尽くす様にして、静まり返ったフィールドに幸徳井の声が漏れた。

「嘘だろ……マジかよコンチクショーが」

「そんなんじゃ、私は簡単に倒せないよって思っちゃったり」

そのように皐月は朗らかに微笑んだと思うと、即座に冷徹な表情へと誘う。

「っふ！」

一瞬で距離を詰めると、横振りに一閃――するかと思いきや。

刹那の時間で槍を縦へと戻し、余さず水月へと突いた。

「っが……!!」

有効打となる無慈悲な一撃が、幸徳井へと貫かれる。

そのまま避ける隙を作る暇さえも与えず、長い柄を顎へと打ち当てて追撃。

「お・わ・り」

突き破る勢いで堅い地面を蹴りあげると、ダッシュのスピードを余さず拳へと上乘せし、必殺の一撃を胸部へと抉^{えく}るように突き付けた。

「……」

忌々しそくに臯月を睨むと、そのまましゃがみ込み――

「リ、リザ……」

全てを言う前に、生徒会会長の意識はブラックアウトした。

何と前代未聞！ 勝者は一年生である倉橋臯月選手です！ 一年生で優勝というのは、これは今まで開催されてきた学園選手権でも初の快拳！ いやあ、見事だった！

『おおおおおおお！！！！』

先生方から、何か一言どうぞ！

勝敗を決めたのは、やはりあの終盤の神力の撃ち合いです。あの光の刃を止められた事で幸徳井選手の集中力が切れたのでしよう。その後の動きはまるで別人のように固くなっていましたから

ね？ 集中力が決め手になるって、言っただけでしょう？

……まあ、あの光の刃は“慣れていなかったら”止めていなかったでしょうけど。

多分、何度もあの手の攻撃と対峙した事があったようね。じゃないとあそこまで完璧に避けられないわ

なるほど！　つまり今回の勝利は、それを想定した倉橋選手の努力の賜物だということでしょうか！

ん？　まあ鍛錬って言えば鍛錬みたいでしょうけど……まあどうでもいいわ。勝ち負けだし？　ああ、お腹へったわね

あはは。後で学食に行かれては……？　——と、話が逸れました！　という事で、今回の勝者、倉橋皐月選手に大きな拍手を！

こうして二日に渡って続いた学園選手権は、皐月の見事な戦闘技術を披露したところで幕を閉じた。

保健室に担ぎ込まれた純一を呼んで飯に行こうかなあと思いながら、嬉しそうに手を振ってくる皐月に対して朗らかな顔を、いつの間にか俺は気付かぬ内に浮かべていた。

第参拾漆話（後書き）

誤字脱字などないようにしてますが、あつたらごめんなさい。

多分今までの戦闘の中で、もっとも努力というか、良いものとなりました（気がします）。

やつのことで学園選手権の終わりですね。

ここまで長引くとは作者自身思つて無かったですが、かなり戦闘描写を書くのは早くなつた気がします（笑）

それでは次話で。

第参拾捌話

午後六時三十四分。

無事に学園選挙権が終わり、その後。

「あのさあ、ちょっと質問あるんだがいいか？ 楓夏」

「何だい君？ 言っておくけど、今この現状をどうにかする方法は、今のところ私には無いが？」

「俺の訊きたかった事は、正にそれだったんだがな……」
そう言つて戦地——ならぬ、白鷗会室を横目で覗く。

「あはははは！ 私が！ 私が一番になつちやったりしてるよー！」

「いいんですいいんです。どうせ私はブツブツ」

「よし、貴様！ もっと呑むが良い！ ええい、遠慮はしなくてよいぞー！」

「うおー、恭さんへるぶー……」

「……ヒック」

上から順に皐月、椎奈、湊さん、純一、加奈子だ。どう考えても常日頃の理性など保っているようには思えない。

はあ、何でもみんな酔つてるんだろうなあ。

——ま、俺の考えでは理由は一つしかないけど。

「それじゃ梓さん。何か弁明することでもありますか？」

「きよ、恭介ちゃん。ちょっと顔が怖いわよ？」

正座しながら俺を上目遣いで覗く、若干引き攣り顔の梓さん。しかしそんな事はどうでもいい。

「いいんです、元からですから。それよりいいですからきびきびと弁明して下さいませんか？ 殴るうにも殴れませんから」

「えー、お姉さん殴るなんて、あんまり宜しくな——」

「いいから謝れ」

「……すみませんでした」

「ったく、誰が呼んだんだよこの人……。いや、勝手に来たの間違
いか。」

事の発端は、皐月のある一言からだった。

『みんな、白鷗会室で打ち上げしちゃおうよ』って提案してみち
やったり！』

そんな理由であの部屋を使用していいのかと楓夏に尋ねると、ま
あいいじゃないか、なんて根に蓋もない発言をかましてこの場所へ
と至り、極めつけは――

『やほーみんな！ 先生がジュース買ってきてあげたわよ』

とまあ、何故かくたびれた様な純一の後ろで、別段として関わり
も無い梓さんがジュース？ なるものをこの部屋を運んだ事が、原
因である。

「なんでこんな狡^{こず}い真似してまで、アルコール持ってきてるんです
か」

見事にぴったり張られているラベルをはがすと、その裏からは立
派なアルコール入りと書かれている、もう一つのラベルが。

「ちよつとぐらいなら、みんながもつとテンションを上げて楽し
めると思ったからで、駄目だったかし――」

「駄目に決まってるんだろ！ 大人だろうが！ 未成年に酒吞ますな
！」

「何よ。恭介ちゃんだって呑んでたじゃない。お姉さん、ちゃ
んと見てるんですからね」

「それはまだお酒だと気付いてなかったからで……」

結構甘いテイスト――マンゴーとか桃とかメロンとか――のチュ
ーハイだったので、知らず知らずの内に俺も、そしてみんなも手を
伸ばしていき。

「もう一杯！……おお、良い飲みっぷりじゃないか貴様！褒めてつかわそう！ほれ、これも呑め！な！」

「もう呑めな——うぐ！」

「……グスウ」

「もつと持つてこーい！なんて偉そ気に言っちゃってみたい〜！」
「すみませんすみません、私の判断ミスでこんなブツブツ」

こんな感じに……。

「——そろそろ、私は回収した方が良いと思うんだが？」

「俺もそう思ってるが、湊さんから酒を取り上げるのは、些^{いさ}か恐怖を覚えるぞ」

見事に袈裟斬りされそうだ。

あんなに興に乗っているのに、横から邪魔してみる。……俺は無理だね。

しかしこういう時使う人は——決まってるだろ？

楓夏に目配せすると、俺の意思を汲み取った様に頷き——

「それじゃ東雲先生。湊執行を宜しく願いますね」

梓さんの方に、キリツと顔を整えて丁寧^{ていねい}に言葉を放った。

「ちよつと待つてくれる！？あんな死地に飛び込めと、白鷗会会長はそんな鬼な事を言うのかしら！いくら先生だからって……」

「こうなつたのも梓さん、貴女のせいですからね？いいから逝つて来てください」

「恭介ちゃん？なんか“いく”のニュアンスがおかしい気が……」

動かないな。いや、動きたくない、か。どうすればいいだろう？
思案すること数秒。ここで俺は昔、椎奈を動かす時に用いていた方法を梓さんに試してみることにした。

後方からゆっくり近付き、そつと耳元で囁くようにして——

「頼りにしてますよ、頑張ってください」

まるで包み込むように、そつと肩に手を置いて諭らせる。

「……こんな芸当、いつの間に覚えたのかしら」

なんて不平を口にしながらも、しぶしぶと言った感じに湊さんの方へと向かった。

成功、か。なかなか椎奈には、感謝した方がいいのかもしれない。
「んじゃ皐月と加奈子は俺が止めるから、あのネガティブになってる椎奈を頼むぞ」

「え、ちよつと！ 彼女を止めることが出来るのは、君だけだよ！」
「俺だと少し……な。問題が」

子供の時、酒関連で色々あったしなあ。

「それじゃ頼むぞ」

ほぼ投げやりのように、俺はまず皐月が陣取っている会長の席へ向かった。

「あはは〜！ あ、きょうすけ兄さんー、これ一緒に呑もうよー！」
そう言って近づいてきた皐月は、俺の首に腕を回してくる。

……うっわ、酒くせえ。

「なあ皐月。もうそれを呑むのは止しなさい」

「ええ〜！ 嫌だよって断固拒否しちゃってみたいり！」

まあそうだろうな。そんな簡単に割り切ってくれるとは思わなかったし。

「いやしかしな。お酒臭い女の子はモテないらしいぞ」

「きょーすけ兄さんはどーなの？　って訊いちやってみたり」

天下のそらごとのような事実無根な事を言うと、想定してなかった切り返しをされる。

「俺か？　俺は……」

ここは大事なところだな。……本音を言っておいた方がいいか。

「慎みのある女性の方がいいな、うん」

「そっかあ。それじゃ、止めとこって思っちゃったり」

そのように言って、俺の狙い通りにお酒を置く――

と思いきや、絡ませていた腕の力を強くして、彼女自身へと引き寄せる。

「ど、どうしたんだ皐月？」

艶然とした皐月えんぜんから、お酒の匂いと共に甘い色香が漂ってくる。

「ねえ、きょうすけ兄さん。私、ご褒美が欲しいんだよね」

「ご、ご褒美……？」

鼓動が除々に早くなっていくのが、容易に確認できた。

「そう。それを聴いてくれるなら、お酒呑むの止めてもいいかなあ
って思っていたりー」

そのように言いながら無邪気に笑い、俺の瞳を捉えてくる。

（うち、コイツ狙ってやがったな……）

酔っているとはいえ、意識は未だ朦朧とはしていなかったのだろ
う。

してやられたと思いながら俺は対策を練るが、皐月の色気や昼間の
戦闘によって疲労が溜まっており、頭を酷使するのがダルくて仕
方が無かった。

こりゃ今後を覚悟した方がいいな、と軽く気を引き締めて、俺は
退避行動は諦めることに。

「ああ、いいぞ。それで何がいい？」

すると、ペアッと即座に優しい頬笑みを浮かべた皐月は、絡ませる腕の力を弱めた。

「それじゃきょーすけ兄さん、今度私とデートして」

「……ん？　それで良いのか？」

はつきり言つて、もっと残酷で実現が難しい物——例えば宝石が欲しいとか——だと思っていたのだが。

「そだよ。これ以上の物は無いって、私は今のところ実感してたり」

納得したようにお酒を置き、そのように呟いて席を立つ。

「少し頭冷やしてくるね。このまま帰ったら、少しアレだし」

「あ、ああ。行つてらっしゃい」

俺がヒラヒラと手を振ると、火照った顔を覚ますために、室内に備え付けられたベランダへと皐月は足を運んだ。

しかし今のは何だったんだろう。ハッキリ言つて、今日の皐月の行動はあまり読めなかった。

前まではアイツの行動、何でもお見通しだったんだけどな。

（それだけ、俺の知らない皐月が居ない間に出来あがつてた、ってことか）

若干嬉しさ、若干悲しさという矛盾するような感情を抱きながら、続いて加奈子からお酒を取り上げるべく、俺は軽く移動を始めた。

第参拾捌話（後書き）

誤字脱字などないようにしてますが、あつたらごめんなさい。

それでは次話でまた。

第参拾玖話

「つよ。気分はどうだ？」

「……」

ぼろぼろと涙を流しながら、ちびちびとお酒を口元へ運んでいた加奈子は、随時俺の隣にいたいと思っていた沙希を撫でていた。ていうか泣き上戸か。珍しい酔い方をするんだなコイツ。

「んで、何が悲しくてそんな泣いてるんだ？」

「……欲しい」

「ん？ 何が欲しいんだ？」

俺にしては優しく尋ねると、真っ赤に腫らした眼をこちらに向けて、静かに応える。

「可愛いペットが……欲しい、です」

……おおう。俺の想像斜め上を越えて行きやがったぜ。

しかしペットが欲しい、か。

一応沙希は、ペットじゃなくて“使い魔”なんだけどなあ。

「なあ、考えてみる？ ペットは色々と世話が大変だぞ？」

「だって……可愛い」

そう言つて涙を含ませながらも、愛おしそうに沙希を撫で続ける加奈子。

さて、これを攻略する方法は……？

「そうだな加奈子——式神をペットにしてみればどうだ？ 楓夏とか、そんな感じだろうと思うし」

それなら世話も必要最低限で済むのに加え、何よりコストがほと

んど掛からない。

「……アタシ……創れない」

「おお？　そ、そうなのか？」

無言で首を縦に振りながら、再びポロポロと涙を流し出した。

何かすごく面倒だ。こりゃ椎奈の担当に当たった方が、当たり前だつたかも――

「私はっ！　私はこれからどうすればいいんですか！」

「し、椎奈副会長！　落ち着いて、まず、何に悩んでいるか私に……」

「もう駄目なんです死んじゃえばいいんです」

「ああ！　だから違うだろう！？　……はあ」

頭を押さえて困惑しだした楓夏より、まだマシか。ありやすげえ面倒だわ。

そして梓さん。大変そうだなあ。

「貴様……我の邪魔をしようと言うのか！」

「はいはい、良いからそれを置きなさい。恭介ちゃんに怒られちゃうから」

「きよ、恭さ……たすけ……」

うし、見なかった事にしておこうか。

「んじゃ俺が簡単に、創つてやるよ。それでいいか？」

「……出来るの？」

「一応な。椎奈とか皐月に教わってるし、梓さんのしごきも多少受けてたし」

そう言いながら俺は、腰に常備してある御札をケースから取り出す。

「それで、どんなのが良い？　あんまり創れるのは無いんだが」

楓夏とかは得意そうだが、今アイツの邪魔をするのは憚はばられる。

すると思案するように加奈子は頭を軽く捻らせ、ふと呟くように声を漏らした。

「鳥……が、いい」

おお、鳥ね。鳥は簡単だぞ。

何しろ鳥型の式神は古くから多用されてるから、凡庸が良く利くし。

創り方も楽だから、結構意に添えたものは出来そうだ。

「うし、それじゃささと——」

そう言っみのみことて俺は何も書かれていない御札を用意して、“大祓識紙おおはらいしきか”とさっみのみことと書きいれる。

大祓には“悪鬼とは存在を遠ざける”という意を、そして識紙とは“知識を持つ存在”という意を含ませている。

式神を識紙と書くのには理由があり、それは隠された知を具現し、術者はその識を使役すること——それが本来の式神の正体であるからだ。

（ふむ、これで普通にすると、黒い鴉みたいな式神になるんだが）それじゃ少し、可愛げがないだろうと思う。

なので俺は、“命”と書かれている文字の後ろに“改・音呼”と付けたした。

「さて」

少し意識を集中させ、神力を御札の中へと注入していく。

そして籠こめること数秒。

「——っと、まあこんなもんかな」

戦闘用に使う訳じゃないし、そこまで含ませる必要も無いと思っ
た俺はすぐに注入を止める。

（別にそのように使うようになって、後でそれは加奈子にさせれば変わらないだろうしな）

「よし、それじゃ加奈子。この御札を持って」

「……ん」

ずっと目を見張って此方こなたを見ていた加奈子に、軽く御札を握らせる。

そのまま俺は握った彼女の手を包み込んで、声を掛けた。

「お前がその御札に銘めいを与えるんだ。後はそれで出来る」

「……銘？」

「そいつが付き果てるまで、存在を確かとさせるための名前だ。ちゃんと考えるよ」

そう言つと加奈子は眼を閉じて考えるようにし、そして数秒後、静かに御札を再び眼に捉えた。

まるで自分の子供を見つめるように、朗らかな笑みを浮かべ、ただ一言告げる。

「雪……」

その瞬間、御札は加奈子の掌てのひらから浮かぶようにして、ふわりと離れて行く。

一瞬だけ神々しく見えたのは、決して俺だけではないだろう。

その御札はヒラヒラと彼女の肩へ降り立つと、一つの姿を現界した。

——それは白雪のように真っ白く、そして端麗さを周りへ誇示こゝししていた。

対称的に黒い瞳を兼ね備えており、さらに小さなトサカのようなものが頭に生えている。

無事に俺の知識を具現できたようで、少なからず安堵あんどを覚える。

「鴉インコみたいなのじゃ可愛くないだろうから、音呼インコにしてみたんだが……どうだ？」

「……良い。とても」

再び涙を流し出すが、それは今さっきまでとは別のもののように見えた。

彼女の名付けた名前通り、雪のように純白な式神は、加奈子を主として認識し軽くじゃれ始める。

「ありがとう……先輩っ」

頬をつたう彼女のそれは、いつもと比べて大層美しかった。

その後加奈子は安心したように眠り、皐月は顔をいつも通りにして帰還してきた。

湊さんはその後、実力行使で失神させられたようだ。楓夏も面倒になったのか、梓さんと同じようにして椎奈を黙らせていた。

「結局まともに説得したのは、俺だけか……」

「こういう事は、お姉さんには向いてないのよ」

「すまないが、会長という役職は、自に反する者を強制的に律する立場だね」

「まあ、期待しては無かったけど」

そう言っただけ俺は屍のようになっていいる犠牲者——純一とも呼ぶ——を軽く右肩に抱えた。

「それじゃ後始末頼む。俺は今から鍛錬する時間だから……」
ついでに皐月。あの話の詳細はまた今度な」

「あいあいさー。OKだよって了解してみたり」

敬礼するように俺の言葉に従った皐月に軽く頬笑み、多少のゴミを従えて、先導する沙希と共に部屋を去る。

「それにしても……」

自分もなかなか厄介な立場に就いたものだ、と今更ながらの後悔と期待を胸に抱いた。

コツコツと廊下に響く俺の足音に、ここで俺は何故か哀愁を覚える。

「……また、鍛錬だな」

不意に俺がそう呟くと、前方を突き進んでいた沙希が空いている左肩へと飛び移ってきた。

そしてそのまま、何かを拭^{ぬぐ}うようにして頬をさつと舐め出す。

「ははっ、お前も手伝ってくれる、ってことで良いか？」

横目で訊いてみると、当然とも言わんばかりに首を大きく縦に振った沙希。

その姿からは可愛らしくも、そこはかとなく威厳が見て取れた。

「頼むぞ相棒。あともうちよつとで出来そうなんだからな」

夜の廊下に響いた、沙希の甲高くも取り込まれる様な美麗な声に、人知れず俺は心地よさを感じた。

第参拾玖話（後書き）

四章完結！

誤字脱字などないようにしてありますがあつたらごめんなさい。

次回は少し番外編を。

それでは次話で。

番外編 梓さんとの一日

三月十二日。午後八時五十六分。

今居る所は寮から一番近い、俺がよく使っている南側の呪練場。沙希は家でお留守番、というか純と一緒に戯れている。なので孤独の恐怖が出ることはないだろう。

そして俺が今ここにいる理由は、頼みこんで梓さんと一試合させてもらうためである。

——と言っても、結構簡単にその試合は終わってしまっていた。いや、試合にもならなかった、とでも言うべきか。たった一度の動作で、勝敗は簡潔に決している。

「……どうもありがとうございました」

「驚いたわね……まさかこんな芸当を」

「ですよ？ 俺も驚いてはいるんですが、まあ出来たので」

そう言っただと抜刀していた太刀を納めると、梓さんに絡みつくように存在していた“もの”は直ぐに瞬かえっていく。

「はあ……何で“邪魅瞬やみしの太刀”なんて大それた名前が付いてるか、これで分かっちゃったわね」

そう言っただの首元に晒していた、兇刃きりやじさを仰々しく放つ二対の剣を、即座に虚空に消した。

「お姉さんの負あけ。……とうとう恭介ちゃんに抜かれちゃったかあ」

そう言っただ近くの呪練場入口にあったベンチに座りだしたので、俺も続いて隣に座った。

「何言ってるんですか？ 本気も出していないのに」

「あれ、何でそんな風に思うのかしら？」

「動きが本気っぽく無かったし、何より覇気が無いですもん」

不平を漏らしながらも、俺は黒漆大刀から神力を取り除いて破散させた。

「そつかそつかあ。そんな事も恭介ちゃんには分かつちゃって来たかあ」

不思議と嬉しそうにして、そしてこれまた何故か持ってきていたクーラーボックスから、さっと缶ビールなるものを取り出す。

カチツといい音がしたかと思うと、そのままぐびぐびと喉を動かす音が続いて響いた。

「こんな時でも持ってきてるんですか？」

「お酒ないと、お姉さんはやっていけないわよー？」

そう言って冗談のように笑いながら、ふと自然に眼を据えだす。

「それで、何でお姉さんにその技能を見せようと思ったのかしら？」

あまり他人に手の打ちようは見せない方が良いとは、昔からよく言っただものだ。

技量がバレれば、それだけ家柄のレベルを落とすとか……そんな感じに昔から思われているので、なかなか親族以外に技を見せたりという事はない。

「まあ何でしょうか？ ……梓さんは信用してますからね、俺」

茶化す様にそう梓さんの疑問に応えようと、一瞬でキョトンとした何とも言えない顔を浮かべた。

「……はは！ まさかそんな返しをされるとは、お姉さん思って無かったわ！」

「少（も）しだけ顔を赤くして——お酒の影響だと思っ——梓さんは俺に凭（もた）れかってくる。」

そつと甘美なる色香が、肩に引つつく繊細な赤っぱい茶髪から、風と共に押し寄せる。

「あ、梓さん？　どうかしました？」

「ふふつ。偶にはこういうもいかなあって」

顔がニヤニヤしている所を見ると、どうやら俺をからかっているみたいだ。

しかし別段として悪い気、いやむしろ少し良い気分であつたので、そのままの体勢で梓さんに一言声を掛ける。

「さっきの一言に追加ですけどね。俺がここまでやる気にさせてくれたのは、貴女のお陰ですから、そりや信用ぐらいしてますよ」

二年前のある日、俺は梓さんと出会つて、一変に見る景色が様変わりした。

その頃は歳低くしてプロの悪鬼被いとなっていたため、驕っている部分があつたのだが……。

その時見た梓さんの戦闘に、人知れず俺は――歓喜を震わせた。

俺はまだまだと言う事を、改めて知つたのはその時だ。

そこから少しだけ梓さんに師事してもらつたが、やはり指導もずば抜けて上手だったし、内容もみっちりで身のためになった。

『良かつたら、私の弟子になつてみる？』

俺が帰ろうとした時に、ふと俺に訊いてきた一言。

正直良いとも思つたが、甘んじて俺はその提案を断つた。

あの人の元に付くと確かに技術は向上させれそうだが、それ以上に彼女に甘えてしまい、梓さんを超える事が困難になると思つたからだ。

だから俺は彼女と出会つた毎に驚かすことの出来る实力を見せつ

ける——そう考え続けてきた。

その一心でここまで来たと言っても、過言ではない。

「別にお姉さんは、恭介ちゃんにちょこつと戦闘を見せてちょこつと指導しただけ何だけどね？」

「それで良いんですよ。自分の実力以上の物を見たり体験すれば、誰だつてためになります」

そう言つて、少しだけ梓さんの体重の寄りを元に戻そうとすると

いつの間にか、梓さんの膝にポトリと顔を落として横たわつていた。所謂、いわゆる膝枕状態である——つて！

「つちよ、何して……！」

「体術でちよつと、ね。分からなかったでしょ？」

なんて笑いながら、俺の抵抗を軽々と受け流す。体を動かそうとしても、なんか力が入らない。

たつた指一本で俺を押さえているだけなのに……。

いつそ神魅でも出して逃れてやろうかと思つたら、梓さんはずっと手刀を俺の喉元へ突き付ける。

「分かりましたよ、もう抵抗なんてしませんから……」

「そうそう、大人しくしときなさい。素直な子はお姉さん好みだぞ？」

嬉しそうに笑いながら、頭まで撫でてくる始末。

「何か……二年前を思い出すわね。ホラ、覚えてる？ 恭介ちゃん、式神二体にボコボコにされて、気付いたら私の膝の上で寝てたでしょっ？」

「思い出させないで下さいよ。アレは本当に痛かったんですから」

……少しラッキーと思つてたのは秘密であるが。

「でもね？ あの東雲家直伝の式神二体を倒すなんてこと、若干十五歳で出来たのは恭介ちゃんだけなのよ？」

「梓さんはどうだったんですか？」

「お姉さんが出来たのは十六の時。——だから、恭介ちゃんもつと自分の実力を誇つていいんだけど？」

そう言つて俺の眼を深く覗いてくる。

いや確かに、俺も強くなつた実感はある。しかし——

「……でも俺は、まだ父さんや梓さん、兄や幼馴染にも力が届いてないような気がして」

俺の零した言葉に、梓さんは少し考える素振りを見せる。

だがそんな様子も数秒で終え、子供をあやすように俺の頭を撫でた。

「そんな事ないと思うわ。みんな貴方の實力、認めてる」

頭を撫でていた手を、そつと頬の方へと動かし始める。

「恭介ちゃんは少々、自身を卑下しすぎよ。まるでそうでもない」と“存在出来ない”ような感じ。少しぐらい、肩の荷を下ろしたらどう？」

「……そうですね、少々根を詰め過ぎてた気はします」

「そういう事を、お姉さんは言いたくないんじゃないけどなあ？」

まあ、恭介ちゃんだし仕様が無いか」

苦笑を浮かべて、空いていた片方の手をお酒へ伸ばすと口元に運んだ。

「生徒の前でお酒なんて、呑んでいいんですか？」

「別に勤務時間外だし、良いじゃないかしら？」

「何で疑問形何ですか……」

だって分からないもの、と少々上機嫌に応えてくる梓さん。そん

な表情に、俺も不思議と笑みが零れた。

「ねえ恭介ちゃん……私の弟子にはならないの？」

「……ええ。……俺が梓さんの下に付けば、絶対貴女に甘えてしまいますから」

「そう、残念ね」

ふと思いつきのような台詞にすぐさま返事をする、少し悲哀の色を含んだ声で、梓さんは残念そうに呟く。

そんな姿に少し罪悪感を感じた俺は、もう一つ心に留めていた事を伝える事に。

「でも……偶^{たま}には特別講師、お願いしていいですか？」

不意を突くような俺の言葉に、一瞬だけ彼女は眼を見開いた。

しかし少し待つと、またいつも通りの微笑を浮かべて、少し悪戯っぽく俺に囁いてくる。

「ええ。……その度に私を驚かせるって条件で、ね？」

「任せて下さいよ」

俺のそんな一言に、梓さんは朗らかに、思わず見蕩れてしまうような笑顔を俺に向けた。

「それでですね。そろそろ俺、どいていいですか？」

「ダ・メ」

「……」

若干大人げないなと思って俺は再び抵抗を始めるが、すぐに抑えつけられて回避不可。

無事に脱却できたのは、梓さんがビールを切らし、クーラーボックスからチューハイを取り出す十分後であった。

番外編 梓さんとの一日（後書き）

誤字脱字などないようにしてますが、あったらごめんなさい。

WEB拍手のコメント欄に要望があったので、書いてみました。
一応時系列的に言えば、四章と五章の間くらいです。

番外編 皐月と過ごす日

「ねえきょーすけ兄さん、最後に……」

「ジェットコースター以外なら、俺は乗ってやろう」

「つちえ。それじゃフリーフォール？ それともバイキング？」

「お前は何故絶叫系にしか乗ろうとしない……」

ある日の休日、皐月のお願い通り、俺は遊園地デート——という名の地獄を垣間見ていた。

沙希は加奈子に任せているので安心だ。最近になって沙希は俺以外でも孤独でなければ何も無くなってきているので、少なからず安堵を覚えている。

「最後に少しぐらい、休憩しないか？ アイスでも驕ってやるから

……」

「おお！ きょうすけ兄さん太っ腹だね。お願いしますって頼

んじったり」

「ういうい。んじゃ少し待ってる」

近くのベンチに座らせて、近くにあつた売店でバニラを二つ購入。近頃は^{たいぶん}大分、少しづつではあるが暖かくなってきた。

軽く暮れている夕陽を数秒見つめて皐月の元へと戻る。

「おー、ありがとねきょうすけ兄さん」

「別にいいぞ。それより溶けそうだから、ぱぱっと食べた方が良いと警告してやる」

「うんうん、私もそうだと思ってたりね」

そう言って舌を器用に使って味わいだした皐月を片眼に、俺も一口パクつと喰らう。

（……ん、悪くは無いな）

「ねえ、きょうすけ兄さん」

「ん？　どうかしたか？」

着々と黄昏へと近づきつつある中、ふと皐月は声を漏らした。

「こういうのも、たまには悪くないよね。……ねえ、覚えちゃってたりする？　七年前も、こうやってアイス食べてさ」

「その時は遊園地じゃなくて、デパートだったけどな」

そうだったね、と軽く笑みを零して皐月は、再び冷たい感触を味わいだした。

あの頃と比べて何も変わってない様にはみえるが、コイツもなかなか成長している。

背はもちろん、体だって女性らしさを兼ね備えてきているし、まず第一にこんな女性特有の柔らかい匂いが風と共にやってくるとは、思いもしなかった。

「きょうすけ兄さん、少し眼がやらしくなっちゃってたりするよ？」

「っげ、マジで？」

「嘘」

「……」

この野郎……！　と思いながら睨みつけるも、にこにこ顔色変えず笑い続ける皐月。

そんな表情を見ていると、自然と怒る気力も失せて行く。

「こんな楽しい日、子供の時以来」

「ん？　皐月は友達とかと一緒に、遊びに行ったりはしなかったのか？」

「してたかって言われれば多少してたけど、でもやっぱりこんなに気兼ね無く遊びに行けるのは、私にとってきょーすけ兄さんや椎奈ちゃんぐらいしか居ないから」

「そう言えばお前、見た目によらず人見知りだったよな」

表面上では誰とでも仲良く振舞っているようだが、本当に親しい奴なら簡単に分かるぐらい、コイツは軽い友人程度では余所余所しさ浮き彫りにする。

「だよね。その性格は今もあんまり直ってないんだけど……でも、白鷗会のみんなだつたら、何故か自然と落ち着いちゃったり」

「あそこはなかなか落ち着けるよな。俺もすうっと取り込まれるように馴染んだし」

周りからは罵詈雑言ばかりだけどな。

「だからね、私はきょうすけ兄さんが来てくれて、本当に良かった。——私の安らぎが、また戻って来たから」

赤みを帯びてきた光と、皐月の茶髪が深く合わさった。

「珍しいな、お前がまともに分自分の意見を話すなんて」

「うんうん、あんまり無いからちゃんと覚えておいてよね、って思っちゃったり」

そう言ってニコリと笑った——

まさにその刹那、体中にざわつと悪寒と寒気——そして畏れが訪れた。

「……もう、変に邪推するなあ。ちょっと怒っちゃったり」

「言い方は柔らかいが、顔はマジで怒ってるな」

いつの間にか浮かべていた氷の微笑は、不吉な程美しかった。

どうやら遊園地内のお化け屋敷近くで妖力が溜まりつつあるらしい。

俺たちが付く頃には、既に特有の“ねじれ”が起ころうとしていた。

皐月は持っていた結界用に力を含ませた御札を使い、即座に薄い神力のフィールドを創り出す。

『しんぱつ神魅……！』

皐月と俺は同時に唱えると、淡い微光と共に武器が虚空へと形成される。

俺が武器を斜め上に持っていき、体重を後方に掛け、突然の行動にも対処できる柳の構えを形成する。

ねじれを見つめていると、皐月が少し探るような目でこちら覗いてきていた。

「ん？　どうかしたか？　そろそろ来るぞ」

「うん、でもなんかきょーすけ兄さんの神魅、変わった？」

「変わったって、どういうことだ？」

横目で訊いてみると、大上段に構えだした皐月はねじれを見つめながら静かに応えた。

「神魅だけ……。何か——神魅らしく無くなった」

「……どうしてそう思うんだ？」

「勘としか言いようがなかったり」

ふーん、発動してないのにそういうのは分かってくるんだな。流石は皐月、といったところだ。

軽く感嘆していると、ねじれの濃さは最大源となり、そして彼奴^{きやつ}は現界を遂げた。

「ピヨオオオオオオ！」

軀は人型の様で、人型を成せていなかった。

鍬^{くわ}のような手に複雑な足が何本も形成されており、眼はギョロギョロとして全てを見透かすような畏れを放っている。

背中から生えている翼^{めめ}……というより、羽らしきものは不規則に蠢^{うごめ}いており、触手の微妙に滑^{ぬめ}った感じが、何とも言えない薄気味悪さを醸し出していた。

「……ヲイヲイ、“しょうけら”かよ。これまた強そうなのが出てきたなヲイ」

「キモイからさっさと被^かおうよ」

「んな事決まってる！」

しょうけらは夜間に人の罪を数え、それを神に教えるという名目で庚申^{こうしん}——西暦に於いて六十の倍の年——に人を殺しまくる、本当に悪鬼極まりない奴である。

俺はいろんな悪鬼と幾度となく出会っているが、行動の不敬さと言えば間違いなくコイツが一番だろうとも思っていた。

「はあああああ……！」

寄って来たしょうけらから繰り出された伸びる触手を、余分な動作無く切り裂いてく臍^{へし}月。

その間に俺は右方より俊歩を用いて、二式 瞬息 を刹那の時間で作った突き専用の形態——霞の構えから堂々と繰り出す。

「ピャアアアア……」

俺の通り過ぎた後には、もげる羽がうねうねと蠢いて地面へと横

たわっていた。

しょうけらの怖いところは、悪鬼の中では珍しい飛行能力をもっているところだ。

飛ばれて無限に伸びる触手を余すことなく降り巡らされたら、そりやいくら高位なプロの悪鬼被いでも怪我、もしくは死に至る事も可笑しくない。

「いいねきょうすけ兄さん。やり易いよ」

そう静かに呟くと、まるで振りまわすような感じに次々としょうけらの部分という部分を切り裂いていく皐月。

悪鬼羅刹あくぎりせつな彼女のそんな姿に若干身ぶるいした俺は、少しだけ距離を開け、触手を絡め取るようにして一式 威光 の刃を出で立たせた。

少し神力を少なくしたので、皐月には効果は及ばない。
光の刃はそのまま、しょうけらの背中から繰り出している触手を、きれいに根元より切り取った。

「っふ！」

皐月はすかさずして、しょうけらのよろめいた隙を見逃さず大槍を深々と頭上に突き抜いた。

「ピョオオオオオオオオオ！！！」

悲痛な声が漏れる中、皐月は無表情ながら残酷にもそこから下方へ一刀両断。

溢れる妖気が煌めいては消えて行くなか、後方にふらついて来るしょうけらを、俺は納刀して間合いに近づくまでじっと待つ。

気配を押し殺している間に、しょうけらが皐月に恐れをなして後ずさりをし出した。

一歩づつ、また一歩づつとゆっくりと近づいてくる。

（——きたっ！）

俊歩で一瞬の間に近づき、そのまま余さず鞘に神力を施す。

その施した神力が刀身に触れ合い、高密度な光の檻を前方に形成した。

鋭く、そして威力も十分な三式 絶園 にしようけらは為す術も無く体を悉く散らされていく。

存在が気薄となったしうけらは何とか逃げようと画策していたようだが、その望みも叶わず、最後に振るった皐月の一撃で現世から消え去った。

皐月と一緒にだったためか、その時は死の恐れが訪れる事は無かった。

「すみませんでした、自分の管轄区域なのに……」

「いえ、気にしないでいいです。俺たちがたまたま近くに居ただけなんで」

後から来た若い男性——見た目二十歳前半——の悪鬼被いは、自分が着いた時、悪鬼が既に現界を終えたことに終始驚いていた。

遅れてきたのは、その数十分前にもこの遊園地近くで悪鬼が出現したからだそうで、その後始末に追われていたから、という事らしい。

「でもまあ、もうちょっと早く来ちゃったりしてた方が良かったと

思っよ？」

少し棘がある言い方だが、皐月のその意見には少なからず俺も賛同する。

たった数分とは言え、その僅かな時間ほかの人を危険にさらすのは、悪鬼扱いとしては名折れだ。

「以後気をつけます。本当に有難うございました」

「ええ、それでは」

ペコリと一礼して、男性はよそよそしく立ち去って行った。

「しかし……珍しいな。お前が他人にあんな事言うなんて」

ハッキリ言って初対面の人に人見知りな皐月が、あそこまで自分の意思を伝えるとは思いもしなかった。

「うん、そうだね。私もちよつとびっくりだったり」

そう言っただけの瞳を覗いて来た皐月。

何かを言いたそうにしているが、それを訊いて欲しくなさそうな雰囲気があるにはあった。……よく分からんな。

「まあ、今日は楽しかった。最後のアレを除けば」

「一日も早いよね。もうちよつと遊んでたかったり」

「あんまり遅いと、加奈子が五月蠅いokoruiからな。まあ帰りに何か驕るから、機嫌直せよな」

「機嫌……？」

不思議そうに、皐月が俺の言葉に反応する。

「悪鬼が出てから、少しだけ顔が強張ってるから」

「……そっか。そんな事も、きょうすけ兄さんは分かっちゃったりするんだね」

そう言っただけの腕に自身のそれを絡めてきた。

「フイ、どういう風の吹きまわしだ？」

「ちよつとだけ、ね」

正直言っただけの鬱陶しかったが、皐月の機嫌が何故か直っていたので、

それでもいいかと思つて足を動かし始める。

その後近くの駅に着くまでずっと聞こえていた皐月の鼻歌に、人知れず俺は心地よさを感じ取っていた。

番外編 皐月と過ごす日（後書き）

誤字脱字などありましたら、ご指摘を。

梓さんと皐月はなかなか恭介と四章で関わりが少なかったので、番外編という形ですが接触させて良かったと思います。

湊さんはアレです。一回屋上で飯食べたので、それでチャラと言う事で。

それでは。

第四章終了時、登場人物・用語

結構長かったですね、四章。

ということで、毎度恒例の人物・用語説明コーナーです。

用語は大まかなものと、新たに出てきた武器の詳細だけを説明することにしました。

登場人物は、四章に出てきた人だけを紹介します。

登場人物

桜庭恭介

今回も見せ場が少なく、空気になりかけてた可哀そうな主人公。
五章では大活躍の予感？

礼儀正しく、言葉を人によって使い分ける若干強面っ子。白鷗会
書記に就任。

神魅——黒漆大刀こくしつのだちの持ち主。

近頃、妖力と神力を混ぜる力でその刀の真価を発揮し出している
が、周囲には梓さんと沙希しか知らしていない。

沙希

大分恭介だいぶんと仲が良い人ならば、接触を許容してきた和み担当。
今回は擬似神魅、妖刀“子狐”こぎつねを具現した。その技量の良さは未
だ窺えない。

どうやら何か秘密を持っているらしいが……？

要純一

二丁拳銃の神魅——ブラスター&ペネトレーターを駆使して戦闘

する悪鬼抜い見習い。

経験は浅いが、実力はプロと比べても遜色がない。

恭さんに従順。なかなか熱い。イケメンでファンクラブがあるとかないとか。

白鷗会の新副会長として就任した。

倉橋椎奈

安倍清明の末裔、倉橋家の長女。恭介の幼馴染。白鷗会副会長の役に就いている。

弓の神魅——雷上動の持ち主。

弓の効果で自動的に矢の神魅である、圧倒的物理力で変化を驚かす兵破と——今回出なかったが——圧倒的神力で変化を啼かせる水破を具現することが可能である。

なかなか面倒な一面を多く持っているが、かなりの実力家。恭介に従順。美少女。

倉橋皐月

安倍清明の末裔、倉橋家の次女。恭介の幼馴染。白鷗会財政の役に就いている。

薙刀の神魅——磐透の持ち主。

その防御力は弓を百発撃たれようと弾くほどで、その鉄壁を破るにはかなりの攻撃力、技量、俊敏さが必要となる。

口癖が「〜たり」。なかなか抜け目のない子。恭介に従順。美少女。

津守湊

どこかにあるらしい剣術道場の一人娘。白鷗会執行の役に就いている。

刀の神魅——大典太光世の持ち主。

天下五刀のひとつとされ、人を二人重ねてもあっさり斬れてしま

うほどの切れ味と言われている。

学園内ではお姉さんの立場を確立している。白鷗会の良心。苦勞が絶えない美女とのこと。

二条加奈子

京都にある悪鬼祓いの名門、二条家の次女。学園では白鷗会会計の役に就いている。

神魃は未だ不明。式神『雪』を恭介に創ってもらっている。意識すれば心を読む能力を発動できるらしい。

他人に冷たく、身内に甘い子。皐月とはまた違った可愛さを持つとか。学園ではツンデレポジションを確立している。

國乃宮楓夏

どこかの有名な旧家の娘。学園では白鷗会会長の役割を果たしている。

式神使いで、呪詛や紋様を組み込んで高位な式神を創ることを得意としている。

その式神のひとつである『雫』は、様々な体系の儀式紋様・呪詛・禁を含んでおり、聖水の能力を具現出来る。

僕っ子。厄介事を受け流す事を得意とする。恭介だけは名前で呼ばず「君」と称する。

東雲梓

悪鬼祓いの卵を輩出する、東雲道場の一人娘。

プロの悪鬼祓いの中では一流の腕前。『破滅王』ルインクイーンという何とも中

二めいた二つ名を持つ。

双刀の神魃——干将莫邪かんしょうもくぜの持ち主。

兇刃さを備えるこの刀で斬られ出すと、あらゆる物は塵も無く滅されてしまうという禍々しいもの。

他人にはそっけない態度をするが、身内になると口調が大層柔ら

かくなる。

特に恭介の前では一人称が「お姉さん」に変わり、密かに淡い好意を寄せているようだ。

幸徳井栄治

陰陽師家のサラブレッド、幸徳井家の男児。

かつて英雄のジークフリートが使っていたとされる神魃——覇剣グラムの持ち主。

その一閃を喰らいし者は、自身の心情を顧みる間もなく、刹那の時間で吹き飛ばされる。

学園長

昔は一流の悪鬼祓いだったとか。場の流れを見極める能力に長けている。

滋岳悠斗

恭介と純一のクラスメイト。なかなかの情報通で、どこかしろから色々な情報を取ってきているらしい。

天海千里

恭介と純一のクラスメイト。グラマラスな体の持ち主。結構腹黒い。口調は作っている。教室では参謀的立場を確立。

諏訪明日香

学園にある放送部のアイドルとして活躍。今回は学園選手権のレポーターの役に就いていた。

加奈子ちゃんLOVE！ 同好会のみんな

アレ以降、解散の一步を着実と歩んでいる。

白鷗会メンバーと戦闘して負けたみんな
とりあえずドンマイ。そして皐月の相手、めっちゃドンマイ。

用語

学園選手権

年に一度インフィニティア学園で開かれる、言ってしまうえば武道大会のようなもの。

式神や使い魔を用いて闘う『護式』と対人戦闘をする『人式』の二種目がある。

優勝すると期末試験が免除されるが、これは先々代の白鷗会会長が提示したもので、この結果、学園全体で稀に見る戦闘力の向上を見せたらしい。

妖刀『子狐』

沙希が使う擬似神魃。

妖力と神通力を混ぜ合わせる事で、超越した威力を出す事が可能。恭介の掛け声で、刀身に籠める力を変える。

磐融

武蔵坊弁慶が用いていたとされる、巨大な薙刀。

刃の部分が九十センチ、柄の部分は百二十センチあり、決して常人では扱う事の出来ない逸品。

皐月は子供の時より訓練を重ねることで、現段階では上手に使えるようになってる。

雷上動

みなもとのよりまじ

源頼政が東三条の森より出でた妖怪『変化』を射落とすために用いたとされる神魑。

この頼政の代より、源家の血筋に代々受け継がれてきた神魑とされている。

弓勢の強さは甲冑7枚を貫くほどで、蜻蛉の羽根を射ることができ、百歩離れたところから柳葉を射て百発百中したと言われている程のもの。

兵破水破

神の両目から出来た矢とされており、その力は計り知れない。

兵破は剛を以って変化を驚かし、水破は柔を以って変化を啼かせた。

大典太光世

天下五剣のひとつとされている。

前田利家が使っていた名刀とされており、その斬れ味の良さは刀の中では最高峰とまで言われている。

覇剣グラム

ゲルマンの英雄、ジークフリートが使っていたとされるツィーハンドバスターファフニールと呼ばれる竜を屠ったとされるこの剣の前では、石や鉄も砂山のように容易く切り裂かれたと言われる。

白鷗会

その行動全てに於いて生徒のためにという観念を築き、そして学生管理の業務を行う組織。

簡潔に言くと、生徒の要望に応え、学園側に求める立場。生徒を律する機関でもある。

役員は任命制で決まる。まず新白鷗会会長を前会長が任命し、その後新役員の任命・使命を新白鷗会会長が行う。毎年十月に行われ

る。

生徒会

その行動全てに於いて学園のためにという観念を打ち立て、そして主に学園施設の運営を行う組織。

簡単に言くと、学園側の規則を生徒側に公表したり、生徒を律したりする組織ということ。

役員・会長は選挙制で決まる。これも白鷗会同様、毎年十月に行われる。

はい、以上でございます。

まだこれ分らない、という用語があれば感想欄にお書き下さい。次回からは五章、恭介三年になるところです。

今後は一話一話の更新速度が少しですが遅くなります。なんせ、受験生なものでして……。

それでは次話でまた。

特別編 キャラアンケート発表（前書き）

おまけで、キャラアンケート（5/1～19日まで実施）の発表です。

集計結果を、キャラ対話方式で発表します。

お遊びです。駄文なので飛ばしてもらってもかまいません。

あと、若干のキャラ崩壊が生じます。

ではどうぞ。

特別編 キャラアンケート発表

純「第一回！ 悪鬼抜いキャラアンケート結果はっぴょー！」

椎「ていうか、第二回もするんでしょ…？」

純「そういう事は放っておく事にした方がいいですよ椎奈さん！」

椎「……ええ、そうですね」

純「と、いうことで設置していたキャラ投票コーナーですが、何と六十五名の方に投票して頂きました！」

椎「皆さん、どうもありがとうございます」

純「ところで、何で俺たち進行役なんだろ……」

椎「私たち、なかなか作者に見込まれているからかもしれないね」

純「ほほう！ それは何か嬉しいな」

皋「……どうせ一票も入ってないからだったりしてるんじゃない？」

純・椎「——っ！」

純「飛び入りで皋月ちゃん入って来たのもアレだけど、それマジ……？」

椎「うう、どうせ私なんて、私なんて……」

皋「ちなみに言っと、一票も入ってなくて、ここにも出れない人たちいるからね？」

純「……ええ」

椎「いくら何でも、暴挙が過ぎませんか……？」

皋「そして最後に、私の仕事もこれが最後だったり……」

純「——さあて！ ぱぱっと進行しましょうか椎奈さん！」

椎「はい、そうですね！ 皋月ちゃんファイトです！」

純「えーっと……この今俺が持つてるメモでいうと、同率七位が四人、んで上位三人がいるっばいな」

椎「あの投票コーナー、選択肢結構ありましたよね？」

純「案外固まってる！」

椎「どうせ、どうせ私は人気無いんです」

純「——ああ！ これ以上喋っても泥沼になるだけなんで、発表したいと思います！ 椎奈さん、宜しく願いします！」

椎「……同率七位の方々は、この人たちです」

第七位 一票

要純一

二条加奈

滋岳悠斗

倉橋皋月

純「ということで、同率七位は——って俺入ってるし！」

椎「ていうか、MOBキャラの滋岳君に私は負けたんですか……」

悠「ど、どうも僕に投票してくれてありがとうございます。あと椎

奈さん、その発言何気に僕傷つくんだからね？」

皋「で、出番まだあった！」

加「誰か知らないけど、入れてくれて感謝するわっ！」

椎「どうせ出番増えただけの後付け……しかも一票……」

加「っちょ！ 椎奈さんそれどういう事ですっ！？」

純「どーどーどー。まあまあみんな落ち着いて！」

椎「それでは次の順位発表の方に――」
純「行くなつて椎奈さん！――えっと、キャラ投票には何故なにゆえにそのキャラが気に入っているか、書けるところがあるんだけど、それも一応発表したいと思います」
椎「それではどうぞ」

滋岳悠斗

・眼鏡っ子好きです！

要純一

・努力家なところが良い！

二条加奈子

・無し

倉橋皐月

・無し

椎「……っふ」

加「椎奈さん今笑いましたよねっ！？ 鼻で笑っちゃいましたよねっ！？」

皐「椎奈ちゃん、ちょっとキャラが崩れちゃってきてるね……」

椎「な、何の事か……ぷふっ……！」

加「本格的に笑いましたかっ！？」

純「……ということで、俺に入れてくれた方、どうも有難うございました」

滋「相変わらず白鷗会メンバーは、キャラが濃いなあ」

加「そっちが薄いだけだと思うけど……」

皐「私もそうじゃないかなって思っちゃったり」

滋「……」

純「そ、それでは悠さん、皐月ちゃん、加奈子ちゃん！ 有難うございました！ さよなら！」
滋「はあ、やっぱり僕って影薄いのか」
加「性格直せば、どうにかなるかなアタシ……」
皐「なんだかんだで私、結構出番あったりしてたね」

純「……ふう。もう、椎奈さんあから様に笑っちゃ駄目ですよ！」
椎「だって私、もう憂さ晴らしするぐらいしか役目無いじゃないですか……」

純「進行の役目ありますからね！？ 勝手に仕事作らないで！」

椎「それでは、第三位の発表です」

純「まさかのスルー！？」

椎「第三位は、この方です」

第三位 十六票

桜庭恭介

純「流石恭介さん！ 俺の投票数と十六倍も違う！」

椎「恭介君は、もっと上だと思ってましたが……」

恭「ういーっす。どうも投票、ありがとさん。——んでお前ら、顔色悪いぞ」

純「ははは、ここまであからさまに人気分かれると、なかなかね……」

椎「純粹に羨ましくて仕方がないんです」

恭「まあ、一応これでも主人公だからな。これで票入ってなきゃ、

小説の主人公変えた方がいいぞ……」

純「まあそうなるかな。——という事で、支持者のコメントを見てみましょう！」

椎「ざつと纏めると、こんな感じになってました」

桜庭恭介

- ・ やっぱり主人公だし！
- ・ カッコいい！ 純一君との絡み最高！
- ・ 死を恐れるところに、人間味がある！
- ・ 弱い部分も強い部分も、どっちもあつて感情移入出来る！
- ・ 信念があると、やっぱり格が変わってくる
- ・ 出番ふやしたげてえ！

純「俺の投票数が減ったのは、恭さんのせいだったか」

恭「それはいくらなんでも理不尽じゃね？」

椎「ていうか最後のところは、最早同情の一票じゃないですか……」

恭「それ言ったら駄目だろ。ていうか俺だってもっと活躍したいつつの」

純「それにしても、票が変わるとコメントも多くなるなあ」

椎「ここに書いていないのでも、同じ様な内容のものがあといくつもありますからね」

恭「ええーっと、まあみんなマジで感謝するわ」

椎「恭介君、頑張つて下さいね！ 私はずっと、応援してますから」

恭「いや、お前も票入る様頑張れよ」

椎「……うう、どうせ私なんて——」

純「恭さん、なかなか酷いな」

恭「つい本音がぼろつと、な？——という事で、コイツの後処理頼んだ」

純「えゝ！？　　っちょ、恭さんここで逃げるのかぁ！」

十分後。

椎「が、頑張ります。恭介君に追い付けるように！」

純「っ、疲れた……」

椎「なに茫然となってるんですか！　まだ発表は続いているんですよ！？」

純「どうしていきなりそんなハイになっただろ……」

椎「もう、だらしが無いですね。それじゃ代わりに私が発表しちゃいます」

純「宜しくです……」

椎「えっと、それでは第二位の方の発表です！」

第二位　十八票

東雲梓

純・椎「——っ！？」

梓「やつほー。お姉さんなかなか良い順位だね、びっくりしちゃった」

純「ど、どうして師匠が二位なんだ……」

梓「んゝ、やつぱり仁徳礼を愛してるからかな？」

椎「お酒しか呑んで無かったじゃないですか！」

純「出番だって、椎奈さんや俺、ましてや恭さんの半分ぐらいしか無いのに……」

梓「分かってないわねー。こういうのは、多くを語らない者の方が人気が出るのよ？」

純「いやいや！ めちゃくちゃ喋ってるじゃないですか師匠！」

椎「もう何かどうでもいいです……。ということで、梓さんを支持した人たちのコメントを発表します」

東雲梓

・お姉さんキャラが最高だぜっ！

・小柄で頑張ってそうな所に、萌える！

・最強っぽいオーラ

・甘ちゃんのところに、ぐつとくる！

・自由奔放なことか結構良い！

椎「私も傍若無人のキャラでいってみましょうか……」

純「いえ、今のままでいいですよ！ 十分すぎます！ これ以上面倒

倒——じゃなかった、キャラ作ったら大変だよ！」

梓「まあ、私はこれが素だし。あんまり無茶してキャラ作ったら後で面倒よ？」

椎「それじゃ、普通に頑張っていけます」

純「それにしても、師匠こんなに人気だったのか」

梓「滲み出るオーラは、隠せきれないのよね」

純「……酒しか呑んでない癖に」

梓「弟子？ あとで特別鍛錬追加してあ・げ・る」

純「す、すみませんでしたっ！ 俺が愚かでした！」

梓「ふふ、物分かりいい子は結構お姉さん好きよ？ ……さあて、そろそろ恭介ちゃんのところに行こっかな」

純「あ！ 師匠、まだ終わってない——って、もう遅いか」

椎「行っちゃいましたね」

純「最近、本気で付くべき師匠を間違えたかなって、ずっと考えてる」

椎「……」

純「さ、さあてお次は、とうとう第一位の発表です！」

椎「それより、これ発表する意味がありますか？ 多分皆さん、大体予想ついていると思いますけど？」

純「まあまあ、自分に票が入らなかったからって怒らないで」

椎「……何かム力つきます」

純「ではでは、第一位の発表でーっす！」

椎「スルーはよくないと思います……」

第一位 二十五票

沙希

純「ということ、沙希ちゃんが一位です！」

椎「一人で四十パーセントも獲得……」

沙「……ぶい」

純「か、かわいい！ 流石は沙希ちゃんだ！ ファンクラブ会員として鼻が高い！」

椎「どっちかというと、恭介君の方が鼻は高いですけどね」

沙「きょーすけどこ？」

純「恭さんなら、もう出番終わったから自室にでも帰ってるんじゃないかな」

沙「……そ。なら、わたしもかえる」

椎「あ、まだコメント発表してないです……」

純「行っちゃったなあ。まあ、沙希ちゃんだし仕様が無いか」

椎「ええ、そうですね。——ということで、本人は居ませんが、支持者のコメントを掲示します」

沙希

- ・もう可愛すぎる！
- ・つよかわって、何かズルイぞ」
- ・僕にもください！
- ・もふもふしたい！
- ・全てに置いて絶対的可愛さ

純「殆どの人に共通して言えることは、とにかく“可愛い”という事です！」

椎「私もそう言われないですね……」

純「椎奈さんはどっちかというと、綺麗って感じだからあんまり言われないのかもね」

椎「あ、ありがとうございますう……」

純「さて、これで発表は終わりです！」

椎「ホントに出てこなかった人が居ますね……。会長とか湊さんとか」

純「すごく残念すぎる——ってアレ？」

椎「どうかしましたか？」

純「票数を合計してみると、六十三票しかないんだけど」

椎「も、もしかして！ 私に二票入ってるってことじゃ！」

純「あ、その他に二票入ってる」

椎「……そんな事だろうと、思ってたよ」

純「えっと、その他の人は同一みたいだね。……誰だろ？」

椎「私のお父さんとかですかね？」

Only one 二票

キャラじゃないけど、南方陽さん」

陽「誰か知らないけどありがと——！！！！！！」

純「おわっ、何か出てきた！」

椎「ていうか、作者に入れて私に入れないって……」

陽「ははは、日頃の行いが違うのだよチミィ！」

純「……」

椎「……」

陽「あ、そう言えば純一君も一票だったねえ！ どまどまってかははははは——っ。所で二人とも、何で無言で神魘を投影してるのかな？ かな？」

純「——地獄に」

椎「——堕ちろ」

陽「っちょ！駄目え！」

集計結果	
沙希	二十五票
東雲梓	十八票
桜庭恭介	十六票
要純一	一票
滋岳悠斗	一票
倉橋皐月	一票
二条加奈子	一票
南方陽	二票

特別編 キャラアンケート発表（後書き）

何かめっちゃうれしい！

本当に、自分に入れてくれた方、ありがとうございました！

あと、作者に一言

多大な応援感謝します！

これから頑張っていくしますので、宜しくお願いします！

では次回より五章です。

閑話 廻

月は白。

風は生暖かく、時に突風が吹き荒れる。

その風に流される雲は、まるで影が地を這うようにゆつくりと、時には蠢くように動いていた。

千散れていく桜の花びらは、凄然としている景觀の間をすり抜けて行く。

「ほお、——綺麗だ」

その場には、異常とも受け取れる程の静観な雰囲気と緊張が漲っていた。

断崖絶壁の山に鬱蒼と覆い茂っている樹海の中には、一軒の小さな隠れ家とも取れる日本家屋が。

その縁側には、一人——否、一匹の雄にしては艶然としている者が居座っていた。

「秋には及ばねえが……風情じゃん」

酒の肴には結構だな。

そんな事をふと呟き、徳利を静かに口元へ運ぶ。

「お主……まあた呑んでおるのか」

ふと後方の襖が空き、その少女とも見て取れる女性は、呆れたように声を漏らした。

その者でも近づくまで察知出来なかった一つの影は、家屋の奥より姿を外観へ誘う。

皓々（こうこう）と射す月の中に現れたその女性は、儚げな雰囲気と濡れたような艶やかな黒髪を備えており、透き通るような白々しい素肌を惜しげも無く外気へ晒していた。

紫の藤の着物は、上品なその女性の色合いに丁度良く混ざり合っている。

「常日頃見えていても、お前は美人さんじゃね」

「いつもいつもそんな言葉にや、騙されはせんぞ」

腐抜けた事を言うわい、と彼女は言うが、若干その頬は赤く染まっている。

——可愛いな。

ふとそう思ったその者は、再び視線を月へと向けた。

「それで……どうなのじゃ？」

「ああ、着実に“奴”の気配は出つつある」

「そうか。——とうとう、お主の悲願が果せると言う事じゃの」

「ああ、長かった」

眼を瞑ったその者に、優しげな微笑みを浮かべる女性。

「——アイツも儂も、何も果たせぬまま終わっちまったからな」

虚空へと儚く消えて行ったその言葉は、自然と山の木々を震わせた。

「でも、アイツはまだ“本格的には”分かっちゃいねえんだろっ
「あ」

「どうして分かるのかえ？」

「解ってるくせに。——“あの力”が消えたり出たりしてるからだ。

アイツが出ていれば、常に放出してるじゃん」

「ならば……その力が常に出るようになれば、という事じゃな？」

「ああ。儂は奴と——殺れる」

一際ざわつと風が舞い上がると、桜の花弁が暗がりへと走り抜けた。

その花弁吹き荒れる巨石が積み上げてある庭園は、神秘的な匂いを漂わせている。

「出来れば、吾は止めて欲しいと思ってるんじゃないか」

「儂の生まれ変わった意味が無くなるじゃんか。……まあ、儂も別にそれでも悪くないとは多少思っているが」

「ふふ、そうかそうか。それは難儀じゃ」

隣に座って肩を寄せてきた彼女の、何とも言えない妖艶な色香が、じんわりと至福の時をその者に与えた。

「暫くは待ちだろうし、ゆっくり待ってようじゃないか」

「ああ、今暫くは……じゃな？」

二つの影はそのまま気配を消し、只管照らし続ける丸いそれを眺め始める。

いつしか荒々しく舞い上がっていた風は、自身らを吹き抜ける微風へと姿を変えていた。

閑話 廻（後書き）

自分でもこんな文章書けるんだと初めて思った。

誤字脱字などあれば、お知らせください。

第肆拾話

「きょーすけ、ごはん」

「お前は起きて第一声がそれで、何とも思わないのか……？」
「……？」

四月二日、午前九時二分。

只今春休み中で、各個人は自己能力向上のため、日々鍛錬に励んでいる。

そんな中、最近やっと目覚ましのベルが鳴ると起きるようになった沙希は、乱れた服装と髪型と共にダイニングに登場。
艶めかしい感じで眼を擦っているその姿には、思わず見蕩れそうになる。

「ま、口頭があれじゃあ、な……」

「なに？」

「別に何でもねえから、椅子に座つとけ。すぐ出来るから」

「わたし、手伝う」

「却下だ！」

「……けち」

何が手伝うだ。お前が手を加えたら後片付けの方が大変になるんだよ。

とりあえず、食パンは焼いている途中で、今は目玉焼きを作っている。

飲み物は——って、まだ出していなかったか。

「沙希」。牛乳出して於いて」

「うん」

素直に返事をする、沙希は冷蔵庫の方に向かいだした。

しかしなかなか、コイツも少しは仕事ができるようになって来て、俺も結構大助かりだ。

——まあ突然変なことをし出すのは、偶に傷なんだけどな。

「きょーすけ、みてみて」

「ん？　なんだ沙——ぶはっ！」

「びっくり？　えろい？」

「何やってんだお前！」

何で牛乳を顔の周りに塗ってんだよ！

不覚にもドキツと——じゃなかった、びっくりしただろうが！

「何処でそんなもん覚えてきやがった……」

「このまえ、くらすのだんしが」

「そうかそうか、今度鉄槌の雨を奴らに降らせてやる」

くそつ、変な情報をコイツにみんな付け過ぎだ。

ただでさえ純真なんだから、んなもん覚えさせたらすぐ真似するだろうが……。

「ばつちいから拭きなさい。そしてそれはコップに注ぐものだ、顔に塗るものじゃない分かったか？」

「……ん」

少しふてぶてしそうに顔をタオルで拭くと、コップを取り出してすぐさま注いでいく。

「ホント、何処で間違えたんだる俺……」

沙希には聞こえないように独り言を、俺は目玉焼きを皿に据える時にふと呟いた。

最初は良かった。本当に普通だった。

それが一週間も経てば少し変になり、一か月経って今のようになっている。

矯正でもするべきかな……？

「ホラ、出来たぞ」

「いつもありがと、きょーすけ」

「……何で今日に限ってそんな事言うんだよ」

はぁ、こうやってズルズルしてるから怒れなくなるんだな……。可愛い娘に怒れない親っていうのは、多分こういう心情なんだろう。

「ん？　どうかした？」

俺が沙希をそんな眼でみてみると、視線に気付いた彼女は俺に首を傾げる。

「いや、いつも通りだなあって」

「うん、きょーすけのおかげで、まいにちたのしい」

そう言っただけで朗らかに微笑んだ沙希に、不意にも俺は顔を逸らしていた。

「ん、取れんな」

床に沙希が落とした食べ物カスがあつたのだが、椅子で潰したか何かでこびり付いている。

「濡れたタオルで拭いた方が早いかな……」

そういえば、沙希は今洗面所で歯磨きとかしてるよな。

「フーイ沙希、歯磨き終わったらすぐ雑巾持ってきてくれるかー？」
玄関の方に付いている、洗面所の入り口方面に声を掛けると、少し足音が激しくなったような気がする。

どうやら洗顔も歯磨きも丁度良いタイミングで終わっていたよう

だ。

ガチャ、と扉を開ける音が響き、足音がとことこと近づいてくる。

「これ？」

「そう、これだこれ——ってお前！」

「なに？」

「なに？　じゃねええええ！　何で服ちゃんと着る前に来てんだよ！」

靴下は半分しか履いていないし、上とかはだけ過ぎて胸元が見えそうになっている。

スカートも中途半端に腰に付けているだけなので、いつずれ落ちても可笑しくはない。

「へんげのとちゅうだった」

「だったら全部終わって来れば良いだろ！」

「でもきょーすけ、“すぐ”っていった」

え？　何？　俺が悪いの？　俺が悪い事になっちゃう？

「ああ、それは俺が悪かった。でもな、普通に考えれば外に出るのはちゃんと身なりを整えてからだぞ」

「……ごめんなさい」

シユンとなつて、俺に少し淋しげな視線を送りながら沙希は謝りだした。

——なんか、すごい罪悪感があるんですけど。

「いや、次から気をつけろって事でだな、俺は別に怒っている訳じゃないから」

「……ほんと？」

「ホントだホント、ってああ！　もう！」

上目遣いで見ないでくれ！ お前可愛い自覚あるのか！？

金色に輝く艶やかな髪、上品にも紅く染まっている唇、長いまっげから覗かせるパッチリ二重。

全てが全て、造形美のようにしか思えな――

「あ、沙希動くなよ」

「えっ……？」

彼女が全てを言う前に、右手は透き通るような肌を持つ顔に、すつと伸びて行く。

若干頬が赤くなったような気はするが、沙希に限って照れていると言う事はないだろう。

俺の掌は、その紅くなっている場所へとたどり着き。

ぎゅっと眼を瞑った沙希の眼元へ、俺は――

「よし、取れたぞ」

「……え？」

「めやに目脂が残ってたぞ。もうちょっと丁寧に顔洗えよな」

俺がそう言うと、キョトンとした感じで俺の顔を覗き続ける沙希。どうやら、別の事をされるように思っていたっぽい。他にやる事があるだろうか……。

そんな風に沙希の顔から手を離そうとした――その瞬間。

「やつぽー恭さん！ 春課題を……あ」

空気が固まった。正にそれを現在進行形で体験している俺。

今の状況。傍から見れば着崩している沙希に俺が迫っている――ように見えなくもない。

「失礼しました！」

大きな音を立てて入って来た純一は、そのままドアを蹴破る勢いで外に出て行くこうとする。

「ライ待て！ 何を誤解しているんだ純一！ 俺は何もやってねえ

ぞ！」

ガツチリ腕をホールドして、脱走しないようにする。

「えー？ でも今の状況どう見てもそれにしか見えないじゃないか

！」

「目脂めやまを取ってただけだ！ 別に疚やましい事なんてしてねえよ！」

俺が事実を明言すると、純一は疑わしそくに此方を覗いてくる。

そして次に沙希の方へ目線を移した。彼女の表情は、今さっきの見た事ないようなキョトンとした顔ではなく、いつも通りに戻っている。

「ねえ沙希ちゃん。恭さんに変なことされてない？ 大丈夫？」

「へんなことって？」

「体べたべた触ってきたり、なんか如何わしい事を話してきたりって事だよ」

てめえ……後で覚えてろよ。

そう思いながら沙希の方を見ると、別段として何にもないような表情を浮かべていた。

「きょーすけはなにもしてない」

「そっか。良かったよ」

「どっちかというと、わたしがやった」

「……」

純一の目線が痛い！

「別に教え込んでねえよ！ どっちかというと、俺以外の男子が悪い！ 変な事教えてんだろぅが！」

「ああ、確か居たね。——黙らせちゃったけど」

ライライ、物騒だな。

「……なんかさ純一。お前、沙希に関しては最近結構きついよな」

「何しろファンクラブ会員第一号だからね」

そう言って清々しい笑顔を浮かべる純一に、俺は苦笑いを浮かべるしかなかった。

どうしてこんなくだらない事を言っているのに、格好良く見えるのだろうか。

ふと涙が出そうになるが、その前に純一が此方に声を掛けてきた。
「それでさ、春課題なんだけど……」

春課題とはその名の通りで、春の宿題のようなものだ。

悪鬼被いでも専門的な内容を、資料に纏めて提出するものだ。

一人ないし二人ぐらいで作業するのが普通と楓夏に言われたので、純一とやる事にしたのだが。

「もう春課題はやっておいたぞ純一」

「……え！？ 終わったの!？」

「ホラあそこ。昨日結構、捗^{はかど}ってな。すぐ出来あがった」

そう言って俺は机の上にある『呪禁道の記し』というタイトルにした資料に指をさした。

呪禁道^{じゆんぎんどう}というのは、陰陽術や古神術の源流の一つとされているもので、森羅万象を禁じることで効果を発するものである。

例えば火を禁じれば火の能力が無くなったり、刃物の斬るという概念を禁じれば、斬られても傷が付かない、といった超然的な能力を発揮出来るものだ。

「そして、一応専用の御札も作ってみた」

「うお！ すげえ！ 木じゃん！」

渡すと嬉しそうに胴上げでもする勢いで頭上に挙げる。

「神木じゃねえと作れないんだよ。——ということで、沙希。妖狐モードにチェンジだ」

と言つて沙希を見ると、既にもう妖狐モード（小）にシフトしていた。

いつもながら、コイツは俺の意思を汲み取るのが得意だな。

……何気に嬉しかったりする。

「純一、それ持ったまな！」

「っへ？ どういうことだ恭さん？」

俺の浮かべたあくどい表情を確認し、顔が引き攣りだした純一。
ふふふ、今さっきの妄言のお返した。

「絶対離すなよー。よし沙希、純一に軽く狐火だ」

「えゝ！？ ちょっと待って恭さ——つてあああああ！！！」

純一が全てを言う前に、沙希は小さい狐火を純一へと放った。

それは小さいながらも、灼熱という言葉すら容易いほどの業火だ。
時折見える青白い炎が背筋を凍えあがらせる。

「うおおおお！ 俺燃えて死ぬー！」

その狐火に四方囲まれている純一は、隣人の迷惑は考えていないのか——考えられないのかもしれない——大声を挙げてあたふたとしていた。

「ヲイ、純一」

「うへえ！ 俺の人生ここまでだったのか！ 楽しかったよみんな！」

「五月蠅いから黙れ」

「うぐっ」

いい加減黙らない純一に、拳骨を一発お見舞いした。

正気を取り戻した奴は、その場を見渡す様にして狐火を探している。

「あれ？ 狐火どこ行っただ？」

「御札見てみるよ」

「え、御札ってここに——って！ いつの間に丸焦げ！？」

最早形だけは保っているものの、刻んだ文字や神力は後片も無く消滅している。

「呪禁道っていうのは、禁じるとは言ってるが、実際身代わりという観念が大きい。まあ藁人形と同じような感じだな」

「ほー、そうだったのか！……あ、ところでこの御札ってもう使えないのか恭さん？」

「ああ。効果は一回きりだしな。その効率の悪さで、平安に入って廃れていったんだよ」

神木を数多く使うこの道教派生の呪術は、そういった観念から効率よく行える陰陽術や神魑によって退行の一途を辿った。

「そつかあ。――あー、あとさ。沙希ちゃんがあんなに躊躇いなく狐火出すなんて思わなかったよ、俺」

「……それに関しては何とも言えんな」
俺だつてびつくりだ。何かしろ、嫌がる反応はあると思っていたのだが……。

沙希に視線をくれると、俺の訴えたい事が分かったのか、すぐさま姿を人へと変える。

「なあ沙希。何で躊躇いもなく純一に狐火を？　もしかして、純一なんか大っ嫌いかな？」

「つちよ！　恭さんそれマジで傷つくからね！？」

「ぎゃーぎゃーと純一が騒ぎだったが、今はなんかどうでも良い。

彼女の返答に注意していると、沙希は少し思案するように顔を捻らせ、一つの言葉を俺に放った。

「きょーすけ、きのうががんばってたから」

「……ん？　どういうことだ？」

「いっしょうけんめいだった、それつくるの」

そう言つて黒焦げになっている御札を指差す。

「いっぱいよんで、いっぱいかいてた」

続いてゴミ箱の方を指して、何度か失敗して捨てていた、神木の効力を失った木々を見つめる。

逐一行動を礼讃^{れいさん}するような沙希の言葉一つ一つに、俺は不思議と体に響く心地よさを感じていた。

そんな風に思っていると、彼女はくるっと此方に振り向く。

少し伏し目がちにしながら、最後にあどけない笑顔を浮かべ、眼を優しく細めた。

「しっぱいするなんて、おもわない」

ああ、俺ってすごい幸せ者なのかもしれない。

不覚にも、目頭を熱くしてしまっている自分がいた。

（沙希ってさ、見てないようでちゃんと周りを見てくれてるよな……）

その時の彼女の言葉は、体の芯を熱くさせるような、妖艶な奏でを兼ね備えていた。

「恭さん、何か羨ましいなあ。俺はとんだとばかりだけど……」

「ははは、まあ氣い直せって。昼飯作ってやるから」

自分でも驚くほどめっちゃ気分が良くなっていた俺。

我ながら現金な奴だと思うが、それ以上に何か嬉しい。

「お、恭さん太っ腹！ んじゃ俺ちよつと食材持ってくる！」

そう言うや否や、純一は俺の部屋から飛び出して自室へと特急で戻った。

相も変わらず元気な奴だな。

……ああいう所に、女子は惹かれてるんだろうか。

そんな風に思っていると、沙希が何かを言いたそうな視線を此方に浮かべていた。

「ねえきょーすけ、やっぱ――」

「駄目だ」

「……まだ、なにもいってない」

「料理手伝う、だろ？ お前は調理具を使いなれてないから、また今度練習しような」

「でも、いつもきょーすけばっか」

そう言っただけを帯びた瞳を浮かべる沙希。

本当に申し訳なさそうに首を少し前方へ傾けてもいる。

なんだ、沙希もそういう心情を持つんだな。

新たな発見と新たな親しみを抱きつつ、俺は沙希の頭を優しく撫でる。

除々に悲しげな眼元は、柔らかな安堵したようなものへと変化していく。

「良いんだよ、お前が美味しくたべてくれるならそれで今は十分だ。

――だから、また今度。な？」

「……うん、ありがと」

珍しく恥じらうような顔を浮かべた沙希に、自然と笑みが零れていた。

第肆拾話（後書き）

誤字脱字あれば、報告を。

第肆拾壹話

四月五日、午後一三時三十四分。

お昼時も過ぎ、今でゴロゴロしている沙希を傍らに、俺は買い物の準備をしていた。

「沙希、俺買い物行ってくるけど、純一とこ行つとくかあ？」

俺でなくても良くなったが、やはり一人にしてしまうと沙希は孤独の恐怖で、不安になってしまうようだ。

現に一月中に一度、下の階にある自動販売機に行っただけで一時間も涙目で拘束されたことがある。

あの時の失態は犯さぬよう、現在ではこの声掛けは恒例となっているのだ。

「いく」

多分テレビに必死で来ないだろうなあと思っていたが、あながち間違いだったようだ。

すぐにリモコンで電源を切ると、タンスに入れていた俺のシャツを取り出し、変化の能力ですぐさま上着へと変える。

「そつか。んじゃ行こうぜ」

「うん」

…… 毎度恒例、腕を絡ませてでの出発となった。

寮の出入口は、何かと緊張が走る。

というのも、沙希擬人化の存在を知らない奴が、なかなか凝視してくるからだ。

中には嫉妬、中には羨望の念が混ざっていたりして、居心地悪い事この上ない。

そして――外出した後も、面倒な事は多々ある。

「はあ、今日も空が綺麗だな」

溜め息と共に出た俺の言葉は、巡り巡って虚空へと混ざっていく。

「そうだね、きょーすけ」

「ああそれでさ。今日はその……何だ？ 腕を退ける気――」

「毎度の事ながら即答かよ。あのな、言っとくけどすごい周囲から視線集まってるの気付いているか？」

真に残念な事で、ちらちらというより、がっちり視線を此方に向けてくる交通人が多すぎて疲れる。

中には「お似合いねー」などと言う声も。

――いや、別に嫌というわけではないが、どうもなんか背中がそわそわして仕方が無い。

「しってる」

「そっか。ならその腕をどかしてくれねえかな？」

「でれでれして」

「お前がな！ 俺の意思じゃねえ！」

「だらしない」

「もう言いたい放題だな！」

再び溜め息零れ、頭が痛くなっていくのを感じた。

どうも最近、容赦という物も無くなって来たようで、こっぴどきついギャグというか罵声というか、ネタのような言葉を掛けてくるようになって来た。

「みてきよーすけ。まど」

「話の振り方が雑すぎ！　んなもん何処にでもあるだろうが！」

「そんなにてれなくても」

「照れてねえ！？　何処にそんな要素があつた！」

いや、若干類は羞恥と怒りで染まっているかもしれない——が、これと今先ほどの沙希の発言との間には、明らかに齟齬が生じているだろう。

「ねえきよーすけ」

「今度は何だ？　言っとくけど、変な事言つなら無視するからな」

「きょうはすきやき」

「……」

ちゃっかりし過ぎだろお前！

「へんなこと、いつてないのに……」

「ああ、今回は俺が悪かった。——だがな、もう四月だ。すきやきはそろそろ納め時だろう？」

「でも、たべたい」

そう言つて上目遣いで覗いてくる沙希には、思わず卑怯だろうと言つてしまいたくなつたが、なかなか俺も食べたかつたよな、とふと思ひ出して彼女の提案を受け入れる事にした。

——決して誘惑や、嫌われるのを避けたいという邪な考えではない。
い。

「着いたな」

「ついたね」

何だかんだで寮から十分程度で着くスーパーまでの道のりを終えていた。

しかし今の俺にとって、それは一時間のロードワークにも等しい

倦怠感を味あわせているのも事実であった。

「くれぐれも、中では大人しくしておくように」

「大丈夫。べったりくっついてる」

「うん、俺の質問の意味分かってんのか？」

静かにすればいいんでしょ、と普段からあまり変わらない端正な顔立ちを向けて、無言で訴えかけてくる沙希。

それにしても、スーパ―で腕を組むとか、それは無いんじゃないかと思いつながら、俺は重い足取りを店内へ運んでいくのだった。

寮への帰り道。

一番暖かい時間帯で、どうも気分が浮かれ気味のように感じる俺は、離れない沙希をどうにか離そうと奮闘していた。

今さっきの店内でも沙希のおかげで仲良くなっていたおばちゃん達からは、何か暖かい視線で見られ、そして店員さんからはと言うと。

『これ付けておきますね。彼女さんと食べて下さい』

何て言われながら、笑顔でおまけされてしまうという始末。

——うん、これはどうにかしないといけないだろう。

「なあ、沙希」

「これあげる」

俺の問かけを丸つきりスルーして、今さっき貰ったお菓子——通称、“山谷隠れ”と言う何ともネーミングセンスを疑うような箱

の中から、山型のチヨコを取り出す。

「……俺、谷チヨコの方が好きなんだけど」

そう言っただけを受け流し、小さな箱より谷チヨコを取ろうとしたところ。

既にその中に谷チヨコは無く、最後の一個はもう沙希の口内へと含まれていた——って。

「やまちよこもおいしいよ？」

「説得力がねえんだよ！ 何で山チヨコばっか残ってるんだろうな！」

「もとがすくなかったから？」

「お前が谷、谷、谷、山、谷みたいに谷をこれでもかと言うぐらい掻き込んでいたからだろうが！」

「……はずかしい」

「どこが！？ どこにそんな要素が！？」

今日は一段と天然ボケが冴えわたっているな、コイツ。

そう思いながら見つめていると、本当に照れたようにして沙希が小さな声で一言呟いた。

「だって、よくみてる……」

あー……、なるほどな。

いやでもさ、普通見るじゃん？ 何するか分かったもんじゃねえし、危ない事でもあれば助けないといけねえ訳だし。

しかし改めて言われると、結構恥ずかしいものがある。

俺は少し頬を掻きながら、そっぽを向く様にして応えた。

「まあ、お前に何かあると悪いし、な」

「……ありがと、きよーすけ」

そう言っただけでクスリと笑う沙希に、俺は何度目か分からない艶然とした雰囲気を感じた。

そしてそのまま、山チヨコを三つ取って俺に渡してくる。

「たべて」

「……おう」

口に含まれ、仄かにビターな味触りだなと感ずることが出来た。しかしそれ以上に沙希の優しさが甘いなあと、いつもでは思い至らないような後で思い返せば恥ずかしい事柄を考えながら、俺はゆっくりなっていた足元を速める。

すると何故か気分良さそうにしていた沙希は、此方の顔をちらちらと覗いてきていた。

何かと思つて目で問いかけると、沙希は照れたようにして――

「ねえきょーすけ、おんぶ」

――なぜこのタイミングで？

「……どうかしたか？ 足でも疲れたのか？」

「うーん。……のり？」

「ノリでおんぶをせがるな」

「わかった。それじゃだっこ」

「何最大限譲歩したように見せかけて、グレードアップしてやがんだ！」

ああ、何か今までの良い雰囲気台無しだな、ヲイ。

――つて、俺は何を考えているんだろうか、柄にもなく。春で頭がボケだしたのだろうか？

「ああ、駄目駄目」

「どうかした？」

「いや、今俺の中にあつた煩悩を退散させていた所だ」

「……そう」

俺がそう言つと、沙希は何故か少ししょんぼりしたように声色を低くした。

——あれ？ 今何か悪い事、俺言ったっけ？

しかし思い返してみてもよく分からないので、とりあえず止まりがちな足を進めることにした。

だがペースはあくまで沙希に合わせて。これはやっぱり、大事な事だろうと思う。

「きょーすけ」

「……また何かあったのか？」

「わたしにあわせてくれて、ありがとう」

その時の沙希の表情は、今まで見た事のない——澄んでいるような濁っているような、何とも形容しがたいものだった。

まるで過去を追憶している、そんな錯覚を見せるほどに。

哀愁もあり、愛着もある。

そんな顔だった。

「どうした、藪^{やぶ}から棒に」

「いつものかんしゃ」

沙希がそのように言う時には、既に俺たちは終着点の寮へと辿りついていた。

「そっか。……まあ俺も好きでやってるから、良いんだけどな」

「うん。だからわたしは——」

最後は良く聞き取れなかったが、その時の表情はいつも以上に端麗なモノで、思わず目を見張っていた。

いつの間にか俺の心持ちは、晴れ鮮やかなものへと姿を変えていたのだった。

その日の夕食は、今まで以上に沙希との距離を感じられるもの——

「なべぶぎょうは、わたし」

「白菜もちゃんと食べる！」

には成らなかった……。

第肆拾壹話（後書き）

次回から学校に戻ります。

誤字脱字などありましたら、ご指摘を。

それでは。

第肆拾貳話

四月七日、午後四時二十五分。

始業式の次の日ではある放課後。

この日、俺と純一は聖インフィニティア学園のシンボルともいえる、中央広場へと足を運んでいた。

理由は、まああれだ。

要するに、力を持った奴が自分以外にたくさん居たとして。今までは抑えてきてた輩も、少なからずいる。

と、なると——やっぱり自分の実力を測りたくなる人はいるだろう？

ある一人の生徒が白鷗会室に、中央広場で戦闘していると知らせて来てくれたのだ。

面倒だな、と思いつつその場に着いてみると、興は今、最高潮へと達しているようであった。

一年のはっちゃけた奴ら——片方は恐そう、もう一方は普通——が神魅を具現化して一年の観衆が見守る中、手合わせをしている。それに乗じて周囲も、馬鹿みたいに盛りたてていた。

二人ともなかなか腕筋は良く、実力もそれなりだと認識出来る。少しだけ、普通な方が手抜きしているようにも見えるが——今はそんな事どうでもいい。

俺はその場へと人をすり抜けて入ると、盛りたてていた生徒たちの野次をすぐに収まっていった。

「フーイ、その一年ども。先生の許可なしに戦闘は禁じられてるだろうが」

「ああゝ！ 今どんな状況が見て……分かりませんか？」

一瞬で声色を変え、謙^{へりくだ}るように此方を見据えてきた恐い方。

——人の顔みて、なに顔色悪くしてやがる。

ちよつとだけ心にグサツとキタのは、多分気のせいだろう。……
気のせい気のせい。

そんな風に感傷に浸っていると、純一が声を荒げて一年生に物申し始めた。

「始末書書かされたくないなら、さつさと止めるよな。——それとも、痛い目でも見たいか？」

何故か荘厳とした雰囲気纏っている純一に、観衆を含んだ年生たちの周りには、緊張のオーラが漂い始める。

「さつさと寮か家に帰れ。んな事で俺らの仕事を増やすな」

「えつと……すみませんでした。んじゃ俺はこれで……」

俺の言葉に頷くと、散っていく観衆と共に、恐い子もおどおどしながら立ち去っていく。

数十秒後には、その場は閑散とした物静かな広場へと戻っていた。

まあその中で、ある一人は未だ冷めぬ闘心を燃やしているようだが。

「それで、君はどうしたいんだ？ 大人しく帰って欲しい所なんだけど」

「うっせ！ 勝手に手合わせ止めてんじゃねえ！」

純一の優しい問いかけに、突き放す様にして癩癪かんしゃくを零す男子生。

少々言葉遣いになっていないようである。

純一の眼元が一瞬吊りあがっていたが、俺が眼で諭すとうずでも良くなったように肩を竦めた。

その動作が男子生の本意に成りえなかったからか、さらに彼の気持ちは昂ぶっていく。

「おい、その強面の奴！ 俺と戦えよ！」

何故俺？ と思っってしまったが、とりあえず面倒なのでさっさと終わらせようと思う。

「……お前が負ければ、すぐに帰れよ？」

「当たり前えだ！ ていうか、そんなに大口叩いてる余裕あんのか！？」

「あるっちゃあるというか——っ」と

俺が言葉を全て言う前に、一年の男子生徒は懐へと潜りこんで来ていた。

既にその右手には、投影し終えた刀の神魅がしっかりと握られているようだ。

そう認識するや否や、そいつは俺の眼前へと素早く移動し始めた。懐へ音も立てず近づく姿は、なかなか手練れである事を悟らせる。

「っふ！」

出来る最短動作で、男子生は俺の喉元へ鞘の付いたままの刀を突き付けてきた。

眼の前で鞘が弾けるように輝く。

——それを認識した時にはもう、俺の脚は神速へ至るように閃き、相手の背後へと刹那に移動していた。

「っあ……！」

一瞬の間に勝敗が決まっていた。

その事に、眼の前の一年生は認識が追いついていないのだろう。

——喉の先端に入り込んでいる、俺の手刀で身動きが取れないでいた。

「さっさと消えろ。マジで始末書書かせんぞ」

俺の不機嫌そうな声色に、若干の驚きと呆れを見せた男子生。

「……嘘だろ？」

一言呟き、降参したように両手をひらひらと上に挙げると、即座に神魅を虚空へ消しやった。

「いやあ、やつぱ恭さんはすごいなあ」

「お前でもあれぐらいなら止めれたろ」

「いやいや、出来そうだけどもつと時間掛かるって！」

白鷗会室への帰り道。何とも他愛のない話をしながら戻る俺たち。外は最近大分落ちるのが遅くなった夕焼けが、目映く窓より照らし出していた。

「それにしても、恭さん見た後の観衆の顔。あれは滑稽だったなあ」
「別に悪いことしなければ何もしいつつうのに、人を勝手に……」
最近、俺の処遇が可笑しい。

というのも、俺が白鷗会入りした時は——純一は無かったのに——多くの非難が飛び交わっていた。

曰く、『力量不足』。曰く、『コネでも使ったんじゃないの?』
などなど。

そんな訳で、入りたての頃はよく多人数で絡まれていたりしていたのだが、何度も返り討ちにしていると、段々とその非難は無くなつていき——

「“白鷗の鬼”なんて大それた名前まで付けてもらって、嬉しくないのか恭さん？」

「どこに嬉しいがる要素があんだよ……」

どう考えても、色々含んであるだろ。

良い意味もありそうだが、悪い意味の方が多そうだ。

「俺も何かニツクネーム欲しいなあ。なー恭さん、いいの何か無い？」

「そうだな。腹が減って来たな」

「まさかのどんでん返し！？」

軽く純一を受け流しながら、俺たちは白鷗会室へと帰宅。

「ああ、二人ともお疲れ」

入るや否や、踏ん反り返って……はいないが、十分偉そうにして中央に座っている楓夏が声をかけてくる。

「すぐ終わったし、別に疲れてはねえよ」

「そうそう。またまた恭さんが一年生相手に本領を發揮して——」
何故か自分の事のように嬉しく語りだした純一を放っておいて、俺は自席へと戻る。

「よ、沙希。……他の奴は今駆り出されてんのか？」

俺の机の上が定位置となった沙希へ、とりあえず室内に人数が少ない理由を考えた上で、彼女に質問する。

妖狐モードで喋れない沙希は、こくりと首を縦に振って肯定の意を表した。

その彼女の隣には、何故かお供え物のような饅頭が、俺が出る時には無かったがいつの間にかそこにはあった。

「ああ、それ君のお兄さんが持ってきてくれたよ」

「……っは？」

「だから、君のお兄さんがお世話になってるからって持って来たんだよ」

「……何しにきたんだあのおバカは」
きょうへいに

思い浮かぶ事が、全て嫌な事ばかりで仕方が無い。

そしてその予想は大いに的中し、ニヤリとあくどそうな顔色を浮かべた楓夏は、意気揚々とその事柄を口に出した。

「どうやら君のお兄さん、この学園の教師になるみたいだね」

第肆拾貳話（後書き）

誤字脱字などないようにしていますが、あつたらごめんなさい。

第肆拾参話

「よおつす恭介！ 元気してるか？ —— おお、沙希ちゃんの妖狐姿、初めて見たなあ！ 可愛い可愛い」

うつわ居たよ。マジで居たし。

楓夏に居場所を訊いて西側の一年生教職室に来てみれば、そこには噂通りの少しハイテンションで面白い（？）な先生こと、俺の兄貴が。

とりあえず、これだけは言っておこうか。

「……何しに来やがった」

言っておかないと、俺の怒り臨界点が突破する。

「いやあ、やつぱ梓さんとお近づきになるには、俺自身が教師になればいいんじゃない？ ってことに至っちゃってさあ。なんとこの俺が勉強したんだぜ？ 驚きじゃね？」

「驚きじゃね？ じゃねえよ！」

—— まあ多少は驚いてはいるけどさ。

「しかし父さんとか母さんは、何て言ってるんだよ」

「恭介の様子見てきて来い、ぐらいいしか母さんには言われてねえぞ？ 父さんは頑張ってる一言だけだ」

…… タイライ、いいのかそんなんぞ。

特に父さん。そんなあつさり許すなんて、珍しすぎじゃねえか？ 信念を伴わない行動は、絶対にするなとか言ってたじゃんか。

—— それほど京平兄の梓さんに対する思いは、只並みならぬモノ

が在るってことか？

まあ追っかけて先生なるぐらいだもんなあ……。

「それで来てみれば、お前は白鷗会でお世話になってるっていう事を聞いたんで、偶々持っていたお土産を持って行ったという事だ。ご理解した？」

「ああ、しつかりな。つまり京平兄は邪な目的で先生になったと。そう言う事だろ？」

「ああん！ 聞いている所が全部悪いところ！」

…… まともに話しても、コイツ相手じゃ無駄みたいだ。

軽くあしらわれているようにも見えるし、馬鹿にされているようにも思える。

「まあこれから困った事があれば、いつでも俺のどこに来いよ我が弟」

「京平兄が面倒だ。どうにかならないか？」

「俺じゃ無理だぞ」

「使えねえ……」

そりゃ無いぜと言いながらもニコニコしている兄は、絶対に精神が可笑しい気もするが……。

——しかし俺は、この能天気な兄を地獄へ突き落すとしておきの言葉を閃いていた。

「でも、残念だったな京平兄」

「んう？ 何のことだ我が弟よ」

俺はニヤリ、と口角を挙げて京平兄に終焉とも呼べる一言を告げる。

「梓さん、三年の担当だからな。一年担当の京平兄とは、下手した

ら一年間会話出来ないかもな？」

生徒の人数が増えれば、その分先生の数も増える。

現に一学年で五十人もの先生が付いているこの学園では、他学年との接触はイベントぐらいしかない。

それはつまり——イベント行事がないと、他学園の先生同士も触れ合わないと言う事だ。

ちなみに他学年との交流イベントは学園選手権しか無いときいてる。

——つまり最低でも、来年の二月まではちゃんとした交流が無いということだ。

無論覗こうと思えば覗けるが……それを見抜けない梓さんではない。

多分んな事してると、あっちから離れて行くだろう。

「……え？　つちよ、それマジ？　マジなの？」

「マジもマジ。大マジだ。——まあ色々頑張ってくれ、な？」

こりゃ勝ったな……と思いながらポンと兄の肩に手を置き、その場から離れる。

魂が抜けたように動かなくなった京平兄を余所にして、俺は来た道を翻し歩き始めた。

数秒経つと沙希がふと振り返ったので、続いて振り返ってみると

無言で苦渋の涙をその場で流し、崩れ落ちている京平兄が見えた。

……その姿の大層情けない事は、近くに居た教職員も眼を疑って見入っていることから容易に窺える。

身内としては恥ずかしい所だが、なかなかしてやったりで、不思議と嬉々とした気持ちも抱いていた。

白鷗会室へ戻ってみると、そこにはいつも通りのメンバーの中に何故か梓さんが居座っていた。

「お帰りなさい恭介君、どこに行ってたんですか？」

「ああ、なんか京平兄が居たから少しからかって来た」

「……何で京平さんがいるんでしょうか？」

「アレじゃない？ 東雲先生に逢いたいがために教師になっちゃったりとか」

「臯月ちゃん、それはいくら何でもあり得くないですか……？」

当たっちゃってるのが、恐い所だな。

「そのまさかだ椎奈」

「え……本当にあの人はそんな理由で？」

「流石だよな。俺にはあんな真似出来ねえよ」

苦笑を浮かべてみせると、呆れたような顔を年子の姉妹は浮かべた。

「まあ、あのおバカさんだし仕様が無いって思っちゃったり」

臯月は何か申し訳なさそうに、背後に近づいていた梓さんに笑顔を浮かべる。

「てか恭介ちゃんのお兄さんが、お姉さんのファンだなんて一回も言った事無かったじゃない」

「俺もほんの数力月前に聞いて、驚いたばかりなんですよ」

……相変わらずの阿呆ぶりにも驚かされたけど。

「ふうん、まあいっか。——それでね恭介ちゃん、少しお願いがあるんだよ」

どうでも良さそうな最後の一言の間に、少し雰囲気が変わった。

これは少々、厄介事が回って来たのかもしれない。

この頃何かやったかなあ、と若干の後悔の念を噛み締め、その意に応えることにした。

「はい、それで何でしょうか？」

そう言つと、少しだけ晴れたような笑顔を浮かべ、静かに彼女は告げてきた。

「少し——お仕事してみない？」

第肆拾参話（後書き）

短いですが、投稿です。

ここから多分、雰囲気が色々変わってくると思います。

第肆拾肆話

「恭介ちゃんはさ、どうしてこんな都会のご真ん中に、こんな大きな建物を立てれていると思う？」

外の少し冷えている外気を感じながら歩いていると、ふと尋ねてくる梓さん。

それは常々（つねづね）俺も可笑しいな、と思っていた事の一つでもあった。

——まあ、答えはアレしか無いだろうけどな。仕事云々からも考えて。

「やっぱり悪鬼という事ですか」

「そうなっちゃうわよね」。実はこの学校、悪鬼出現ポイントが東西南北に一つずつあるらしいわ」

「……そんなにですか？」

いくら敷地は広いと言えども、悪鬼の出現間隔は狭すぎるような気がする。

道理でこんな都会に馬鹿でかい建物を建てられている訳だ。

「そしてその南北は、代々白鷗会と生徒会に任せると言う事になっているらしいの。——まあ手っ取り早い話よね。今の内に悪鬼に慣れさせといて、初現場で慌てない優秀な生徒を創り上げて学園の名を上げるってとこかしら。多分、他の学校もそうだと思うわよ」

やはり一人や二人、プロと遜色ない生徒がいろんな学園から出て名を残すと言うのは多いらしいが、こういう訳だったのかと納得する。

「それでこの春までは元白鷗会の人らに任せてただけで、卒業しちゃったから恭介ちゃんの代に回ってきた訳」

「なるほど……納得です」

昨年の白鷗会はみな三年だったと楓夏に聞いた覚えがあるので、多分今のメンバーは知らなかったのだろうと思うが行きついた。

「北が恭介ちゃんたち白鷗会の取り締まる悪鬼出現ポイント、そして南が生徒会のテリトリーで感じたから、覚えておいてね」

「梓さん、東西はどうするんですか？」

「何のためにプロの悪鬼扱いが、この学園の先生になっていると思ってるの？」

ふと思いついた疑問を尋ねると、自身あり気に胸を張って応えた梓さん。

その昂然としていても可愛らしく見える姿に、何故か自然と笑みが零れていた。

「実際お姉さんのような先生は数十人いるから、その人たちと週ごとに交代して被うらしいわ」

「分かりましたが……とりあえず、仕事を俺と沙希だけにしたのはどういう訳ですか？」

白鷗会全員で行けば、別にすぐ終わるだろうと思うのだが。

何か思惑でもあるのかと思って、俺は訊いてみた。

「ん？ まあ単純に恭介ちゃんと沙希ちゃんの実力を測りたかっただけかな？」

「……了解です」

別に他意はなさそうで、本当にそう思っていたらしい。

すぐ分かったのは、いつものような悪戯っぽい笑みを零さないからである。

まともにやる時は徹底的に真面目にやる——梓さんそういう人だ。

「——つと、通りすぎる所だったわ」

そう言って辿り着いたのは、北側に備わっている呪練場。

そこから少し横にはずれ、小さな倉庫のような建物に行きつく。

立ち入り禁止と書かれているテープから想定して、ここが入口のようだ。

「ここが入口だから覚えておいて。この下に、所謂悪鬼出現ポイントがあるから」

「分かりましたけど……これって神力で封してますよね。出る時も同様に神力施しておけばいいんですか？」

「あ、忘れてたわ。ここって封を解いたら、一時間後に自動的に封されるからね」

「……案外、整ってるんですね色々」

これ程の設備が学校如きであるとは、少々驚きである。

どう考えても悪鬼扱い専用の集会場ぐらいしか、こういうのは無いと思ってたのだが。

「整備整えておかなきゃ、生徒をこんな危ない学園はしやんに来させないでしょ？」

「それもそうですね」

軽く相槌を打つと、梓さんは少し真面目な表情を浮かべ、さっと御札使って封を解除し始める。

パリッと小さく神力が弾けたかと思うと、封してあった神力は梓さんの握る御札へと納められていた。

——あの、普通自身以外の神力を扱うとか出来ないんですけど。改めて梓さんの規格外さを垣間見たような気がする。

背中に乗っていた沙希も、少し驚いたようにして眼を見開いていた。

「それじゃ行こっか」

そんな俺たちの驚きを解せずして颯爽と進みだした梓さん。
その小柄な背に引つつくように、俺たちも階段を続いて突き進み
だした。

辿りついてみると、そこには上の呪練場の結界の檻が地下まで連
なっているフィールドがあった。

そのフィールド中央にはむき出しのままの黒い土が、周りの閑散
としたコンクリートの壁と丁度良い対比を醸し出しながら、そこ
にはあった。

多分あの場違いな場所が悪鬼出現ポイントなのだろう。そしてそ
の周りを覆っている結界は、悪鬼の気配を出さないための処置であ
る事は、一目瞭然であった。

（上の呪練場は、あくまでもオマケってか……）

本当に必要なのは、ここの封鎖なのだろう。

今までここに出現する悪鬼の気配を感じなかったのは、多分この
結界のせい。

それを呪練場にして結界の本意を隠しているとは、要らない所で
悪知恵が働いているなあと深く感じる。

「どうかした？ 恭介ちゃん」

「ああ、いえ。上の呪練場は、あくまでこっちダミーなんだなあっ
て……」

「んー？ まあ、どっちもどっちってもんじゃないかしら？ 一応

上も十分必要だし——つと、そろそろ来そうね」

そう言って梓さんが結界の中へ入っていくので、俺も続いて入る。

——その瞬間、今まで体験したことのないような濃い妖力を即座に感じ取った。

「……ライライ」

「あちゃー、こりや大物ねえ。恭介ちゃん運の無さすぎ」

苦笑を浮かべながら此方を見据えてくる梓さん。

その纏うオーラは、既に戦闘する前の焦がれたものへと変わっていた。

「さあて、お姉さんは危なくなったら介入してあげるから、それまでは沙希ちゃんと頑張つて」

「はあ、まあ頑張ってみます」

こりや、梓さんに一泡吹かせてやらないとなあ。

確固たる決意を以って、俺はこの戦闘に臨む事にした。

第肆拾肆話（後書き）

キリが良いので、短いですがここで。

誤字脱字ありましたらご報告を。

第肆拾伍話（前書き）

遅くなりました。

第肆拾伍話

沙希はと言うと、既に臨戦対応を整えていた。

口元には不吉なほど美しい白雪のような刀剣——靈刀“子狐”が、静かに神通力を放っている。

じっと見つめるその一線の先には、徐々に捻れ始めた空間が禍々しくも妖気をはなちつつあった。

「ホントに強そうだな、今回」

俺が横目で沙希に訊くと、いつものようにコクリ、と彼女は首を縦に振る。

だがこれだけの妖気。出現する悪鬼というのは限られてくるだろう。

さすれば対策も簡単になる。強敵というのは、なかなか弱点を探りに探られているものなのだから。

「——っと、来るか」

後方で鋭くも暖かい視線を送る梓さんの気配が、その瞬間変わった事を察する。

捻れ曲がった悪禍が、一際妖力を濃く放ったと思った。

「ヒヨオオオオオオオ！……！」

その瞬間より、劈くような甲高い鳴き声がフィールド内を木霊していく。

黒と黄のまだらな体毛、それに付属している不気味に此方を覗く

顔——そして尾っぽ。

正に醜悪を凝り固まらせた生物としか形容出来ないでいた。

「鵺……な。そりゃ妖力濃くても仕方ないか」

雷獣とも称されるこの悪鬼には、大きく分けて二つの種類がある。まず一に、所謂トラや蛇などと言った動物の各部分を体内へと取

つてきている種。

そして力二や蜘蛛を連想させる、四肢にうろこ状の鉤爪をもったハサミを持つ種。

今回は前者であり、雷撃の攻撃はほぼ無いと言っても過言ではない。

しかしその代わりに“獅子王”という別名を与えられてもいて、とにかくスピード、力量が後者と比べて段違いである。

尚且つ近くで鳴き声を聞くと、聞いた者の魂を徐々に喰らい尽くすとも言われてるのだ。

「――俺的には、後者の方が良かったんだけどな」

前者の鵄というのは、圧倒的に弓で葬ったとされる点が多い。物理攻撃、そして近くでの鳴き声は、近接武器より十分避けれる弓の方が相手取るに当たって大きな利点となるからだ。

「ま、くよくよ言っても無駄が……」

見つめる視線の先には、すぐにでも取って喰らおうが如く、臨戦対応をとっている四獣の一体である悪鬼が。

「……行くぜ！」

初っ端からトップスピードに至る。出し惜しみなどしては、コイツにも悪いだろう。

沙希は後方へ俊歩を使い、閃光の如く移動していく。

「おおおおおお……！」

縦一線、渾身の一撃を俺は頭部へ叩き込もうとする。

しかしその獣の顔は憎たらしくもニヤリと笑みを浮かべるだけだった。

キーンと何故か金属同士が触れ合うような音が響き渡る。

「っ！　嘘だろ！」

体中を覆っている妖力が、まるで鎧のように鵠の体中をコーティングしていた。

瞬時に刀身を鞘へと戻し、三式 絶園 を捻れこませようとする。
「つぐ！」

振るった俺の手が、逆に威力に耐えられないでいた。

体毛に僅かながら入ったものの、それ以上は侵入出来ず、見事に制止している。

俺は急いで後方へ一度退避しようと、四肢に力を入れる。

「ピヨオオオオオ！」

「うう……があ……！」

散々今まで傍観を決め込んでいた鵠は、眼の前で不気味な声を出して精神力が喰らい尽くし出した。

一瞬にして俺の脳内には、今までの苦悩や恐怖が蠢く様に積み重なっていった。

何もかもがどうでも良い——そんな不精な念に呑みこまれそうになる。

「~~~~~っ！」

そんな中、沙希が刹那で俺と鵠の距離を空けるため、天頂より一太刀を振るった。

安心しきって防御していなかった鵠の左横腹には、くつきりと神通力の刃の痕が刻まれる。

「オッオ！？」

驚いたように聞いた事のないような声を出し、後方へと下がっていく鵠。

まさか自慢の妖力コーティングが、よもやそんな簡単に破られるとは思っていなかったのだろう。

「……くう」

その隙に俺は左手の聖痕に神力を集め、鳴き声を介して体内に入った妖力の除去を行う。

（つち、流石だな。油断はしてなかったけど、やっぱ“アレ”無しじゃキツイか）

前の俺では多分勝てなかっただろうその敵。
だが——今の俺は違う。

あの一撃で決める、そんな想いが俺の中で焦がれ始める。
「沙希！ 少し時間を稼いでいてくれ」

そう俺が合図するや否や、沙希は刹那で鵜の前方へと躍り出る。
その刀身に纏うモノは、神通力より妖力へとシフトしていた。

（よし、それじゃ……）

これを使うには、少し下準備が必要となるのだ。
その間、俺は力を溜めつつ沙希を見つめる。

彼女が高速で近づく中、刀を振るい上げようとすると、その攻撃に鵜は待っていたかのように前足を勢いよく上空へ振るい上げる。
しかし沙希はそんな事お構いなしに、右方を通り抜け様に子狐の横一線を煌めかせた。

斬！ と鈍い音がすると、降る上げた鵜の片腕はポトリと地面に崩れ落ちる。

「オオオオツ！」

一際悲痛めいた声が響いた。
しかし諦めは悪いらしく、鵜は尾っぽに付いている蛇を用いて、沙希への追撃を行おうとする。

沙希は着地と同時に左方へと流れるようにして、蛇との距離を空ける。

それを随時追おうと蛇が移動した——

正にその瞬時にして蛇へと向きを変えた沙希が、その顔をすり抜けるようにして回避。

刀を途中より決り込ませ、付け根近くまで無慈悲な程に寸断した。

（……アイツもいよいよ正体が分からなくなってきたな）

いくら六尾の狐とも言えど、あの悪鬼を圧倒するような実力は八尾以上ぐらいじゃないとまずないだろうと思う。

（まあ……お陰でこっちはそろそろ出来そうだけど）

妖と神。

二つの相反する力は、漆黒の刀を媒介として混ざり合いながらその力を具現しようとする。

「っぐ！」

だが厄介な事に未だこの力を制御しようとすると、肉体に激痛が襲い、精神が霞みそうになる。

しかしそれを乗り越えた後、^{のち}その力はお互いの存在を相殺し、新たな力へ。

唯一無二の“闇”へと変わるのだ。

「……来た」

全身からまるで何もかもがすっぱりと抜け落ちるような感覚。

それがこの力の発動する時の印象だった。

刀身を絡みついていた天地を司るエネルギーは、空間から気配を消し――

太刀全体をスッポリ覆い隠す“無の影”へと姿を誘っていた。

「沙希！ 下がれ！」

俺を庇うようにして鵜の一撃を丁寧に弾き返していた。

そう、沙希の最初に行った攻撃は、俺を鵜の注意から遠ざけるためのモノだったのだ。

その狙い通りにいった彼女は、一頻り大きく霊刀を振るい上げる。鵜の見事に集中的に妖力でコーティングされていた前足と重なり、二体が遠ざかった。

「四式——冥陣」みようつじん

影を放つための祝詞を自らの技名にしていた俺は、堂々としてその新たな技をそつと呟くと、地面へと深々にその影を纏いし黒漆大刀を突き刺した。

——刹那、影は地を這って鵜の周りに絡みつく様にして蔓延はつじんっていく。

「オウ！ ヒョウウオ！？」

一体何の力で、今どうなっているのか分からないのだろう。

ただその獣が分かっているのは、自身の影が闇に結ばれて動けない事だけだ。

「……喰らえ」

俺の声が静かに木霊すると、地面を這っていた影という影は次々に鵜を取り囲むようにして、黒き刃を一定の間隔で突き刺していく。一つ、また一つ。

黒き刃が、鵜より漏れるどす黒いオーラすら飲み込んで行く。

「ヒョオオオオオオ……！」

それは鵜の嘆き。甚く弱々しい鳴き声。

——しかしその眼には、未だ闘心が芽生えている。

根気を奮い立たせるようにして、鵜は俺の腕へと蛇を絡み付かせた。

「ぎい……、ああああああ！——！」

その鵜は最後の力を振り絞るように、俺の体内へ高密度の妖力を注ぎ込む。

——熱い、あつい！
——燃え滾たぎつてしまう！

高熱のような不快極まりない妖気が流れ込んで、俺の体を蝕んでいく。

朦朧とする意識の中、そのショックにより俺の中で何かが弾ける——感触がした。

これも新たな心地だった。

——いや、俺はコレを以前から知っているのかもしれない、そんな気持ちも浮かぶ。

そう悟った時、俺の意識は刹那の間だけ……鬼へと切り替わった感じがしたのだ。

「オン、バザラ、ヤキャシャ、ウン！ 鬼神ヤクシの力を用いし、其の前なる魍魎もつりょうを滅せ！」

その無意識下で発した、よく分からない呪文のようなもの。

全く分からないそれを唱えた正にその時より、籠める闇の濃さが爆発的に上昇した。

その結果……鵜を喰らい尽くした影の刃という刃は、飛躍して鵜全身を覆うように包み込んで行く。

「~~~~っ！」

後方へ危ないので避けていた沙希は、俺に絡みついていた蛇を鉤爪で上空から切り取った。

尻もちを付きながら、俺が最後に見た光景。

それはあらゆるモノを飲み込み、世界という概念すら届かぬものへと変えて行く無知の世界。

それは新たな境地にも見えなし、懐かしき居場所にも見えなし。

闇は鵺を現実から虚無へと誘うと、再び地へ孵^{かえ}っていった。

第肆拾伍話（後書き）

誤字脱字ないようにしてますが、あつたらごめんなさい。

一応、分かると思いますがこれが今後の布石となります。

ちなみに邪魅孵しの太刀の描写では、闇は“還る”ではなく“孵る”を使っています。誤字ではありませんのでご了承ください。

第肆拾陸話

幾度となく、危なっかしい彼を助けようと思った。

しかし踏み留まつておかなければ、先ほど起こった現象を目の当たりに出来なかつただろう。

（——やっぱり、アレは）

地の力である妖力と、天の力である神力は互いに相反するもの。

決して双方の力を汲み取るというのは、極めて困難と言わざるを得ない。

そう——不可能でなく、困難。

過去の文献には、たった一人だけその力を身に付けた者が居る。

数多の蔓延る悪鬼を滅し、数多の不動たる鬼を喰らい尽くしてきた、鬼を超えし鬼殺しとまで称されるある一人の人物。

後年では天地を司り、その二つの溝より生まれる“影”を扱ったと言つ。

（恭介ちゃんは……やっぱり）

認めざるを得なかつた。

転生輪廻、そんなものはある訳が無いと思つていたが、先程の——恭介ちゃんは気付いていなかったようだが——真言を扱う姿は、どう考えてもそこに辿りついてしまう。

陰陽道に於いても密教派生の真言は、結界能力や御札の効力を上げるため扱うが、あれは阿倍清明によって誰にでも使えるように呪をなされているからだ。

もはや源流からかけ離れていると言つても過言ではない。

本来の真言は、決してそんなものではないのだ。

——それは自身を世に顕すため音。

——決して他人に理解されない、自身を世に広めるための呪^{のろい}。

それを扱えた者は…… たった一人。

人を超え、鬼を超越し、鬼神となった男。

三代目征夷大將軍——坂上田村麻呂だけなのだ。

「くっそ……どうなってやがる」

頭を駆け巡るように、断片的な空想が流れ込んでくる。

いくら断片的とはいっても、莫大な量があるそれに頭が悲鳴を上げてくる。

「大丈夫！？ 恭介ちゃん！」

後方で思い巡らすように此方を覗いていた梓さんは、近くに寄ってきて俺の背中を優しく擦る。

眼の前には小さくシフトしていた沙希が、心配そうな面持ちで俺を見ていた。

そりや多少とは言え、沙希のではない穢れた妖力が入ったのだ。

体に違和感が無い方が可笑しいに決まっている。

しかし俺は何で真言^{マントラ}なんて……。

最初は全然意味が解らなかったが、あの響きはどう考えてもそれ其の物——

最初はどんな呪文かすら、分からなかったのに。

「……っぐー！」

一瞬だけ鈍い痛みが鋭いモノへと変化した。断片が流れ込んでくる。

真言——これは今の俺に起こっている摩訶不思議な現象を助ける手掛かりとなるはずだ。

しかし、俺は分からない。

今の俺じゃ、到底理解できない。

「きょーすけ……」

いつの間にか、沙希は擬態化して俺の瞳を覗いていた。

その沙希の姿は——

その姿は？

「——尾裂狐」

巡っている空想の断片と、沙希が少しだけ合わさった気がした。

驚いたように眼を見開き、俺の芯を捉え始める彼女。

「……どうして——」

途端に彼女の声が聞こえなくなった。

脳が委縮し、体中に電流が迸る。

俺はいつたいどうしてしまったんだろう。

断片が回り、廻り……。

一瞬だけ眼がくらむと、俺はまどろみへと意識を移行した。

月が映える。

眼の前には、神々しい纏いを帯びた一人の女性が居た。

決して日の元では相まみえない金色の御櫛。

芳しき大人の女性特有の色香。

縁側に座る男の隣へと、音も無く彼女は腰を置く。

「……凶ウツホシ」

月の皓々とした光が届かぬ男の隣で、女性は此方に問いかける。

「やっぱり、気持ちは変わりませんか？」

凶と呼ばれた男は眼を細め、苦笑交じりに女性を見詰める。

——そうだ。

この一言を、笑みの残滓ざんしを残したまま口から零した。
続いて表情から気配を消し、悪いな、と続ける。

「貴方にはワタシがいます。それだけじゃ駄目？」

——互いに依存しつぱなしじゃ、やはり駄目だろう。

「私はまた独りになりますわ」

——どうしてだ？

男の問いかけに、女性はクスリと朗らかに笑った。

「ワタシは人の心を見抜く才能が無いですもの。」

もしワタシが他の人間と一緒に行動するとしたら、それは来世の
貴方と共に歩んでる人しか居ないですわ」

——お前はそれでいいのか？

「良いも何も、それしかワタシには無いのです。貴方との一生がワ
タシにとっての宝物なのですから」

——つくづく碌でもない奴に引つつくな。

「そうでしょうね……本当に、ワタシは人を見る眼が無いです」

そこから続く二人の沈黙は、鈴虫の奏でる音色によって儚くも美しきものへとなっていく。
しかし優しく和らいでいた寡黙を、居住まいを正し、頭を垂れた女性が柔らかに破った。

「幾瀬、幾年もお待ちしております、我が主」

一際凜とした声。口調も正し、雰囲気も様変わりした女性に、男は屈託の無い笑顔を浮かべた。

虫の音は、少し涼しい虚空を未だ震わしている。

秋の――そして男の終わりは、すぐ傍まで押し寄せていた。

何かを見ていたような気がする。

しかし何度も頭を捻っても思い返せない夢を思い出しながら、少しだけ覚醒した頭を挙げた。

「……俺の部屋じゃん」

そう言えば昨日、祝練場の下で意識を失ったなあと人事のように思いながら、ベッドから降りようとする。

しかし体を起こす前に、俺はあるものを見つけた。

「……」

隣で俺のベッドに潜り込んでる沙希。

その頬には、枯れた涙の痕が残っていた。

「はあ……。心配、かけしまったもんなあ」

後で梓さんにも謝っておかないとなあ。

そう思いながらベッド上に備えてある時計を確認する。

「今日は学校休むか」

既に四時間目に入っていてそんな昼時前であつたため、今日は念のため、身体の保養日にする事にした。

それにしても、隣に居る沙希は起きる気配すら無い。

どうやって起こそうか迷って彼女を見てみると、何やら懐かしい雰囲気を感じた。

（アレから何かおかしいな……。変な断片もちよくちよく頭に浮かぶし）

どうやらあの妖力がきつかけとなつて、頭に何かしろのダメージを負ってしまったようだ。

多分梓さんなら、妖力の問題を解決してくれるだろうと思つてみると、沙希が俺の顔を覗いてきている事に気付いた。

「よお。眼は覚めたか？」

「……きょーすけ？ だいじょうぶ？」

「まあまあだな。少し頭痛がするぐらいだ」

そう言つて俺は沙希を寝かせたまま、寢床より降り立つ。

「しんぱいした」

「俺も焦つたよ」

苦笑いを浮かべてそういうと、沙希が少しだけ微笑んだ。

さて、朝飯兼昼飯の準備でもするとしますか。

第肆拾陸話（後書き）

女性の一人称、口調を変更

私↓ワタシ

ですます調

2011'9/10

お知らせ

真に残念ですが、ここで一旦休載とさせていただきます。

理由としましては、知ってる人は知っているかもしれませんが、大学受験が控えているからです。

あまり成績のよろしくない私では、勉強と小説の両立は現段階で不可能と感じました。

悪鬼被いの方ですが、来年あたりに再開出来たらなと思っています。そういうわけですので、再開するまでは完結扱いにさせてもらいます。

早い復帰を目指しておりますが、自分の学力、微妙なんですよね…。

ここまでご愛読された皆様、どうもありがとうございます。

よければ待つて頂けたらな、とは思いますが無理にとは言いません。それでは、失礼します！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5252q/>

悪鬼祓いの奮迅記録

2011年10月8日05時16分発行